

寺前信次著

今生の想い出

2005・2・28



寺前信次著

今生の想い出



『今生の想い出』の目次

序 言	1~4	昭和 54 年	パキスタン~エジプト ~ギリシャ 16 日間	83
まえがき	5		台湾一周 5 日間	86
歌 開	6		ビルマ観光巡回の旅	87
『恋記』	6	昭和 55 年	雲南・昆明~桂林~広州	88
『雇用の妙は人に存す』	7	昭和 56 年	中國觀光巡回 219 春	89
「中華人民共和国の歌詞」	7	昭和 57 年	ブルガリア~トルコ~カラチ	90
「ビルマ・シャン高原の歌詞」	10	昭和 58 年	韓国一周の旅	91
『経営は最大の能力』	15		ニュージーランド~シドニー	92
「ナムバッカの歌詞」	15	昭和 59 年	北欧四ヶ国の旅 10 日間	93
『歌謡・帰國神社』	20	昭和 60 年	中国・上海~杭州~蘇州	95
旅 遊	25		イスラエルの旅 8 日間	96
『内旅行』	25		スペイン、モロッコ、 ポルトガル	98
昭和 40、41、42 年歩 219~3、懇親会	26	昭和 60 年	河西回廊~天山北路 12 日間	100
昭和 43~49 年(60 期)歩 219・歩 146	27	昭和 61 年	タイ(国朝と古都チェンマイ)	102
昭和 50 年(同上、出羽三山巡り)	28	昭和 62 年	パリ一島、ボロブドール	103
昭和 51、52 年(仁兄 33 回忌、沖縄観光)	29		パプアニューギニア 8 日間	104
昭和 53、54 年(陸兵団歌鑑賞、帰國神社)	30	昭和 63 年	ベトナム~アンコールワット	111
昭和 54~55 年(五島列島、福江、観光祭)	31		ハイイ族旅行 6 日間	113
昭和 56 年 四国八十八ヶ所巡り	32		雲霧石窟、五古山、泰山	113
昭和 56 年 「阿波」出版記念会	34		スイス、北イタリ、フランス	116
昭和 56 年 西園三十三ヶ所巡り	35	昭和 64 年	モンゴル 15 日間	117
昭和 57 年(146 の 8 中華歌謡祭・小豆島)	37		トルコ遠跡、ガンドーラ遠跡	119
昭和 57 年 坂東三十三ヶ所巡り	38		52 年目の瀬戸内と北京一人旅	121
後父三十四ヶ所巡り	41		南昌~廬山~景德鎮~黃山~杭州	123
昭和 58 年 佐賀市内観光、佐賀金山観光	42	平成 3 年	海のシルクロード~海南島	125
北海道一周旅行(自家用車)	43		アステカ文明とマヤ文明	127
昭和 59 年 潮送流火祭、札幌雪祭	45		五大湖~漠中の旅 9 日間	129
対馬、奄美一周の旅	46	平成 3 年	喜雲峰とピクトリオ大瀑布	131
鷲狩の島観光	47	平成 4 年	併蛇山、天台山、紹興、杭州	133
昭和 60 年 国東半島一周の旅	48	平成 5 年	オヘストラリア一周 18 日間	135
城音崎と三笠壁見学	49		サハリンの旅 5 日間	139
昭和 62 年 伊豆網代、三陸海岸、上高地	50	平成 6 年	アラビヤ半島一周 15 日間	141
坂井県立三国中学クラス会	51		サイパン島一周の旅	143
九州、柳川~阿蘇~福布院	52		東欧 7ヶ国の旅 13 日間	144
昭和 63 年 146、219、60 期寺前会	53		東部カナダの紅葉の旅 8 日間	147
昭和 64 年 京都御所、谷川岳、身延山	54		フィジー島 8 日間	149
石垣島~宮古島観光	55	平成 7 年	イラン一周 12 日間	150
平成 2 年 潤戸大橋~金比羅~最上福井	55		グアム島	153
クイーンエリザベス号乗船	56		長江~黄河間の頼王街巡り 10 日	154
平成 3 年 島原、原城址、吉野桜見学	57	平成 8 年	中国・陝西特別区の臘肉旅行	157
祖馬、野馬追レース按温泉	57		癌を押して旅團~203 高地へ	158
佐賀、嬉野温泉、伊豆、伊東	58	平成 10 年	ビルマ観光巡回の旅 11 日間	160
平成 4 年 長良、興福寺、利尻、礼文	59	平成 11 年	ラオス紀行 8 日間	162
弘前~八幡平、米沢~山形~盛岡	59		人生最後の歌謡式典	
喜源來大本山巡寺会~60 期会	59	平成 16 年 10 月 3 日 歩 146 研究歌謡祭	164	
種子島~鹿久島~宇宙センター	59	(長崎県大村市歩 146 研究「懇意之碑」)		
平成 5 年 高山祭、小笠原諸島観光	60	平成 16 年 10 月 31 日 歩 219 研究歌謡祭	165	
鬼怒川温泉、伊勢神宮、邇宮	60	(沖縄沖田) 日暮家様~式(作高風船で解散会)		
平成 6 年 鹿児島、知覧村攻城見学	61			
平成 6 年 亡兄 50 回忌で神縁~供養	61			
平成 7 年 60 期岡山大会、宮本武蔵の墓	62			
平成 8 年 大相撲新春場所見物	63			
下関市周辺観光	63			
津和野~山口市観光	63			
喜野の祝レース~和貴温泉・加賀温泉	63			
平成 9 年 与那国島~鹿児島まで列島巡り	64			
岐阜・根尾の「うずしみ桜」	64			
白川村合掌造り、青垣トンネル	64			
北嶺直東部、知床半島鳥	64			
平成 10 年 大洲、宇和島~佐田岬~九州	65			
金城式、東京帝國ホテル~銀座	65			
奈良大社~若戸大橋~飯塚ボタ山	66			
平成 11 年 高千穂、天の岩戸、燐池渓谷	66			
平成 12 年 元寇、弘安の役、博覧会	68			
末梢神経障害発病	68			
海外旅行				
昭和 48 年 香港~マカオ	71			
昭和 49 年 ヨーロッパ 9ヶ国 3 週間	72			
昭和 50 年 旧ソビエト一周 15 日間	74			
昭和 51 年 カナダ、米国、メキシコ	76			
昭和 52 年 南米一周 14 日の旅	78			
昭和 53 年 スリランカ、印度、ネパール	80			
あとがき				
①医療意識だけの前期			188	
「後編」「歌謡・帰國神社」			189	
②自意識だけの中学生			190	
③病魔に悩まされた後期			191	

辭 訣 (註1) 平成十六年甲申元旦 寺 前 信 次

今ここに吾が棺を蓋い幽明境を異にして黄泉の客 (註2) となろうとする歳を迎え、
生前に辞訣の辞を申し上げておきます。私がこの世に生を享けて八十有余年、この間に賜
りました御芳情に対し茲に拝跪 (註3) し、叩頭 (註4) して深く感謝いたします。

「始有る者は必ず終有り」「生ある者は必ず死あり」、或いは「盛者必滅、会者定離」
(註5) と申しますが、「命は天に在り」(註6) と云われております。傘寿も半ばに垂
(註7) としますと我が生涯を回顧するものです。そこで私の一生を振り返ってみると、
人生の最大の出来事でもあり「心の古里」となったのは「戦闘参加」であります。

戦雲が東亜の空に低く垂れ始めた危急存亡の秋・昭和十二年、人生意気に感じ (註8)、
「燕雀 安んぞ 鴻鵠の 志 を知らんや」(註9) と、國家の積幹 (註10) たらん
と軍人を志した。昭和十五年には騰程万里 (註11) の彼方、支那 (中国) チャウグン 中原に鹿を
追う (註12) と言われた由緒ある大陸の黃河流域の戦場に飛雄 (註13) し、作戦中の
北海道第七師団編成の第三十五師団に赴任した。鬼哭歎歎 (註14) とした漢民族の発祥
の地である中原の各地を、名譽ある聯隊旗手として轔轔高き軍旗を捧じて駒を進め、或い
は中隊長として北海道・関東健兒を率いて北支那の各地の戦闘に参加して勇戦奮闘した。

就中、昭和十六年秋の黃河流域の戦線に於いて、「人間到るところに青山あり」(註1
5) と覚悟して決死の黄河の敵前渡河を敢行した。この中国・河南省・中牟県城の攻防戦
は我に倍する敵との戦闘となり熾烈を極めたが占領に成功した。この戦闘に引き続ぐ黄河
の渡河点確保の中牟県城橋頭堡の戦闘は、我が寺前隊 (砲・工・その他の配属を含む) だ
けが残留して孤立無援の背水の陣を敷くことになった。攻守その処を変えた彼我両軍は
旗鼓の間に相見え (註16)、百倍の衆敵と雌雄を決する乾坤一擲の決戦となった。

死中に活を求める薄氷を履むような寡兵の我が寺前隊は士気旺盛、壮烈にして拔山蓋世（註17）、断じて行えば鬼神もこれを避くという力戦奮闘によって大任を果した。

この戦功により第三十五師団長から我が中牟橋頭堡守備の寺前隊（含配属部隊）に対し賛美が授与されたのである（軍司令官命令なら感状である）。

赫々たる功を奏した寺前隊の中牟橋頭堡陣地（註18）の戦闘は天聰（註19）に達し、我が将兵の武勲を御嘉賞（註20）するため天皇陛下は御名代（註21）として侍従武官を現地の中牟に派遣され、寺前隊の将兵はその光栄に浴したのであった。名を竹扇に垂れた功績（註22）は、生を視ること死の如く笑みを含んで他界した部下将兵たちの鼓舞の悲しみ（註23）に対し、せめてもの慰めだと懷古しております。

時は流れて陸軍士官学校第六十期生の教育の任に就いていた私は、昭和十九年秋、ビルマ（現ミャンマー）方面軍参謀部附を拝命し、馬革で屍を包む覚悟（註24）で、暴虎馳河（註25）のビルマの死闘戦場へと凶南（註26）の軍旅に就き、首都のラグーン（現ヤンゴン）に着いた。その後暫らくして東部ビルマの屍山血河（註27）をなす第一線軍の第三十三軍司令部参謀部附を拝命し、ビルマ戦線の彼我両軍の甚大な物量の差を身を以って体験し、壮烈極まる極限状態の戦況を眼の当たりにした。

生死には限りあり遁るべからずと覚悟した私は、春秋に富んだ（註28）今こそ、参謀部附よりも弾丸飛来の間に立つ第一線歩兵大隊長を体験しなければならないと意を決し、第三十三軍司令官に最前線歩兵大隊長への転出を申し出た。

希望が了承された私は第三十三軍隸下の第五十六師団、長崎県大村歩兵聯隊編成の歩兵大隊長を拝命し、日本最強の北九州の将兵を指揮して、強大な戦力に優る英支（中）の連合軍との獅子奮迅の激突を繰り返した。然しながら兵器弾薬糧秣の補給は全くなく、戦

力には^{カンゲイ}雲泥の差があり、^{チシヤ}鉄車に向かう^{トロロク}蠍の斧（註29）の如き戦闘は「提灯に釣鐘」であり、^{タツ}危ういこと虎の尾を踏むようで、全将兵は「死を視ること帰するが如し」（註30）と、夢中に夢を夢みる（註31）ような血闘を続けた。

敗戦の三ヶ月前の昭和十九年五月、ビルマ方面軍の主力は、ビルマと^{タイヨク}泰国との国境をなすサルウイン河を渡河して^{タイヨク}泰国に後退することになり、我が寺前大隊はビルマ全軍の後退援護の重任を命ぜられて、中部ビルマのシャン高原に布陣した。

「怨骨隨に徹す衆敵・連合軍の破竹の勢いに対して一矢を報いんと、私なりに^{ケンボクジンス}權謀術數（註32）を謀り、運用の妙は人に存すと熟慮した結果、大隊の主力陣地を谷底に敷いて敵の立体的な猛火を避け、不意急襲して反撃した。一方では神出鬼沒（註33）し、或いは地形を巧みに利用して敵の意表（註34）を衝き、時には夜陰に乗じて敵陣内に深く潜入して後方撹乱のゲリラ戦を敢行して敵大軍の進出を頓挫せしめた。

師団は、我が寺前大隊の持久戦は一週間から十日前後と予想していた。しかし、命よりも名を惜しむ我が将兵は、旺盛な企図心（註35）と追隨を許さない創意（註36）により、臥薪嘗胆（註37）すること四十日間という長期の持久戦に成功し、ビルマ方面軍の^{タイヨク}泰国への後退を容易ならしめたのであった。

その功績により、第五十六師団長より我が寺前大隊に対して「賞詞」が授与された。更にその上、敵連合軍からも「逆感状」の形で賞賛されたのであった。それは東南アジア連合軍最高司令官マウントバッテン将軍隸下の英軍第十九師団の^{モントウシクホウ}戰闘詳報に、下記のように記録されているのである。（英軍中尉ルイス・アレン著）

【中部ビルマのカローからヘイホ～タウンギー街道を進撃した英軍第十九師団は、莫大な損害を被った。この敵は急遽、タウンギー方面に派遣された日本軍第五十六師団の一

部隊（寺前大隊のことを指す）である。この部隊は今まで遭遇した日本軍とは違つて攻撃精神は格段と旺盛で、指揮官の戦闘指導は卓越して特に山稜での作戦は抜群であり、部下将兵の士氣も充溢していた】と戦史に書かれている。この戦闘詳報の訳者は我が第五十六師団搜索聯隊の村野新一中尉（陸士五十六期）の戦史研究家である。

第二次世界大戦に於いて地上戦の三大激戦地と称せられたビルマの戦闘に参加し、「死生命あり」（註38）と死を覗ること生きるが如く、雲霧のような敵の大軍と矛を交え、肅然として（註39）異域の鬼となられた多くの部下たちを偲び、ここに私の最後の慰靈鎮魂の辞として支那（中国）・ビルマ（ミャンマー）戦記の一端を述べた次第であります。

我が八十数年の生涯を回顧すると、我々は開闢以来の大戦に参加した時、祖逖の誓（註40）を決意し、命は鴻毛よりも軽し（註41）と死を賭して戦った。そして敵の銃・砲・爆撃下に身を曝すこと満四年、その間に負傷すること三度に及んだが、九死に一生を得て生還したのであった。然しながら未だかつて平和のための戦争は無く、戦争は諸悪の根源である。論語に「四海之内、皆兄弟なり」とある通り、世界の全人類に向かって「絶対不戦」を絶叫して「辞世」としたい。

【註】(1) 別れの挨拶 (2) 死んだ人 (3) ひざまずく (4) 地にぬかずく (5) 勢いの盛んな者も必ず衰え会う者は必ず別れる (6) 人の寿命は天がつかさどる (7) なろうとする (8) 人間は金や名誉のためだけでない (9) 小人には大人物の心は分からぬ (10) 真柱 (11) 遠い意 (12) 帝位を争う (13) 勢い盛んに活躍 (14) 多くの人が枕を並べて死ぬ (15) 骨を埋める地 (16) 対陣すること (17) 力、山を抜き、気、世を蓋い、士気は壮大 (18) 対岸の陣地 (19) 天皇の耳 (20) ほめたたえる (21) 代理 (22) 歴史に残された功績 (23) 死別の悲しみ (24) 戦場で死ぬ覚悟 (25) 素手で虎と立ち向かい大河を徒步で渡る (26) 南の大海へ行く (27) 死体が山の如く重なり血が河の如く流れる (28) 若い内に (29) カマキリの斧で鉄車に立ち向かう (30) 我が家に帰るように死ぬ (31) はかないこと (32) はかりごと (33) 自由自在に出没する (34) 思いつかないこと (35) くわだて (36) 誰も考えつかないこと (37) 敵を討とうと苦労努力すること (38) 人力ではどうも出来ない (39) 寂しいさま (40) 生きて再び選らないという誓い (41) 羽毛の意で極めて軽いこと

まえがき

文章は先ず「まえがき」とか「序文」を記載することが常識である。しかし今回は特に「辞訣」を真っ先に書いた。これは異常である。其の正常でなかつた我々の人生は死を賭けた異常な人生だったからである。

人生二十五年と謂われた時代に青年期を迎えた我々は、国家のために国民は戦場に出陣することが、人生の義務であり華(はな)だと小学生時代から教育され、千辛万苦の大山鳴動する戦塵の騒ぎの中を、死を賭(と)して力戦奮闘しながら生き永らえてきた。

「風を待つ露」のように自分では如何することもできない運命の戦場に身をさらし、ある人は不運にも命を犠牲にし、ある人は幸運にも天の命を拾った。この戦いを共にして骨肉を分けた友人を「戦友」と言った。「又」と「又」の字を合わせて「友」という字になるのだが、「又」は右手の象形であり、手と手を取り合う「とも」の意を表している。その戦の友人が私の友達のすべてであった。

昨年末の喪中の来信は急激に増え、今年元旦の賀状は急減した。これは戦友の齢も傘寿や卒寿を越したからで、人間はいくら努力しても「死」から逃れることはできない。

今年ほど『門松は冥土の旅の一里塚』の句の意味を骨身に感じたことは無い。この句は一休禅師の作と伝わる狂句だが、下の句は「芽出度くもり芽出度くもなし」だ。若い時は生の貴重さを教えられたが、我々老人には門松は死に一步ずつ近づく印である。

(戦前は門松は各所に立てられ、年齢は数え齢で正月には齢は一つ増えたのである)

多くの戦友は僕(めのな)くも戦場の露と化し、万死に一生を得た戦友は減るばかりで、幽明の間をさまよう状態を思うと、今日まで私に寄せられた御友情に対し深謝する良い機会だと考え、筆頭に我が死の準備とも謂うべき「辞訣」を書いた次第である。

「拙書」は第一に上記した観点から、一指揮官として部下を死地に就かせた『戦闘』(戦争)記を筆頭にして、亡き戦友が鎮座します靖国神社問題なども取り上げて記述したい。

“第二”には、精神的にも肉体的にも疲労困憊(ひろうこんぱい)し、戦場から祖国に帰還してからの経過と思い出である。昭和二十一年五月に浦賀に上陸して以来、現役将校出身が理由で追放令に該当し、辛酸を嘗(な)めさせられたが、良き伴侶(はんりょ)を得て一男一女をもうけた。戦後の生活の当初は四年ばかり搾油業を営み、続いて通運業(個人)を二十五年の間つづけた。二人の子供が大学を卒業した時、漢書にある『人生は行楽せんのみ』の辞が脳裏に浮かんだ。人生は短く、ただ楽しんで暮らすことだと旅気違になり、国内旅行だけに止まらず、海外旅行も六十回にも及び病は膏肓に入った。これらの旅は戦闘間の「命より名を惜しむ」生活の反動のようなもので、鹏程万里(ほうていほんり)の旅は胡蝶(こちょう)の夢を見ているようであった。しかし罹病と老齢から『諦(あきら)めは心の養生』だと已む無く旅を中止した。

“第三”は、平成八年六月に初期胃癌が発見され、八月の胃癌手術で三分の二を切除したが、その縫合部分が綻(ほころ)びてしまった。若い医師はあわてて抗生物質を四肢の静脈から注入し、更に手術台の上で鎖骨の下の中央大静脈からも注入した。その結果、薬害によって先ず第一に眼の網膜に黒い斑点が生じ、鼻は臭覚が、舌は味覚がなくなり、聴覚も難聴の度がひどくなつて身体障害者に認定され、五感は喪失状態に陥ってしまった。その後に、四肢がしびれる末梢神経障害の症状が現れ、その辛さは表現の域を出している苦痛の状態である。これに対し無責任な医師は一言も謝らず、私の怒りは心頭から発している。

『医は仁術なり』の医師の基本と、東洋・西洋医学を眺めて素人ながら学習してみたい。

戦闘

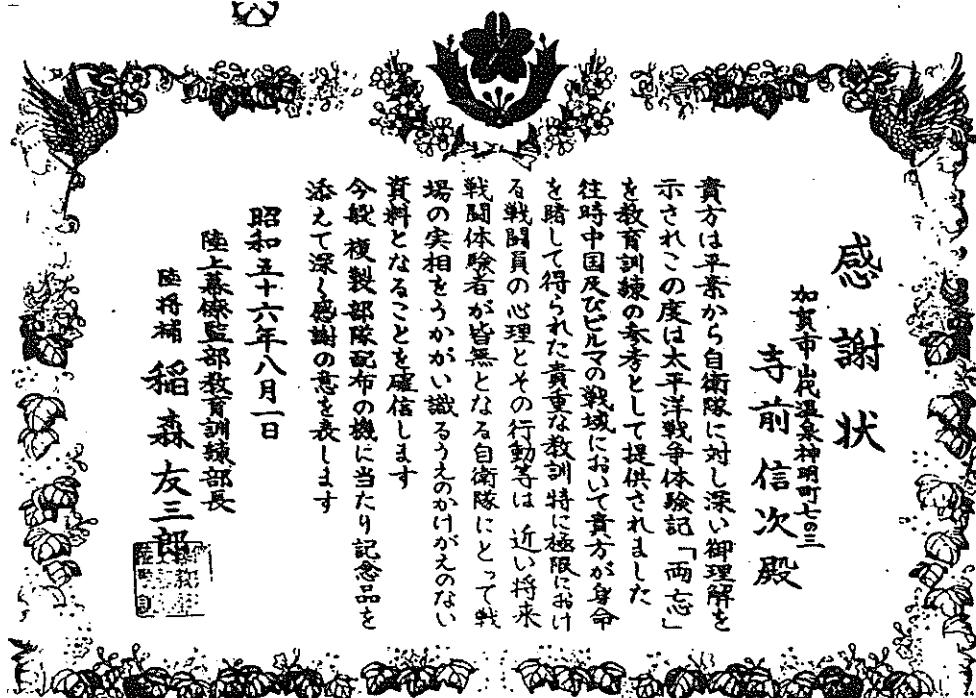
《戦記》

戦闘に関しては昭和五十五年（1980）に約二年間の日時を費やし、タイプライター（当時はこれしかなかった）を叩き、生と死の両方を忘れて戦ったという意味から考えた『両忘』と題した吾が戦闘記を上梓し、上司をはじめ部下戦友・同期生・教え子・親族縁者等に三百部を印刷して配布した。

その他、昭和六十年に「春秋に義戦なし」、平成十二年に「支那戦場余話」、平成十四年に「遠交近攻」、及び各紀行文にも戦闘記を記載した。

この『両忘』を私の陸軍士官学校の教官であった上司は、貴重な戦闘記は価値大であり是非とも公開出版すべきだと力説し、出版社まで紹介してきた。しかし私は自己宣伝を嫌う上に、一般に知らせたくない殺人やガスの記事があり、出版を拒否した。

陸士の教官だった上司は陸上自衛隊の最高幹部の地位にあり、戦闘心理を主として記載した『両忘』を、陸上自衛隊の幹部教育の貴重な教育資料にしたいとの申し出を受けた。そこで私は陸上自衛隊幹部諸君に伝えたくない数ヶ所を削除することを条件に、出版権を陸上自衛隊幕僚幹部に無償で寄贈した。それに対し下のような感謝状を授与された。



陸上自衛隊幹部学校長（旧陸大に相当）の藤吉俊男陸将からも次のような礼状を受く。

【謹啓、初冬の候、いよいよ御健勝のおもむき慶賀のいたりに存じます。このたびは貴殿著作の大変貴重な図書「両忘」を御寄贈賜り心から御礼申し上げます。

御寄贈の図書は、表紙に御芳名を付したうえ教育・研究の参考資料として当校図書館に長く保管し、十分活用して御芳志におこたえする所存でございます。

はなはだ略儀ながら、書中をもって御礼申し上げます。

敬具】

『両忘』は戦場心理に重点においていた貴重な資料として、陸上自衛隊幕僚幹部では二千部を印刷して各方面総監部をはじめ、各師団・各科連隊に配布した上に将校全員に配布したと聞いている。そのためか各方面総監部・各師団・各連隊から続々と感謝状に添えて盾(たて)などの記念品が贈呈され、私としては十分、出版した価値があったと思っている。

《運用の妙は人には存す》

軍を指揮して戦闘する場合、その運用の智恵は普通学の智恵とは違い特別なものである。所謂(いわゆる)、軍事的に卓越した頭脳があるかどうかである。これが無い人は軍人とくに戦場の指揮官には適しない。それで「運用の妙は人には存す」と掲げたのである。

「攻撃は最大の防御なり」といふことも良く言われているが、私の戦闘体験からは同意できず、攻撃一点張りでは賭博(とばく)に等しい。ビルマのインパール作戦はその悪例である。既成の型にはまつた発想では、何とかの一つ憶(おぼ)えで必ず行きづまる。戦闘に固定した勝利の型は存在しない。勝利の形態は、敵情に応じて絶えず変転流動する。兵法家はこれを水の運動に譬えている。私の四年間の戦闘指揮を通じて「攻撃は最大の防御」ではなかった。そこに運用の妙が存在するのである。兵法書は奇想天外な戦術で勝つための秘訣集であるかのように受け取るのは間違いでいる。

私の経験から「勝つことよりも先ず負けないことを第一に考えよ」と言いたい。孫子は守備と攻撃、二通りの戦法の特色を指摘し、守備の側を優先させるべきだと述べている。その第一の理由は、守備は自己の努力の範囲内で確実に達成可能であるのに反して、攻撃の成否は敵の動きに左右される不確実性を多分に含んでいるからである。理由の第二は、攻撃をして勝利するよりも、敵の攻撃によって敗北しないことの方が先決だからである。理由の第三は、守備の方が、戦力に余裕が生じ、強力で有利な戦法である。

孫子の説く守備～防御の態勢とは、攻撃に出た敵がしたいに消耗する一方、守勢を取る自軍の戦力には余裕があるので利用して、敵軍を敗北の態勢へと誘導する手を打ちながら、その時機の到来を待ち構える積極的な性格をも合わせ持っている。したがってそれは単に、消極的な守勢一方の態勢ではなく、何時でも攻撃態勢へと変化・移行できるのである。

日露戦争での勝利の原因を強調するために昭和の日本陸軍は攻撃一本槍であった。戦術用語に「攻勢防御」という戦法は以前にはあったが、我々が教育された戦術には無かった。攻勢に転じる防御なら、初めから攻撃せよという思想である。これが日本軍の失敗の一因である。戦闘体験者は常に負けないことを先ず念頭において闘ってきたと思っている。

中牟橋頭堡の戦闘

「辞訣」に書いた中牟橋頭堡の戦闘は、絶対優勢な火砲を有す約二万の衆敵に対し、我が方は僅か四百名の寡兵であり、黄河を背にした文字通りの「背水の陣」の戦闘であった。死守の任務を達成できた要因は検討するに値する。詳細は吾が拙書「両忘」にゆずりたい。

先ず第一は、中隊の団結であった。中隊長と小隊長、中隊長と分隊長、中隊長と兵士との力強い団結心が成功の賜物である。第二は吾が陣は退くことが出来ない「死地」であった。吾が將兵の前面には衆敵が待ち構え、背後には黄河の渦流が滔滔として流れて行き場がなく、決死の覚悟を固めさせたのであった。その上、毅然とした隊長の態度は以心伝心、孤立無援の態勢が諸兵連合の各隊を一致団結させたのである。絶対絶命の窮地に追い詰められると個人的感情は無くなり、橋頭堡の陣地は整然と統制されたのであった。

第三は、徹底した陣地構築が將兵に安心感を抱かせたことである。これは橋頭堡守備の重要な要件であることは論をまたない。特に敵の猛砲撃に対して厚さ1メートルの煉瓦で固めた掩蔽陣地(トーチカ)の数々は、將兵に自己の墓場だと自覚させ戦闘意識を高揚させた。更に敵兵の突撃を阻止するための鉄条網に加えて、深さ2メートル以上もある遮断壕を陣地の全周に構築し、その強度を増すために壕底に低鉄条網を張り巡らせた。この隠れた低鉄条網の効果は抜群で、これに引っ掛けた敵は足を引っ掛けて動くことが出来ず、中牟橋頭堡は金城湯池(難攻不落)の鐵壁の陣だと攻撃を諦めさせたと思っている。

[陣地の概要]

戦闘は条件が揃っていない勝てない。そのために意表を衝くことを考えた中牟の陣地は東西1,200米、南北950米の城壁に囲まれた長方形の県城と、その東方100米の部落と西方300米の砂山を含めて正面は約4^{キロ}の黄河を背にした橋頭堡である。

[戦闘の概要]

昭和十六年十月三日、夜陰に乗じて黄河を渡河し、中牟城の南方から迂回攻撃して占領した。それから約四十日間を費やして必死に防御陣地を構築した。その間、聯隊主力は鄭州を攻撃し我が陣地構築の援護をしていた。十一月十三日、我が陣地の完成を待って聯隊は黄河北岸に撤退して警備地区に後退した。(私が中牟の攻撃の際に中牟南方で戦闘をしたため、その地形を熟知していたことは防御戦闘に大いに役立った)

十一月十四日、敵は一挙に我が橋頭堡守備隊を黄河に追い落さんと猛烈な砲撃を開始した。我が陣地に対する攻撃準備の破壊射撃であった。引き続き、その夜から敵は主攻撃を東南角に指向すると共に、全線に渡って夜襲を決行したが、我が堅固な陣地に阻止された。翌十五日も亦、主攻撃を西方に指向して夜間攻撃を決行してきた。しかし我が將兵の沈着冷静な奮戦によって敵の攻撃は頓挫した。十六日も敵は再び主攻撃を東南角に指向して夜襲を敢行した。堅固な陣地を信頼し余裕をもって戦ってきた我が隊は、敵を陣前に引き寄せて猛射を浴びせた結果、敵は累々とした屍を残し、夜襲は悉く失敗に帰したのである。

後日の調査により、敵は鉄条網を数ヶ所にわたって鉄条網鉄(はさみ)で切断して突撃路を開設し、遮断壕に飛び込んだが低鉄条網に足を取られ、壕底を撃つ我が機関銃の猛射により、各所に重なり合って屍を残置していた、ことが判明した。

[天皇の御嘉賞の詞が伝達される]

上記のような戦闘経過により十一月二十二日午後二時、侍従武官の搭乗機が中牟上空に飛来し、光栄にも「辞訣」(2頁)に記載した天皇の御嘉賞の詞が伝達された。

[二回の出撃と、その効果]

中牟橋頭堡の直接攻撃が不成功に終わった敵は、中牟の東方の二ヶ所の高地から間断なく、我が補給路を遮断する目的で渡河点及び航路を砲撃・銃撃した。この敵の陣地を破碎するため師団砲兵の支援を得て、昭和十六年十二月六日の黎明時に第一回、昭和十七年七月二十八日の黎明時に第二回の出撃を敢行し、師団工兵の協力で敵陣地を破壊した。その結果、黄河を横断する補給路は安全に確保され、爾後、中牟橋頭堡は平穏な日々が続いた。

まさかの出撃によって敵は防御陣地の構築に着手し、鉄条網を張り巡らし、地雷を敷設するなど、中牟を攻撃する意志を完全に放棄して防御態勢に移った。その結果は文字通り「攻撃は最大の防御なり」であった。しかしこれは「運用の妙は人に存す」と言う方が適当であり、常に用いる戦法ではないと私は考えている。

後日、私はビルマ戦線に大隊長として参戦し、無謀な夜間攻撃を命ぜられて悲惨な結果を招いた苦い経験がある。「攻撃は最大の防御なり」は精神的なもので常用戦法ではない。

[必要性と可能性]

戦闘行動には常に「必要性と可能性」を考慮しなければならない。これは中牟の戦闘間に私が学んだ成果であった。必要性があっても成功の可能性がなければ実行すべきでない。反対に可能性があっても必要性がない戦闘は実施すべきではないことを教えられた。

二回の出撃は僅少の犠牲で成功した。しかし、これから以後は何も手を打たないことは絶対に避けなければならない。そこで当時の敵が持っていない兵器で以って敵に脅威を与えることを考えた。その一つは「火炎放射器」である。我が陣前で火炎を放射し、敵が攻撃してくれば焼き殺されると脅かした。また探照燈で敵陣を照らすと、日本軍が再び夜襲を決行してきたと勘違いして射ちまくり、我々は高みの見物であったこともある。爆薬投射器で爆薬を投射して大轟音を発生させ、敵の肝を驚かすなど、奇策は考えれば沢山あることに気がつき、多きな効果を挙げ、守備隊長の私に対する兵士の信頼を高揚させた。これらの兵器は一般歩兵の中隊は所持せず、師団の工兵隊から借用したのであった。

戦闘には固定した型は存在しない。敵情や地形その他の状況に応じて絶えず変転流動すべきで、柔軟性を持つことは肝要であり、これが即ち積極性である。特に防御戦闘に於いては消極的に陥りやすく、創意工夫に勤めて千差万別の状況に対応する事が運用の妙であり、無用の流血を防止して責任を完遂することができる。

指揮運用に卓越した指揮官によって、守備隊の各兵科が連携して協同一致し、一人の人間を使用するような状態なれば、誰でもそうせざるを得ないようになるのだと感じてきた。

[敵の評価]

我が師団の情報部の報道によると、「中牟の指揮官は大佐級で、兵力は最精銳部隊二千名」と敵は推察したと言う。中尉の私が四段飛びして大佐に昇進し、四百名の兵力が五倍の二千名にも認められたのである。更に我が橋頭堡守備隊の決死の奮戦によって、光栄にも私の首にまで賞金が掛けられ、中牟は難攻不落、金城铁壁と敵は認めたのであった。

私は中牟橋頭堡守備の任務を命ぜられて、初めて諸兵連合の部隊を指揮した。若輩の身で責任を全うするには先ず部下の掌握が根本であると決意した。指揮官は権威を以って我が統率に従わせようとしても、本心から忠実に責任感に燃えるかは疑問である。身分の上下といった形式的な要素だけでは、極限状態の状況下では指揮に限界があると自覚した。

そこで常に旺盛な責任観念と強固な意志で以って責任に当たり、苦楽を俱にして率先垂範、この人なら生命を預けても惜しくはないと思わせることだと決意した。部下を指揮する立場の者は、自分の発した一言に過敏なまでの責任を感じなければならないのである。

常に毅然たる態度で指揮し、信賞必罰によって部下に親愛と畏敬(いけい)の念を抱かせることは重要である。また指揮官の智恵が戦闘を勝利に導くのであり、部下の信用を得るためにも創意工夫は絶対に必要で、上記した火炎放射器・探照燈などは一例に過ぎない。

[高級指揮官の視察開始]

侍従武官の上空からの視察と御嘉賞の御詞の伝達に引き続き、支那派遣軍総司令官「畑俊六大将」を始め、北支派遣軍司令官「多田大将」(北京)、第十二軍司令官「土橋中将」「喜多中将」(济南)、第三十五師団長「原田熊吉中将」「重田徳松中将」「坂西一良中将」(開封)等の将星が視察と激励のために中牟橋頭堡を訪れる光栄に浴した。但しあくまでも当初は黄河を渡河して中牟橋頭堡に案内するのは危険であり、責任問題が発生するという理由から黄河北岸の高地での視察であった。

(右の写真は中牟橋頭堡守備隊長当時の著者、昭和十六年十一月)



中牟橋頭堡守備隊編成
歩兵二一九聯隊第三中隊

を基幹にして編成

第四中隊一ヶ小隊配属

機関銃隊一ヶ小隊配属

野砲一ヶ小隊（二門）

十五榴弾砲一門配属

渡河工兵一ヶ小隊

（舟艇五隻）配属

野戰病院分院

（軍医一名、衛生兵十名）

昭和十六年十一月現在

兵員約四百名と迫撃砲

十門にて迫撃砲隊編成

右上の写真は中牟橋頭堡守備隊幹部（下士官以上）

（昭和十七年元旦撮影）

前列左より 機関銃小隊長森山少尉 第一小隊長高橋少尉

野戰病院平松軍医中尉

守備隊長寺前中尉

中隊本部付斎藤少尉

第二小隊長前田少尉

第二列左より三番目 書記菅野曹長 六番目工兵小隊長三川曹長 右端第四中隊より配属

小隊長 第三列左より五番目 第三小隊長高山少尉 第五列左より一番目 指揮班長金谷

准尉 三番目 野砲兵小隊長 井上准尉 背景は守備隊長室（私の個室の正面玄関で撮影、正月の注連縄が張られている）

私は昭和十八年五月に濟南の十二軍司令部に於いて陸軍大学校の試験（初審）を受け、九月に合格の通知を受けて内地に帰還するまで、中牟橋頭堡の守備隊長をつとめた。

ビルマ・シャン高原の戦闘

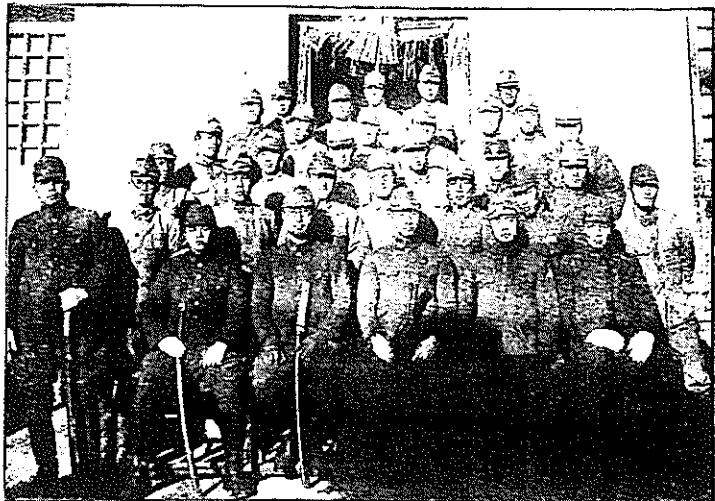
「辞訣」の3頁に書いたビルマ・シャン高原の戦闘は、敗戦三ヶ月前の昭和二十年五月、我が寺前大隊一ヶ大隊だけが急遽シャン高原に派遣され、方面軍主力がサルウイン河を渡河して泰国に後退する為の援護の任務を命じられ、中部ビルマのシャン高原に布陣した。

彼我の状況は混沌としており、迎え撃つ敵軍は破竹の勢いで追撃中であるという以外の情報はない。しかし敵は絶対優勢な空軍と砲兵及び大戦車群を擁し、我が大隊との戦力比は数百倍の差があることは、今日までの戦闘経過から判断された。

命じられた中部ビルマの地形はヘイホ飛行場のある高原が主たる抵抗線で、そこから東方四キロに広がる平地は雨季のため湿地帯化しており、ゲリラ戦には好適の地形だと判断した。湿地帯に続くタウンギー高地は樹木はなく禿山で、遮蔽陣地の構成には不向きのため長時間の防御は困難と判断し、頭の中で概略の防御戦闘の構想を立案した。

防御戦闘の主眼は地形の利用、工事の施設、戦闘準備の周到等、物質的利害により兵力の劣勢を補い、且つ火力及び逆襲を併用して敵の攻撃を破壊することが原則である。しかしビルマの戦闘は原則が適用されるような戦闘は全くなかった。双方の戦力差に応じた可能な戦闘行動を立案しなければならない。端的に言えば、敵を罠（わな）に掛けることである。

私が第一に考えたことは、我が戦力を一点に集中させて、個々の戦場の戦闘に於いては常に優勢を保持しながら、孤立した敵を各個撃破することであった。第二は戦闘の場所を



決定できる主導権を我が方が握ることである。これはより具体的には、特定の地域や地点だけを防御しないという方針によって可能となる。

土地を敵の攻撃から守ろうとすれば、守備兵力をその場に張り付けなければならず、守備する地域が広く、守備する地点が多ければ兵力は分散し、またそのことによって、部隊の態勢も意図も、明瞭に敵に察知されてしまう。したがって土地の防御を放棄することによって、はじめて部隊は地面の拘束から開放され、態勢と意図とを秘匿し、兵力を一点に集中する行為が可能となる。そうすることによって敵は受身にまわり、戦闘の主導権は一方的に我が方が掌握できることになる。この際、単に我が軍の意図を隠すだけでなく、別働隊を派遣して偽装攻撃を併用すると、敵の兵力分散を一層助長させる効果を發揮する。

敵にとって最も不気味なことは、いささかも土地を守ろうとせず、攻撃する敵の戦力の撃破だけを目指し、ひそかに火力を集中してくる我が軍だと判断させたことである。

シャン高原のヘイホ飛行場は約二千メートル四方ほどの平坦地で、その東側には小高い丘が南北に連なり、その幅は約千メートル程度で、その東側は急斜面で平坦な湿地に連なっていた。(この下流千米にインレー湖がある)

敵は飛行場西側の隘路(あいろ)からしか進出できにくい地形であった。この地形を利用して先ず配属された聯隊砲(山砲)を以て隘路から進出してきた敵の集団を砲撃し、展開妨害射撃で戦端を開いた。敵の練習は蜘蛛の子が散ったように四散して度胆(どきも)を抜かれた。しかし補給のない聯隊砲は携行弾薬が少なく、残念ながら、ただの一発しか撃つ弾がなかったが、敵に与えた精神的な効果は大きく、敵は慎重すぎるほど過敏になった。

飛行場に面した東側の高地の山脚には陣地は布陣しなかった。これは優勢な敵の砲兵による損害を避けるためで、少数の兵を以て大部隊が布陣しているように欺瞞(ぎまん)させた。これらの兵は敵の砲撃開始と同時に後方の主陣地に後退することにして、撤退の時機はそこを指揮する者の判断に任せた。

私は中隊長と共に双眼鏡で敵の行動を凝視していると、全正面に慎重かつ隠密に展開を開始した敵は、それまでに三日間の日時を要していた。特に40～50両のM4戦車軍群の展開を見せ付けられると、該地の戦闘は徹底した対戦車戦法を講じなければならないと決意を新たにした。

私はこのヘイホのシャン高原に到着した瞬間に閃(ひらめ)いたことは、敵の砲兵・戦車・飛行機の物量戦が發揮しやすい地形であり、これを避けることが我が任務を達成する唯一の手段であることであった。

常套戦法では敵を欺瞞できない。今までの戦闘で敵が経験したことのない陣地を占領し、至短時間に不意急襲して敵の度胆(どきも)を抜かなければならぬと考え、主陣地を敵側の反対斜面の谷底に構築した。戦車に対しては通過できる公路のすべての橋梁を爆破して進撃を阻止し、飛行機に対しては擲陣地を構築して敵の爆撃を吸収することにした。

更に谷底陣地の正面にある高地にも着眼した。この高地は連なる丘の最高峰のため必ず敵は攻撃してくると判断した。しかし此處に陣地を占領すれば敵の猛烈な砲爆撃の目標となり、多くの犠牲を強いられるることは、火を見るよりも明らかであった。

敵の攻撃は物量に物を言わせて徹底的に砲爆撃を実施し、陣地を破壊しなければ突撃は敢行しないのが慣習となっていた。私はこの戦法を逆に利用することを考えたのである。

「戦闘開始」

いよいよ戦闘の火蓋は切って落とされた。敵の砲兵は飛行場に接した山脚にちらつく我が影を、主陣地と誤認して猛砲撃を開始した。攻撃すると必ず一日中にわたって継続して

彼らが目標に選んだ我が陣地を砲撃するのが習慣で、我が兵士は危険な場所を避けて退避するのが常習である。この丘の山脚にも敵は陣地があると予想して陣地破壊射撃を猛射をした。砲撃が終了すると同時に日本軍は健在なりと敵に向かって発砲し、これで二日間は敵の射撃は継続するだろうと判断した。第二日目になると40両から50両の大戦車群が戦車砲を射撃しながら接近し、我が陣地と予想した地点を躊躇（じゅうりん）し始めた。

無人の陣地に大量の物量を集中した結果、日本軍は退却したと判断し、明日から丘の最高峰陣地の砲撃を開始するだろうと私は判断し、待ち構えるための準備した。

予想通り第三日目になると、最高峰には堅固な陣地を構築していると判断した敵は、全砲兵約40門を以て陣地破壊射撃を開始してきた。その光景は実に見事で素晴らしい光景であり、将兵は私を信じてくれている時間となった。夜間は警戒のために派遣していた一ヶ小隊は指示していた通り、砲撃開始と同時に丘を下りて敵の反対斜面の壕に避難し、砲撃の中止するのを待つのであった。

この最高峰の丘は重要な陣地と判断した敵の指揮官は、我が日本軍は相当な陣地構築を施した堅固な陣地と判断したことは、至極当然なことであった。第一日目、第二日目の射撃終了と同時に我が小隊は頂上に駆け上ったが、敵兵の姿は現れなかった。敵の指揮官はまだ集中砲撃の効果は不十分だと判断したからであろう。

第三日目は集中破壊射撃の効果があったと判断した敵は、射撃終了と同時に歩兵部隊が丘の上に進出してきた。待ち構えていた我が一ヶ小隊の勇者は間髪を入れず、猛射で反撃し敵は四散してしまった。そして夜を迎えた。夜間には別働隊を編成して敵の後方擾乱隊を敵陣内に潜入させ不意急襲射撃を実施して直ぐに帰還するように命じてあった。それらは一兵の犠牲も出さないという私の信念からであった。

第四日目を迎えると依然として敵砲兵の陣地破壊射撃は猛烈を極めたが、丘は戦車群を使用できるような地形ではない。思案した敵指揮官は戦闘爆撃隊の参加を依頼して、今度は空からの攻撃に切り替えた。このことがあると判断していた私は、最高峰の丘の南側に屹立していた丘に眼をつけ、あらかじめ樹を伐採するなどの手段を講じて偽陣地を構築していたのであった。午後の二時になると約30機の戦闘爆撃機が飛来して旋回をはじめ、爆撃目標の選定を始めていた。私はここぞとばかり発炎筒一発を、偽陣地に向かって発射させた。見事に偽陣地から煙が立ち上り、敵機の指揮官は友軍から目標が支持されたと勘違いして、一団の飛行隊は連続して偽陣地を山が変形するほど爆撃した。我々一同は「快なる哉」と心を躍らせて高見の見物であった。

第五日目を迎えると敵砲兵は早朝から最高峰の丘の集中射撃を実行した。五日目ともなると丘に生えていた樹木は砲弾で吹っ飛んで、丘は丸裸の常態となっていた。これでは一ヶ小隊の奪還部隊にも犠牲が出ると判断した私は、再度の奪還攻撃は中止させた。その代わりに、前もって試射を実施して十分な射撃準備を完了していた大隊砲に、最高峰の丘に集中射撃を命じ、敵に泡を吹かせたのであった。敵は我が軍に砲兵が存在するとは夢にも思はず、これで強敵の存在を知った敵の指揮官の攻撃の意図は一時的にもひるんだろう。

その効果は覗面（てきめん）で第六日目は準備のためか鳴りを静めて沈黙し、敵は斥候などを派遣して爾後の攻撃を準備したのである。我が軍もまた偵察に余念がなく、敵の企図を探るのに懸命であった。

警戒陣地とも言うべき丘の上の陣地を奪取された我が大隊の主な隠蔽陣地は、谷底に秘匿して陣取った主力陣地であった。今日までのビルマ戦線の日本軍で谷底に主陣地を構築した部隊があつただろうか。一つ泡を吹かせてやりたいと言う魂胆から、私は一つの賭け

をして谷底に主な抵抗陣地を試みたのであった。意気揚々として丘を下り、我が軍の餌食となり標的となるだけの敵の敗残の姿を想像していた。

谷底からの短い射撃距離に敵の大部隊を引き込めば、敵の退路は山の急斜面が待ち構えて伏せることも身を隠すことも出来きない。前進すれば日本軍の隠蔽した陣地からは雨霰の如く射ちまくられ、鳥合の衆と化して我が大隊の餌食となるだけである。

予想した通り丘の最高峰の占領に成功した敵の大衆は、昨日までの喧騒たる戦闘の銃砲声も消えた静寂の中を、安心しきった表情で我が方に向かっている斜面を下り始めた。我が詭計(きけい)が待ち受けていることも知らない敵は、数条の下り坂を悠然と降り始め、固唾を呑んで満を持している前に姿を現した。まさに飛んで火にいる夏の虫である。数百の敵の顔は刻々と大きくとなってきた。

緊張の中に敵の先頭が主陣地の前方30米に接近してきた時、鬱憤(うっぴん)を晴らさんと、沸騰点に達したように一斉射撃を開始し、起死回生の反撃に転じた。明暗は一転して攻守はその処を変え、我が将兵の心中は「痛快」の一言であった。その情景を描写する術を知らず、積年の恨みを一瞬にして晴らしたという感じであった。

『ここで重要なことは、個々の戦場に於いて常に優勢な立場に立てないビルマの戦場では、敵を孤立させて各個撃破するしか打撃を与えることは困難である。いつも自軍の戦力が敵よりも優勢であるように仕向けて戦うことだ。孫子は「兵の勝は実を避けて虚を擊つ」と言っているように、敵の兵力配置の手薄な箇所を作り、そこに攻撃力を集中することだ』

私はヘイホ高地の戦闘の成果だけでは、ビルマ方面軍の退却掩護の時間的な余裕に不足しているのではないかと思案し、ヘイホ高地から平地に出た開闊地帯にも「策」がないかと、ヘイホ高地の戦闘間の暇を見て策を考えた。

五月以降は雨季のために国道以外の道路は車両の通過は困難であった。よく視ると、国道の両側には軒々として樹木の生えた草むらが点在していた。これらの草むらを利用すれば敵の進撃の勢いを遅らせることは可能なかからうか、と思案した。

敵はヘイホ峠から一気にタウンギーの高地に進撃することは当然で、行軍するためには尖兵を先ず派遣するだろう。この尖兵を狙って一撃を加えれば敵の心胆を驚かして進撃は鈍ると考えた。そのためには国道の両側にある樹木の生えた草むらに伏兵を配置し、先ず敵の尖兵を皆殺しにして出鼻を挫(くじ)かなければならぬ。

私は夜間を利用して隠密にヘイホの各陣地から部隊を撤退させ、各隊を指揮して国道をタウンギーに向った。ヘイホの森林地帯から開闊した地形となった約300米付近で停止し、草むらを5~6箇所ほど選定し、小隊長以下10名に懇々と戦闘方式を説明して健闘を祈って別れた(所謂ゲリラ戦法である)。

別れたその夜半に敵の尖兵が前進してきた。国道を円く囮んだように配置した草むらから、目の前10~20米の至近距離に接近したところで一斉射撃を見舞い、敵の尖兵を全滅させたのでせあった。翌日の昼ころに全員が私のところに申告しに参った。全員無傷で意氣軒昂、軽機関銃などの戦利品も持ち帰ったのであった。

この戦果による効果は抜群で偉大な実績を挙げたのである。翌日以降、敵は砲兵を使用して湿地帯に点々と生えている樹木や草むらに対し虱(しらみ)つぶしに射撃を実施した。この無数の草むらに対する射撃のために、敵の前進は約一週間程度は遅延したのである。

文明国の軍隊は四つに組んだ戦闘には絶対優勢な火力で圧倒して勝利に結び付けているが、その反対にゲリラ戦には極端に弱いようである。そのため未だタウンギー高地の陣地での防御戦闘までには3キロ程度の距離があり、更に戦術を練っていたのであった。

草むらでのゲリラ戦で痛い目にあった敵は、今度は戦車を先頭にして前進してくることは間違いないと推察しながら、部隊を引率して夜行軍していると、湿地帯の中ほどに幅約10米の小川が南北に流れていた。その川はインレー湖に注ぐ地図の通りの川であった。

その小川に架かっていた橋梁は爆破されて落とされていた。誰が落としたのかは不明だが、幸いにこれでは戦車の通過はできない状態であり幸運だと直感した。小川の両側には適当な堤防があつて身を隠す遮蔽陣地の構築に適していた。しかし敵が迂回して攻撃してくることは当然考慮しなければならず、そのためには少なくとも一ヶ中隊の兵力で以って布陣すべきだと判断した。

タウンギーの高地は敵側に傾斜していて敵の砲撃には絶好な地形である。これはヘイホに行く前に一泊露營して詳細に地形偵察した結果であり、その時からタウンギーの防御の腹案は出来ていた。そのため小川の線で出来るだけ長く持久し、敵の展開を遅らせたいと考えて一ヶ中隊を残置し、持久戦を計画したのであった。

予想した通り今度は戦車一両を先頭にした尖兵隊は、その後方に歩兵を随伴して国道を堂々と前進してきた。昼間だから明瞭に視界が広がり我が軍に有利であった。中隊長以下固唾を呑んで射撃開始の時期を待っていたのである。

敵は戦車の絶対的な威力を頼りにして行進し小川の線で停止した。そこで暫く四方を警戒しながら偵察し、日本軍の姿が見えないからと河畔に集まって休憩となり、車座となつてタバコをふかし始めた。この好機を逸すべからずと中隊長の無言の命令一下、一斉射撃を浴びせて敵を全滅させたのであった。ただ戦車一両だけは反転して退却したが、我が方の快勝に帰して損害は皆無であった。その大打撃の影響から敵は姿を現さず、陣地らしいと思われる地域に砲弾を乱射して物量を活かしていた。

戦術書では、ただ「意表を衝く」と漠然と書いてあるだけである。「意表の手段」を考案することが各級指揮官の戦術眼で、これは図上戦術等では学習できるものではなく、実戦の経験の積み重ねが肝要である。戦術眼とは、その指揮官の脳細胞が戦術的に適しているかどうかであつて、学校の成績優秀と実戦的な優劣とは別問題であると思われる。

小川の線で失敗した敵は全域に砲兵を展開し、数日の間タウンギーの稜線を試射をかねて砲撃を開始した。大隊の主力は一週間も前に到着して懸命に陣地構築中であった。しかしシャン高原に転進してくる二ヶ月前の昭和二十年三月、隸下の第八中隊は新設旅団編成のために抽出され、四分の一の戦力が削られていた。且つ連戦連戦のため犠牲が続出して兵力は半減し、中国・雲南省からの移動で将兵は疲労困憊（ひろうこんぱい）であった。

タウンギーの防御陣地の正面は約3キロで、前記したとおり敵側に向って傾斜しているために敵の砲兵の目標となりやすく、私自身も長期間の防御の自信はなかった。小川の線で活躍した中隊が後退ってきてから四日後、敵砲兵は鬱憤（うっふん）を晴らさんと集中射撃を繰り返し、約40門の砲列の威力は物凄いものであった。

二日間にわたった砲撃で陣地は破壊され、夜間になると敵は陣地の隙間から侵入し、その上に戦車攻撃で躊躇されれば壊滅状態になる恐れがあると、私の心中は穏やかでなかつた。その時、聯隊長から後退命令が発令され、次の陣地に移動できたことは幸運であり、聯隊長の鋭い慧眼に感服したのであった。

以上、ビルマ・シャン高原の長期間に亘った戦闘に於いて犠牲者は皆無であり、上司の期待に応えられたことは我が大隊将兵が一丸となって戦った成果である。

中牟橋頭堡の戦闘及びビルマ・シャン高原の戦闘は辞決に書いた通りである

《経験は最大の戦力》

ナンパッカの戦闘

「辞訣」には述べなかつたが、風前の燭（ともしび）のように、いつ全滅するか分からなかつた血なまぐさい戦闘を私は体験している。その一つが私がビルマ戦線に赴任し、大隊長の重職に就いて日なお浅い昭和20年1月28日のナンパッカの夜間攻撃であった。

前任者と大隊長の任務を交代したのは一月中旬であったと思っている。死闘の連続で当時の日本軍の状況は悲惨きわまり、大隊に地図一枚もなく紙も鉛筆もない状態であった。戦闘に追いまくられた戦況下の人間の記憶力は、当面の悲惨な状況に押されて極端すぎるほど薄くなり、日時までは記憶に留められなかつたのが現況であった。

任務を引き継いだ地は中国・雲南省とビルマの国境の町「畹町」（わんちん）の高地の戦場で、大隊の戦力は大隊本部、歩兵一般中隊が四個中隊、機関銃中隊、大隊砲小隊であった。しかし機関銃中隊は普通編成であれば重機関銃12銃だが現有戦力は2銃に過ぎず、大隊砲小隊も砲2門のところ1門しかなく、携行弾薬も少なく補給は皆無であった。兵員の数もこれまでの激戦で犠牲者が続出し、定員の半数以下と云う状態に陥っていた。

畹町の戦闘は任務を引き継いだ夕刻からの敵の猛攻により、陣地は持ちこたえられず、已む無く命により4～5時間程度で撤退した。引き続き幾つかの防御陣地で抵抗を続け、モンユウの付近に布陣して敵（中国軍の精銳・雲南遠征軍16ヶ師団）の大軍と阿鼻叫喚（あびきょうかん）の戦闘を交えたのは、1月25日前後ではなかつかと思っている。

絶対優勢な砲兵を有す敵は一日中にわたり猛烈な砲撃で我が部隊を圧倒し、数十両の戦車を繰り出して戦車砲で射ちまくっていた。その間、勇敢な我が兵士は爆薬を抱えて敵の戦車に向って肉弾攻撃を敢行し、壮烈きわまる戦闘を続行していた。

その時、突然に撤退命令が届けられた。山蔭に部隊を集結して国道に出てみると、師団の各部隊の撤退と重なり、入り乱れた混雑は言語に絶して敗残部隊の様相を呈していた。

聯隊長は私を見付け、寺前大隊は直ちにそこに待機している自動車に乗車せよ、との命令を下した。聯隊長も私も何が何だか分からず、混乱した道路の車上から後退してくる寺前大隊の将兵に向って大声を發して乗車を命じた。

部隊の掌握も困難な状態のままながら自動車隊の指揮官は出発を命じ、濛々とした砂塵を巻き上げて西に向って驅進（ぱくしん）した。絶対的な敵の制空権下の昼間の自動車行軍は無謀きわまり、私も自動車隊長も目的地や任務を知らされておらず、その時は魔の戦場が待ち受けているとは夢想だにしなかつたのである。

約二時間程度の乗車時間であつただろうか、平地から山間の隘路に差し掛かった瞬間、右手前方の高地から突然に急襲射撃を浴びせられ、若干の砲撃にも見舞われた。直ちに下車を命じ右側の高地に登攀させて各隊に陣地占領を命じた。双眼鏡に映る敵は陣地を構築中で兵力は不詳、しかし最高峰を占領した敵はあなどり難く、相当な火力を装備していることは確実であった。

暫くすると高地に登ってきた一名の将校が手に敬礼し、第33軍参謀長山本少将の命令を伝達した。それは、全部隊を引き連れて下山し参謀長の位置に集結すべし、であった。命令ならば私一人が御伺いすれば良い筈だが、敵を前にして部隊全部を指揮してとは、何ということであろうか、と不思議でならないのであった。

我が大隊が此の地に後退してくる数日前、33軍参謀長山本少将が我が56師団の視察

を終えて軍司令部に帰還する途中、我が大隊が遭遇したように此の地で敵の急襲射撃を受け、この山の谷間に避難して留まっていたのであった。

後に判明したことによると、我が師団の車両が後退することが出来ないと勘違（けんちがい）をし急遽、全師団を後退させ、寺前大隊を自動車輸送して此処に呼び寄せたのである。自動車部隊の後退を援護するためなら、我が大隊が占領した高地さえ確保していれば可能な筈だが、何故に大隊兵士全員を谷間にいる山本参謀長の場所にまで呼び寄せなければならないのか、と疑問を感じていた。

後日判明したことだが、山本参謀長は鉄道兵科出身の将軍で、歩兵の戦闘に関しては全くの素人であった。敵の急襲射撃に度肝（どきも）を抜かれて周章狼狽（しゅうしょうろうばい・大変あわてること）し、私が初めてお会いした時には身体は震えて顔色はなかった。敵は射撃して脅威を与えており、我が軍を捕捉殲滅する意図があれば、我々が一時占領した国道の両側の高地を占領している筈である。

敵が射撃するのは彼らが恐ろしいと恐怖感を感じているからで、別に我々が驚くことではない。だから車両が通過できることは私は確信を持っていましたばかりか、我々が乗車してきた自動車は其の夜には無事に通過している。夜間、白旗を持った兵に誘導された自動車や戦車は、最低速度でエンジンの音を立てずに隠密に行進すれば、国道は両側の高地に囲まれている遮蔽地であり、完全に且つ安全に自動車は後退できると確信を持っていた。

一月のビルマ北部の山岳地帯は日没も早く、もう直ぐに太陽が西山に没すという二時間ほど前に、山本少将の居られる戦闘司令部に野砲56聯隊長、工兵56聯隊長と歩兵大隊長の私が集合し、野砲聯隊長が代表して「我々の部隊は山本少将の指揮下に入ります」と申告して、山本少将は此の地に居る諸部隊を指揮することになった。

そして開口一番、「寺前部隊は今夜、あの高地を占領中の敵を攻撃し、同地を占領すべし」という命令が下達された。私は先刻登攀した高地から敵陣を双眼鏡で偵察した結果、高地の頂上は岩山で其処に敵は布陣していた。其の高地との距離は200米、比高は約50米ぐらいで、山の斜面は急斜面のうえに岩石が多く、長く伸びた草が繁茂して登攀には時間がかかる、と地形判断をしていた。それらのために夜間攻撃の準備には一日以上の日数がかかると判断し、山本参謀長にたいして『夜間攻撃の一延期』を申し出た。

しかし私の意見具申は即座に脚下されてしまった。

夜間攻撃は企図を秘匿することが最大の要件であり、夜間は指揮することも協同動作も困難であるため、歩兵の専門分野となっている。夜間を昼間と同様に行動するためには地形や敵陣の状況に通曉（つうきょう）し、準備を周到にすることが攻撃を奏功させる必須の条件である。これを考慮すると今夜の夜襲の成功は覚束ない。一応、部隊の集結地に戻って各中隊長に集合を命じ、第六中隊長「松崎中尉」と第八中隊長「島田中尉」に概要を説明して準備を命じた。

又、其の足で戦闘司令所に山本少将を訪ね、『再度の夜襲の一日の延期』を具申した。結果は同じく拒否された。それを覗いていた砲兵聯隊長は「歩兵の突撃の姿は神のようです」と私を慰めていたが、この状態で夜間攻撃を実行すれば甚大な犠牲が出ることは目に見えていた。私の心境を理解できる人は誰一人存在しないと涙が出そうであった。北支那の戦場でも分らず屋の少将がいたが、日本軍の将官の程度が窺われる所以であった。

果たして少将閣下は戦術能力を持っているのだろうかと疑った。鉄道兵科出身者は歩兵戦闘は未経験で我ら歩兵指揮官以下の能力しか持っていない。『経験こそ最大の戦力』だと参謀長閣下に声を張り上げて絶叫したい心境であった。

私の拙い戦闘経験でも実戦の経験から得た貴重な戦術でなければ、実戦の役には立たないと確信している。歩兵の戦闘は歩兵に任すべきで、「餅は餅屋」である。夕刻の二時間ほど前に到着して直ちに夜襲の決行命令を受けても、夜間攻撃の金科玉条である諸準備はひとつとして出来ない状態であった。それを度外視して決行の命令を下達することは「無謀」というべきである。

日本軍の悪弊の一つに、上級者が命令を下せば必ず其の通りに実行されるものだと云う観念があった。それは特に上級者に多かった。戦力に天と地ほどの開きがあるビルマの戦闘を回顧すると、命令通りに実行されたことは数えるほどしか無い。

「敵を知り吾を知らば百戦危うからず」という孫子の兵法は、誰しも知っている格言である。負け戦の連続では敵のことは十分知っている筈だが、しかし直接的に交戦する歩兵でなければ本当の敵の状況は不明である。敵よりも「吾」を知らない方が更にひどい状態であった。当時の我が大隊の兵員数は犠牲者が続出したために半数以下に激減し、戦力は（兵員數十兵器・弾薬・補給）四分の一以下に低下していた。師団砲兵聯隊の砲数は48門のところ7門しか保有していない状態で、「吾を知らない」ほど危険なものは無い。

私が支那戦線で身につけた実（み）の「必要性と可能性」の観点から、夜襲の「必要性」に就いては若干の必要性はあるものの、「可能性」に就いては全くゼロである。結局は実施すべきではないとの結論に達していた。

部隊の集結する位置にもどった私は、夜襲部隊の二ヶ中隊と共に国道の線にまで前進した。しかし、しぶとく、「三度目の一日延期」を参謀長に懇願のために伺ったが、結果は入れられなかつた。諦めた私は両中隊長と握手を交わして善戦を祈って見送った。心中に大きな不安はあったものの、これが最後の別れになるとは思いもしない。周到な準備で隠密に夜襲を決行できる状態であれば、一ヶ中隊しか使用しなかつたが、準備なくしての夜襲の強攻策となつては二ヶ中隊を使わなければ、成功は覚束なかつた。それは私の苦しい状況判断の結果である。

大隊長の命令を受けた両中隊長の胸奥には、悲壮な覚悟の大隊長の覚悟を読み取つてか前途の不安を乗り越え、転機をつかむ以外はないとの心情で、堅く口を結んで淡々として進んでいった。両中隊は右と左に分かれて漆黒の闇の中に隠密に消えた。灌木の林に覆われた急峻な斜面を登攀する難業を、見えないながらも私は凝視し続けていた。

闇夜の静寂な時間は過ぎていく。大隊長の私は副官や情報掛将校等と共に国道脇の高地に陣取り、無言の中で敵陣の高地を見守っていた。一時間以上も経過したであろうか。丘の上で手榴弾の炸裂音が鳴り響いた。斜面の下から手榴弾の投擲はできない。あの炸裂音は敵の手榴弾だと直ぐ判つた。忽ち数発の爆音が鳴り響き、銃声も聞こえてきた。

不安が胸一杯に広がつた我が身は硬直して身震いしていた。どれほどの時間が経過したであろうか。山の急斜面を下りてくる兵士が灌木を搔き分ける音が鼓膜を振動させた。夜襲が失敗に終わったことは直感でわかつたが、声を出す者は一人としていない。それは殘念の一言で声さえも出せない心境なのだ。

下がつてくる兵士も少しずつ増えてきた。彼等こそ隣の戦友の死を見守つて戦つた人たちで、心中は御通夜のようであろう。その責任は私にあると心の中で懲悔していた。そのような経験を我々は幾回となく重ねてきた。しかし一回一回が新たな経験であった。

戦場の指揮官は自己の生死よりも部下の生死に対して責任を感じ、自己の死はいさかも厭わないものだ。その悲壮な覚悟で軍参謀長に夜襲の失敗を報告すると、明日の攻撃を命じた。損害の程度も不明な状態で下命する山本少将の心境は鬼のような感じであった。

前夜の一月二十八日の夜襲は二個中隊を以って強行したが、第六中隊長松崎大尉、第八中隊長島田大尉以下四十一名の戦死者と多数の負傷者を出しながら失敗に帰した。その全責任は大隊長の私に在り、その弔いの夜襲の決行と云うよりも、参謀長に対する恨みが骨隨に達し、鬱憤を晴らすために死を以って抗議したいとの決心であった。これが眞実だ。

昭和55年(1980)に上梓した「吾が戦闘記・両忘」の記事は上記のようではなく、普通の夜襲の戦闘行動のように記述してある。これは当時は先輩や同僚たちも多数生存し、旧軍の名誉を傷つけ、上司を暴(あば)くことを遠慮した為であった。

一夜にして四十一名の尊い生命を犠牲にした責任者の心境は、其の當人でなければ理解できない。生きているよりも死をもってお詫びしたいという心境になるものである。

一月二十九日の薄暮の林の中に生き残っている大隊の將兵を集合させ、大隊長としての決意を述べた。大隊長は昨夜の弔い合戦の陣頭に立って亡き戦友に続く決意であると。その決死の血の叫びは部下將兵の心に深く衝いたのであった。

肅々と漆黒の中を部隊の先頭に立って進む私の前に、いつの間にか私をかばうように兵士たちが立っていた。實に有り難いことだと胸を痛めつつ林間を前進し、敵の高地の山麓に突撃の態勢を整えながら、凜呼(りんこ)として立っていた。

敵は吾が攻撃を予想していたように自動短銃を撃ちまくってきた。兵士たちは地面に伏せて長い無言の時間が経過していった。その間、私一人だけが身を伏せず、断固として信念を貫かんと弾丸飛来の中に立っていた。その時、私の前にいた大隊本部の森曹長は肩に銃弾を受けた。平然として立ち続けている私を敵弾は避けているのだろうか、と思っていた瞬間、左の首筋を鉄棒で殴られたというか、焼き火箸で首をえぐられたような衝撃を受け、うなりながらドーと転倒した。

何も思い残すことは無い。未だ若い命を捨てるのに少しも抵抗はないと悟りきっていた。多くの戦死傷者を出した責任感に燃えている私は、おひただしい出血と呼吸困難から無意識に血を吐き出しながら、「これでよし」と自らを慰めている心境であった。

今日でも大隊長はあの時、毅然として敵弾飛来の中に立っていたと話されると、決死の覚悟であったことが部下たちも知っているのである。瀕死の重傷の身は急造担架に乗せられて軍参謀長の前で降ろされた。これは私が指示したことではなく、部下が私の心中を察した行動だったと思っている。口腔の右側の歯牙はすべて欠損し、食道は貫通して舌の奥は切断されて声は出ない。水さえも飲めない。その時の山本少将の言葉は全く記憶にない。

敵前三百米の壕の中に重傷の身を横たえたが、二人の中隊長と多くの部下の命を失った責任感が再び込み上げてきた。それに対した私の決死の行動は一種の執念で、千万言に優る怨恨の発露でもあった。

「学問なき経験は、経験なき学間に優る」といわれる通り、実戦の経験の積み重ねによって一人前の戦闘指揮官になれるのである。それは直接的に部下を指揮しない者と、部下を直接指揮する者との間には大きな差が生じてくる。それが歩兵戦闘の難しさである。

「経験は最大の戦力」である。指揮官は「挙まるる指揮官」でなければ実戦の役には立てないので。医科大学教授は手術が上手だとは云えないのと同様に、陸軍大学校卒は実戦が上手とはいえない。大言壯語することは戦場では役に立たない。身に付けた学問こそ本当の実戦に役立つ実力である。演習ではなく犠牲という出血を忘れてはならない。

「戦力比」云々と云ったところで、第一線に立って経験しなければ戦力比の実感は味わえず、計画立案も無責任に帰すのである。ナンパッカの戦闘は第二次大戦の縮図であった。詳細な記事は「吾が戦闘記・両忘」に譲ることにする。

負傷して三日目に我が聯隊主力が後退してナンパッカに到着し、聯隊長今岡大佐は早速重症の私を塹壕の中に見舞いに来た。戦闘経過と私の心境と意見を述べると、同意されて感動した。矢張り「餅は餅屋」でなければ分からぬのである。(軍参謀長と聯隊長は同期)

負傷後四日目に師団の自動車に乗車し、聯隊長や大隊将校の見送りを受けて約15キロ後方のジャングルの中に護送された。これが野戦病院で二名の軍医がいるが衛生材料がなく、患者の治療することは出来ない状態であった。

大隊には軍医二名がおり、この軍医に治療させたいと痛みをこらえ、首に包帯をぐるぐる巻いて第一線に戻った。包帯姿の大隊長の勇姿に部下は感激し、今日でも思い出の語り草になっている。

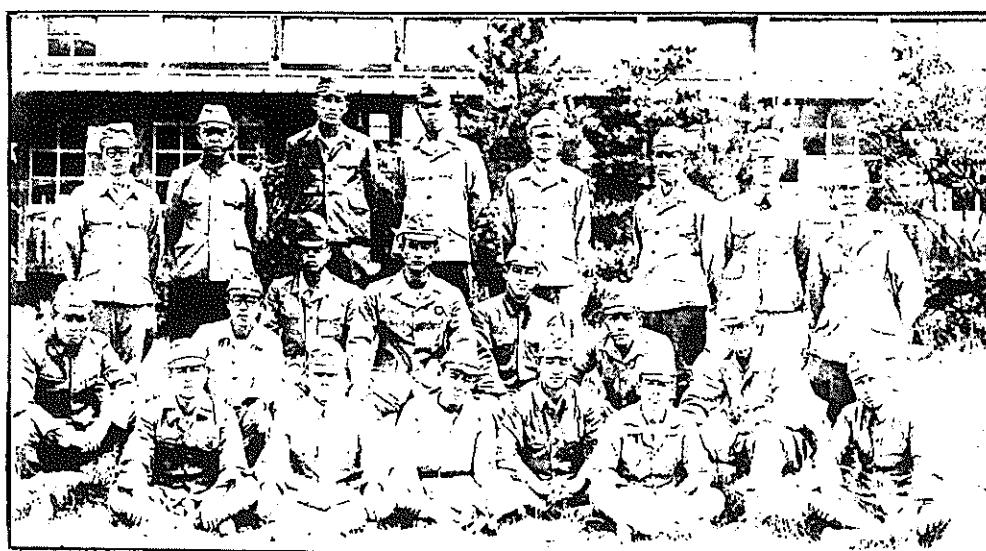
この戦闘以来、私は第33軍参謀長山本少将の無知蒙昧(愚かで知恵がない)に怒りを覚え、軍記厳正であるべき軍隊に於いて、「面従腹背」の精神が私にも芽生えてきたのは偽りのない事実である。これはインペーラル作戦の第15軍隸下の31師団、15師団、33師団の全師団長が、面従腹背により更迭されたのと同様で、その原因は上級指揮官の無能に原因している。

これは軍紀の弛緩というよりも、「桂馬の高上がり」である。能力や実力のない者が身分不相応な役職に就いたからで、実際に役に立たない「座敷兵法」である。鉄道屋が第一線歩兵のことは分からぬのは当然で、「戦闘はすべて経験の世界」である。

タイのバンコクから米軍上陸用舟艇LSTに乗船して15日間の航海により昭和21年5月6日に浦賀に上陸し復員した。下の写真はその時の寺前大隊の将校団の貴重な記念写真である。中国・雲南省からビルマの北から南まで死生を俱にして、蠍蟻(かまきり)の斧に等しい死闘の中で八面六臂の活躍をされました将校の各位に対し、衷心から感謝を申し上げます。

前列左より4番目「第5中隊長小西大尉」6番目「本部付大山大尉」7番目「副官石原大尉」第二列左より3人目「寺前大隊長」3人目「大隊砲南大尉」5人目「機関銃中隊長荒木大尉」後列左より2人目「第7中隊長荻原大尉」右端「第6中隊長木下大尉」(後方の建物は旧海軍砲術学校の復員局宿舎)

(第8中隊は途中に抽出されたため中隊長金谷大尉以下将校の姿はない)



《慰靈・靖国神社》

戦いは敗戦に帰し、四年間に亘った悲惨な戦闘を終えた私に遺されたものは、傷ついた体躯と希望を喪失した精神だけであった。唯、天皇陛下から下賜された将兵が神と仰いだ「軍旗」の切れ端と、破れた布に包んだ命綱の「水筒」だけは、戦後六十年になろうとする今日まで、我が家宝として、或いは、生涯の思い出として保存している。

終戦時、陸軍省よりの「軍旗は奉焼し、竿頭の菊の紋章は地下に埋没すべし」と云う命令を聯隊長の決断で履行せず、「菊の紋章」だけをビルマのサルウイン河畔に埋没した。軍旗の絹で織った旗の部分は、聯隊の将校全員に切断して配布した。私は最後の人としてサルウイン川の渡河点にて受領した。



(右上写真の右側は軍旗の切れ端、中央は軍旗の全体写真、左は軍旗の房のほぐれたものである。右側の旗の部分の黒い部分は赤色、左側の房の部分は紫色である)

上記したもの以上に我々生存者に遺された否、課せられたものは「慰靈」であり、「靖国神社」の護持問題である。靖国戦線とまで言われた各戦場を馳駆(ちく)し、若くて尊い命を犠牲にされた戦友の「靈魂」を慰靈することは、我が生涯の責任であり義務であると決意した。(「靈」「魂」は人間の精神をつかさどるものである)

「慰靈」とは死者の靈を慰めることである。我々の唱える慰靈は戦死した戦友の靈を祀った「靖国神社」や「護國神社」「忠魂碑」「忠靈塔」などを維持し、参詣して「みたま」「たましい」を慰めることで、慰靈の心は即ち靖国神社に通じるのである。

明治二年(1869)に国事に殉じた者の靈を祀るために「東京招魂社」が建立され、明治十二年に靖国神社と改称され、戦没者二百四十余柱の靈を合祀されている。靖国神社は英靈を慰靈・顯彰し、平和を祈念する場所である。

「靖国」は「國を安らかに静め治める」の意で、「鎮國」とも称す。この字は古代中国の「春秋氏左伝」(僖公二十三年)に書かれており、中国古代の「五經」の一つである。

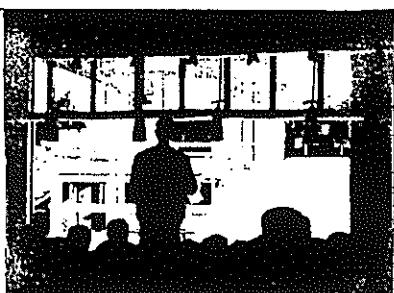
私が在籍した北支那戦線で戦った聯隊は、その後、南方に転戦して玉碎した。その合同慰靈祭は、昭和50年4月27日に第一回を靖国神社に於いて催行した。同じくビルマ戦線で戦った龍146聯隊の慰靈祭も昭和54年9月9日に靖国神社で挙行している。

敗戦に依り戦後はどん底の生活を余儀なくされ、国の復興に尽力した戦友達は、昭和50年代になって漸く慰靈に集結し、各師団・聯隊は靖国神社に額(ぬかず)いたのであった。それは聯隊合同慰靈祭のことであり、それまでは團結の単位であった中隊毎に靖国神社や地方の護國神社などで行われていた。私は東京靖国神社・札幌護國神社・長崎慰靈祭会場等には皆勤して慰靈の誠を捧げ続けていたのである。(この記事は国内旅行で記す)

歩兵219聯隊の記念すべき第一回慰靈祭の祭典委員長に不肖、私が光栄にも任命された。歩兵聯隊の将校の数は約120名であったが、その中から私が選ばれた理由を私なりに考えると、中原会戦に旗手として参加して聯隊中にその名と顔が知れ渡っていた。次いで前記した「中牟橋頭堡の戦闘」は、陛下から御嘉賞の詞を賜ったことが支那派遣軍全部に通達されて有名であった。最後は新設師団、新設聯隊で初めて私が陸軍大学校の試験に合格したことであろう。陸大の受験資格は少尉任官後2年を経過し、聯隊長の命令で受験するもので個人の資格では受験できず、資格取得後の第一回で合格したからかも知れない。

第一回歩兵 219 聯隊戦没者慰靈祭を靖国神社に於いて施行す。昭和 50 年 4 月 27 日
写真の右は靖国神社拝殿。左は拝殿から本殿に向かって祭文を奉読する寺前信次
下は祭文

歩兵第 219 聯隊 戦没者 慰靈祭



祭 文

本日こそ靖国神社の社領に類づいて、旧歩兵第二百十九聯隊
戦没者の第一回慰靈祭を挙行するにあたり、謹んで英靈に申し
上げます。

奇しくもわが聯隊が大命により北支那の戰場に赴きました時
を同じとする四月のこの日、私共隊友相集い清水聯隊長以下二
千有余の恩賜の英靈の御前に座して追悼申し上げますことは熱
い涙を禁じ得ないものであり誠に感懾無量であります。

顯りみますと昭和十四年三月聯隊が創設され軍旗を授受し男
羅祖国を後だ北支那河兩省に胸を遣め相次ぐ作戦あるいは警備
に大任を負すこと五年有余にわたりました。その後中原の戦野
をかけめぐり貴重にまみれ死傷に悩ましながら勇戦奮斗し輝
しい聯隊の武勳の歴史を樹立いたしました。しかしながらその
陰にあつて不幸敵弾に倒れるいは病魔に冒され多くの隊友が
斎華されました。更に度あり太平洋戦争に突入南洋諸島におけ
る敵連合軍の反撃焼夷となりついにわが聯隊にも昭和十九年三
月西即ニユーギニア軒邊の大命が下りました。時すでに敵の制
圧下、海路の危険を冒して南太平洋をめざして決戦出陣、第一
大隊はセントアンドレウ諸島守備の任務に就き聯隊主力はメン
のなによりの苦びとすることあります。

願わくば在天の英靈上靖國の御社に安誠りまして永久に永遠
の心中に生き、故郷をさる祖国の平和と發展に貢献度あるんこ
とを祈念いたし謹んで英靈に捧げる追悼の言葉といたします。

昭和五十年四月二十七日

第三十五師団歩兵第二百十九聯隊

一一九会

寺前信次

ホル島に上陸したのであります。脚蓋としたジヤングルにおい
て敵機の激しい空爆にさらされ過度の食糧不足、加えて灼熱に
あえぎながら蒸々と守備につく隊員の労苦は筆舌につくし難い
ものがおりました。

やがて物量を増す圧倒的な敵連合軍の大兵力を迎へ撃ら、ビ
アク島においては先に救援の為派遣された第三大隊が、ついで
スンホル島において潜水聯隊員指揮する第三大隊のいずれも軍
兵よく死力を尽した敵戦艦も空しく至極度に喪失も笑く最後
を逃げられて、ついに玉命するにいたりました。喝呼聯隊創立
以来精神不滅祖国の忠誠と栄光を信じつゝあたら青春の前途有
為な若き生命を犠牲にされた多くの隊友に想いをいたす時万感
懶々として胸にせまるものがあります。はからずも英靈各位の
志に反して敗戦による終戦により私共万死に一生を得て生還、
おおのの戰場において祖國尊徳の為歎力を尽してまいりまし
た。今や幸いにして我が國は世界靖國の注目する経済大国とし
て復興し、平和と繁榮のうちにあり、東亞の諸國も独立してそ
れぞれ發展を遂げております。その證は国體に拘じられました
尊い個性の屬であります。われわれ一同英靈の身を以て示され
ました國を思う至情をこれからも遺憾といたします。夢寐にも
忘れることの出来ない隊友の皆さんの在りし日の面影をじのじ

歩兵第146聯隊の隊員から淨財を集め、編成地の長崎県大村市の忠魂碑の建つ丘の斜面の一部の土地を購入し、我が聯隊の亡き戦友三千有余命の靈魂を祀る慰靈之碑を建立した。昭和58年11月30日を期して御遺族330名、生存する戦友506名、政財界の有志の来賓87名の参列者合計923名に加えて、陸上自衛隊大村駐屯地隊員の参加及び軍楽隊の吹奏のもとに、厳粛且つ盛大に竣工記念式典を神職により挙行されたのである。

歩兵第146聯隊の編成は歩兵大隊三ヶ大隊から成り、今岡聯隊長は復員した翌年に鬼籍の人となられた。鹿毛第一大隊長、寺前第二大隊長、堤第三大隊長の三人の大隊長のうち鹿毛第一、堤第三大隊長は老齢のために黄泉の人となり、最若年の寺前第二大隊長の私だけが健在であったため、第一回の聯隊合同慰靈祭に参列し代表を勤められたことは、身の幸福と感激している。命のある限りこの「慰靈之碑」に拝跪(ひいき)して慰靈いたします。



ビルマ派遣歩兵第146聯隊
慰靈之碑

寺前第二大隊長



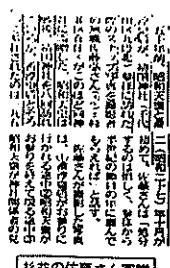
大村歩兵第146聯隊(龍六七三五聯隊)
碑文表題 戰友会 生存者有志一同
元大隊長 寺前 信次

昭和十六年(一九四一)秋、久留米第五十六師團に効負下令。十月二十七日混成第五十六歩兵團坂口支隊(大村歩兵第146聯隊)編成完結。十一月中旬大村駐屯地を発し、門司港より出航、南洋カロリン諸島西部のバラオ諸島に待機す。
昭和十六年(一九四一)十一月八日大東亜戦争(太平洋戦争)勃発。十一月下旬南部比島ダバオ及びホロ島を攻略し、大東亜戦の緒戦を飾る。昭和十七年(一九四二)一月蘭嶼ボルネオのタランカ島及びバリクババン攻略、二月十一日パンジュルマシン占領、三月ジャワ島攻略。この坂口兵团「六段とび」に、今村闘印方面陸軍最高指揮官り忠状を賜る。
昭和十七年(一九四二)四月二十日ビルマ國ラングーン上陸、第五十六師團(龍部隊)の隸下に入る。四、五月ビルマ・雲南へ進行、一部は怒江を渡河。鉢巻山中山高地及び拉孟付近にて奮戦し、騰越へ転戦、騰越北方高黎貢山系一帯に作戦。十月中旬蟠支國境町付近に移転し、怒江河畔に作戦並びに雲南省平臺・芒市・ビルマ國ナシカン・クンロン地区を警備す。
昭和十九年(一九四四)四月中旬主力はフーコン地区の菊兵团救援作戦、一部は雲南米・英・支の連合軍に対する反撃作戦に参加。五月中旬より拉孟・平要・龍陵・芒市付近において悲戦苦闘、拉孟・騰越部隊相ついで玉碎。平要守備第一大隊を教出し涙の再会。昭和二十年(一九四五)一月我が聯隊の最後の岩廟町にて、死闘につぐ死闘を重ねて奮戦。爾後、ビルマ國ナンバツカ・ラシオ・シャン高原を南下、断作戦及び克作戦も利らず終戦。爾後は苦難の道を乗り越え困苦欠乏に耐えて、ケマビュー経由寮納国境を通過、チエンマイへ出て、十二月ナコンナヨークに集結す。
昭和二十一年(一九四六)五月中旬パンコク出航、主力は下旬広島県大竹へ、残余は六月上旬浦賀へ上陸復員。独立歩兵四五六大隊に転属の第四・八・十二中隊は、翌二十二年(一九四七)六月上旬ラングーン出航、下旬支品に上陸復員す。
嗚呼、万物流転し、生命有限と雖も、亡き戦友三千有余名を憶えば感概無量なり。ここに英霊の安からんことを祈念し、同時に世界平和を祈求して、この碑を建立す。

联隊長 山本 春平・今岡宗四郎
昭和五十八年(一九八三)十一月吉日建立

碑

文



昭和天皇・皇后陛下

戦後初参拝を撮影

半世紀ぶり 靖国神社に

スナップ写真でもう一度



国家は国民に兵役の義務を命じて犠牲を強要しながら、戦後はその責任を放棄したのである。靖国神社の命(ミコト)たちの心中を察すると鬱憤が募るばかりだ。

私は平成14年4月に「春秋に義戦なし」、同年10月に「遠交近攻」と題した小冊子を発行し、実戦場で部下を失った指揮官の心境を吐露し、理解ある者たちに配布した。

戦後の首相の靖国神社参拝は、昭和26年(1951)に吉田茂首相が参拝を再開し、翌年の例大祭以来、岸、池田、佐藤、田中、三木と続いた歴代首相は、例大祭に参拝した。

昭和50年(1975)8月15日以降は、三木、福田、大平、鈴木、中曾根の歴代首相は例大祭と8月15日に参拝している。この間は首相の靖国神社参拝は問題にされなかった。

ところが昭和60年(1985)に中曾根元首相が靖国神社に参拝すると中国は抗議してきた。その表向きの理由は靖国神社にA級戦犯が合祀されているという理由からであった。その背後には日本人の知らない中国の国内事情があったのである。それは文化大革命後の改革開放路線の遂行をめぐる、保守派と急進派の権力闘争であった。

中曾根元首相は個人的に親交のあった急進派の中国首相「胡耀邦」の援護と称していたが、本心は『謝罪』のために訪中したのであった。靖国神社問題は、個人的な友情とは別な問題である。国家対国家の重大なことも忘れ、靖国神社参拝を陳謝するために北京まで出頭して平身低頭した。この謝罪が日本の首相の「謝罪外交の嚆矢」である。

私等と同年輩の中曾根元首相は若い時分には青年将校の風を吹かせて大言壯語し、海軍主計少佐だったと公言していた。主計中尉は終戦時に一階級進級させたが、佐官への進級は陸海軍ともなかった。問い合わせられると二階級特進したと思ったと、とぼけている。経歴詐欺ではないだろうか。主計将校には指揮権は与えられなかつたが、彼には第一線に立って指揮したような言動があつた。彼の勤務時の海軍に軍艦が存在したかは疑問である。

「遠交近攻」策を外交の基本とする中国は、日本を隸属国化することを夢見ていた。その最盛期の首相が「江沢民」であった。日本の首相が靖国神社に参拝するのに、何故に中国の許可が必要なのか。戦略的にも中国の属国に陥りつつあった証左である。日本のマスコミの一部も亦、自ら進んで中国の権力下に飛び込んでいった上に、更に進んで軍拡競争にODAまで供与したのである。

阿鼻叫喚の弾丸雨飛の戦場で死を賭して戦った将兵は、靖国神社に祀られることを信じて安心立命(あんしんりゅうめい)し、死に就いたのであった。

このことは我々年代の者は幼少の時代から教育され、国民全体がそれを信じていたのである。

しかし敗戦後は天皇陛下を始め総理大臣の公式参拝も行われず、犠牲者との約束を反故(ほこ)にした。多くの戦友や部下を犠牲にした責任者は慙愧に堪えず、死んでも死に切れない心境だ。

戦後はその責任を放棄したので

「春秋左氏伝」(僖公五年)に「徳を懷(おも)えれば惟(これ)寧(やす)し」と述べている。それは、「政治を行う者が道徳を考えていくと、その国は必ず安泰になる。宗子(そうし・世繼ぎ)は、その国を守る城となる」という意味である。また(僖公九年)に「忌(いの)めば則ち怨(うらや)み多(多く)し」と献公は述べている。それは、「他人を忌(いの)みきらえれば、必ず自分がきらったその人から逆に怨(うらや)まれる」という意味である。これらは春秋時代の最も基本的な人間の道で、このような簡単な言葉を現代中国の為政者は忘れているのである。亦、これらの教訓を活かして外交することを忘れた日本の首相以下の政治家の素質を疑いたい。

「靖國」という言葉の出典は、前記したように春秋左氏伝の「國を靖んずる」という言葉にある。即ち「平和な国家を造る」というのが本来の意味である。戦場に赴く日本の軍人は「靖國神社で会おう」という言葉を残して祖国に殉じていった。それらの人々の思いを現在平和な日本に生きている我々が大切にし、祈りをささげることは日本人としての義務であり権利である。

靖國神社を崇敬することは軍国主義でも戦争賛美でもない。ここが英靈に感謝をし、平和を願う場所であるからである。国事殉難者を祀る百三十年の歴史をもつ神聖な場所である。英靈を慰靈顕彰することは自然の法則であり、日本民族の伝統であり、文化であり、正義である。その慰靈の方法は世界各国によって違ってよいことは当然である。

靖國神社に於いては、二百四十六万余の英靈の名を「靈璽簿」に記載し、そこに魂を依らせて、民族固有の方法でお祀りしている。中国では天安門広場に高さ 38 米の「人民英雄記念碑」を建てて祀っている。このように民族が固有の伝統と方法で戦死者を祀ることが当然許されるのである。

自然の法に基づいて考えると、いかなる国家も、その国家のために死んだ人々に対して、敬意を払う権利と義務がある。それは戦勝国か敗戦国かを問わず、平等の心理でなければならない。無名戦士の墓を想起すれば、以上のこととは自然に理解できる筈である。

A級戦犯を合祀している靖國神社に首相や閣僚が参拝することは、軍国主義の復活につながると抗議しているが、大東亜戦争当時、戦争は國際法上違法ではなかった。昭和 3 年の不戦条約は侵略戦争を違法としたが、自衛戦争が侵略戦争かを決めるのは、その国自身である。しかも戦争を遂行した個人の責任を追及するという法律はどこにもなかった。A 級戦犯の判決を下した東京裁判は「事後法」の裁判で、「法律がなければ刑罰はなし」の近代法の大原則に違反している。

江沢民の言動は靖國神社の趣旨と A 級戦犯に対する無理解に基づく内政干渉で、日本は断固として抗議すべきである。中国には「墓を暴(あばく)文化」が存在するから、文化干渉してもよいと云うだろうか。この点は前述したとおり、中曾根元首相の馬鹿げた陳謝外交が始まりであった。日本という国は叩けば直ぐに謝る国だという間違った観念を抱かせたことは間違いない。大歎位の勲章は泣いている。

一国の最高責任者は決して妥協してはならないことがある。一端、公約した「八月十五日に靖國神社に参拝する」という約束を破った小泉首相は、子供たちに「国を愛すること」や「公共心を持つこと」が説明できるだろうか。

韓国に一言述べておきたい。植民地支配が罪ならば、欧米先進諸国はすべて旧植民地に向かって謝罪しなければならないが、謝罪していない。そして日本の朝鮮統治は植民地支配と呼べるかどうかは甚だ疑問だ。竹島を勝手に占有することは罪ではないのか。

私は一日も早く前頁の写真のように、天皇・皇后の靖國神社への御親拝の実現を願い、我が子孫は必ず年に一回は靖國神社に参拝することを「遺言にしたい」。

旅 遊

『人生は行楽せんのみ』。これは漢書の楊惲伝(よううんでん)に出ている名言である。「人生行楽耳(のみ)」の次は、須富貴何時【富貴を須(まつ)も何れの時ぞ】と続いている。人生は短い。ただ楽しんで暮らすことだと、説(とい)いでいる。

「命の洗濯」などの字句は、日ごろの苦労を忘れて気晴らしをするのだと知りながらもこの句は改めて心を刺激した。「人生は夢の如し」の文句も亦、人間の一生は夢のようにはかないものだと、改めて諭してくれたのであった。

戦争(戦闘)という生死の谷間を飛び回って九死に一生を得た私たち軍人出身者は、青春期を国家の要請によって死を賭して国家に奉公したが、敗戦の責任を我々のような一介の青年将校にまでも背負わされた。公職追放令によって身の自由までが奪われ、喰うに職はなく、拳句の果ては大八車を曳いて通運業を営みながら庶民の中でも最低の生活を送り、平家の落人(おちうど)のような塗炭(とたん)の苦しみを身をもって体験した。

孔子は「幸せは貧富によるものではない。たとえ酒の替わりに水を飲む暮らしであっても、信じる道に生きるものには、其の中に自然の楽しみがあるのだ」と述べている。

私は「貧しくとも楽しむ」という「これだ」と悟った。貧乏しても慌てることはない。夫婦には協力して立派な子供を育てる楽しみがあるのだ。戦場指揮官として人生で最も大きな貢献は立派な後継者を世に遺すことだと、部下に教えたことを思い出した。

戦後も逆風の中での生活を余儀なくされ、浮き草のように青息吐息で生き延びてきた。しかし、ようやく物心両面に余裕を見い出した時は既に五十代の半ばであった。

これかららの我が人生には絶対に花は咲かない。しかし、深山の紅葉のように燃えて、眼下の渓流に一陣の風とともに散ることも、美しく老いていく生き方だと行楽を決心した。その時、芭蕉が「奥の細道」へ旅立つ時に詠んだ詩を思い出した。「日月は百代の過客にして、行きかう年も又旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口をとらえて老いをむかう者は日々旅にして、旅を栖けみかとす」であった。

旅に出立してみると、私の体内に眠っていた旅心は妙を得たりと目を覚まし、人生の最後に青春を求めようと国内外を問わず浪漫の旅へと出立させたのであった。

旅は人生を長くして人間に喜びと勇気を与えた。そして旅は人生の健康法の最善だと信じるようになった。旅は即ち人間だけに与えられた神の贈り物で、「世界という書物を直接的に読破する」機会を与えられ、人生の師匠であることに気が着いた。

旅を続けていると孔子の教えの通り、「老いの将(まさ)に至らんとするを知らず」であった。人それぞれに、つらいこと、苦しいこともあるだろうが、其の中にも道を楽しみ、憂いを忘れる余裕と趣味を持つことが、私には旅が最も相応しいことであった。

そして「博く文を学び、之れを約するに礼をもってす」の孔子の言葉が胸を衝いた。先ず、博く学ぶがよい。しかし、博識をもって満足してはならない。礼、すなわち実行によって、その知識をまとめていくことだ、と教えられた印象に深く感銘した。

先ず私は国内一周旅行を数回に分けて実施した。自動車運転は25年間も通運業を営んできたからプロである。測量士の免許も取得しているから地図の理解もベテランであった。国内旅行を概ね卒業してから海外に旅し、それが「病、膏肓に入る」となってしまった。

« 国内旅行 »

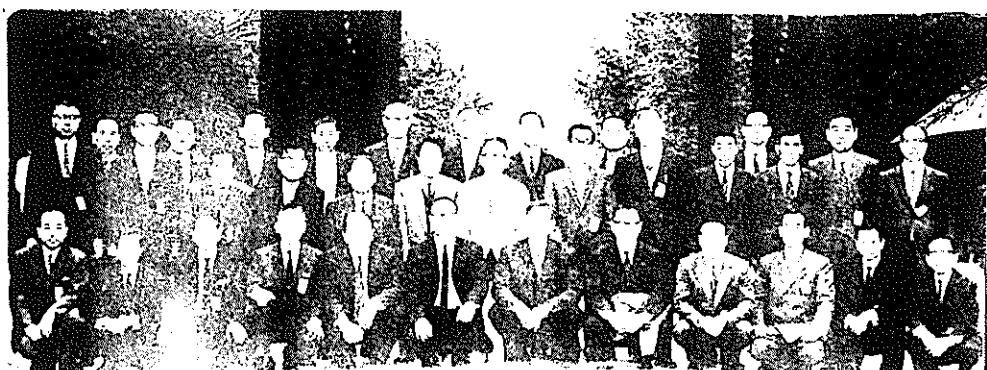
昭和 40 年(1965)11 月 3 日・歩 219 聯隊第 3 中隊(寺前隊)慰靈祭 於靖國神社
(前列中央が寺前隊長)



昭和 41 年(1966)11 月 3 日・歩 219 联隊第 3 中隊(寺前隊)慰靈祭 於靖國神社
(第二列左端が寺前隊長)



昭和 42 年(1967)11 月 3 日・歩 219 联隊第 3 中隊(寺前隊)慰靈祭 於靖國神社
(前列右より 6 番目が寺前隊長)



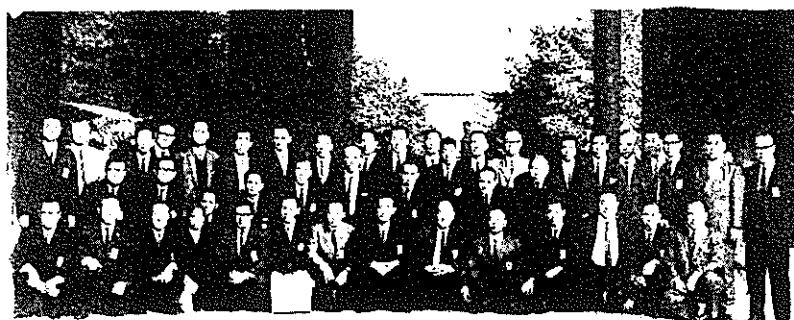
第一回寺前会開催

昭和43年8月3日、四谷見附の旧偕行社に於いて陸士60期寺前会が秋山君の努力で開催された。未だ参加者は少ないが将来の発展を期待する
前列中央が寺前信次



昭和44年5月、第二回寺前会
於陸上自衛隊伊丹駐屯地
天野中隊長が参加されていたが
元気なく、早く鬼籍に入られたと
聞く。好漢・馬田も未だ元気だった
が彼も亦逝ってしまった。
(前列左より二番目は寺前信次
三番目が天野さん)

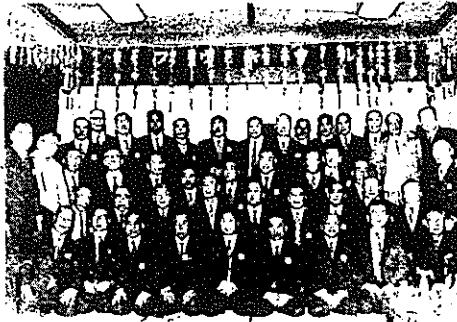
昭和45年11月3日 歩219聯隊第3中隊慰靈祭 於靖國神社



昭和49年2月24日 於長崎市 歩146聯隊第二大隊本部・第一回慰靈祭



ビルマ戦線 146 聯隊第二大隊本部戦友会
慰靈祭 昭和 50 年 3 月 9 日 於島原市



第二列中央 寺前大隊長

支那派遣 219 聯隊第三中隊戦友会
慰靈祭 昭和 50 年 4 月 27 日
於靖国神社



後列右より二番目 寺前中隊長

山代友人会(預金講)の旅行 出羽三山巡り
羽黒山~大日坊(写真の山門・即身仏のミイラ
の見学)~湯殿山~国宝根本中堂~最上川下り
~鳥海山~酒田市~温海温泉~越後胎内観音~
北方文化博物館。
根本中堂・・・
閑(しづかさや 岩にしみ入る 蝉の声
大日坊(即身仏)・・・
我が国には 24 体の「ミイラ」がある
といわれているが、其の中で 13 体が湯殿山
で修行された即身仏で大日坊に安置されて
いる。不食真如海上人も其の体である。



上の写真の左は 大日坊の山門
右は 即身仏ミイラ

陸軍士官学校第六十期吉野会(第四中隊会)
昭和 50 年 11 月 2 日 於熱海



前列左から三人目が寺前信次区隊長

陸軍士官学校第六十期寺前会
昭和 50 年 11 月 2 日 於熱海



前列右より二人目が寺前区隊長

陸士六十期吉野会
昭和51年11月20日 於熱海



前列左から三番目寺前信次

歩219第三中隊戦友会
昭和52年11月6日



前列左から六番目寺前信次

実兄「寺前勇作」が戦死した三十三回忌のため浦添城跡を訪れる。陸士60期生の住友商事沖縄支店長であった「和田耕造君」の好意により三日間の沖縄慰靈と、観光を楽しむことが出来た。深謝いたします。

兄の戦死した日時は昭和20年5月7日、浦添となっているが、生存者は皆無のため調査の手掛かりはない。

浦添城は米軍上陸の普天間基地に面した高台で、琉球王朝時代以来の古城で未だ石垣が残っていた。米軍艦艇からの砲撃で一瞬にして陣地は壊滅的に崩壊したと思う。

私が訪れた時分は沖縄を訪問する人は少なく、現在の沖縄大学の地下に未だ第32軍司令部跡があり、守礼の門も再建されていなかった。

右の写真の上は、兄の写真を飾り蠟燭と線香を立てて当時の猛烈な戦況を想起しながら慰靈した。その下の中の写真は沖縄南部の摩文仁(まぶに)ケ丘にある第三十二軍司令官牛島将軍自決の洞窟、その下は当時未だ整理されていなかった「ひめゆりの塔」の洞窟である。ただ石碑に詳細な状況が記載させていただけであった。

陸士六十期寺前会
昭和52年10月 於陸自木更津航空隊

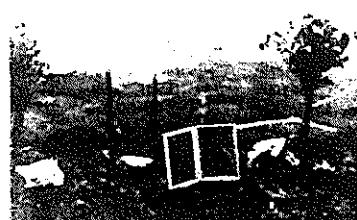


左から二番目寺前信次(後列)
木更津航空隊司令が六十期のため見学し、ヘリに搭乗して東京・神奈川一周

兄寺前勇作三十三回忌 沖縄慰靈訪問
浦添城跡にて写真を飾り合掌す



昭和52年10月



昭和 53 年 5 月 大和路へ(夫婦にて) 写真は省略

権原神宮～神武天皇陵～長谷寺～法隆寺～般若寺～唐招提寺～薬師寺～生駒山・宝山寺
昭和 53 年 7 月 庄川上流ドライブ(夫婦にて) 写真は省略

御母衣ダム～五箇山合掌造りの見学

昭和 53 年 8 月 東北三大祭り見学(夫婦にて) 写真は省略

秋田竿頭祭～十和田湖遊覧～奥入瀬散策～八甲田山～青森ねぶた祭～中尊寺

塩釜・松島公園～仙台・七夕祭～青葉城

陸土六十期寺前会

昭和 53 年 6 月



前列左より二人目・寺前信次

歩 219 第三中隊戦友会

昭和 53 年 11 月 5 日 於靖国神社



前列中央寺前信次隊長

昭和 54 年 9 月 9 日

ビルマ派遣龍兵团(第 56 师団・北九州編成)戦没者慰靈祭 於靖国神社

龍兵团戦没者慰靈祭記念

S.54.9.9



歩兵团長水上中将以下 17,895 名の英靈に対して遺徳をたたえ、御冥福を祈願す。

参拝後は皇居を拝観。龍兵团の靖国神社参拝は、その後は東京地区のみとなる。

前列右より四人目が寺前信次大隊長 前列は御遺族が主体である。

陸上六十期吉野会

昭和 54 年

11月 3 日

前列左より

3人目寺前信次



歩 219 聯隊

第3中隊校友会

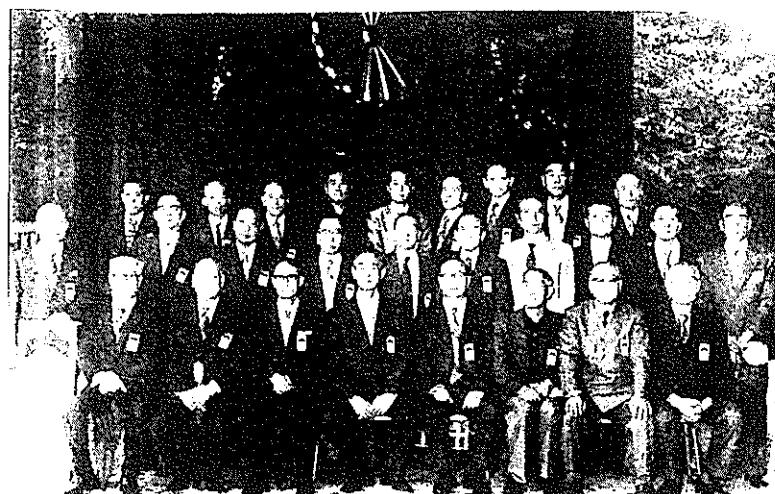
昭和 54 年

11月 4 日

於靖国神社

左より四人目

寺前隊長



歩 146 聯隊

第8中隊会

(金竜会)

昭和 55 年

4月 6 日

於五島列島

福江港

前列左端

寺前信次



昭和 55 年 3 月 20 日

香港の楊兆コン氏来宅して一泊する。

彼は中医学院秘書兼通訳(日本語)で月に
一回は来日している。

香港では大変お世話になりました。



楊

兆

聰

昭和 55 年 4 月 3 日～8 日 山口県～長崎県平戸～五島列島福江～長崎

4 月 3 日 秋芳洞～秋吉台～萩観光(松下村塾・高杉晋作旧宅・明倫館・萩城址)

4 月 4 日 平戸観光(最教寺・川内峠・平戸城・オランダ橋・ザビエル記念碑・鄭成功靈廟・西海国立公園)

4 月 5 日 佐世保市内観光

4 月 6 日 第八中隊(金竜会)中隊会に招待されて出席 福江市翠仙閣に於いて
(記念写真は前頁に掲載)

昭和 55 年 5 月 11 日～21 日 四国八十八箇所霊場巡り

山代温泉を早朝の 4 時 30 分に出発して北陸高速～名神高速～和歌の浦出航～四国・徳島小松島着。一番札所霊山寺に参拝し、遍路の身支度を整えてから順番に霊場巡りを開始。我々夫婦と大聖寺・大家正勝様と南郷・新木様の両老人が同乗し、私の運転する自動車で。第 4 日目の高知では尾長鶴センターを見学し、桂浜を散策する。

第 6 日目は道後温泉・ホテル川吉で旅の疲れを癒す。

第 8 日目は最大の難所である第 60 番札所の横峰寺巡礼であった。木賃宿を 5 時半に出発し、霧の中のつづら道を杖の鈴の音を鳴らしながら励ましあって登る。鶯の鳴き声を耳にして 7 時半に頂上に到着した。現在は自動車で登ることが出来るようだが、巡礼の 2 時間の苦労は一生懐忘れない。四国最高峰・石鎚山の景観は絶景で疲れを忘れる。

第 68 番札所の観音寺では、陸士・教え子の福崎繁一君(川之江市在住)が観音寺観光ホテルまで訪ねてくれ、久闊を温めた。

第 10 日目にして漸く 88 番札所の大窪寺にて結願す。快なる哉、仏心なくとも一仕事を終えた感じは格別である。16 時に小松島を出帆し、船中から和歌山県橋本市の紀ノ川園に予約電話を入れ、21 時頃に宿の人となり旅装を解く。

第 11 日目、7 時半にホテルを出発して高野山に登る。登りは片道に 2 時間を要したが、高野山奥の院で結願。直ぐ下山して奈良・京都を経て我が家に帰宅したのは 19 時である。



第 1 番札所「霊山寺」に参拝して
お遍路用具一式を調達する



室戸岬の第 24 番札所「最御崎寺」
の崖下海岸にある大岩石

第六十番札所の横峰寺に登るには下の民宿に一泊しなければ登れない。下の写真の左は民宿の「川口屋」、右は麓に建立してある案内地蔵菩薩で靈場の雰囲気は満々



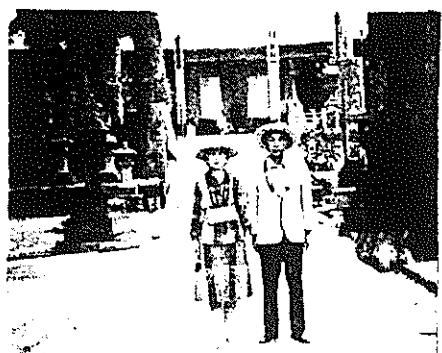
横峰山頂にて休憩、眺望絶佳



第八十八番札所「大窪寺」大願成就



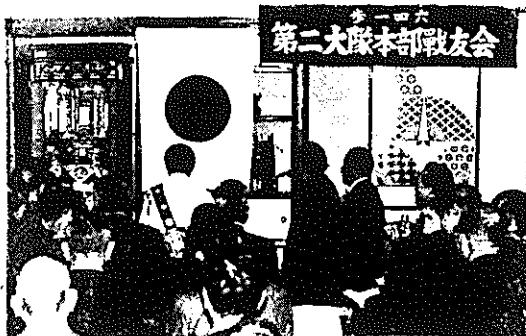
下は拙書「両忘」の出版記念として
九州出身の陸士六十期生有志が長崎県
小浜温泉の小浜観光ホテルに私を招待
して祝賀会を開催した記念写真
(前列中央が寺前信次)



上の写真は高野山に詣でて四国
八十八箇所巡りの大願成就を
報告した「高野山奥の院」



昭和 56 年(1981)3月 14 日 於長崎
歩 146 第二大隊本部慰靈祭・戦友会



昭和 56 年 5 月 21 日より夫婦同伴で
愛知県蒲郡を訪問し、郊外の三ヶ根
山頂に祀られている A 戦犯七勇士の
墓に参拝した。

帰路に名古屋・鳴海の妻の実家に一泊

昭和 56 年 9 月 22 日より、静岡県の
登呂遺跡の見学～久能山東照宮参拝～
美保の松原～日本平～清水次郎長の
生家と菩提寺・梅陰禅寺～富士宮一泊
富士山麓の白糸の滝・音止滝～富士
五湖の本栖湖～精進湖～西湖～河口湖～
山中湖宿泊～新五合

9月 24 日

拙書「兩忘」を陸上自衛隊に出版権
を無料にて寄贈したため、陸自の富士
学校主催の総合火力演習の見学に招待
された。特別に依頼されたため特別席
で演習を参観す。

我々の戦闘した時代から見てみると、
火力の点では雲泥の差があり、犠牲の甚大なることが予想される。しかし戦闘をすること
は愚かである。前車の轍を踏まないように祈りたい。

昭和 56 年 4 月 20 日
歩 219 第九中隊会に招待される
(昭和 15 年徵収の初年兵の教官を務め
たため久しぶりに招待さる)

昭和 56 年 5 月 1 日
219 聯隊本部高級軍医小原夫妻
山代温泉ホテル百万石に来る
40 年振りに再会し懐かしい
小原軍医は早く鬼籍入りしたが
御令室様とは平成 15 年まで文通す。

昭和 56 年 11 月 8 日
歩 219 第三中隊会 於靖国神社
前列中央が寺前中隊長



昭和 56 年 11 月
陸士第 60 期生吉野会
前列左より三番目寺前信次



昭和(56年)10月2日~8日(1981) 西国三十三箇所観音霊場巡り

10月2日、早朝の4時に自宅を出発。今回も四国八十八箇所巡りと同様に大家・新井の両老人と妻を同伴し、北陸高速を大阪に向かって疾走した。心配していた台風は本土を離れた様子で一安心した。近畿自動車道路を南下して藤井寺球場のある所の道明寺に到着。先ず5番札所の葛井寺(ふじいでら)を巡礼の第一歩にして、納経軸などの巡礼用具を調達す。

南海高野線沿いの街道を南下すると、和歌山県最後の橋本市から昨年は高野山に登っているから懐かしい。今回は橋本市から東に向かう、五条市から十津川の流れに沿った街道を紀伊半島を縦断するように南下した。右に楠正成の千早城を眺め、遠くに吉野山を遠望して山系の断崖を望み、糸余曲折の甚だしい十津川河畔の狭い街道を走った。運転をあやまれば千仞の谷底であった。

いよいよ有名な「瀧八丁」(とろはっちょう)が左手に見えてきた。もう新宮に近いと思うとやれやれと人安心だ。「瀧」とは河川の流れの中で、水が深くて流れが緩やかな所を言い、「丁」は109.09メートル。昔の里程の一里は36丁である。

新宮に到着して直ぐに一番札所の那智山「青岩渡寺」に詣でた。私は二回目であった。

「二日目」 昨夜宿泊した勝浦の宿を6時に出発し

、熊野灘の海岸線の奇岩怪石の景観を眺めて、眼の保養をしながら第2番札所の紀三井寺「金剛宝寺」まで約2時間要した。この寺も私は二回目であったが、見晴らしの素晴らしいはどの経験しても飽きるものではない。
(右は田子の浦の海岸風景)



第3番札所「粉河寺」(ながら)から和泉山脈を越えた第4番札所の槙尾山「施福寺」は西国三十三ヶ所の最大の難所といわれている。海拔530米の山頂にある施福寺まで1.1キロメートルの急な石段の坂道で、桜もみじの中を手すりの力を借りて漸く辿り着いた。
(右は施福寺の石段を登る我ら夫婦)



「三日目」5番6番7番札所を経て
第8番札所のある長谷寺温泉郷で昨夜は一泊し、今朝は6時半の鐘の響きと同時に参拝した。参拝者は読経の中を静々と回廊を上り一周した。私は二回目であった。

(左の写真は長谷寺の回廊の階段に立つ我等夫婦)

7番岡寺~6番壺坂寺~9番南円堂~10番宇治山田の三室戸寺~11番京都の上醍醐寺を巡礼して、京都市内のホテルに一泊した。

上醍醐寺の高い山から下山した所に清水が湧き出でていたが、疲労困憊した参拝者は冷たい靈水の味を嘗みしめていた。この味から「醍醐味」という言葉が生まれたのではないかと思案していた。辞書では、「美味の最高のもので、仏の教法の形容」とあり、素晴らしい味の形容であった。



「四日目」は京都の七寺から大阪の二寺と兵庫の一寺を詣でる計画で出発した。15番の観音寺～16番の清水寺～17番の六波羅密寺～18番の六角堂～19番の革堂～20番の善峰寺～21番の穴太寺～22番の總持寺～23番の勝尾寺～24番の中山寺
ベテランの運転手は地図の読解力も戦闘体験者で経験は豊富で、広地域の各寺を順調に参拝し、阪急・中山寺の新築旅館で一泊した。

「五日目」は25番の清水寺(福知山)～26番の一乗寺(加古川)～27番の円教寺(姫路)～28番の成相寺(天橋立)を巡拝し、東舞鶴のホテルに宿泊。



(上は、27番の円教寺に行くには姫路市の白鷹城を右に見て西に進み、ロープウェーで山頂に行き、そこから馬車に乗車しなければならない場所であった)

「六日目」は29番の松尾寺(東舞鶴)～30番の宝願寺(竹生島)～14番の三井寺～13番の石山寺(共に大津)～12番の岩谷山・正法寺。安土駅前の旅館で一泊。

「七日目」の32番・観音正寺は平地に聳える山の上にあり、急峻な石段を登らなければならない。その苦労は一生忘れる事はない。31番の長命寺は琵琶湖に面した風光明媚な位置にあり、その景観もまた忘れない。

32番札所から岐阜県にある33番札所の谷汲山・華厳寺までは名神高速にて岐阜羽島インターを下りて谷間の街道を走った。約二時間の行程であった。

大木に囲まれて鬱蒼としている谷汲寺(たにくみてら)は、西国三十三箇寺の結願所で、それに相応しい環境の中に建立されていた。谷汲寺・華厳寺を14時に出発して帰宅したのは19時であった。計画通りである。



(上は谷汲山・華厳寺の参道)

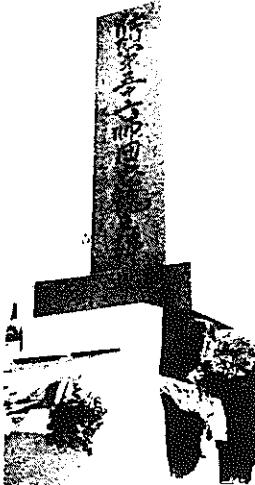
昭和57年3月13日～15日(1982) 南九州旅行(預金講・友人の会にて)に参加

- | | |
|-------|-------------------------|
| 3月13日 | 加賀温泉～大阪駅～大阪南港出帆 |
| 3月14日 | 鶴戸神宮参拝～鹿児島・城山公園～指宿温泉・宿泊 |
| 3月15日 | 長崎鼻～開門岳を遠望～南州神社参拝～乗船 |
| 3月16日 | 帰 宅 |

昭和 57 年 3 月 19 日～23 日(1982)

ビルマ派遣龍兵团郷土訪問の旅

- 3月 19 日 山代温泉出発して大阪より新幹線、岩国・錦帯橋の見学、小倉泊。
- 3月 20 日 門司郊外のメリカ公園に建つパゴダに慰靈参拝
午後博多から長崎に着き、我が寺前大隊有志の
出迎えを受け、中国料理を美味しながら 146
聯隊慰靈碑の建立問題を協議し意見を述べる。
- 3月 21 日 長崎から諫早に行き、「利休」に於いて行われた
第六中隊の慰靈祭に参加。
同隊の原田氏から第一回ビルマ遺骨収集に参加
の状況を聞き、我が聯隊の慰靈碑建立の決心を
強化した。
- 3月 22 日 謳早を早朝 5 時 20 分の列車に乗車し、9 時 57
分に南福岡駅着。
陸上自衛隊第四師団長・今田敏之陸将と第 19 普
通科連隊長の出迎えを受ける。師団長は陸士 60
期で、私の教え子たちも早や師団長に栄進してい
た。時の流れは速い。(上の写真は陸自四師団敷地に建つ龍 56 師団忠魂碑)
11 時から第四師団司令部内に建立された第 56 師団・龍兵团戦没者忠魂碑
前で慰靈祭が挙行され、屍山血河の激戦場を想起しながら黙祷す。
我が寺前大隊本部の中島正
男准尉の案内で「壮烈ビル
マ戦場の碑」までタクシー
を飛ばし慰靈する。建設者の
輜重聯隊の吉松軍蔵氏に
敬意を表したい。
(右は碑の右側に立つ寺前)
同日の夜は博多駅前のホテル
に於いて、陸士同期の皆川
節夫氏と支那戦線の会話を
しながら一泊する。
- 3月 23 日 福岡の筥崎宮を参拝して帰途に着く。

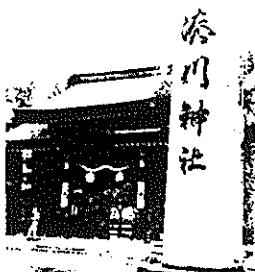


昭和 57 年 4 月 5 日～4 月 6 日

第八中隊(金竜会)慰靈祭

於小豆島

- 4月 3 日 神戸に立ち寄り大楠公を祀る湊川神社に参拝する
後日の阪神・淡路大震災で壊滅した神社の前の姿を
拝観出来たことは幸運であった。
当日、何回目かの姫路城(白鷺城)に登る。懐かしい
思い出に耽っていた。当日は姫路駅前のホテルに一
泊する。(右の写真は昔の湊川神社)



4月4日 9時に姫路駅を出発して赤穂駅に下車した。今年のNHKの大河ドラマが四十七士となっているから、赤穂市内は宣伝の旗がなびいていた。

(右は姫路城の天守閣から見た花盛りの城)赤穂では先ず四十七士の古城・播州赤穂城(城内は高等学校が建設されていた)を訪れる。二層の隅櫓に東郷元帥が揮毫した「義胆」の石碑が建っている大石家の居宅を、眺めながら大石神社に先ず参拝した。



(右は大石神社境内の義士討ち入りの絵)国鉄・赤穂線に再び乗車して日生駅で下車。そこから小豆島の大部港に向かうフェリーに乗船した。大部港からバスに乗車して福田港に到着すると、第八中隊の平古場氏がおりクラブが今夜の中隊会場であった。



4月5日 第八中隊慰靈祭

朝食を終えた隊員が乗車したバスは福田港へと進み我々を葺田八幡宮へと運んだ。ここが今日挙行される慰靈祭の神社で、一風変わった雰囲気の中で、神官の祝詞に続いて戦友各自が玉串を捧げて慰靈の誠を捧げた。詳細はアルバムの記事参照。



(右は慰靈祭が行われた葺田八幡宮)

式後は小豆島の松籜の中を走ったバスは映画で有名になった「二十四の瞳」となった「岬の分校」から、オリーブ園、孔雀園、太陽の丘、寒霞渓、銚子渓などを観光した。



(右は映画になった岬の分校と寺前信次)当夜はクラブに於いて盛大な晚餐会が行われ、第八中隊ならではの行事であった。

4月6日 解散。帰宅の途に着く。

(右は第八中隊会の参加者写真の後列左より大山氏、2番目が寺前信次)ソ連の旅行で一緒になつた高橋氏が遠路を尋ねてくれたが感謝したい。



11月7日

第1回ビルマ遺骨収集団A5班一行が能登で会合を開催、之に招待された。我が寺前大隊の第六中隊・原田氏以下九名が北陸路で会合し、和倉温泉で一泊、翌日は能登の曾々木海岸のホテルで宿泊した。彼らは能登の御陣乗太鼓を見て感激して拍手喝采。珠洲市の揚げ浜塩田も物珍しい様子であった。

記念写真はホテル前の海岸に突き出た岩場で撮る。前列の女性はビルマのメイミョウの陸軍病院の日赤看護婦だった松木さん。

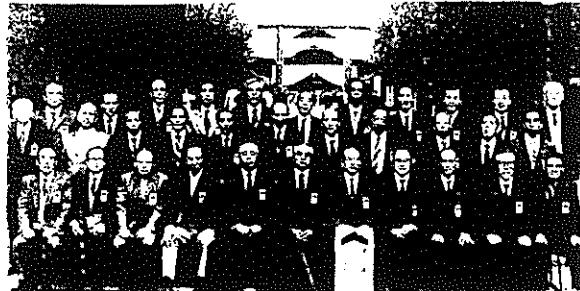
後列の右側が寺前信次。二列目の左端は原田氏



11月7日 歩219第三中隊慰靈祭

於靖国神社

右の記念写真に私が不在な理由は、上記したビルマ遺骨収集団の能登会合に地元の大隊長として出席し歓待する立場であったから、遺憾ながら第三中隊寺前会に欠席した。



坂東三十三ヶ寺観音霊場巡り

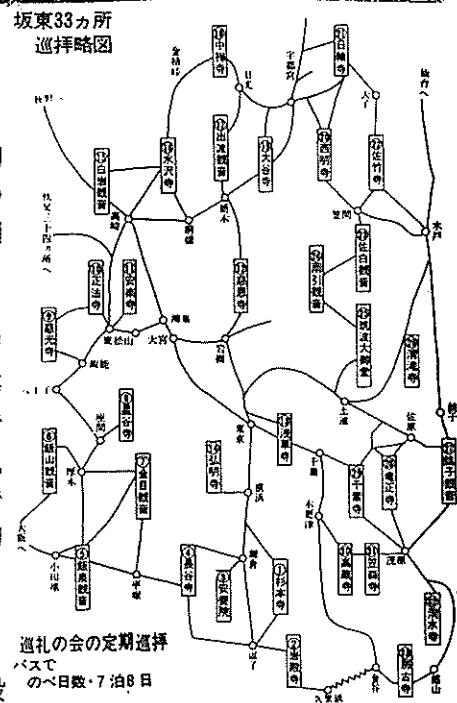
(昭和57年5月12日~19日)

5月12日 早朝5時に妻を同乗して我が家を出发して北陸高速自動車道を快走し、東名高速をまっしぐらに東進する。松田インターを出て先ず最初に小田原の五番札所の飲泉觀音を皮切りに、厚木の6番飯山觀音~座間の8番星谷觀音~平塚の7番金目觀音を経て鎌倉の4番長谷觀音へ詣で、3番の安養院を参拝した。

関東地方は陸上在校中に演習のほか、陸軍大演習に参加する機会もあり、更に現地戦術、測図演習等で現地は知り尽くされ、我が庭に行くような感じであった。又、通運業を廃業すると同時に測量士の免許を取得した関係から、地図を見るることは専門家であった。地図は見るものでなく暗記することが大切である。それは戦場の軍隊指揮官に要求されることで、この旅行も速やかに移動して目的地に到着することが出来たのであった。

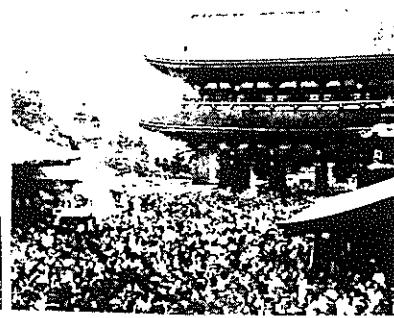
鎌倉を通過して1番の杉本寺、逗子の2番の岩殿寺を参拝すると日没となった。そこで鎌倉八幡神社通りの旅館に一泊した。

5月13日 は鶴が丘八幡宮~鎌倉大仏~円覚寺~建長寺等の古刹をめぐり、横浜の14番の弘明寺に参った。これで本日の巡礼に終わりを告げて、一路、東京・世田谷区用賀にある息子の住む国家公務員住宅に滑り込んで落ち着いた。



右の写真の左側は鎌倉の小路を散策する妻の昭子。右側は浅草の三社祭りに出くわした風景

5月14日 坂東三十三ヶ寺の中で東京の市内にある寺は浅草のみで、孫娘の文代を連れて参拝した。地下鉄に乗車して浅草を訪れるのは戦後初めてのことであった。幸運にも見る機会



がない「三社祭り」が行われていた日で、参詣よりも祭見物が主体であったようである。

その夜から妻の昭子が発熱し、翌日の5月15日に公務員住宅の近くの関東通信病院で受診の結果、肺気腫のために即刻入院となった。一日や二日で回復の見込みがないことが判明し、爾後の坂東三十三ヶ寺の巡礼は私が一人で実行することに決心した。

5月16日 私の一人旅の計画として先ず東京湾の西岸を南下し、久里浜から対岸の金谷港に渡り、房総半島の千葉県の札所を参拝して茨城県に入り、ついで栃木県を経て群馬県を訪れ、最後は埼玉県の岩槻市にある慈恩寺を経由して帰京することにして、息子に私の計画を伝えて承諾を得た。

計画通り久里浜からフェリーに車とともに乗船して東京湾を横断し、対岸の金谷港から房総半島の33番・那古寺~32番の清水寺~31番の笠森寺~30番の高蔵寺~29番の千葉寺~28番の竜正寺に進んで27番の銚子観音を詣で、犬吠崎を見学して銚子の町で一泊した。

初めて眺めた九十九里浜の海岸線は、戦争の最後の段階で米軍の上陸地点と予想したのは当然だが、貧弱な火力で迎撃つ我が軍の犠牲は計り知れないものだったと、冷や汗を感じていた。上陸には最適地であっても防御には最適地ではないことを知りながら、布陣する無責任な上層部には同意できない。経験は最大の戦力であると力説したい。

5月17日 利根川沿いに上って「香取神宮」に参拝し、それから利根川を渡って潮来の景観を存分観賞しながら「鹿島神宮」に詣でた。

「香取神宮」は下總一ノ宮で祭神は経津主神(フツヌシノミコト)。「鹿島神宮」は常陸一ノ宮で祭神は武甕槌命(タケミカズチノミコト)。共に古くから軍神として尊崇を集め、宗教的な権威者としての「男性之神」の意義が強い。

(右の写真の上は鹿島神宮、下は香取神宮である)

次いで26番の清瀧寺を回り、海軍予科練で有名になった土浦に戻って霞ヶ浦を展望して筑波山に登った。25番の筑波山大御堂に詣でながら、有名なガマの油で有名なガマの置物の町を通過した。ガマとはヒキ蛙の俗称であることを知った。

筑波山を下山して24番の雨引観音から笠間市の23番の佐白観音を経て、水戸に直進して偕楽園一帯の弘道館や孔子廟を見学した。しかし金沢の兼六園と比較すると全面的に劣っており、花のない梅林は物足りなかった。当日は水戸のホテルに宿泊して久しぶりに按摩の世話になった。



5月18日 水戸を離れて22番の佐竹寺～陶器の町・益子の20番・西明寺～21番の日輪寺～宇都宮に入って15番の大谷寺～日光街道の「いろは坂」を登って中禅寺湖畔の18番・立木観音～栃木市の17番・山流寺～伊香保温泉の14番・水沢観音～何回眺めても美しい榛名湖畔の15番・白岩観音を参拝し、高崎に戻って一泊した。

5月19日 入院中の妻に電話したこと、未だ熱があつて通院できそうにないとの返信のため、此の際、秩父34ヶ寺も巡礼したいと予定を変更し、高崎から寄居に出て秩父の山岳地帯に入った。しかし一人旅は不安というよりも寂しいものであった。

秩父三十四ヶ寺観音霊場巡り

秩父の34ヶ寺に西国と坂東を合わせて百觀音霊場となる。此の機会をはずしては願望が達成できないと、困難を排して実行することにした。

西武鉄道秩父線に沿って秩父に向かうと、街道の左右に小さな御堂が建ち並び、それれに札所の番号が付してあった。時には隣り合わせに、時には向かい合わせに建ち並び、34ヶ寺巡りといつても小さな秩父市内の札所である。到着した当日に半数の霊場を巡ることが出来た。祭りで有名な秩父神社の隣のホテルに一泊する。この分ならば明日は残りの秩父の札所を回り、東京・用賀の息子の住宅に戻ることが可能だと判断した。そこで帰途の途中にある飯能町に居住している支那戦線で中隊長時代の部下・向俊夫君に訪問するからと電話を入れ、大体の到着時間をして承諾を得た。

5月20日 坂東三十三ヶ寺の中で取り残した9番の慈光寺を参拝した後、向俊夫君と再会した。次いで東松山の10番・正法寺～11番の安楽寺を参詣し、岩槻市の12番・慈恩寺を最後にして東京都内の市街地も難なく通過して、夕刻に息子の住宅に安着す。

早速、妻の入院中の病院に見舞いに訪れた。しかし病状は通院できるまでには回復しておらず、当分は退院できないため、一泊して再び自動車を運転して帰宅することにした。

昭和58年(1983)3月20日 龍兵团(56師団)慰靈祭参加 陸自第四師団内(福岡・春日市)
昭和58年(1983)3月27日～29日 歩146第5中隊会 於五島列島・福江市

第5中隊会・慰靈祭が五島列島の福江市で開催され、招待を受けて参加した。福江は先に第8中隊会に参加のため訪れており、今回は二回目であった。前回は空路であったが、今回は長崎からの連絡船で渡った。

福江は五島藩一万二千六百石の城下町で、歴史の遺構を今も伝えていた。一方、キリスト教会の多い長崎県にあって、更に多いのが五島の島々で到る所に天主堂が見えていた。又、遣唐使船の寄港地としても有名で各地に記念碑が建っていた。一般に遣唐使船は瀬戸内海を経て平戸に寄港し、海上の気象状況により五島に渡り、それから一挙に中国大陆に向かった。

(上の写真は海岸に建立された遣唐使船の寄港地の記念碑)



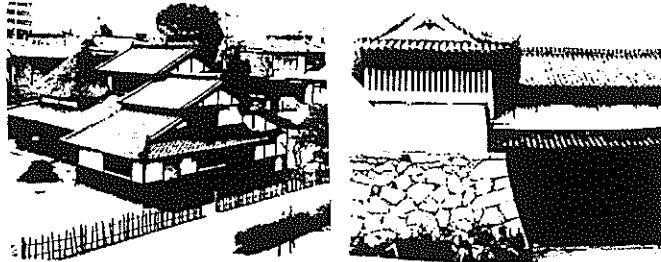
3月28日 五島列島・福江市からの帰路は佐賀県・嬉野温泉で有志と一泊する。

3月29日 佐賀市内観光

佐賀市内に我が大隊の第八中隊の西牟田忠氏が在住し、その好意により佐賀市内を観光し有益な案内を頂いた。高校教師の御令息の運転する自動車で回る。

築隱れ武士で有名な佐賀は早稲田大学創設者の大隈重信の出身地で、二回に亘り内閣を組閣した憲政党の創設者でもあった。

佐賀観光は大隈重信邸から佐賀城址、鍋島藩の菩提寺、明治維新の志士・江藤新平の墓、歩兵55聯隊の跡。小さな県都でありながら見るべき遺跡の多いことに驚く。



(右上の写真の左は大隈重信邸。右側は佐賀城址)

昭和58年9月16日～17日

9月16日 陸土教え子の60期「上田 寛君」来宅。
翌日の17日は金沢市の犀川料亭にて昼食会に招待された。
彼は東大工学部建築科を卒業してフジタ工業に勤め、現在
は取締役・技術研究所所長・工学博士(名刺による)
金沢支店の役員一名と懇談し有益であった。

(右上の写真は金沢・犀川料亭で記念に撮影す)



昭和58年11月13日

歩219聯隊第三中隊
慰靈祭 於靖國神社
(右の写真の左側・前列の中央が寺前信次)



昭和58年11月28日

大分県臼杵観音参拝

昭和58年11月20日

佐渡観光
預金講の友人会
金鉱山見学 当時は
犯罪者を使用して採金

写真の左は採掘作業を
展示した作業現場の
展示坑である



右側の写真は寺前信次

昭和 58 年 11 月 30 日

歩 146 聯隊「慰靈之碑」建立記念式典

(式典の状況は 22 頁に掲載済で省略す)

聯隊戦友の浄財の献金は

合計 18,730,496 円で

戦友諸君に衷心より感謝申し上げます。
(私の献金は最高額の 200,000 円である)
(右の写真は式典後、各中隊は記念撮影
した中の一つで、私は前列中央である)



式典後、岩本繁君の案内で

「名護屋城」を見学して唐津市に一泊、
翌日は唐津城や「唐津くんち」を見学。

(右の写真の左側は名護屋城、右側は
唐津城)



昭和 58 年 6 月 11 日～23 日 北海道一周旅行(夫婦)

5 月 11 日 自宅より北陸高速に入り一路北上し、当日は山形県の鶴岡に宿泊する。

12 日 男鹿半島を見学してから再び北上して青森市内に宿泊。

13 日 青森からフェリーに乗船して函館に上陸。五稜郭を見学して大沼公園で宿泊。

14 日 北海道の太平洋沿岸を走り、十勝を通って帯広で宿泊。

15 日 帯広郊外の池田十勝ワイン城を見学して阿寒～オホネトウ湖を遊覧して根室泊。

(右の写真の左側は阿寒湖畔

のアイヌ商店街。

右側は阿寒湖を背景にし
て記念写真)

湖畔のアイヌ博物館も見学



5 月 16 日 ノサップ岬から水晶島などを見学し、知床五湖を回って網走で安藤市長に再会。
一路北上して層雲峡を見学し同地に一泊する。

17 日 層雲峡から猿払海岸を見学して宗谷岬の間宮林蔵

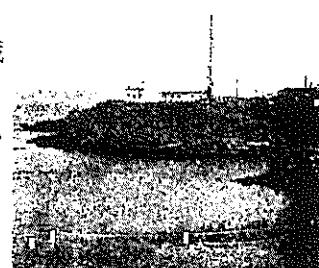
の銅像 前で記念写真を撮る。(右はノサップ岬)

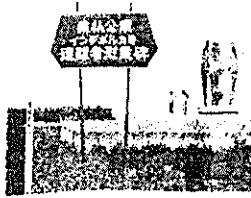
稚内の冰雪の門を見学して稚内市内ホテルに宿泊。

18 日 北海道の西海岸を通り増毛の小林信男氏を訪問。

久しぶりの再開で久闇を温める。

増毛から旭川に行き一泊する。





左より猿払海岸
層雲峠の景観
宗谷岬に立つ
間宮林蔵像
増毛・小林邸

5月 19日 旭川

から一挙に札幌に行きしない市内見物をして[羊ヶ丘]にも登る。



旧部下隊員が出迎えて

札幌市内料亭で歓迎会を開催



此の戦友は私が札幌の歩25聯隊出身者ではあり、北支那戦線で私が中隊長をしていた時の勇敢な戦士であった。

前列中央が寺前信次

その左側が中隊先任将校斎藤中尉

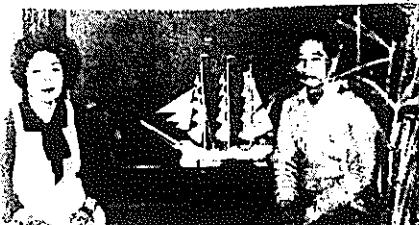
私の右側が中隊付楠野曹長

5月 20日

斎藤貞二氏宅を訪問し御礼を申し上げる

つづいて

私の従兄弟の平島重二郎氏宅を千歳市に訪問
従兄弟で唯一人が北海道に居住しさびしいだろう。(右の写真は平島重二郎夫妻)



千歳から小樽に行き一泊する。

5月 21日 小樽市内観光

小樽クリーク、三角市場など
を散策してフェリーに乗船し、
一等船室でのんびりと疲れを
回復させた。

(右は小樽クリーク)



5月 22日 敦賀港にフェリーは着き
北海道一周の旅は終わった。

昭和59年2月1日~8日(夫婦)

北海道・網走流氷祭と札幌雪祭

- 2月1日 加賀温泉発6:14 白鳥~青森着 18:03 青森宿泊
2月2日 青森発7:30 函館着 11:20 函館発 11:35 網走着 21:20 網走宿泊
網走駅頭に教え子の陸士 60期・網走市長の安藤哲郎君が出迎えてくれ、ホテルまでも準備しておいて頂いた。誠に有り難く深く感謝申し上げます。
2月3日 安藤市長の好意により秘書課長の案内
で先ず流氷祭りの観光から開始した。幸運にも今
年の流氷は海岸に接岸し、流氷の上に乗ることも
出来た。
(右の写真は流氷に乗って記念撮影した我等夫婦)
次いで凍った湖上太公望のワカサギ釣り、網走刑
務所跡の見学、モヨロ貝塚などを観光して楽しむ。
16:00 網走発の列車に乗車~19:05釧路着 宿泊



2月4日 釧路発11:00 おおぞら 札幌着 16:14 駅頭に齊藤貞二君夫妻の出迎を受く。

2月5日 札幌雪祭りの見学。大通公園
及び真駒内会場の観光。テレビで見るよ
りも迫力があり豪華に感じる。

(右の写真は真駒内会場の絢爛豪華な雪像)



2月6日 札幌発7:22~函館着 11:51 泊
各正教会、天主教堂、市場

2月7日 函館発 10:10 青森から日本海4号の夜間急行寝台列車に乗車

2月8日 7:31に加賀温泉駅着

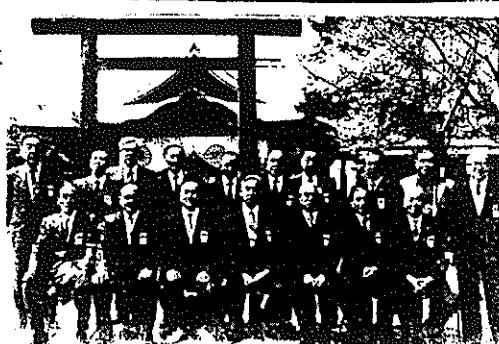
昭和59年3月15日 歩146聯隊二大隊本部慰靈祭



歩146聯隊「慰靈之碑」の前で記念写真

昭和59年4月15日

歩219聯隊第3中隊慰靈祭 於靖国神社



毎年参加者が減少するのを嘆く。

(前列の中央が寺前信次)

5 月 11 日 15:07 加賀温泉駅発~21:15 小倉駅着 上記の両氏が出迎えてくれる。

小倉港 22:40 出航 上対馬・比田勝港 04:55 着 8 中隊の宮原正夫氏が出迎える

5 月 12 日 同氏宅に案内されたところ、近所の 6 中隊の武末網作氏と 8 中隊の故上野秀夫氏の御遺族の訪問を受ける。早速、上野氏宅に訪問し故人の靈に額すく。

その後、上野氏の御令息の車にて各地の案内を受けた。感謝の至りで深謝いたします。村の中だけでなく周囲の山もすべてが真っ白な花で覆われていた。これが天然記念物で「ヒトツバタゴ」の花であった。まさに明眸皓歯(めいぼうこうし)の美人の姿であった。
 (右はヒトツバタゴの美観)



それより旧陸軍対馬要塞重砲兵(大隊)の跡、航空自衛隊対馬基地を訪問した。夜は大隊長が来ると云うこと

で各家からは釣り上げた大魚を宮原氏宅に持ち寄り、村民挙げての大歓迎会が催され、その歓待振りに涙が出るほどであった。

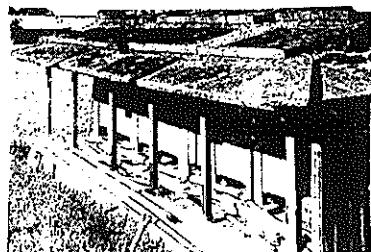
5 月 13 日 上対馬を縦断して名所旧跡を見学し、美津町濃部の第 8 中隊出身の犬東氏宅で昼食をご馳走になり、更に養殖真珠業の彼から説明を受けながら生まれて初めて養殖真珠の作業を見学した。

上対馬と下対馬を結ぶ万関橋を通過して、美津島町鶴知の元第 8 中隊の阿比留七郎氏の御靈前にぬかずいた。夜は国民宿舎「対馬」に於いて犬東・阿比留夫人が歓迎会を開いてくれた。拙い指揮官であった私をかように歓待してくれて御礼の言葉もなかった。

5 月 14 日 蒙古襲来で上陸地点の小茂田を訪れて小茂田神社を参拝し、城主の宗助國の胴を祀った御胴塚にも参拝した。

大山氏が生まれた生家の寺で、秘蔵の蒙古仏・高麗仏など 15 体を特別に拝観が許されたことは、特に印象に残っている。

海岸に建っていた「石屋根」も珍しい。台風に屋根が吹っ飛ぶことを予防し、火事の飛び火にも絶対的で貴重なものを拝見した。(上は石屋根)



それから厳原の町に出て日本三大墓地の一つと言われる宗家の墓地を参詣した。三大墓地は金沢の前田家、萩の毛利家の墓所の三つを言い、私は全てを拝観したのであった。
 (右の写真は宗家の墓所の景観)



墓所から厳原市内に出て先ず目に映ってくるのは石垣の堀で囲まれた武家屋敷であった。蒙古襲来で壊滅的な損害を被った宗家だが、このように整然と並んだ武家屋敷の存在は予想外の遺産であった。それから港の近くのホテルで一泊した。(右上の写真は厳原の武家屋敷の一部)



5月 15日 『壱岐』

対馬各地で大歓迎を受け、最後まで戦友の暖かい戦友愛を満喫して厳原港を出航した。約二時間で「壱岐」の「郷の浦」港に着岸した。大山氏が連絡したのか第6中隊の馬渡弥五郎氏と下条岩雄氏の両名が出迎えてくれ、感激しながら硬い握手を交わした。

対馬と同様に壱岐も魏志倭人伝に出てくる有名な島で、文永・弘安の役には全土が壊滅している。地形は対馬と対照的に平地が多く、昔は稻作を輸出していたと云う。

壱岐は平地のために台風が来襲した時は沖縄の宮古島と同じく、山がないために風当たりが強烈で、各家庭は防護策として石垣と植木による暴風施設が特に目立っていた。

対馬の北端で見学した豊砲台があったのと同様に、壱岐には手長島に東洋一の砲台があり、戦友の好意により案内された。両砲台共に大正の初期に建設されたが、一発も発射することもなく幕をとじたのであった。嗚呼無念。

5月 16日 壱岐から空路で福岡に帰り、新幹線に乗車して帰宅した。各地でビルマの戦友に再会できたことは喜ばしいことであったが、戦死者の家族が二家族もあり、逢わす顔もないというのが私の心情であった。(上の写真は壱岐の石と生垣に囲まれた屋敷風景)

昭和 59年 10月 11日~13日 隠岐の島観光

10月 11日 加賀温泉駅発 新幹線で岡山経由で松江到着。松江城~小泉八雲邸~武家屋敷~月照寺等を見学し一泊。私は何回目になるだろうか。見学するのにも退屈を覚える。

10月 12日 タクシーに乗車して境港に行き、隠岐行の連絡船に乗船して隠岐に渡った。玉若酢神社(祭神は大国主命)~隠岐郷土館~後醍醐天皇行在所跡の記念碑等を見学し一泊。

10月 13日 隠岐空港~大阪空港~帰宅

(右上の写真は隠岐の後醍醐天皇行在所の碑)



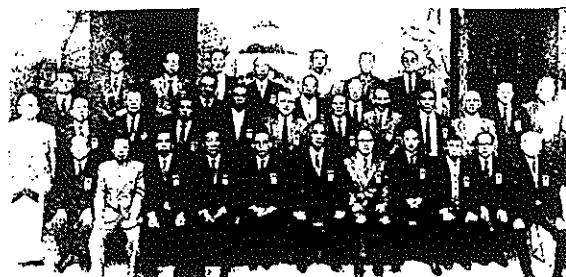
昭和 59年 11月 4日

歩219 聯隊第3中隊慰靈祭

於靖国神社

(右の写真の前列右より)

6番目が寺前信次



この年から私は三年間、瓢箪つくりに懸命

昭和 60 年(1985)4月 2 日~4月 8 日
(フルムン旅行・夫婦)
宮島・厳島神社

宮島~国東半島~桜島~小倉城~長崎慰靈祭
宇佐八幡神社前の五百羅漢



国東半島・熊野摩崖仏



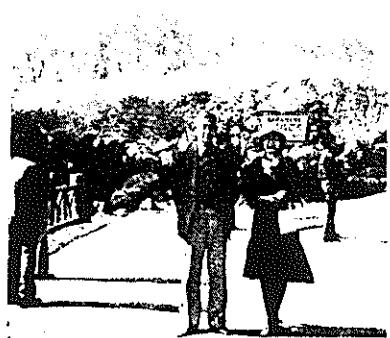
国東半島・長安寺



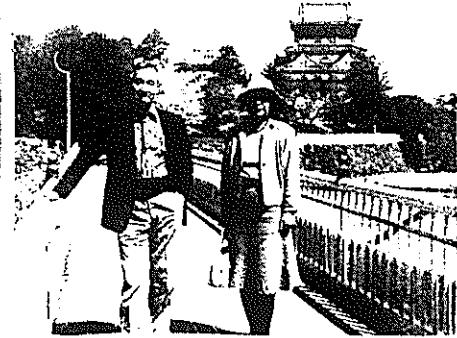
杵築城下の武家屋敷



桜島・南岳



小倉城



第二大隊本部慰靈祭



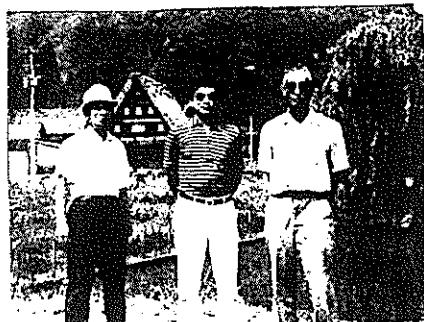
第六中隊慰靈祭(2列の左から 4番目が寺前信次)



昭和 60 年 8 月 4 日 ビルマ遺骨収集班一行が来宅し一泊。翌日、五箇山を見学して岐阜県・高山に於いて懇親会あり、私も出席す。

遺骨収集班一行(山代温泉)

五箇山に案内(中央はビルマ人、右は寺前)

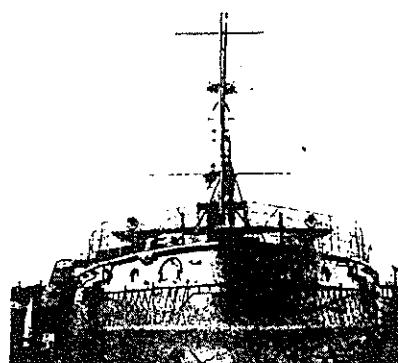


寺前会の翌日横須賀・観音崎見学
(中央が寺前信次)

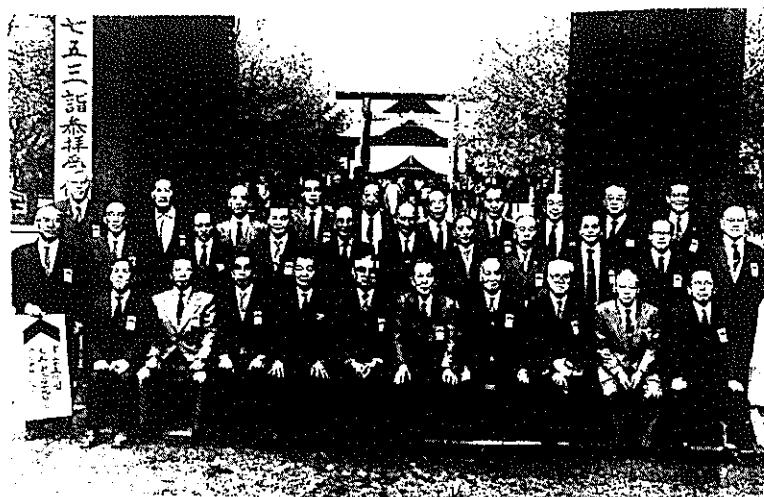
11 月 3 日 60 期 寺前会 於横浜
前列中央が寺前信次



日露戦争・旗艦・三笠を見学



11 月 10 日 歩 219 聯隊第 3 中隊慰靈祭 於靖国神社



第 219 聯隊 第 3 中隊 慰 為 祭 記 念 S.60.11.10

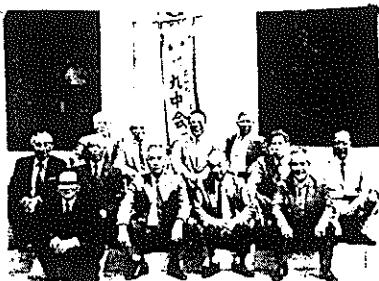
昭和 62 年 5 月 10 日

歩 219 聯隊第 9 中隊会

於伊豆・網代

聯隊合同慰靈祭が靖國神社で挙行された後、戦後初め
て第 9 中隊会に参加す。同隊の私が教育した昭和 15
年兵は殆んどニューギニアに転戦して玉碎した。右の
写真はそれ以前に除隊した兵士たちである。

右の写真は靖國神社で撮影。前列左より
二人目が寺前信次、次は美濃中隊長



昭和 62 年 7 月 1 日より三陸海岸・単独旅行

下は浄土ヶ浜



遊覧船にて浄土ヶ浜を遊覧す。
仏教で言う浄土とはこのようなものか?
金華山へ行く予定だったが強風のため
連絡船は欠航し、観光は中止す。



7 月 20 日より神岡鉱山～乗鞍～新平湯温泉(一泊)～上高地～穂高連峰を眺望する。
8 月 1 日より鈴鹿峠～伊勢・高田本山尊修寺～榎原温泉一泊(大觀音)～赤目四十八滝

下は上高地の河童橋



下は赤目四十八滝



昭和 61 年 11 月 22 日(1986)
教え子の「川井 健君」が天下の名門・一ツ橋学長に選ばれ、私が精魂を込めて作った
「長瓢箪」を一本、寺前会の際に御祝いとして贈呈した。
学長就任おめでとう
(前列左より 3 人目は寺前信次
4 人目が川井 健学長
5 人目は川井夫人)

陸士 60 期寺前会

於東京・高輪



昭和 62 年 8 月 23 日 県立三国中学
クラス会 於三国海岸 若えびす
福井県は大東亜戦争で運が悪く激戦地に出征した部隊が多く、クラスの人たちも 8 割は戦死している。三回負傷した私だがプロの軍人が生き残ってしまった。すべて運命である。この写真の中で現存するのは僅か半数となってしまった。
(後列右端が寺前信次)



昭和 62 年 10 月 3 日
歩 146 聯隊第 7 中隊慰靈祭・
戦友会 於長崎・大村・浜田屋
(前列中央洋 服姿が寺前信次)



昭和 62 年 11 月 7 日

陸士 60 期寺前会
於東京・高輪

(前列左より 2 番目が寺前信次)



昭和 62 年 10 月 2 日

福岡～柳川(北原白秋家の見学・柳川河下り遊覧)
～阿蘇九重山国立公園の見学～湯布院温泉一泊。



大山氏と平吉場氏に大山氏と予備士官学校同期でビルマ戦線に出陣していた伊津見氏の自動車に便乗して九重山一帯を観光し、由布院の大山氏と同期の支配人の経営するホテルに一泊。翌日は湯布院を観光して福岡に帰る。

(右の写真は柳川・河下りの景観)

昭和 62 年 10 月 3 日 歩 146 聯隊合同慰靈祭

その後、各中隊の会合が開催されたが、今回は第 7 中隊会に出席(前頁に掲載済)
昭和 62 年 11 月 6 日 歩 219 聯隊第 3 中隊慰靈祭 於靖国神社

(右の写真の前列
中央が寺前信次)

11 月 7 日に陸士 60 期寺前会開催(前頁
に掲載済み)



昭和 63 年(1988)7 月 13 日～18 日 青森県一周の旅(単独)

7 月 14 日 恐山 15 日 仏ヶ浦 16 日 岩木山～弘前(禅林寺街路～弘前城～武家敷)

8 月 10 日 孫の文代と直子を連れてディズニーランドへ

9 月 11 日～13 日 浜名湖～館山寺温泉～白糸の滝～石和温泉～武田神社～甲斐善光寺～
武田信玄靈廟～昇仙峡～上諏訪大社

9 月 23 日 凰来寺山～長篠城址と長篠合戦場一帯の単独の旅

9 月 24 日 奈良シルクロード博の見学

10 月 8 日～9 日 会津の単独旅行

列車にて新潟周りで会津若松着。同期の谷文夫君(北支那同僚隊)と再会して一泊。翌日、会津若松城～武家屋敷～飯盛山(同期の飯森正日氏)に再会した後、日進館を見学し会津村を観光する。

10 月 10 日 川崎の曹洞宗大本山「總持寺」拝観。

昭和 63 年 11 月 12 日

歩 219 联隊 3 中隊慰靈祭 靖国神社

(前列右より 5 番目が寺前信次)



昭和 63 年 11 月 12 日

陸士 60 期寺前会 於東京・高輪

(前列の右より 3 番目・寺前信次)

昭和 64 年 1 月 7 日
昭和天皇崩御 年号を平成に改める

平成元年(1989)3 月 9 日

陸士 60 期寺前会

於加賀・山代温泉

ホテル百万石

(前列左より 2 番目・寺前)



平成元年 4 月 11 日

歩 146 联隊第 2 機関銃中隊慰靈祭

於長崎市内

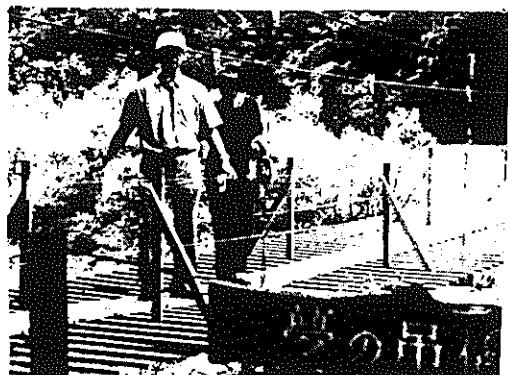
(前列右より 4 番目が寺前信次)



歩 146 联隊(ビルマ戦線)の聯隊合同慰靈祭は毎年・春・秋に行われるが、私は各中隊会には順序を定めて毎年一ヶ中隊ずつ参加することにしている。

- 平成元年・4月 23日 京都御所の一般公開で訪問する。時間が余り金閣寺～北の天満宮～妙心寺を訪問。
- 5月 8日 台北の「林」さん一家が来訪。那谷寺と観音寺を案内し、夜はホテル百万石で会食する。
- 5月 21日～22日 谷川岳・天神平へ旅行、懐かしい伊香保温泉に宿泊。翌日は「だるま工場」と「群馬サファリー」を見学。
- 5月 24日 義母・高谷ひで・喜寿の祝い（片山津温泉・ホテルながやま）
- 9月 21日～23日 身延山参詣～静岡宿泊～寸又峡宿泊(夫婦)

「夢の吊橋」を恐る恐る渡った

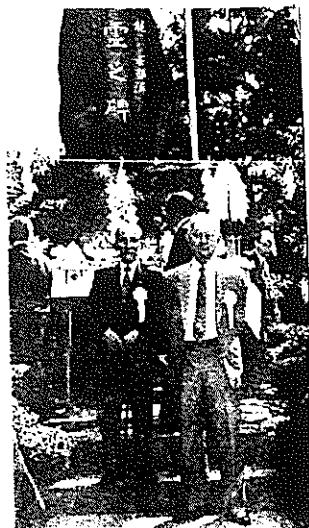


平成元年・10月 1日

歩 146 聯隊慰靈祭 於大村市・慰靈碑前にて

歩 113 聯隊の「松田光男」氏が参拝に来る

松田氏と私は昭和 54 年(1979)11 月にビルマ慰靈巡礼の旅で知り合い、ビルマの同師団・龍兵团であることから親交を深め、彼も我が家に来訪するなど家族同然の付き合いを続けた。しかし彼は平成 15 年に黄泉の人となる。
嗚呼 哀哉 (右の写真の左が松田光男氏、右が寺前信次)



平成元年・11月 2日 琵琶湖東の紅葉狩り

平成元年・11月 12日

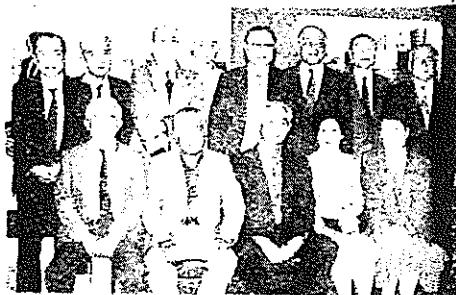
歩 219 聯隊第 3 中隊慰靈祭
於靖国神社
(前列左から 6 番目が寺前信次)



平成元年(1989)11月12日

陸士60期寺前会 於東京・高輪

(右の写真の前列中央が寺前信次)



平成元年 12月 20日~23日 小松空港~沖縄・石垣島~宮古島~小松空港(単独)

小松空港~福岡空港~石垣島着・観光

12月 21日 石垣港~西表島観光

(マンゴープル、気根の板根、牛車遊覧)

~竹富島観光(星砂)~石垣港~宮古島宿泊

12月 22日 宮古島観光

熱帯植物園~日露戦争の時、露海軍

通過を知らせた久松五勇士顕彰碑見学

宮古島空港~那覇空港 泊

12月 23日 那覇空港~福岡空港~

小松空港



(気根の板根の間に立って)

平成2年(1990) 新春の瀬戸大橋と岡山三日間の旅(夫婦)

1月 1日 神戸港~川之江港(船中泊)



2日 多度津ゴールドタワーで日の出を拝む



金比羅宮初詣~瀬戸大橋~与島・咸臨丸で遊覧
倉敷観光~岡山泊



3日 岡山~備中高松~最上稻荷参拝

(右の写真は最上稻荷の本堂の前にて)

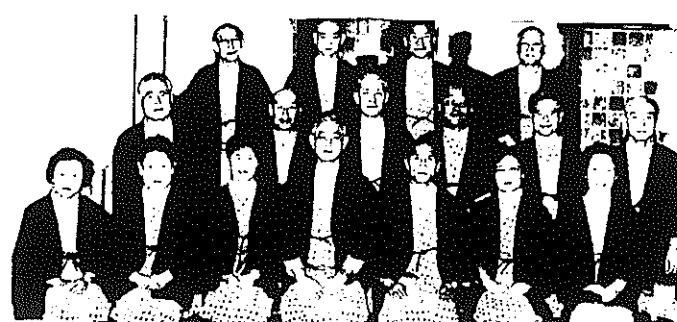


平成2年 2月 24日

陸士60期寺前会

於犬山ホテル

(前列左から4人目が
寺前信次)



平成2年3月4日~7日 歩146聯隊第2大隊本部慰靈祭・戦友会に参加・その他の旅

3月4日 吉野ヶ里遺跡~

佐賀県・嬉野温泉

第2大隊本部慰靈祭

・戦友会に参加

5日 福岡県篠栗町

の南蔵院参拝

(四国八十八箇所の

別格本山)

6日 天草国立公園

の旅(下田温泉泊)



3月29日 東京・東村山貯水池を訪れて青梅の枝垂桜を見物する。

3月31日 文代・伸一を連れて関西見物

四天王寺~大阪城~大阪泊~京都観光遊覧

平成2年6月6日 クイーンエリザベス2号に乗船一泊 (夫婦)

クイーンエリザベス号の船室に於いて記念撮影

6月7日 大阪花博覧会見物



平成2年10月27日 石川県陸士60期生会に招待される

於加賀・粟津温泉・ホテルまつや



(前列左より 4番目が寺前信次)

平成2年11月4日
歩219聯隊第3中隊慰靈祭
於靖國神社

(前列右より5番目寺前信次)



平成3年2月24日

陸士60期寺前会

於和歌山市加太国民休暇村

翌日は和歌山城・和歌山東照宮
~淡島神社の珍景(性器)等の見学
(前列右端・寺前信次)



平成3年3月3日 歩146聯隊2大隊本部慰靈祭・戦友会 於佐世保市 月華荘
(前列右から4番目・寺前信次) 4日は田島計彦氏の好意により、原城址を見学する。
於原城址記念撮影(右より2人目・寺前)



4月17日~18日 吉野山の桜見物と飛鳥路めぐり(吉野山と太平記の勉強となる)
(飛鳥寺と蘇我入鹿の墓の見学)

6月2日~3日 ピレマ遺骨収集班の会 日本一の刃物の産地「関」と鶴飼に参加

7月1日 陸士60期26中隊会に招待される。於栗津温泉・まつや。相良広明氏に再会

7月23日~24日 相馬・野馬追と飯坂温泉の旅に参加

平成3年10月6日

歩146聯隊第7中隊戰友会

於佐賀県嬉野温泉

(前列左より4人目・寺前信次)

歓迎 第7中隊 聯隊一員



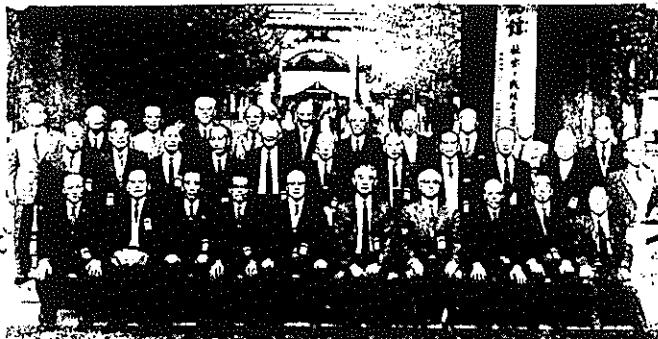
平成3年10月9日 同期生・支那戰線・同聯隊でともに戦った「伊藤鉄次」君は、昭和19年に南方戰線ニューギニアに転戦し、歩219聯隊の軍旗と共に玉碎した。其の靈を慰めるために秋田県田沢湖畔の実家まで盛岡からタクシーを飛ばし、墓参を果たした。実兄が未だ御健在であった。地図を用意して参上し、詳しく戦闘状況を説明申し上げた。

平成3年11月10日

歩219聯隊第3中隊慰靈祭

於靖国神社

(前列右より5人目・寺前信次)



平成3年11月10日

「寺前様を囲む会」

於伊東温泉・いなば旅館

(前列左より3人目寺前信次)

同日、219聯隊合同慰靈祭が例年のごとく挙行され、その後、自動車に乗車して伊東温泉に走り、私を慰労した。

私が同聯隊の慰靈祭に関して尽力したこと、聯隊各隊の委員が認め、慰労すべきだと衆議一決して慰労会となる。



平成4年(1992)2月3日~4日

奈良・興福寺の節分を見学~翌日は京都・信長ゆかりの史跡を見学(夫婦)

3月2日

歩146聯隊

第2大隊本部懸垂祭・

戦友会

於諫早ホテルセンリュウ

(前列右より)

5番目寺前信次



3月3日

高塚地蔵参拝

4月10日 文代 慶応義塾中等部合格祝いに上京

4月11日 陸士60期寺前会

於長野市・長野ロイヤルホテル

(前列の中央・寺前信次)



4月24日 山口県防府天満宮参拝・防府市内観光

8月3日~8日 さいはて旅情・利尻島~礼文島の旅(夫婦と直子)
札幌で齊藤貞二夫妻・平島重二郎夫妻に再会

10月11日~14日 ねぶたの里めぐり 弘前~十和田湖(姫の湯ホテル泊)

八幡平~中尊寺~巣美峠(鳴子温泉泊)

蔵王アルペンルート

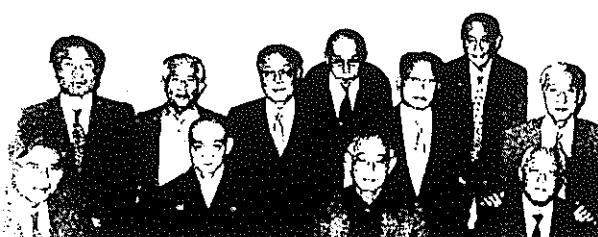
10月25日 山口県青海島観光

11月6日~8日 山形県・米沢城址~山形市内観光

11月10日 陸士60期寺前会 渡津弘道君 曹洞宗大本山總持寺副管長就任祝い

於大本山總持寺

(前列右より 2番目・寺前信次)



(前列左より 2番目・渡津弘道君)

12月3日~4日 種子島(含宇宙センター)~屋久島(縄文杉見学)

平成5年(1993)

4月 15日 春の高山祭り見物(夫婦) 級爛豪華な曳山は日本随一で感激す。
彫り物は全て中国の古代歴史物語で、高山の人も知らなかつた。

4月 小笠原諸島の旅 「おがさはら丸 3,550トン、定員 1,041人」
秀一の案内で父島～母島を遊覧。父島に戦争中に師団司令部があつたとは驚き

4月 16日 石川 60期総会に
招待される

於和倉温泉
ホテル海望

(前列右より 4番目・寺前信次)



9月 5日 陸土 60期全国総会

招待される
於鬼怒川温泉・あさやホテル

吉野会の懇親会
(前列中央・寺前信次)
翌日、二ノ宮神社・淨土真宗
高田派本山専修寺参詣
(親鸞聖人納骨堂あり)



11月 7日 鶴見の曹洞宗大本山總持寺見学

教え子の渡津弘道君が同寺の副管長に就任し、寺前会員が招待される

11月 7日 歩219聯隊第3中隊慰靈祭 於靖国神社

(右の写真の左から 5人目・寺前信次)



12月 7日 伊勢神宮式年遷宮、年末に参拝す

平成6年(1994)3月10日

歩146聯隊2大隊慰靈祭・戰友会

於雲仙・パークホテル

(前列中央・寺前信次)

翌11日、雲仙の「お糸地獄」散策と
噴煙を噴き上げる雲仙普賢岳を観光。
土石流の被害状況を視察

(中島六男氏の案内)



3月12日 鹿児島・知覧特攻隊の平和観音を参拝

特攻隊の資料館を見学し、涙を誘うもの
多く、戦闘の悲惨さを体験した我々は、
戦争絶対反対を絶叫したい。

ついで知覧の武家屋敷を観光して鹿児島
空港から大阪に飛び、当日帰宅する。



(右の写真は知覧平和観音と戦闘機の前に立つ寺前)

4月21日~23日 亡兄の50回忌のため沖縄・浦添城址に参拝供養する(夫婦)

甥の寺前信彦の
妻の実家「諸見
里」家が沖縄市
にあり、甥の妻
・和子の案内で
諸見宅を儀礼訪
問す。当夜は那
覇市の料亭で沖
縄舞踏を観賞し
ながらの大歓待
を受く。



(右の左側は守礼の門に立つ我等夫婦、右側は亡兄の写真を浦添城址に飾り参拝)

6月5日

石川60期総会に招待される

於 白雲樓

(前列中央・寺前信次)

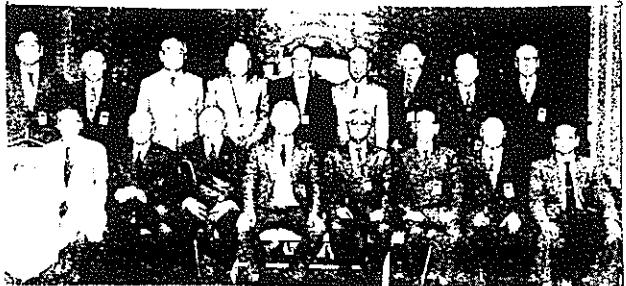


平成6年11月6日

歩219聯隊第3中隊慰靈祭

於靖國神社

(前列左より4番目・寺前信次)



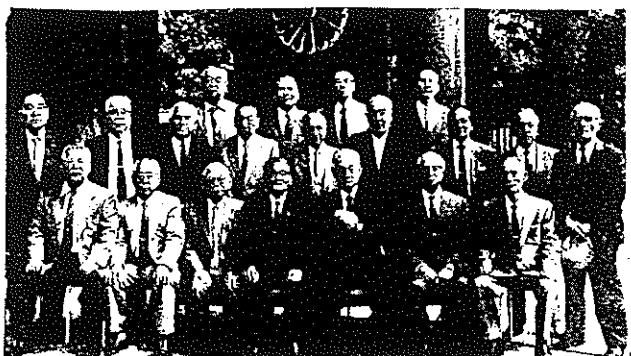
平成7年(1995)5月7日 歩219聯隊合同慰靈祭

慰靈祭の後

第3中隊戦友会を開催

於半蔵門会館

(前列右より3番目
・寺前信次)



6月11日

石川60期総会に招聘される

於栗津温泉・天翔閣

(前列中央・寺前信次)



7月10日~11日

陸士60期全国総会に招聘される

教え子の「秋山照雄」が代表幹事

於岡山・プラザーホテル

右は中隊会の写真

(前列右より3番目・寺前信次)

解散後、タクシーで宮本武蔵の里を、ついで津山鶴山公園を散策して岡山へ



平成 7 年 11 月 12 日

歩 219 聯隊第 3 中隊慰靈祭

於靖國神社

(前列中央・寺前信次)



平成 8 年(1996)1 月 21 日 大相撲新春場所・千秋楽を息子の秀一の努力により見物す。
娘婿の駒谷康文も同伴し、貴乃花、小錦、武蔵丸等を見る。優勝は貴乃花。

平成 8 年(1996)3 月 9 日 下関観光

満州皇帝の弟である愛新覺羅氏とは陸大再審試験で同班であったから会話をしたことがある。嵯峨 浩(日本の華族)氏と結婚し、其の夫婦を祀る愛新覺羅神社を参拝、高杉晋作の像が建つ日和山公園~旧英國領事館~巖流島(小次郎の剣の流派の名をとって巖流島とよばれている)~赤間神宮(平家と共に滅んだ安徳天皇が祭神で、平家一門の亡盛塚がある)~壇ノ浦砲台跡等を見学す。



3 月 10 日

歩 146 聯隊第 2 大隊本部慰靈祭

於慰靈之碑の前(前列左より 3 人目・寺前信次)

3 月 12 日 津和野~山口市内観光



4 月 21 日 陸士 60 期寺前会

(前列右より 2 番目・寺前信次)



5 月 25 日 寺前信次の喜寿の祝い 於和倉温泉加賀屋
(左側が記念写真)

11 月 10 日 歩 219 聯隊第 3 中隊慰靈祭(下の写真)
於靖國神社 (前列左より 4 番目・寺前信次)



平成9年(1997)2月9日~18日

南西諸島の旅(琉球諸島~薩南諸島・単独)

与那国島~久米島~沖縄本島最北端の辺戸岬~与論島

~沖永良部島~徳之島~奄美大島~鹿児島~大阪空港

右は日本最西端の島・与那国島の証明書

日本最西端の証



THE MOST WEST POINT OF JAPAN

与那国島観光協会

寺前信次様

3月10日 私の胃癌見舞の会

主催歩146聯隊第2大隊

於福岡県・二日市温泉

昨年夏に胃癌手術に際し有田焼

の大花瓶を見舞い品として頂き

本日は又見舞会を開催し感謝の
至りである。有難う御座います



(右上の写真より後列右より4番目・寺前信次)

4月12日 岐阜県・根尾村の

「うすずみ桜」鑑賞の旅

4月15日 大阪市・造幣局

「通り抜け桜」の鑑賞

5月1日 みほろダム~庄川桜の
鑑賞と白川村合掌造

5月17日 私の胃癌快気祝いを
兼ねた陸士60期寺前会
(前列中央・寺前信次)



5月23日 竜飛岬を見学し青函トンネルを通過し北海道に渡る

24日 弘前・岩木山登山と弘前市内観光。五能線のリゾート列車に乗車

6月8日 陸士石川60期総会に招聘される

於能登珠洲市・能登路荘

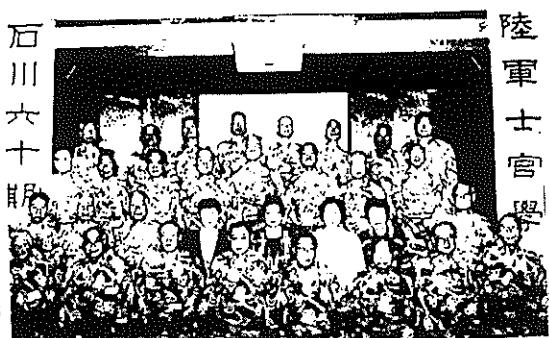
(第3列の右から4人目・寺前信次)

6月17日~22日 北海道東部の旅

小松空港~羽田空港~女満別空港

知床半島巡り~霧多布海岸~釧路

温泉観光~阿寒湖~屈斜路湖~美幌
峠~女満別空港~羽田~小松空港



平成9年(1997)11月9日

歩219聯隊第3中隊慰靈祭

於靖国神社

(前列左より3人目・寺前信次)



平成10年(1998)5月1日

陸上60期寺前会

於知多半島南端の師崎港

(後列右より4番目・寺前信次)



平成10年5月16日~19日 四国九州の旅

NHK大河ドラマで有名になった「おはなはん」の古里である伊予大洲を観光し、宇和島に行って城下町を巡って一泊。翌日の17日は四国・九州を結ぶ連絡船に八幡浜港から乗船し、佐田岬半島の景観を嘆賞して別府港に上陸した。

18日は噴煙を上げる阿蘇山にのぼり、お釜も良く見えて絶好の登山日であった。阿蘇はミヤマキリシマの花盛りで絶景美を呈し、熊本に出る途中の田原坂の古戦場を訪ね、薩摩軍の戦没者墓碑に参拝す

6月14日 我等夫婦の金婚式を祝う会

於東京・帝国ホテル・一泊
我が子及び孫たちが祝賀会を開催する。

15日は江ノ島に遊び、稲村ガ崎にまで足を

延ばし、箱根・湯本・富士屋ホテルに宿泊。

16日は箱根街道を走って関所跡を訪れ芦ノ

湖を海賊船で遊覧し、熱海百万石で一泊。

幸福を感じながら旅をした。



(熱海の海岸・お宮の松にて記念撮影)

平成 10 年 10 月 1 日
歩 146 聯隊第 2 大隊本部
慰靈祭・戦友会

於慰靈之碑前

於大村市・はまだや

(前列左より 3 番目・寺前)
大村市内観光

10 月 2 日 北九州をドライブ

福岡・香椎宮～官地嶽神社～宗像大社～若戸大橋～飯塚市のボタ山見学

10 月 11 日 滋賀県・八幡宮～近江商人屋敷～水郷観光

11 月 3 日 小松市・瑞芳園の苔の見学



平成 11 年(1999)5 月 16 日 九州・高千穂地方の旅

日豊線・延岡駅・乗換えて高千穂鉄道に乗り終点で下車。

夜は夜神楽の見物、高千穂らしい雰囲気が味わえた。

17 日はタクシーに乗車して高千穂神社～高千穂峡谷を観光し、天の岩戸東本宮～西本宮～天安河原を見学して日本の古代史の謎を知る。

我々は小学校時代から教育された神の国、天の岩戸はただの岩の割れ目であった。この割れ目が天之岩戸神社の御神体である。

5 月 18 日 熊本県の南朝の武将「菊池一族」を祀る菊池神社から菊池峡谷を観光する。



6 月 6 日
陸士石川 60 期総会に
招聘される
於山代温泉葉渡莉
(前列右より 4 番目
・寺前信次)

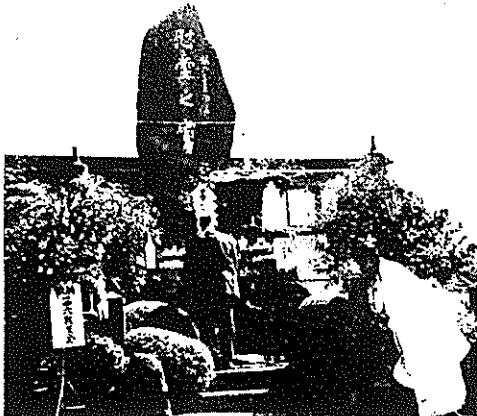


6 月 14 日
陸士 60 期寺前会
於・東京・市谷
(前列右より 4 番目・寺前信次)



平成 11 年 10 月 2 日 「しまなみ海道」へ

慰靈祭に参加する前日、福山から
バスに乗車して「しまなみ海道」
の各橋梁を通過して景観を堪能し
今治から列車にて松山へ。そこか
ら空路、福岡へ、そして長崎へと。



10月 3 日

歩 146 聯隊慰靈祭・於慰靈之碑
の前に代表者として参拝する
寺前信次

11月 25 日

義弟夫婦と有馬温泉に一泊し、翌日は京都・高雄山から嵯峨野を散策して京都駅ビルホテルに宿泊。夜は「夜の京都観光バス」に乗車して楽しむ。

平成 12 年(2000) 支那戦線余話を上梓する。

6月 4 日

陸士 60 期寺前会

於東京・市谷

(前列中央・寺前)



6月 11 日

陸士石川 60 期総会

於河内村千丈温泉

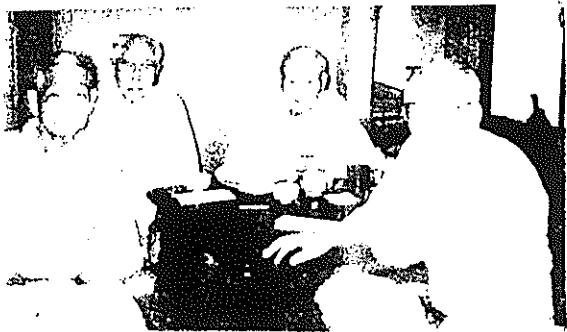
招聘される

(前列中央・寺前)



戦争体験者の戦友会の人達とは 60 期諸君は
未だ若いという感じだ

平成 12 年(2000) 10 月 8 日



歩 146 聯隊慰靈祭
於懸靈之碑前

第 2 大隊本部戦友会
於大村・浜田屋

大隊本部戦友会も参加者は激減し、寺前を含めて僅かの 5 名となる。嗚呼、寂しい哉

10 月 9 日、大隊戦友会に尽力された長崎市の故山下正義君、故小森正三郎君の御仏前に参拝し、生前の御礼と御冥福を御祈りした。丁度、長崎は御祭りで蛇踊りなどを見学す。

案内して頂いた竹島豊彦氏に心から感謝申し上げます。

11 月 5 日

歩 219 聯隊第 3 中隊慰靈祭

於靖国神社



(前列左より 3 番目・寺前)

北海道の楠野勝敏氏が之が最後だと参加してくれた。

有難う。感謝する。

(前列左より 4 番目・楠野氏)

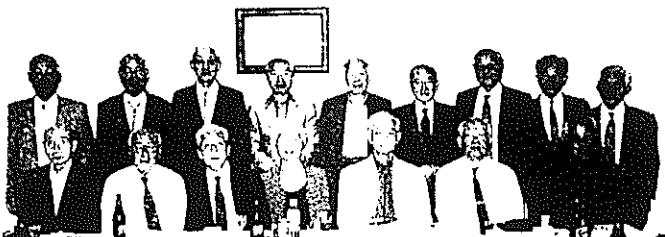
5 月 8 日 博多中世博覧会見学(元寇の役・弘安の役の博覧会)

旧大宰府古跡・水城の堤防・今津海岸の防壘などを見学する

6 月 3 日 陸士 60 期寺前会

於東京・市谷

(前列左より 5 番目・寺前)



6 月 10 日



陸士石川 60 期総会に招聘される

於 能登・志賀町・いこいの村

今春より末梢神経障害により手足が痺れ、会合で立つて挨拶することも出来ない病状となる。消耗した顔。

平成13年10月7日

歩146聯隊慰靈祭 於慰靈之碑前

第2大隊本部戦友会 於浜田屋

(前列右が寺前信次)

前列左の中島六男氏はこの会合に出席が最後となった。 祈御冥福



11月4日

歩219聯隊第3中隊
於靖国神社

(前列左より4番目・寺前)

前列左より3人目の齊藤氏は夫婦同伴で出席された。しかし病魔に冒されて意思の疎通もままならず、胸を塞ぐような寂しさを感じさせられる。



平成14年(2002)6月2日

陸士60期寺前会

於東京・市谷

前列右より3番目・寺前



11月4日

歩219聯隊第3中隊

慰靈祭

於靖国神社

(前列中央・寺前信次)

前列右より2人目の菅野邦俊

氏は翌年御逝去され御冥福を

祈る。右端の浅賀唱一氏は病

に倒れ御快癒を御祈りします。



平成 14 年(2002)11 月 11 日

陸士 60 期寺前会

於山代温泉かんぽの宿

(前列中央・寺前信次)



今年の 6 月 2 日に東京・市谷で

行われた会合で、本年秋に金沢で開催される陸士 60 期全国総会の前日に「山代温泉」「かんぽの宿」で寺前会を実施することが決定された。本年は二回目である。

平成 15 年 (2003) 6 月 4 日

陸士 60 期寺前会

於 東京・市ヶ谷

前列左から二人目の春日恭蔵君は久しぶりに長野県から参加した。有難う。



以上、26 頁から書き始めた《国内旅行》は平成 15 年半ばを以って終わりとしたい。
支那戦線やビルマ戦線の生き地獄のような過酷な戦闘を潜り抜け、九死に一生を得て帰還した生き残りの我々は、最後の一人になるまで慰靈の誠を捧げると固く誓い合った。

しかしながら戦後 58 年も経過すると生き残りの戦友の多くは鬼籍に入り、今年の慰靈祭を施行する戦友会の代表者も幽明境を異にし、或いは病魔に躰れてしまったのである。

我が人生を回顧すると、人生の前半生は国家意識に駆り立てられて犠牲的精神に燃えていた。死生を超越し戦場で多くの部下を犠牲にした私は、其の責任感の重圧から一生を慰靈に尽くしたいと決意し、実行してきた積りである。

例年、私は少なくとも一回以上は靖国神社に昇殿参拝し、或いは我等が建立した慰靈碑に額づいてきた。中国の史記に「招魂」という一篇がある。それには民族の歴史とともに連綿として歌われてきた鎮魂の思想が、詩篇の基底として流れている。残された人々は「魂魄離散せる、その魂を招く」と、殉国の死者を弔い、我々を「招魂の世界」に近づけるのであった。「魂」は「人の精神をつかさどるたましい」であり、「魄」は「人の肉体をつかさどるもの」である。「魂よ帰り來たれ」と魂を招きよせ、靈魂よ、あなたが帰るところには、皆が、祖国が待っていると詠っている。

しかし「みたまよ、帰りませ」と呼んでも、果たして現在の我が國には、殉國の英靈の居心地のよい招魂の地があるだろうか。国民は挙って靖国神社や慰靈碑に参拝して欲しい。

《海外旅行》

「旅」は軍隊のことを意味する言葉である。軍旅(戦)とも称した。「タビ」は「他火」で「他所(ヨソ)の火を経験する」ことであるとも云える。即ち「旅」は「居所を離れて他方に行く」ことである。幸か不幸か私は二十代には日本を離れて四年間に亘り外地に従軍し、現在の中国である支那やビルマ(現ミャンマー)を始め、台湾、タイ、ベトナム、マレーシア、シンガポールなどの異郷を旅(軍旅)した。

この間に私は彼の地の地理を始め歴史も学ぶ機会に接した。特に中国では我々が日本で学んだ中国の故事や古典に刺激され、軍事以外に「世界という書物」を見聞したと思っている。しかし敗戦・復員して以来、どん底の生活に汲々として旅どころではなかった。

生活に余裕を見出した時は五十代半ばで、当時としては老人の仲間入りの時期であった。其の時、江戸後期の儒学者「佐藤一斎」の「老人心得箇条」を読んだ。その養生訓には四つの原則があった。曰く和易(ワイ・心は安らかに)、曰く自然(自然の成り行きにまかせる)、曰く逍遙(ショウヨウ・気ままにぶらぶら歩くこと・楽しく悠々自適)、曰く流動(心のおもむくまま)である。つまり何事も無茶しないことである。無茶しないからと云つて、のんべんだらりと過ごすのは宜しくない。「老いてなおひたすら学び、これが心身の養生になる」。

「児孫団集(団欒)すれば養を成し、老友聚話(シュウワ・集まって語り合う)すれば養生を成す」と、温かい人間関係を強調している。また内にばかりこもらず、外に出て自然に浸ることをすすめている。「老人は宜しく流水に臨み、遠山を仰ぎて、以って開豁(カイガツ)の観(広大な眺望)を為すべし。真に是、養生なり。もし風寒を怖れ、常に被を擁して(夜具などにくるまって)、室に在るは即ち養に似て養に非ず」と。現今なら、大いに旅を楽しむことを奨励していることである。その佐藤一斎は八十八の長寿であった。

私の場合は中国・ビルマの凄惨な戦闘で犠牲者が続出し、その遺骨すら拾うことの出来なかつた戦場に未だ数多くの英靈が眠っており、慰靈巡礼の旅心に火が点いていた。しかし其の国に入国するための友好条約は未締結で、漸く実現できたのは昭和 53 年(1978)であった。現実なのか、幻なのか。眞実なのか、作り話なのかと想いを馳せながら時を重ね、輪が広がつて世界各地に脚を伸ばしていった。

この世は一刻として留まってはいけない。時間は我々の都合におかまいなく過ぎ去っていく。時間が過ぎ去つて行くのではなく、我々が過ぎ去つて行くのであると気が付くと、更に旅の魅力に扇動され、「世界は一冊の美しい書物だ」と拍車をかけて飛び回った。

「百聞は一見に如かず」と飛翔した海外旅行は六十数回に及んだ。しかし重複する国も多くあり、又、写真撮影の失敗から紀行文を書くことも出来ない旅もあった。そのためには《海外旅行》の此の部では五十回のみを取り上げて、子孫のために書き遺すこととした。

年老いても希望のあるところに喜びがある。それが充実した人生である。希望を失った人生は惨(ミジ)めである。人生で問題なことは其の内容である。内容の充実した人生を過ごした人こそ、本当に長生きしたと云えるのではないだろうか。



●『香港・マカオの旅』 昭和48年(1973) 7月

当時の海外旅行と云えば香港・マカオの旅であった。それも1ドル360円の固定レートで、人も羨む高価な旅であった。私達友人の預金講は旅行代金も貯まり、それに参加することになった。

講は私の加賀地方では盛んであった。それは浄土真宗再興の人と云われる蓮如上人の布教の根拠地が加賀市であり、講を作つて檀家を広めたと伝えられ、その影響は今日にまで続いている。

「香港」はイギリスの直轄植民地で、アヘン戦争で香港島は1842年イギリス領となり、九竜市はアロー号戦争で60年にイギリスに割譲され、九竜半島は98年に99年間の期限付きでイギリスが租借した。そして1997年に全地域は中国に返還された。

「マカオ」は珠江の河口にあるポルトガルの植民地で、政庁公認の賭博場があり有名であった。1557年にポルトガルが租借し、1887年に正式にポルトガル領となつた。又、マカオはカトリックの布教の根拠地でもあった。そして1999年に中国に返還された。

当時の香港を訪れる日本人観光客は宝石と時計を買いあさっていた。私の息子の知り合いで宝石商の「江さん」が出迎えてくれ、我々一行も宝石を安く手に入れた。しかし香港の商人は贋物を売っているという評判も高く、眞実は高いか安いか分からぬ。

マカオではカトリック教会の跡が残っていた(右上の写真が教会跡)。戦中に我々は中国の山間假地の辺鄙なところでも教会を見つけた事を思い出す。それは布教に名を借りた軍の手先で、主目的は情報収集機関であったことをマカオで理解した。又、マカオでは生まれ初めて初めて賭博を経験したが、結局は博打には手を出さないことだと云う結論であった。

(写真の右端が添付)

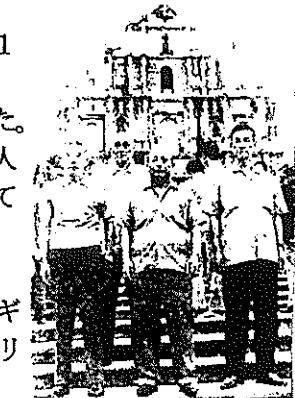
●『ヨーロッパ九国三週間の旅』昭和49年(1974)10月10日~31日

このコースはロンドン～パリ～ベルギー～アムステダム(オランダ)～ケルン～ボン(西ドイツの首都)～ライン上り～ハイデンベルグ～ノイシュバンシュタイン城～ローテンブルグ(以上は西ドイツ)～インスブルック(オーストリア)～ジュネーブ(スイス)～ローマ～ナポリ・ポンペイ(イタリア)～マドリード～トレド(スペイン)～羽田

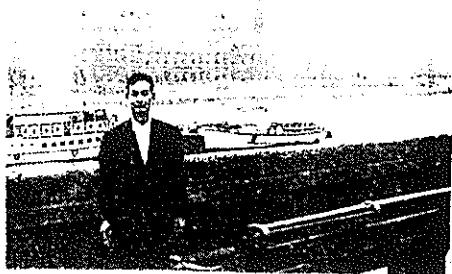
当時は成田空港はなく、国内・国外便はともに羽田発着で混雑していた。欧州便は北廻りと南廻りがあり、北廻りは17～18時間を、南廻りは24時間を要した。普通は北廻りでアンカレジで給油するために約1時間の休憩があった。それから北極を通過して欧州の各飛行場へと飛翔した。私の初めてのヨーロッパの旅は北廻りで英国のロンドンに飛んだ。

今日では老いも若きも海外、特にヨーロッパ旅行は盛んで珍しいことではないが、当時は数少ない人たちの旅であった。それかと云つて財閥ではなく、普通の人たちばかりの旅好きな連中で私が最高年齢であった。そして今のように女性は多くなかつたようである。

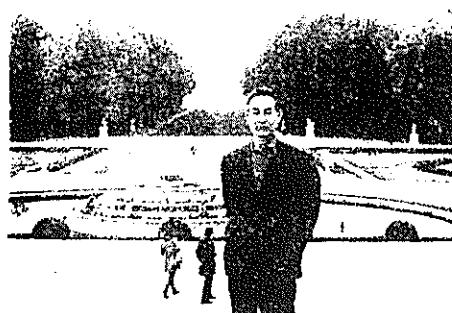
今日の世界と当時の世界で最も異なつてゐる国はドイツである。当時は西ドイツと東ドイツに分断されていて、西ドイツの首都は人口10万人のボンで、東ドイツの首都はベルリンであった。そのベルリンも東西に分断して東西ドイツが領有し、その境界線に東ドイツが壁を築いてベルリンの壁と呼び、越境すると銃殺であった。



ヨーロッパは多くの日本人が旅をしているから私の写真が映っているものを掲載する。
ロンドン・ティムズ河畔にて



パリ・ベルサイユ宮殿の庭園



ドイツ・ライン河遊覧船上にて



ジュネーブ湖(スイス)にて



パリー・ノートルダム寺院にて



オランダ・アムステルダム風車



オーストリア・インスブルック
凱旋門



イタリヤ・ポンペイ遺跡の挽き臼



マドリードの闘牛



三週間に亘り二十世紀までをリードしてきた欧州を見学してきた感想は、日本と違つて物質文明が発達していたことを改めて認識した。日本の場合は海を隔てた中国だけが刺激を与えてくれたが、欧州は陸続きで相互に刺激しあって精神・物質文明が発達してきた。

戦争は日本の場合は朝鮮半島との戦争はあったものの、欧州は欧州大陸を縦横断するばかりか中近東からロシアまで広範囲に戦争を展開した。形容は悪いかもしれないが、戦争ほど文明を発達させるものはない。その結果、欧州各国は世界中に植民地を求めて拡張してきたのである。そして世界の富を手に入れて発展してきたことを痛感した。

私の欧州に関する知識は旧制中学(現高校)で習った西洋史程度で、陸軍士官学校では全く教育されず、又、旅立つ前に知識を得るために何らの準備をしなかった。ぶつつけ本番の旅行では収穫は少なく、次回からの海外旅行では、旅先の国々の歴史をはじめとして準備の必要性を痛感した。之は将来のために良い経験となった。

●『旧ソビエト連邦・15日間の旅』 昭和50年(1975)7月10日~24日

このコースは新潟発~ハバロフスク~ノボリビスク(シベリア最大の都市)~タシケント(現ウズベック共和国)~トビリシ(現グルジヤ共和国)~ソチ(ソ連邦最大の保養地・18世紀までトルコ領)~キエフ(現ウクライナ共和国の首都)~リガ(リトアニア首都・ここからラトビヤ・エストニアのバルト三国観光)~レーニングランド(現サンクト・ペテルブルグ)~モスクワ~羽田

「ハバロフスク」この名称は東シベリヤに派遣された大隊長の名前である。この町に流れるアムール川は中国名では黒竜江で、文字通り黒い流れである。そして町も暗い感じで当時は東西冷戦状態で、空港には戦闘機が臨戦態勢で待機していた。(右はハバロフスク大隊長の像)

「タシケント」アフガニスタンの北隣のウズベック共和国の首都で人口は100万人で、イスラム教のためにモスクが多く、レーニン像が立つレーニン公園は広大で町には星のマークが多く、軍都らしい感じが漂っていた。

通訳は北朝鮮の女性で、北朝鮮はソ聯の隸下であった。



タシケントは第二次世界大戦では旧関東軍の日本軍将兵をシベリアに抑留した一地点で、共産主義を徹底的に教育し、その証拠に漢字で書いた看板が街角に残っていた。

(右の写真は共産党=無産党的看板)

「トビリシ」グルジア共和国の首都で、スターリンの生誕地でもあり人口は120万人。ホテルからの眺めは絶景で忘れられず、郊外には四世紀のナリカル城などの旧跡が多く存在している。旧名はチフリス。黒海とカスピ海に挟まれた地域で、現在紛争の地となっているチェチェン共和国も隣接し、トルコ・イラン系人が多いようだ。

「ソチ」黒海沿岸のソ連邦最大の保養地で温泉もあり、一年の内で220日も晴天が続くという四季温暖な土地柄である。18世紀まではトルコ領で、露土戦争によって1864年にロシア領となる。オペラ劇場もあり、幸運にもポルショイも観劇できた。

「キエフ」現在のウクライナ共和国の首都で、当時はソ連邦で第三位の大都会で人口は300万人。今まで世界を旅してきた中では最高に美しい街であった。日本の京都に似て寺院が多く、ドニエーフル河の水浴も楽しいようであった。

世界中を旅をして街の中に「道祖神」を見たのはこのキエフだけであった。

(右は公園右の中に立ち並ぶ道祖神)

「リガ」バルト三国の一つ。ラトビヤ共和国の首都で人口80万人。石畳と望楼の多い古都でコハクの世界的な名産地である。北側の国がエストニア共和国、南側がリスアニア共和国で、バルト三国と称された。現在はそれぞれ独立してEUに参加している。ここで妻子にコハクのお土産を購入した (右の写真はペテルブルグの夏の宮殿)

「レーニングラード」(現サンクト・ペテルブルク)

バルト海に臨んだ1712年から1918年までロシア帝国の首都で、18世紀の初めにピョートル一世によって建設されてペテルブルクと称し、1914年にペトログラードと改称。1917年2月、10月革命の発祥地で、当時は餓死市民は40万人と云われた。1924年にレーニンの名にちなんでレーニングラードと改称し、人口は420万人であった。冬の宮殿、夏の宮殿は有名で、地下鉄も乗り回しポルショイ劇場を観覧したのは印象に残る。

「モスクワ」ソビエト社会主义共和国連邦の首都で、ソ連邦が崩壊後はロシア共和国連邦の首都となる。クремリン宮殿と赤の広場を中心に放射線状に広がっている。当時は人口700万人で面積は東京都の1.5倍。1918年にレーニングラードからスターリンによって遷都した。(上はクремリン内にある釣鐘)



旧ソ連邦一周しての感想は、共産主義国であるという先入観も加わった性か、自由がないためか全般に暗いイメージをひしひしと感じた。又、全ての点について西方地域と東方地域の間に大きな格差を感じた。庶民生活は我が国と比較して非常に貧しく、マーケットの物資も欠乏していることを私の目で見てきた。

学問の点にも疑問を感じた。我々一行の通訳はウラジオストック大学日本語学科の女性教師であった。通訳にしては語学力が貧弱で我々の質問に答えられない。直ぐに辞書を取り出して頁をめくる状態であった。全ての経済力を軍事に注入しているのだろうと感じたのは、私一人ではなかったと思っている。冷戦の最中の時期であった。

●『カナダ・アメリカ・メキシコ・ハワイ 14日間』昭和51年(1976)5月5日~18日

私の海外旅行の計画では、元気のある間に遠い国を見聞し、年老いてから近隣諸国を回りたいとの方針であった。しかし今年はアメリカの建国200年記念のため特別にした。

バンクーバー～ナイagara～ニューヨーク～ワシントン～メキシコシティ～ロサンゼルス～ラスベガス～サンフランシスコ～ホノルル～羽田

「バンクーバー」北緯49度の位置だけに寒いが街は裕福そうである。日僑・華僑の店が多く、花の多い町で桜は満開であった。トーテンポールが多いのもこの町の特徴のようで、トーテム信仰の種族は自宅や部落の入り口にポールを立てていた。アラスカ・カナダ・北アメリカ原住民の間に多く見られた。1泊。

「ナイagara」写真で見るとおりの景観で迫力満点だ。河岸は凍り付いて寒く、滝の地下道の温室に入って暖をとる。ここでも各種の花の観賞は樂しみであった。1泊。

「ニューヨーク」早朝、地図を頼りに単独で中心街の五番街からロックフェラーセンターを散策した。リスが遊んでいるセントラルパークは何時までも印象に残る。一行の観光はエンパイア・ステートビル、国連ビル、貿易センタービル、自由の女神の見学の後、メトロポリタン、オペラハウスからチャイナ・タウンを廻り、その後、再び単独で街を散策してアメリカの雰囲気を味わった。夜はマンハッタン・ナイトツアーに参加した。2泊。

右は9・11事件で見られなくなった貿易センターとハドソン河一帯のニューヨークの景観



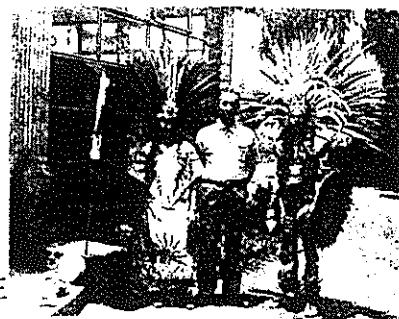
「ワシントン」観光コースは国會議事堂～ホワイトハウス～リンカーン記念堂～ワシントン記念碑(高さ165m)～ポートマック公園から橋を渡って～アーリントン墓地～ペンタゴンを眺めて～各国大使館街を見学。
1泊。(右はケネディも眠るアーリントン墓地)

我々は米国と闘って敗戦を喫した今、霸權の中心地を踏破した心中は複雑怪奇であった。



「メキシコシティ」 初日の観光は、アステカ王宮跡～オリンピック・スタジアム～コロンブス記念碑～ラテンアメリカ・タワー（世界最高）～アラメダ公園～共和国広場～革命記念館～チャペルテペック公園等の市街地の見学。2泊。

翌日は2000年以上も前のジョジワカン文明（2～7世紀には特に繁栄）の遺跡である「テオティワカン」の太陽のピラミッド（高さ65m）と月のピラミッド（高さ45m）を見学し、頂上まで登攀した。



この当時は自然のままの荒れ放題であったが、二回目の1991年に訪れた時は整備されて見違えるほど改装され、入口も違っていた。詳しい記事は1991年のところで記載する。（右の写真はレストラン前で正装の若いアメリカ・インディアンと記念撮影）

「ロサンゼルス」 人口280万人のロスの観光はメキシコ市場から、200店舗のあるファミリー・マーケットの見学となつたが、当時の日本では全く見られないものであった。車社会の米国は土地は広くて道路も何車線もあり、郊外に買出しに出ることに不自由を感じないからで、新聞を始めタバコなども自動販売機が普及していた。今日では日本も発達してマーケットが乱立しているが、アメリカに追随しているような感じがする。

翌日は本家本元のデズニーランドを訪れた。さすがにアメリカはスケールが大きいと圧倒されたが、今日では東京のデズニーランドも大脳わいである。1泊。

「ラスベガス」 空路でロスからラスベガスに飛んだ。夕食はショウを観賞しながら摂り、スターダスト・ホテルに宿泊した。そのショウはパリの凱旋門近くのリドーから出張して公演しているもので、本場で見たから非常に懐かしく感じた。

ラスベガスのカジノは各ホテルに設けられており、市中には専門のカジノ場もあり、不夜城のように夜も煌々として輝き誰しも驚きであった。前にマカオで経験したが桁違いの賭博場は驚愕するばかりであった。予め金額を決めて遊ぶのも楽しいものである。此處で初めて1ドル硬貨を使って遊んだ。1泊。 （上の写真は夜のラスベガスの不夜城の景観）



「サンフランシスコ」 観光は先ず金門湾に架かったゴールデン・ゲート・ブリッジ（2,65kmの吊橋で6車線）や日本庭園を見学し、昼食は海岸のレストランであった。そこで食べた蟹は忘れられない美味しさであり、再度食べに行きたいところである。

それから自由行動となつた私は単独で日本人町を訪れた。そこで知り合つた日本人は親切に案内してくれ感謝したい。それから近畿百貨店を覗き、シスコ名物のケーブルカーに乗車し、市の中心部を散策してみた。アメリカでも東西では雰囲気が全く違う感じがした。

翌日は「ヨセミテ国立公園」の観光となり、ロッキーの広大な奇岩怪石に圧倒されながら食べた七面鳥の味も格別であった。2泊。

「ホノルル」 サンフランシスコを午前の航空機で飛び立ち、午後ホノルルに到着し1泊。パンチボールの丘やイオラニ宮殿などを見学し、日本の五重塔や神社の景観を眺めて海岸のホテルに旅装を解いた。

夜はカラワラ通りのインターナショナル・マーケット・プレイスを訪れたが、大陸と違ってハワイらしさを味わつた。しかし宣伝するほどの観光地とは思わない。

●『南米一周の旅14日間』 昭和52年(1977)3月13日～27日

羽田～ロスザンゼルス～ポゴダ～ブエノスアイレス～イグアスの滝～パラグアイ～リオ・デ・ジャネロ～サンパウロ～マナウス～リマ～クスコ～ロス～羽田

3月13日羽田発18:15～ロス着翌日10:40。リットル東京～メキシコ市場～チャイナ劇場～マリオット・ホテルに1泊。当時は南米行きの直行便はなくロスに一泊。「ポゴダ」コロンビアの首都に立ち寄り休憩。カメオの廉価に驚き購入する。

「ブエノスアイレス」深夜到着。シェラトン・ホテルに3泊となる。

観光はホテル前のトラド公園～タンゴ発祥地の市街を見学～ナショル大寺院～国會議事堂～マージョ広場～南米最古のカトリック教会～レオレータ基地の見学など。

当時の南米諸国は殆んど軍人統領であったが、発展途上国では仕方がないのであった。広大な土地の至るところに公園があり、公園には必ず偉人の銅像が立っていた。流行病から馬が多いことは当然で、私は一頭の馬を選んで乗り回すと拍手喝采、軍人出身であることがバレてしまった。

(右は牧場の馬にまたがり得意になっている私の雄姿)

第3日目は自由行動の日であった。私は出発前にスペイン語の単語を400ほど暗記してきたから、一つ試してみたいとホテル前の地下鉄の駅で駅員に話しかけてみた。するとある程度は通用した。駅員も親切に教えてくれ、先ず五月通りから7月9日通り(革命通り)の由緒のある街並みを散策し、大統領政庁やオリエントの高い塔を眺めて国會議事堂の前に出た。市場に立ち寄って話を聞くとラプラタ川に遊覧船が運航していると聞き、案内されながら小さい遊覧船で市街を縦断した。この経験以来、旅行先の国の単語をある程度を暗記していく習慣が身に付いて来た。単独歩きも悪くない。

「イグアスの滝」ブエノスアイレスを午後の飛行機で出発し、イグアスのカタラタス・ホテルに1泊となる。イグアスの滝はアルゼンチン、ブラジル、パラグアイの国境をなすイグアス川の合流点のやや上流で、全長は約4kmで世界最長の滝で豪壮な景観であった。

夜はパラグアイの夜店を見学しよい記念となった。翌日はブラジル側に渡ってイグアスの滝を眺め、滝の危険な場所にまで近寄り、水しぶきを浴びながら観察した。

「リオ・デ・ジャネロ」シェラトン・ホテルに3泊。

リオはコロニア(植民地であった)ころの皇族の住居地で、町全体が巨大な公園のうになっている。特に湾が多く連なっている海岸が多く、植物園には7千種類以上の熱帯樹があり南米の楽園である。観光はレプロン海岸からヨットハーバー通り、第二次大戦の戦没者慰靈塔に参拝し、ガイドは自分の商売のように宝石店に案内した。ブラジルはダイヤ以外の宝石は全て産出するという。

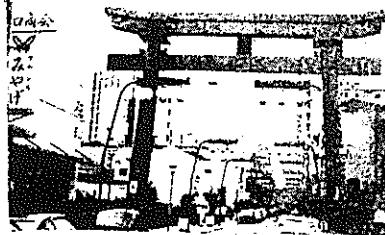
大西洋に突き出た岬の大岩山の岩山がアスカール山でロープウェイが通じている。キリスト像の立つ頂上からの見下ろすリオの眺望は地上の楽園であった。(上の写真はリオのアスカール山のキリスト像)



「サンパウロ」 私が陸軍士官学校で教育した第60期生の「田中 滋」君が、サンパウロ郊外で花園を経営していることが領事館を通じて判明した。一方、サンパウロ偕行社（陸士OB会）を通じても連絡しており、外国で教え子に再会できる楽しみを夢見て、予定になかったサンパウロ行きを提案し、全員の同意を得て実行されることになった。リオ観光は3日間の予定で、残る一日は自由行動であったから、是非ともサンパウロは見たいと全員が賛成したようである。

(下の写真はサンパウロ日本人町の鳥居)

サンパウロ空港に降り立ったが教え子の姿は見えない。電話連絡も出来なかつたから無理もないことだと諦めた。一行は案内されるままエブリカ（ヒッピー市場）や市内各地を観光して日本人街に向かつた。日本人街には朱塗りの鳥居があり日本語看板が並んでいた。よくサンパウロ偕行会が常に利用するというレストラン「日乃出」で昼食となつた。そこで後輩の偕行会長の「山田唯資・58期」君に電話したが、教え子の田中君から連絡がないとの返事で万事休す、永遠の別れとなつた。しかし帰国後に田中君から懐かしい手紙が届き満足。



数年後、鶴見の総持寺の副管長の職にあった教え子の「渡津弘道君」が、サンパウロ別院建立祝賀に当地に赴いた。その時、偕行会長に連絡を取るようにと渡津君に連絡しておいたから、彼等同期生は何十年ぶりに再会でき、私の努力も無駄ではなかつた。

「マナウス」 ブラジル北部、アマゾン川支流のネグロ川に臨んだ河港都市で外洋汽船の終航点。アマゾン河口から1,200km、1万トン級の船も航行可能でアマゾン探検の出発点である。人口50万の旧ポルトガルの植民地。魚の街だけに魚臭い街であった。2泊。夜はアマゾン川を舟に乗りワニ狩りに出た。それを料理して食べたが最高の味であった。

翌日は小舟に乗ってピラニア釣りで楽しみ、アマゾンのジャングルを2kmばかり探検し、インデオの小屋に立ち寄り生活状況を拝見するが、気の毒なほど貧しい暮らしであった。

「リマ」 ペルー共和国の首都で太平洋岸の都市である。1535年にスペイン人のピサロが建設した由緒ある建築物が残っていた。(フジモリ大統領が後日就任したが、このときには噂もなかつた)。リマ空港に降り立つたのは、周りは砂漠と禿山ばかりで人間の住む地かと疑つたほどである。空港から砂漠を4kmほど山手に走ると、そこに欧洲風の街が見え、出窓のある家屋はスペイン風であった。リマには行き帰りに各1泊。

観光は中央寺院の見学から始まつた。マヨ広場の宗教裁判所ではスペイン人の拷問状況を模型を使って展示されていた。欧米の植民地政策を如実に表現していた。夜はピエロ通りを散歩しているとペルの日本人が銀座街を案内してくれた。矢張り血は水より濃い。

「クスコ」 ペル南部のアンデス山脈の海拔3,500mの高原都市で、一行の大半は高山病で吐き気をもよおし、酸素吸入の厄介になつてゐた。私は平氣で肺活量は抜群だ。

1533年、ビサロに征服されるまで「インカ帝国」首都として繁栄した街である。1泊。

「マチュピチュ」とは「古い峰」の意味。日本の日立製作所

製の列車で片道4時間を使つて、世界各国からの観光客で超満員。

終点の駅から自動車で3,500mの遺跡に登攀した。

このような山頂で生活した生命力に驚愕の眼を向け、人間の叡智には際限がないと感心した。一夜にしてこの部落が全滅したのはコレラであろうか。

(右はマチュピチュ遺跡)



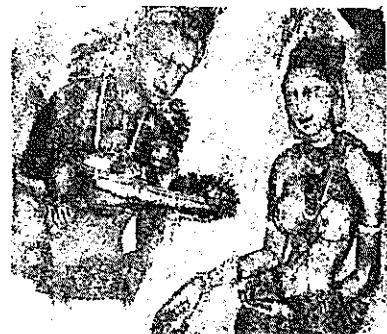
- 『スリランカ・インド・ネパール18日間』昭和53年(1978)2月4日～21日
羽田～コロンボ～シギリア～キャンディ(以上スリランカ)～ニューデリー～オールドデリージャイプール～アグラ～カジュラホ～ベナレス(以上インド)～カトマンズ(ネパール)～羽田

「スリランカ」インド半島の南の島で戦前は「セイロン」と称した。1948年にイギリスから独立。南方仏教(小乗仏教)の中心地。宝石・茶・ゴムの産地。(旧英植民地)住民は仏教徒のシンハラ人が四分の三を占め、他にヒンズ教徒のタミール人が島の北部に住み紛争が絶えない。当時のスリランカ(コロンボ)の人口は1,561万人。

「コロンボ」旧首都でセイロン島の南西部の港湾都市。港に砲台が見えたが対日戦争のためにあった。市街は英國風の中に仏像があり、ヒンズ教のセックス像が屋根の上に葺かれ、少ないがイスラムのモスクも見えていた。宝石を購入。1泊。

「シギリア」コロンボから内陸に165kmの地にある高さ183mの岩山で、山の断崖は垂直な絶壁である。その岸壁の上部にヒンズ教の壁画と仏像の壁画が描かれ、1,500年も風雨にさらされて大部分は消えている。しかし19体の像だけが昔の天女の艶麗な姿をとどめ、スリランカの古代美術の至宝と謂われている。

(右の写真はシギリアの美女の壁画)



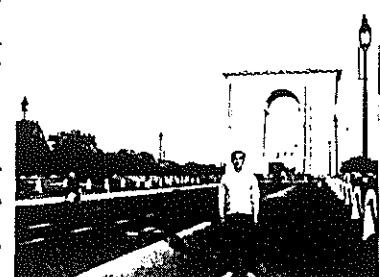
「キャンディ」コロンボ北東115km、標高600mにあるスリランカ第二の都市で、セイロン最後の王朝があった古都で、現在も王宮や寺院が保存されている。観光の目玉は仏歯寺である。昔インドの或る王女が髪の中に隠してきた駄迦の歯が祀られ、世界的に有名である。1泊。

「インド」住民の多くはヒンズ教でカースト制度が残存している。バラモン教、仏教、ヒンズ教の発祥地。インダス文明が栄えた後、アーリア人が侵入。紀元前4世紀のマウリヤ王朝による統一以来も、統一と分裂を繰り返し、イスラムも進入した。16世紀以来にイギリスが東インド会社を設立して植民地化を進め、1850年に直轄領とした。

我々が第二次大戦でビルマで戦った英印軍の中にパキスタンとバングラデシュも含まれ、パキスタンがインドから分裂して独立したのは1947年の戦後である。

「デリー」インド北部のガンジス川の支流・ジャムナ川の西岸に沿った大都市で、ムガル帝国、イギリス領インド時代の首都。1931年、南部に「ニュー・デリー」が建設されてから、北部を「オールド・デリー」と称した。3泊。

両地域とも長い歴史があるために廟が多く、インド門はニューデリーのマークで、ガンジー廟も偉大な彼を偲んで忘れられない。しかしカースト制度を廃止できなかつたことは、偉大に疑問符を付けなければならないと私は思っている。勿論ネールも同じであると言わねばならない。カースト制度はバラモン(僧侶)、クシャトリア(武士)、バイシャ(商人)、シュードラ(奴隸)の4階級で差別制度である。

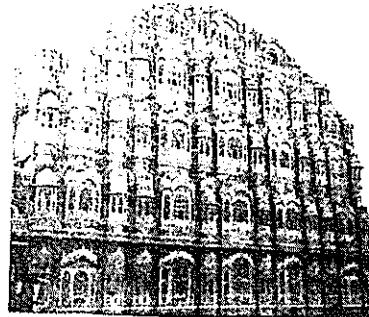


(上の写真はインド門の前に立つ私)

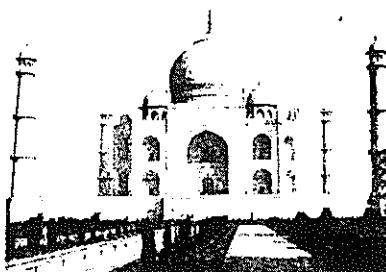
「ラールキラ」オールド・デリーの中央駅前にたつ城で別名をレッド・フォートと呼ぶ。文字通りの赤い砦で、デリーを訪れた人は必ず見学するだろう。第五代ムガール帝国皇帝シャー・ジャハーンが九年間を費やして造ったもので、雄大な砂岩の城砦は人々を圧倒する。内部の大大理石で造った全てのもの（宮殿・浴場など）は、素晴らしい感嘆の至りである。

「ジャイプール」この街の旧市街の建物は全てピンク色の石の建築で、ピンク・シティと呼ばれている。この街の北方11キロの小高い山の上に「カッチャワ王国」のアンバー城がある。この城の見学に象に乗ったが、これはビルマの戦闘以来のことであった。

この街の「風の宮殿」も忘れられない豪華な建造物である。いつでも、どこからの風でも、部屋に吹き込まれるように設計された宮殿であった。そして此の建物は王がハレムの美女達に町の祭りを見物させようとして造ったもので、細かい格子のために中の女達の顔は外から見えないという。（右の写真は風の宮殿の素晴らしい出窓）



「アグラ」世界的に有名な「タジ・マハール」のある町である。この建物は世界最大の大大理石の建物で、ムガール帝国のシャー・ジャハーン帝が、愛妃ムムタズ・マハールの死をいたんで建築したものである。完成までに22年の歳月をかけたという。ペルシャ風の浮彫の外壁と宝石をちりばめた内壁は、偉大な愛の物語にふさわしく優雅で豪華である。（右はタジ・マハール外観）



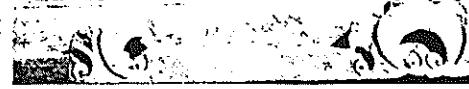
アグラ城も大きな城壁に囲まれた城塞で、城内のハレムには幾千人の女性が居たのであろうか。中国の皇帝に優るとも劣らないと思われる。1泊。

上記した「ムガール帝国」とは、インドのイスラム帝国（1525～1858）ことであり、「イギリス東インド会社」に滅ぼされた。

「カジュラホ」インド中部の都市でヒンズ教の石造寺院が多くあり、寺院の内外の壁面は神像や明るく官能的な男女融合の彫刻で埋められている。このようにセックス像を公開しているのは驚きである。（右はカジュラホ寺院の彫刻）



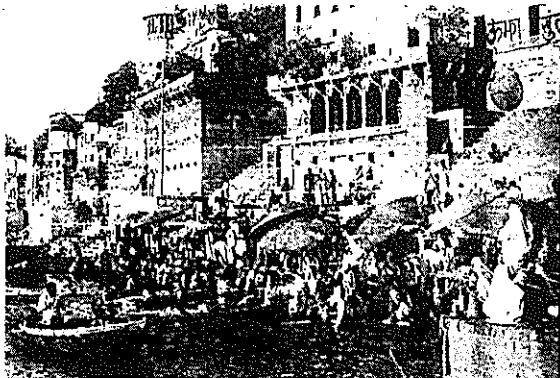
ヒンズー教とはインド土着の信仰・風俗とバラモン教とが融合した民族宗教である。現在のインド人の大部分はヒンズー教である。バラモンとはインドのカースト制度の最上級の身分で、その階級に発達した民族宗教がバラモン教（婆羅門教）である。



カジュラホのカンダーリヤ寺院の彫刻はポルノ顔負けということで、世界的に有名な彫刻が寺院の外壁を飾っている。10世紀から11世紀にかけて栄えた王朝の遺跡であり、全部で872体が彫刻されているという。南方民族は薄着のために年少の頃から性交が盛んで、子供が子供を生んでいるように見えた。

「ベナレス」 ガンジス川のほとりにあるインド最大のヒンズー教の聖地である。水辺に下りた石畳の場所には早朝から老若男女の区別もなく水浴しており、ガンジス川の河岸には70箇所の沐浴場があるという。我々は早朝から斎戒沐浴して敬虔な祈りを捧げる信者の光景を拝観するため、小舟に乗って川の流れの中から見学した。しかし写真撮影は厳禁であった。

(右は斎戒沐浴するヒンズー教徒)



ヒンズー教徒の生涯の願いはベナレスのガンジス川で沐浴し、そして自らの遺灰もガンジス川の流れに撒いてもらうことだと云う。川岸の丘の上には大小の寺院が1000もあり、その街中を歩くと更に彼等の心中が理解できるような感じを浴びた。

「鹿野苑」(ロクヤエン) ここはベナレス郊外のサルナートの地で、釈迦が悟りを開いて初めて説法した所である。鹿苑、鹿の苑(その)、鹿の園生(ソノウ)とも云う。

ブッタガヤで大いなる悟りを得た釈迦は、やがて立ち上がり、そこから250kmも離れた「ベナレス」へと向かった。その近郊10キロのサルナートの園(鹿野苑)のマンゴの大樹の陰で五人の弟子を得た。ここで釈尊の胸中の大きな悟りが初めて広く世に伝えられたのであった。初めて教えを説かれたので「初転法輪」と言う。

1泊。

「カトマンズ」(ネパール国)

ヒマラヤ山脈の南山麓のチベットとインドとの間に立憲君主国で、ヒンズー教を国教としているネパールの首都がカトマンズである。海拔1,280mの高原に位置するヒンズー教や仏教の古寺が多い町である。

市の中心に広場があり、その東側にカスタマンダブという木造三層の寺院がある。これは一本の樹でできた家という意味で、カトマンズの語源だと謂われている。続いて七層の石造の基壇の上に、木造三層の塔のようなシヴァ神殿(ヒンズー教の神の名)がある。ここにも又カジュラホと同じく神殿の柱に男女が交わる合歓の像が数多く彫刻されていた。

(右の写真は上記寺院の柱に彫刻された合歓の木像)

市の郊外に2000年の歴史がある仏教寺院のスワヤンブ・ナート寺があり、屋上の塔に人間の眼球が描かれているから「目玉寺」と呼んでいた。



「エベレスト」へ飛行

エベレスト山を飛行機で見学する希望者を募集していたから応募した。ヒマラヤの峰々の中でもエベレスト山は際立って高く聳えていた。しかし我々の搭乗機したプロペラ機は8,000mまでも上昇できず、下から見上げながら飛行して終わった。しかしエベレストに飛行して眺めたという証明書を受け取り、運が良かったといるべきであった。2泊。

帰路はバンコクに一泊し王宮などを見学して18日間の旅は終わりを告げた。

● 『パキスタン～エジプト～ギリシア 15日間』昭和54年（1979）2月4日～18日

カラチ（パキスタン）～カイロ～ルクソール～アスワン～アスワンハイダム
(以上エジプト)～アテネ（ギリシア）

『エジプト』アフリカ北東部とシナイ半島を占め、正式名はエジプト・アラブ共和国。
古代エジプト文明の発祥地で世界有数の観光地で人口は4566万人。
「エジプト文明」はナイル川流域に栄えた古代文明で、紀元前3000年頃に統一国家が成立し、以後、紀元前1世紀まで20の王朝が交替して栄えたが、第21王朝以降は衰退に向かった。巨大な国家権力のもとにピラミッドや各種の神殿が建設され、象形文字を使用し、測量術、天文暦法などの科学技術を発達させた。エジプト文字も古代エジプトで使用された文字で、最古のものは紀元前3000年頃の象形文字で聖刻文字と呼ばれる。

1517年からオスマントルコ帝国の支配を受けたが、1882年にイギリスの保護領となり、1922年に王国として独立。52年に自由将校団のクーデターにより王制を廃止し、翌年に共和制に移行した。

「カイロ」ナイル川下流の三角州の南端にある首都でアフリカ最大の都市である。

「カイロ宣言」1943年（昭和18）、ルーズベルト、チャーチル、蒋介石がカイロで会談して発表した宣言。日本が侵略によって得た領土の剥奪、返還、朝鮮の独立など降伏後の領土の処理案を示し、日本が無条件降伏まで戦う意思を表明したもの。

「カイロ観光」2月6日～9日まで滞在。市内観光はモスク巡りでミナレットに圧倒された。「エジプト博物館」の圧巻はツターカーメンの王棺と厨子で、人形棺は重量113,4kgの黄金造りで、その豪華さに感嘆す。彼のミイラはルクソールの王墓に安置され、その他ものは全てカイロ博物館に展示されていた。

初日は市郊外でピラミッドが良く見える「キザー」のホテルに宿泊した。（右はツターカーメンの黄金の王棺）



「ピラミッド、スフィンクスなどの観光」ピラミッドは大小合わせて80個もあると言われば、最初は偉大のフク王のピラミッドであった。高さ137m、底辺の長さ231m、積み上げた石の数は230万個で想像できない。「スフィンクス」はエジプト・アッシャリア地方などで神殿、王宮、墳墓などを守護する人頭獅子の巨大な石像である。ギリシア神話では女性化されて翼を持った姿に変化した。「パピルス博物館」パピルスはカミガヤツリという草の茎を裂いて縦横に重ねて作った一種の紙で、筆写材料としてエジプトや地中海沿岸を中心に、紀元前3100年頃から紀元後10世紀頃まで使われていた。紙を意味する英語のPaperはパピルスに由来している。記念にパピルス画一枚購入する。「コプト博物館」コプトとはエジプトのキリスト教徒のこと、エジプトがイスラム化される以前は大きな勢力をっていた。珍しくエジプトにはその博物館が残っていた。

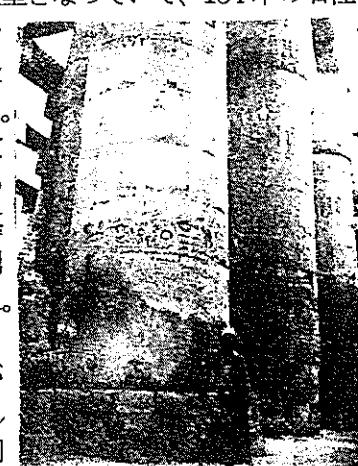
「モハメド・アリ・モスク」モハメド・アリという人は、オスマン・トルコ帝国がモロッコを除くアラブ一帯を支配していた頃、エジプトのパシャ（將軍）としてトルコから派遣された人物である。解放まではエジプトの王様として彼の後継者は君臨し、残酷なことも行ったところで、カイロ第一の有名な大モスクで印象は強烈である。

(右の写真はカイロのフク王のピラミッド前に立つ我等夫婦)

「ルクソール」ルクソール神殿へは馬車で揺られていくのが通例のようである。この神殿は紀元前1800年頃、第18代王朝のアメノフィス3世が、太陽神アモンと妻トム、息子のコンス(月の神)に捧げたもので、後にラムセス2世が拡張して現在では側面の長さが260mもある。実際にはラムセス2世は敗れて逃げ帰ったのだが、自己顯示欲が強く戦いに勝ったようにレリーフや文字を残している。



この神殿の北にある「カルナック神殿」はルクソールの主神殿で、第一塔門は高さ44m、幅131m、奥行き370mもあり、世界最大の神殿である。続く第2、第3の塔門の間は多柱室となっていて、134本の石柱が並んでいる。カルナック神殿は当初から巨大だったのでなく、テーベが中心になって新帝国が興るとともに、全エジプトの最高神とされ代々の王が増築したものである。



「王家の谷」ルクソールのナイル川の西にあるのが王家の谷である。古代王国期のピラミッドに対し、新王国期のファラオの墳墓は地下にもぐった。王家の谷の地下大墳墓群がその跡である。特に有名なツターカーメン王墓は盗掘からまぬがれ、内部は当時のままの状態で保存されていた。王家の谷で発見された王の墓は64を数え、残された壁の彩色レリーフから彼らの抱いていた死後の世界、宇宙観が解るようだ。これらの副葬品や壁画等から、彼らは生まれ落ちるなり早々に死後の世界を造り始め、死後も現世と同じ生活ができると信じていたのであった。

(上はカルナック神殿の柱の前に立って)

「デンデラ神殿」自由参加でルクソール北方65K、「クレオパトラ」の像があるデンデラ神殿を訪れた。クレオパトラ(前69~前30)は古代エジプトのプトレマイオス朝の女王(在位前51~前30)で、その才知と美貌でカエサル(古代ローマの将軍・政治家)の愛人になり、後、アントニウスと結婚して専制支配を図ったが、アクチウムの海戦で敗れ、毒蛇に身をかませて自殺した。



(右の写真の右側がクレオパトラ像)

「アスワン」カイロから960km上流にある町で、ナイル川を遡行してきた船は、ここから急流のために遡行できなくなる。古来から人も荷物も船から卸して陸路を急流の上まで登り、再び別の船便にて航行を続けた。

そこでアスワンは通商や軍事上の重要な関門になっていた。現在この急流の部分にアスワンドムを築いてナセル湖ができたのであった。

「アスワンハイダム」アスワンドムの南7.2kmの世界第一のダムで、長さ3.6km、高さ111m、頂上の厚さ40m、基部の厚さ1800mの巨大ダムで、1959年に完成した。このダムは洪水を防ぎ、水力発電により年間100億kwの電力を供給している。

「アブ・シンベル」ナイル川に面した岩山に掘り込まれた岩窟式の神殿である。第 19 王朝のセティ一世が先ず計画し、ラロセス二世の前 1230 年頃に完成した。約 90m の間隔を置いて左に大神殿、右に小神殿がある。暗黒の奥殿に並ぶ四体の神像には、年に二回だけ朝日が差し込むように設計されていることで名高い。

この大神殿はピラミッドと並んでエジプトの誇る重要な文化遺産で、世界的にも有名である。四つの巨像の高さは共に 20m ほどで、その額鬚（あごひげ）だけでも 3, 2 m もある。（右の写真は巨像の前に立つ）

かつてアスワンハイダム建設のため、世界的な遺産が水没の危機にさらされたが、エジプト政府、ユネスコをはじめ世界各国の協力により総工費 130 億円をかけ、岩山全体を 1041 個のブロックに切り刻んで、そのまま 60 m 引き上げることに成功した。こうして人類全体の尊い遺産が救われたのであった。

栄枯盛衰は世の習いで日本の歴史や、これから訪れるギリシアの歴史は古いといつても、エジプトと比較すれば問題にならない。各国の王制や天皇制が交替や廃止になったとしても、不思議ではないことは世界の歴史観である。これがエジプト旅行の感想である。

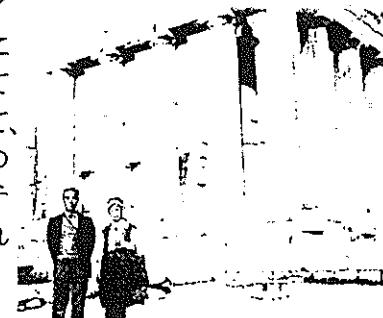
『ギリシア』西洋文明の源流をなす古代文明の発祥地。紀元前 8 世紀頃、アテネやスパルタなどの多くの都市国家が成立。紀元前 5 世紀にはペルシア戦争の危機を団結して乗り越え、アテネを中心に古典文化の最盛期を迎えた。しかしペロポソネス戦争を契機に衰退が始まり、紀元四世紀にマケドニア領となり、のちローマ領、東ローマ帝国領を経て、15 世紀以降はオスマントルコ帝国の支配下に入った。1821 ~ 29 年の独立戦争に勝利して王国として独立。1973 年に共和国となる。住民はギリシア正教を奉じる。

「アテネ」ギリシア共和国の首都。古代ギリシア文化の中心地で、アクロポリスのパルテノン・エレクティオンなどの遺跡がある観光都市。アテネはアテナとも呼び、ギリシア神話の女神で、オリンポス 12 神の一つ。知識・工芸・音楽・戦争の神でアテネの守護神。

「アクロポリスの丘」高い所の都市という意味である。高所に都市が生まれた理由は、敵を早く発見して防衛処置が立てられるからであった。アクロポリスは人間の歴史と共に城塞としての歴史を持っている。この丘に人が住み着いたのは約 5000 年前の新石器時代の頃で、およそ 1000 年余り経った 3 千数百年前に居住地の拡大とともに城塞が築かれ、強化されていったことが発掘によって確認されている。

「パルテノン神殿」この神殿が城塞都市に初めて造られたのは紀元前 6 世紀だが、紀元前 5 世紀の初めにペルシア軍によって破壊された。それから約 40 年後の紀元前 438 年にアテネの大政治家・ペリクレスの時代に再建された。その後、幾度かの戦火によって破壊されたが、ギリシアが独立した 1829 年以後にドイツ人建築家のクレンツェとロスの手によって現在の姿に復元された。その後、紀元前 146 年、ローマによって征服され、キリスト教が伝来するとアテナ信仰は衰えて、一時期キリスト教会に改修された。1455 年にトルコの支配下になって回教寺院にされ、1687 年、ヴェネチア軍が攻めてきてトルコ軍と戦火を交え、火薬庫にされていたパルテノンはヴェネチア軍の砲弾で破壊された。

（右はパルテノン神殿の前に立つ夫婦）



パルテノン神殿はアクロポリスの丘の最も高い所に建ち、その間の空間には大小の石ころや石柱の残骸がころがっていて、まさに廃墟であった。パルテノンとは「処女」の意味であり、処女神「アテナ」に捧げる神殿の意味である。そしてこれは世界三大名建築の一つで、彫刻はイギリスが運んで大英博物館の宝物となっている。大盗賊の植民地主義国家である。

「スニオン岬とポセイドン神殿」初めて眺めるエーゲ海は日没に向かって真っ赤に燃えていた。アテネから70kmの岬の断崖の上に建つポセイドン神殿は、エーゲ海から黒海やイオニア海へ船出した古代ギリシア人が航海の安全を祈願した所であった。この日の出と日没は有名で、今回のスニオン岬の訪問もそのためであった。

(上の写真はスニオン岬のポセイドン神殿を背景にした我等夫婦)



●『台湾一周5日間』昭和54年(1979)6月11日～15日

成田～台北～台中～日月潭～台南～高雄～花蓮～台北～成田（今回から成田が開港）

戦中の昭和19年の暮れビルマに赴任する途中に台北で一日滞在し、自動車で廻った経験があった。今回は台北は最後にしてバスは台中に向かって快走した。台中宿泊。

「台中」先ず日本人遺骨安置所に参拝のため宝覚禪寺を訪れる。この寺院の特徴である皆大歎喜という大仏は日本で言う弥勒菩薩のことであった。孔子廟に参拝し日月潭へ。

「日月潭」太陽と月の形をした湖があることに由来して名付けた観光地で、潭は水の深いことを意味している。湖畔に玄奘寺が高く聳えており景観は良好。

「台南～高雄」台中から特急列車で台南へ行き、高雄の観光となる。翌日の午前中は先ず明（ミン）の志士である「鄭成功」の祠に参拝し、澄清湖に聳える「春秋御閣」を見学して湖を廻り、高台にある高雄神社に詣でて夜は高雄の夜店の見物となった。高雄宿泊。

「花蓮」高雄から空路花蓮に飛び、先ず太魯閣峡谷の観光後にホテルに着き、夜はアミ文化村の唄と踊りを観賞する。翌日は大理石工場を見学し空路、台北へ飛ぶ。

「台北」龍山寺の参拝後は自由行動でタクシーを飛ばして孔子廟を訪れ、百貨店を一巡して歓迎晚餐会に参加する。翌日は、黒こげになっていた台湾神社を思い浮かべながら、その跡に建った国立故宮博物館を観光し、我が国の靖国神社にあたる忠烈祠に参拝して空港に向かう。

「太魯閣峡谷」は延長40kmに及ぶ断崖絶壁がすべて黒大理石の峡谷で、原住民のアミ族の勇敢な頭目「タロコ」から名称が取られたという。この峡谷の街道を通りぬけると台中の町に通じております、台湾の横断道路である。

私がビルマ戦線の大隊長として奮戦している時の通訳は、台湾出身の高砂族であった。シャン高原で英印軍と戦火を交えていた終戦の寸前に行方不明となり、今でも胸が詰まるような想いで、峡谷を眺めていた。(右は大理石の太魯閣峡谷)



● 『ビルマ慰靈巡礼の旅』昭和54年（1979）11月17日～22日

大阪～ラングーン～イホ～タウンギー～マンダレー～サガイン～パガン～ペグー～ラングーン～大阪

第二次世界大戦に於いて日本陸軍の三大激戦地と称されたビルマの修羅戦場に、戦争末期になって決戦出陣と称して、私は歩兵第146聯隊第二大隊長に任命され、幸か不幸か胸程万里の南の彼方・ビルマの僻地に赴任した。

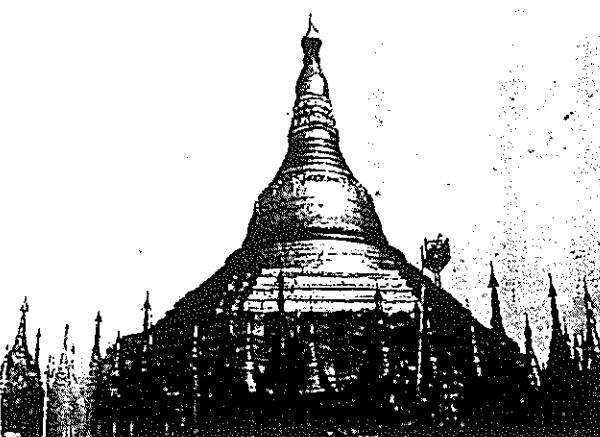
盛者必滅、会者定離（ショウジャヒツメツ、エジャジョウリ・史記）と覚悟し、中国雲南省とビルマの国境線から任務を引き継ぎ、「この世は地獄なり」と言わんばかりの激戦を敢闘して終戦を迎えた。「命は天に在り」とは言え多くの部下を犠牲にした責任は泰山より重く、自らも重傷を負いながらも九死に一生を得たが、「生を偷（ヌス）む」（死すべき命を永らえて生きること）指揮官として、吾が生涯を慰靈に捧げて英靈に報いたいと決意したのであった。

「生を視ること死の如く」（生死を超越して命に従う）異国の地に眠る戦友の靈を弔う日を待ち焦がれていたところ、戦後34年間も過ぎた昭和54年の末、ビルマ慰靈巡礼を企画した募集を知り、遺者（生き残っている老人）の責任であり任務だと直ちに応募した。

年月の経過は光陰矢の如しだが、再び足跡したビルマの地は戦争当時と変わらず復興の兆しさえ見えない。

血を流した戦跡には未だに戦友の屍さえも拾うことが叶わず、置き去りにしてきたことを想起すると断腸の思いであった。

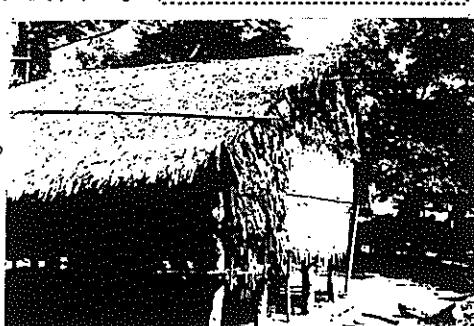
ビルマの政情は悪く古戦場に直接脚を運んで慰靈することは許さず、首都ラングーンの日本軍戦没者慰靈碑に額ついで慰靈を申し上げ、ビルマ最大のパゴダである「シュエタゴン・パゴダ」に真心を込め、襟を正し敬虔な祈りを捧げた。（上はシュエタゴン・パゴダ）



上記した各古戦場を訪れ、歎々とした鬼哭を聞こうと耳を傾けたが応答はない。唯一つサガイン・ヒルに弓兵団（第33師団）が建立したパゴダだけが、亡き英靈を供養する塔であった。

それ以来、私は我が聯隊の慰靈碑の建立に微力を尽くし、昭和59年暮れに戦友の念願が実って忠魂碑が大村の地に聳えたのであった。

（右は戦友たちが眠るビルマの貧農村の住宅）



歩113聯隊出身の松田光男氏とは骨肉の関係となつたが、悲哉、平成15年に他界してしまった。彼ほど戦没者慰靈に尽力した人物は少なく御冥福を祈ります。

以上の拙文で以って慰靈巡礼の旅に変えたいと思います。細部は「両忘」を読まれたし。

● 『昆明（雲南省）～南寧～桂林～広州の旅14日間』 紀行文は『煙波世界巡礼記』
昭和55年（1980）11月9日～22日

大阪空港～広州～香港～昆明～南寧～柳州～桂林～広州～香港～大阪空港

昭和53年に日中平和条約が締結されて本年から審査によって一般人の中国への入国が許可された。昨年はビルマ慰靈巡礼の旅に参加して亡き英靈を慰靈したが、未開の国のビルマと中国との国境は訪れるることは到底できなかった。しかし私が指揮したビルマ派遣部隊の激戦地は中国の雲南省と、それに接したビルマ領を中心とした地域であった。その古戦場には現在でも容易に訪れるることは困難で、当時としては夢のまた夢に過ぎなかった。

そこで我等の戦友の眠る靈場に最も近い雲南省・省都の昆明を訪問し、取敢えず慰靈をしたいと思い、この機会を逃さずと、大阪発の当旅行に参加したのであった。

この旅行の紀行文の題名は『煙波世界巡礼記』である。「煙波世界」とは雲の波の世界のこと、ヒマラヤ山脈の麓に位置する雲南省の別名であり、詳細は其の紀行文に譲りたい。

第二次大戦以前から米英は国民党・蒋介石軍を支援して日本と戦争させ、我が国の戦力の消耗を計画し支援していた。その援蒋ルートは仏印（現ベトナム等）ルートとビルマ・ルートであった。我が国が米英と開戦してから、この両ルートを遮断する目的で北仏印に進出し、ビルマ作戦を断行して援蒋ルートを遮断したのである。ビルマ・ルートは二千m級の山岳地帯にまで舗装した道路を貫通させ、軍需物資をトラックで輸送していた。

ビルマ・ルートの終点は雲南省・省都の昆明で、そこから鉄道輸送で当時の首都・重慶に運んでいた。砲弾用の鉛を積んだ長蛇の列の軍用トラックが日本軍の爆撃で、その残骸を街道上に残していた光景を私は見た。それほど彼我両軍では重要な補給路であった。

「昆明」は日本の京都に似た寺院の多い町で慰靈のためには絶好の地であった。少数民族が多く親日的で、日本語の学習も熱心であり、慰靈の目的は当時としては十分達成できた。昆明の郊外の石林では深夜に起床して石の林の静かな中から合掌して慰靈した。（右は石林で慰靈の我が姿）

「南寧」は当時の中国共産党が宣伝していた人民公社の最盛期であった。これは働く者が損をし、働く者が得をする制度で、廃止になったのは当然である。上の者が言う通り、全国民が馬鹿の一つ覚えのように、一に農業、二に工業、三に国防、四に科学技術と叫んだ時代であった。

「桂林」では市中に聳える愛綠山や象の鼻に似た象鼻岩が印象に残り、漓江下りで見る景色は絵を眺めているような大陸的景観で、日本では考えられない美しい眺望であった。しかし当時の中国では失業者は二千四百万人もあり、共産党の前途には不安が山積していた。

（右は桂林の漓江下りの景観）



●『河南紀行8日間』昭和56年（1981）4月6日～13日

(北支那派遣歩兵第219聯隊で戦没者慰靈団を編成して訪中)

紀行文の題名は「河南紀行」

成田～北京～鄭州～開封～中牟～鄭州～洛陽～北京～成田

在京の歩219聯隊戦友会の訪中慰靈団結成を、雲南省の煙波世界巡礼から帰国後に知り、幹事の亀井一夫君（第4中隊出身）に連絡して参加することが出来たのである。

細部は紀行文に譲ることにし、尚且つ開封は私の駐屯地でもあり、戦記・紀行文に譲る。

「開封」は戦国時代の魏の都の「大梁」で、北周の「汴州」、五代の「東京」、前宋の都の時代は世界一の「汴京」として栄え、金の都などの六代の都であった。私たちにとっては青春を謳歌した町で河南省都であった。

戦争当時の開封と比較すると今回の訪問時の開封は省都が鄭州に移転したために衰微していた。街の中心地の望楼の時計台は交通に邪魔だと取り壊され、国宝の相国寺（現名は建国寺）は文化大革命で破壊され、現状維持をしていたのは鉄塔と私たちの宿舎だった河南大学だけであつた。

(右は今次旅行の地図)



開封の相国寺で聯隊合同慰靈祭を行う予定であったが、中国側の許可が得られず、已む無く中止となった。しかし相国寺の国宝である千手観音像は戦時中の軍の力でも拝観は出来なかつたが、今回は幸いに其の写真を入手できたので掲載する。

(右の写真は相国寺国宝の見事な千手観音菩薩像)



「中牟」は開封と鄭州の中間にある県庁所在地で古い歴史を有し、1, 2, 7～10ページに記述した通りの私が中隊長として力戦敢闘した古戦場で、侍従武官まで派遣して昭和天皇陛下から御嘉賞の御言葉を賜つた橋頭堡陣地である。この中牟で慰靈祭を実施することが私の最大の目的であったが、この地は未解放地という理由でバスの停車も許可されず、懇願してトイレ休憩という理由で若干の停車を強行してもらった。その少々の時間を利用して石の上にお供え物を並べ私は数珠を手にして四方に向かって拝礼し、私なりに慰靈の誠を捧げたのであった。中牟城は城壁も消えて昔の面影を遺す物は一物もなく、寂しい思い出の再会であった。残念。

「鄭州」は当時は敵軍の司令部があった根拠地であった。

「洛陽」は周の洛邑で成王がこれを東周として以来、平王が東遷してこれを東周と改め、漢代に河南郡といい、のち東漢、晋、北魏、隋等が都した洛陽、北周、唐の東都、宋の西京であったところである。ここで有名な竜門石窟は観光客で賑わっていた。この千仏崖は魏の末期から唐初期にかけての石像である。洛陽でもう一つ有名なのは東にある白馬寺である。この寺は東漢の明帝が月氏（ゲッジ）國より仏教を伝えられて建立した古刹で、國中佛教寺院の嚆矢として著名である。



(右は白馬寺の石馬に跨る私)

●『ブルガリア～イスタンブル～カラチ12日間』昭和57年(1982)10月5日
～16日 紀行文は無し

「ブルガリア」この国の歴史は古く、紀元前5世紀にはトラキア人が定住し、現在首都である「ソフィア」は繁栄した。トラキア人は優秀な農耕民族で牧畜・狩猟にも秀でて独創的な文化を打ち立てた。その後、マケドニア、ケルト、ローマの勢力が及んで5世紀末にはスラブ人が南下し、7世紀にはアジア系の遊牧民族「ブルガリア人」が侵入してきてスラブ人と混血合体し、681年には「第一次ブルガリア王国」が誕生した。

11世紀には東ローマ帝国の支配下に入るが、1187年、タルノボの貴族が蜂起して「第二次ブルガリア王国」を設立。13世紀にはその最盛期を迎えたが、14世紀末にはオスマン・トルコに征服され、約500年間に亘ってトルコの支配下に置かれた。

1877～78年のロシア・トルコ戦争によって、漸くトルコから解放され、「第三次ブルガリア王国」が生まれた。第一次世界大戦にはドイツ側に立って戦い敗戦。第二次世界大戦にもファシスト枢軸側に加わって参戦した。一方、国内では左翼勢力が台頭し、ソ連のブルガリア解放軍と呼応して人民戦線が蜂起し、1946年9月9日、王制を廃止して「ブルガリア人民共和国」を樹立した。

「ソフィア(首都)」この都市の歴史は古く、ヨーロッパでも最古の都市の一つに数えられている。交通の要衝であったためスラブ、ゴート、マジャール、オスマン・トルコなど様々な民族が興亡を繰り返した。ここが首都になったのは1878年のことであった。

「セルディカの遺跡」

(右の写真は首都ソフィア中心部の地下道中にある遺跡の模様)

地下道建設工事の際に発見されたもので、地下道は博物館のようであった。ここがセルディカの東門に当たり、ローマ帝国コンスタンチヌスをして「セルディカ」は私のローマだと言わしめた面影が偲ばれた。

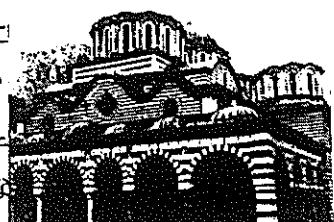
(右の写真は聖ジョージ教会)



「聖ジョージ教会」3～4世紀に建てられた円筒形の建物で、バルカンホテルの中庭に建っている。古びた焼レンガを積み上げた建物は当初は聖人たちのための場所で、後に教会として使用され、トルコの支配下では回教寺院として「バラの教会」と呼ばれた。ローマ時代の石畳と遺跡が残っている。

(右下はリラの僧院)

「リラ僧院」ソフィア南方約120kmのリラ山地の谷間に建っているブルガリア最古の修道院である。起源は10世紀中頃、聖人イワン・リルスキーがここに隠遁したことに始まる。500年にもわたるトルコの支配下にあってもビザンチン古来の僧院制度が厳守され、ブルガリア文化を守る砦となった。ブルガリア民族精神を今に伝える重要な存在である。

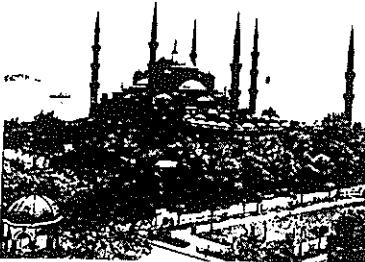


修道院はアーチと白い柱列の3～4階建の回廊に囲まれ、中央に教会と塔が建っている。教会はビザンチン風の円屋根を頂き、白と黒に塗り分けられたアーチに囲まれている。内部は見事な彫刻と壁画が飾られ、院内博物館には羊皮紙に書かれた古い写本、聖画、玉座その他の彫刻が施された十字架など、歴史的な遺品が集められていた。その他、昔の厨房や300人の僧侶の宿房、壁画で飾られた客室、2万冊以上の蔵書のある図書館等があった。

「イスタンブル」(トルコ) イスタンブルは東西の接点で、いつも旅人の心を引き付けている。イスタンブルをアジアとヨーロッパに分けるボスポラス海峡、金角湾にかかるガラタ橋と飛び回るカモメ、街中に聳えたつミナレット、そして宝石、毛皮、じゅうたん等を売る店が続く大バザールなど、その魅力は限りはない。絶えず東西の接点、架け橋としての地理的条件にも恵まれ、栄華を極めてきたこの街は、そのような背景から東洋の人には西洋的な都会に、西洋の人には東洋的な都会という印象を与えていた。

東ローマ帝国の都として長い歴史を持ち、東洋と西洋の接点としてシルクロードの重要な基地でもあり、キリスト教とイスラム教との融合の妙がバザールの雰囲気となって、一種独特的の雰囲気をかもし出していた。

トルコ最大の都会イスタンブルは西の終点と言われている通り、かつての交流の足跡を至るところに残している。トプカピ宮殿には、かつてのスルタン(王朝)の権力を示す宝物の数々が展示され、日本や中国の陶磁器だけでも見る価値が十分ある。「トプカピ」宮殿は400年にわたるオスマン・トルコのスルタン(王)の牙城で、現在は博物館となっている。スルタンが権力にまかせて集めた宝物は世界中の注目を集めている。又、宮殿の一部にあるハaremも当時のスルタンの生活を垣間見るには最適である。(右上の写真は1809~1816年間にスルタン・アフメットが建立したブルーモスクの全景)



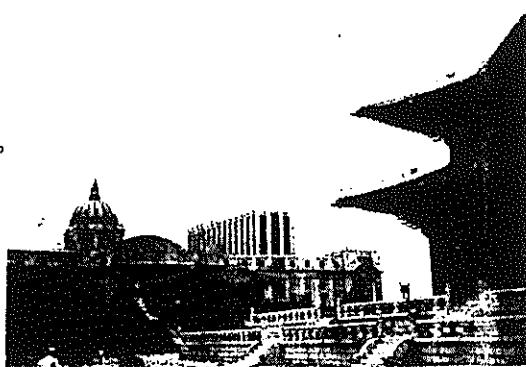
「カラチ」(パキスタン) パキスタンは中世以来、イスラム教が根付いていた。我々が闘った第二次世界大戦時にはパキスタンはインドに含まれ、戦後、パキスタンとバングラデシュはイスラム教であり、インドはヒンズ教のために分離独立した。

パキスタンは東西文明の交流の数々の遺跡が残っている。約5000年前、インダス川を中心に栄えた高度な文明のインダス文明や、かつてギリシア人に支配され、ギリシア・ローマ文化と仏教美術が結びついて、高度な神像彫刻技術を生んだガンダーラ芸術など、考古学や芸術の宝庫である。私等夫婦は魅力に曳かれて1990年にガンダーラ遺跡を訪ねた。

カラチはパキスタン最大の都会で私は都合6回も訪れている。旅行の中継地のためである。1947年に独立した後、急速に発展しただけに観光的には見るべきものはない。ただパキスタンの建国の父と尊敬されるムhammad・アリー・ジンナー廟や、パキスタン地方の民族衣装や出土品を展示した国立博物館は一見に値する。

● 『韓国一周5日間』昭和58年(1983)

日本人として生活した経験のある彼ら韓国人は日本語を懐かしく喋り、外国に行つたという気分にならず、記事は省略したい。私自身は戦中に朝鮮半島を三回も往復して概要は知り尽くしているが、彼らが漢字文化を捨てたことは残念である。今は取り除いて視ることは出来ないが、旧王宮と南大门の間に鉄筋コンクリートの朝鮮総督府が建っていた。(右の写真の建物)



● 『ニュージーランドとシドニー(オーストラリア)8日間』昭和58年(1983)3月11日~18日

成田~オークランド~ロトアル~ウェリントン~クリストチャーチ~シドニー~成田

ニュージーランドは赤道と南極の中間ぐらいの南太平洋に位置し、主な島は北島と南島で、面積は北海道を除く日本と同じくらいである。気候は温暖で雨量も適当で、北島は肥沃な牧草地と広大な森林、地熱地帯、それに雪に覆われた活火山、死火山がある。南島は南アルプスが素晴らしい景観でスポーツに絶好の地で、ノルウェーに劣らぬフィヨルドがある。

ニュージーランドは人口は約300万人で、原住民のマリオ人は約28万人、マリオの血が混じった混血は8万人で、異人種間の結婚の比率が高く、欧州とマリオの両方を先祖に持つ者は少なくない。成田から途中斐ジのナンディ空港に立ち寄りオークランドに着く。

「オークランド」開拓当時の建物があちこちに残り、大都市と共有している点は魅力的である。先ずマウント・イーデンに登り100万都市を眼下に見下ろし、ワン・ツリー・ビルに建つオペリスクを眺めてイーデン山頂にいたり、ハーバー・ブリッジを眺望してバスは一路、ロトルアに向かって疾走した。

「ロトアル」ニュージーランドでマリオ文化が最も濃厚に残っている所である。間欠泉と温泉などの観光資源が豊富でロトアル湖を中心とした観光都市となっている。トラベル・ロッジに宿泊した夜はマリオ族の大歓迎会となり、男女の代わる代わるの唄と踊りで時間の経過も忘れ、特に顔に模様を描いて舌をペロリと出すしぐさは印象的であった。

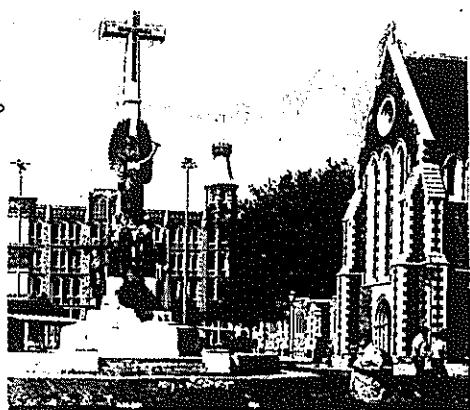
翌日はガバメント・ガーデンの見学となる。ここはロトアル湖岸の広大な庭園で、世界一を誇る間欠泉は1日に3~5回ばかり、噴湯の高さは20mほどで壮観な景観であった。マリオ博物館やギャラリー、レストランで休憩しながら熱泥池やマリオの墓地、牧場などを見学した。私が注目したのは初めて見る地熱発電所であった。

「ウェリントン」ロトアルからバスで到着した首都・ウェリントンは北島の最南端の町で、市街は美しく海岸も風光明媚である。この都市の名称はイギリスのウェリントン公の名にちなんで付けられた。オーストラリアもニュージーランドも英国の犯罪人の島流しの地であり、それらの罪人によって開拓した国であった。ウェリントン(1769~1852)はイギリスの軍人・政治家で、対ナポレオン戦争を指揮して1814年にパリに入場し、翌年ワーテルローの戦いで勝利し、28年にトリ党内閣の首相となった。市内のニュージーランド産の大理石で造った国会議事堂の前を通り、バスで標高200mのビクトリア山に登り、展望台から絶景を眺めた後、南島に渡る連絡船に乗船して

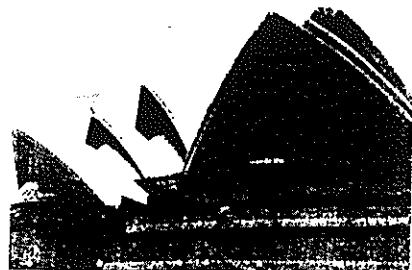
ビクトリア港に上陸し、そこから貧弱な軽便鉄道に揺られながらクリストチャーチに到着し一泊。

「クリストチャーチ」南島の最大の都市で人口は35万人。市の中心に高さ65mの尖塔があるビクトリア風の大聖堂が建っている。ここを中心に市街は広がり、ここに上陸したキヤツブテン・クックの像がたっていた。ここからマウンテン・クックの観光をした人たちは悪天候のために引き返してきた。

(右の写真はクリストチャーチの大聖堂)



「シドニー」早朝の飛行機でクリストチャーチを飛び発ち、世界三大美港の一つといわれるシドニー湾を眺め、先ず眼を引き付けたのはオペラハウスであった。(右の写真はオペラハウスの正面玄関の階段)



キャップテン・クックが1770年に上陸したが、彼にとっては生涯の大事業であったと思う。市内見学はオペラハウスからハーバブリッジを渡り、当時流行のコワラパークに向かった。世界中がコワラブームでコワラパークは超満員の盛況を呈していた。その後、オークスベリー川とシドニー湾の遊覧で時間をすごし、最後は市の中心部に聳えるシドニー・タワーに登って四隅の景観を眺望したが、今回のシドニーの旅行は小学生の遠足の延長線のような観光の感じであった。

次の1993(平成5年)に再び訪れ、日本の特殊潜航艇がシドニー湾に侵入した地点までも詳しく見学し、十分と価値の多い旅だったから今回の旅の印象はかすれてしまっている。

● 『北欧四ヶ国の旅10日間』昭和59年(1984)7月12日~19日

デンマーク～ノルエー～スエーデン～フィンランド

参加者36名中で私一人だけがコペンハーゲンの直行便に乗れず、単独でロンドンで乗り換えてコペンハーゲンに行くことになった。初めての経験だが、旅慣れている私をえらんでだのかも知れない。誰一人顔見知りのいない旅だったが何の不安も感じなかった。

「コペンハーゲン」デンマークの首都コペンハーゲンではチボリ公園前のパレスホテルに宿泊し、翌早朝からイスラエル広場のノミノ市に単独で車を飛ばし(土曜日開催)、珍しい柄の外国製の陶器を購入した。これは貴重なもので現在でも珍客に使用している。

「おとぎの国」だからとホテルまえのチボリ公園にも入り、一時、童心に還って楽しんだ。この国の感じでは美しい活気の溢れる国柄で生活水準も高いようである。この国の住民はゲルマン系で一時はスエーデン・ノルエーも支配したこともあり、現在グリーンランドはデンマークの領土であることを忘れてはならない。

「人魚の像」は想像していたほどではなく、小さな像でがっかりだった。そして帰国すると右腕が切断されてしまったという報道が眼にとまり、世界中に悪戯は絶えない様だ。

「ヴィキング」8世紀から11世紀にかけて、スカンジナビアやデンマークから、海路ヨーロッパ各地に進出したノルマン人の別名。略奪行為・征服だけでなく、殖民・交易・建国など活動は多方面に及んだ。(上の写真はコペンハーゲンの人魚の像)

「ノルマン人」デンマーク・スカンジナビアに現住する北ゲルマン人のことである。8世紀頃からヴィキングとしてヨーロッパ各地に渡来・定住し、ノルマンディ公国・両シリニア王国・ノブゴロド公国などを建国している。

コペンハーゲンから北に突出した半島をバスで見学すると多くの城塞があり、バルチック海に臨んだ海峡には砲列が並んでいた。海の通行料金を徴収していたのだろうか。



「ノルウェー」スカンビナヴィア半島の西半分を占めているが山岳地帯が多く、しかも国土の三分の一が北極圏に属して不毛の地が多い。しかし大西洋岸はフィヨルド（陸地深く入り込んだ狭い湾）で漁業国である。

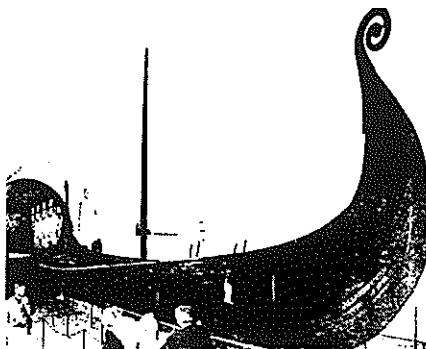
「ベルゲン」ハンザ同盟の町である。「ハンザ同盟」は13世紀以降、リューベック・ハンブルク・ブレーメンなどの北ドイツ商業都市が貿易の独占と保護を目的として結んだ都市連合体である。北海、バルト海沿岸に商業圏を広げ、14世紀後半に最盛期を迎える、17世紀後半に消滅した。

この街の丘の上までケーブルカーで登り、港や市街地を見下ろす風景は絶景で強く印象に残っている。グドバシゲン港から乗船してフィヨルドを航行し、ラルグール港に着いてホテルに一泊。高木氏からの差し入れのカレーライスの味も格別。

翌日は陸路をオスロに向かい、途中に建っていた木造の古いスチーブ教会を見学した。

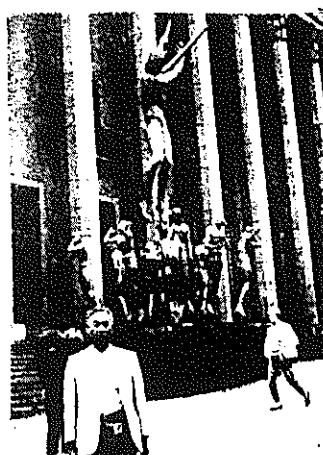
オスロではヴァイキング船を見学し、そこで購入した写真は今でも我が家に飾ってある。オスロはヴァイキングのハーラル一世によって創設された街で、早速ノーベル平和賞の授与式が行われる此の王宮の見学に単独で訪れた。オスロの日本料理も忘れられない。

「ヴァイキング料理」多種類の料理を食卓に並べ、客が自分で好みのものを皿に取り分けて好きなだけ食べる形式の料理。スエーデンのパーティー料理の形式を取り入れ、日本で命名したるものである。（右上の写真はヴァイキング船ゴクスタド号・9世紀のもの）



「ストックホルム」（スウェーデン）

ノーベル賞授与式後のレセプションが行われる市庁舎の見学が先ず第一であった。庁舎はメーラレン湖に美しい其の影を映し、近代建築の代表作だと賞賛されている。市庁舎の内部も各王朝が顔負けするほど豪華で、続いて見学したスウェーデン王宮は見劣りした。



スウェーデンは1523年にデンマークから独立し、1814年にノルウェーを併合したが、1905年に再び分離独立す。（右はノーベル賞授与式挙行の庁舎前に立つ私）

「ノーベル」はスウェーデンの化学技術者で事業家でもある。ニトログリセリンと珪藻土を混ぜたダイナマイトを発明し、また無煙火薬の発明製造などを行い、莫大な財を成した。そして遺言によってノーベル賞が創設された。

その基金168万ポンドの利息をもって毎年、物理学・化学・医学・生理学・文学・経済学・世界平和に優れた実績をあげた人に賞金とメダルが贈られる。

「ヘルシンキ」（フィンランド）

バルト海に面した共和国で、東はロシアと国境を接し、国土の大半が森林である。スウェーデン領、ロシア領を経て1917年に独立した。住人はフィン人で北部にラップ人が住んでいる。宗教はプロテスタントが多く、首都はヘルシンキである。

ヘルシンキは数回にわたる大火災で木造の古いヘルシンキの町を灰燼にした。1550年に河口に造った現在の街でも教会の礎石が残っているに過ぎない。1812年にヘルシンキは首都になったが、歴史的に由緒ある名所旧跡の多くは1800年以前のものである。

ヘルシンキの人口は1812年に4000人、19世紀から20世紀へと移る頃には79,000人で、現在でも50万人の小さな町で最も有名なものはサウナである。冬季オリンピックが開催された会場や港の広場の市場ぐらいしか見るべきものではなく、国会議事等の建物だけが丘の上に見えていた印象だけが残っている。何と云っても白夜だけであろう。



(上の写真は駅から眺めた国会議事堂)

● 『上海～杭州～蘇州の旅』昭和60年（1985）1月8日～12日

紀行文は「吳越紀行」

一般に誰でも旅行する所だけに細部は省略する。この旅行は女婿の駒谷康文氏の所属する石川県造園組合が、日中友好のために蘇州市に琴似燈籠の寄付するのが目的で、私は女婿に連れられて参加したのであった。

紀行文に「鼓腹擊壤」と「臥薪嘗胆」と「傾國（傾城）」の三点を掲載したが、ここでは上に立つ者の為に「鼓腹擊壤」のみを記述して警鐘としたい。

「鼓腹擊壤」（十八史略）は、聖天子の聞こえ高い帝堯（テイギョウ）のころの物語である。堯は即位してからひたすら心を傾けて、天を敬い人を愛する政治を行い、天下の人々から慕われた。太平無事の月日が積み重なって、いつしか五十が過ぎた。あまりの平和さに、堯の心には返って一抹の不安があった。「一体、天下は今、本当にうまく治まっているのだろうか。人民たちは本当に私を天子に頂くことを願っているのだろうか」

堯はそのことを自分の目で視、耳で聞いて直接に確かめようと思い立って、目立たない衣服を着てこっそり街の中にしのび出た。すると白髪の老百姓がひとり、食べもので口をもごつかせながら、木ごま遊び＝擊壤（壙（キゴマ））をぶつけ合って勝負を決める遊びに夢中のありさま、お腹を叩いて拍子をとりながら、しゃがれた声でつぶやくように、だが楽しそうに歌っていた。

日出でて作（はたら）き、

日入りて息（いこ）う。

井を掘りて飲み

田を耕して食う。

帝力我に何かあらんや！

（日が出来やせつせと野良仕事、日くれにやねぐらで横になる。のどの渴きは井戸を掘ってしのぐ、腹の足（タ）しには田畠の実り。天子様なぞ、おいらの暮らしにや、あつてもなくとも、おんなんじことさ。）

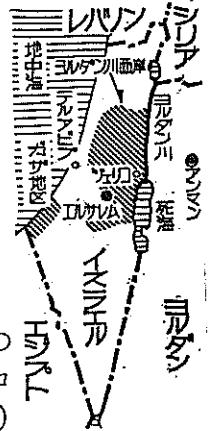
天子の堯は「これでよいのじゃ。民たちが何の不安もなく鼓腹（はらづみ）をうち擊壤（こまあそび）をして、自分たちの生活を楽しんでいてくれる。これこそ私の政治がうまくいっている証拠というもののじやわい」と言ったという。

● 『イスラエル（ユダヤ）の旅8日間』昭和60年（1985）2月13日～20日

紀行文は「ユダヤ紀行」。参考として「春秋に義戦なし」。「アラビヤ半島紀行」
【この旅行ほど将来の世界情勢（9. 11事件、パレスチナ対イスラエル、イスラム教
対キリスト教、アフガニスタン問題）の変化・紛争に対し参考になったものはない】

当時の世界情勢ではイスラエルに入国してパスポートにイスラエルの入国スタンプを押印されると、世界の他の国は絶対に入国を許可せず、イスラエルの旅行は不可能であった。その原因は中東戦争（1948年のイスラエルの建国を契機とするイスラエルとアラブ諸国との一連の戦争）のためであった。

大規模の戦争は第1次（1948）、第2次（1956）、第3次（1967）、第4次（1973）であった。私がイスラエルを訪れたのは第4次の戦争の10年後で、世界各国はイスラエルを敵視していた。まだ今のパレスチナ政府ではなく、パレスチナ全域とレバノン及びシリアのゴラン高原等を含め、全域はイスラエルの占領下にあり、ごく小さなテロを除いて軍政の為に安定したいた。（右は斜線を含めイスラエル占領地域）



この情勢下でワールド航空サービスという旅行社はイスラエルの旅行者を募集した。イスラエルへ飛ぶ航空機はローマからのアリタリア航空しか認められず、我々は4時間もローマで待機させられてイスラエルの玄関口のテルアビブに飛んだ。パスポートには入国スタンプは押印せずに別の用紙に押印し、出国時も其の紙を見せて出国するという危険を伴う行動であった。それは激戦経験者の糞度胸かも知れず、他はキリスト教の神父であった。

結果的には其の時にイスラエルを訪問したことによって、イスラエルとパレスチナの紛争の原因から、ユダヤとキリスト教徒とイスラム教徒の関係、並びにイスラエルとイスラム教国家の永久的な紛争の原因が理解できた。特にイスラエルが首都としているエルサレムは本当はパレスチナの土地である。この解決なくしてユダヤ対イスラムの関係は解決しないと、私は占領地を一周して理解できたのであった。

アメリカの経済を支え、経済を支配しているはイスラエル人やユダヤ系のアメリカ人である。また莫大な政治献金をして政治家を操る者も其の人たちである。アメリカ人はその点を理解し、何事も武力で解決しようとすれば永久に決着はつかないと判断する。

私は実に良い機会にイスラエルを訪問して知識を広められたことは、世界を見る上で絶対的に必須の要件であったと考えている。後日、イランやアラビヤ半島一周の旅をしてイスラムの諸国家を訪れ、絶対的な知識を得たと自信を持つようになったと考えている。

又、何れの旅行も準備として其の国々の歴史と地理等を読む習慣が身についており、帰国して紀行文を綴って更に熟読玩味してきた。今回も時間をかけてユダヤ紀行を作成するために、旧約聖書から新約聖書を読み、ムハマンド（イスラム教の開祖で「ムハマド」と称し、英語読みではマホメットと称す）の神の御告げによるイスラム教書も読破し、概要だけは掴んだ積りである。彼らの信仰する神は同一神のエホバ（ヤハウェ）である。また出身地も同じくチグリス、ユフラテス川付近の住民であった。なぜ争うのか疑問である。

前7000年頃に起こったノアの大洪水から地球の乾燥は進行し、やがて全近東や北アフリカは砂漠化した。緑地帯として残ったチグリス、ユフラテス川の流域のメソポタミア

～シリヤ・ヨルダンを通りパレスチナの海岸地帯を経てナイル川の河口に至る地域である。メソポタミアは前4000年ころ大災害に遭った。これが旧約聖書の「ノアの大洪水」である。

もともとイスラエルの民は半遊牧民である。羊の群れを追ってオアシスを渡り歩き、大自然が人間に与えた生活様式であった。この半遊牧民がペルシア湾に近いバビロニア（メソポタミア南部、チグリス川・ユフラテス川下流地方の古名）を離れなければならなかつたのである。そしてカナン（パレスチナ地方の古名）の地に到着後、神の命令により「イスラエル」と改名したと言う。「聖書では神がアブラハム（旧約聖書に登場するイスラエル民族の祖）とその子孫に与えると約束した地として描かれている」

以下、旧約聖書に詳しく述べているから省略するが、アラブ人とユダヤ人とは同じセム族の二つの流れであり同系統の民族である。

「アラブ」という名前は、セム族の「アラバ」から由来すると言い、アラバは大砂漠を意味すると言う。前2000年ころ、メソポタミアから移動してきたセム族系の諸族のうち、パレスチナの海岸に近い地域に住み着いた半農半牧の民が後のユダヤ人であり、大砂漠の放牧民がアラブ人である。

両者の間にはしばしば敵意が流れ、ローマ帝国はアラブの反ユダヤ感情を利用し、紀元70年のエルサレムの攻撃にもアラブ騎兵部隊を参加させている。ローマはパレスチナのユダヤ人を撃破し、彼らを世界に四散させる一方、後には砂漠に砦を築き、アラブ人をアラビア砂漠に押し込めてしまった。砂漠は多数の放牧民を養うことができず、やがてアラブ人はムハマド（マホメット）と共に砂漠から立ち上がり、サラセン帝国を建設した。

（サラセン帝国は7世紀にアラビア半島に興ったイスラム帝国の通称である）

（上記は昭和60年3月に書いたユダヤ紀行であり以下は省略する）

アラブのことは平成6年2月にアラビア半島15日間の旅や、平成7年3月のイラン（ペルシア）一周12日間の旅、昭和60年2月のモロッコの旅、平成14年4月に上梓した「春秋に義戦なし」に詳しく記述した。

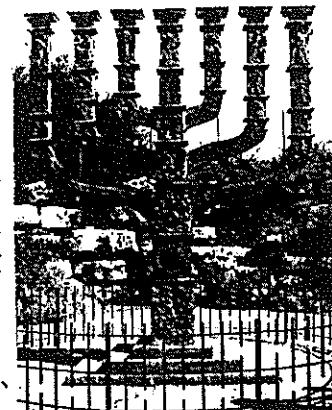
特に「春秋に義戦なし」はイスラム原理主義からイスラム教、キリスト教、ユダヤ教等を詳細に書いたから、参考にすることを希望する。ユダヤ教からキリスト（教）が生まれ、キリスト教からイスラム教が生まれたが、誠に宗教は不思議な存在で、同じ流れと思われる仲間が最も憎しみ合っているのである。

今世紀に入つて9、11事件からアフガニスタンの戦闘、イラク戦争と続き、前世紀から引き続くイスラエルとパレスチナの闘争等もあり、過去の世紀にも見られなかつた宗教を抱えた戦争が絶え間なく継続している。誠に愚かな人間どものである。

今日までの日本は戦争の外にあって平和を享受してきた。私のユダヤ紀行文の最後にも、日本人は身を安全な世界におかれているため、身の安全を考えないと書いてある。

「ただ」で空気を吸っているように、平和も「ただ」であるようにしか日本人は考えてはなかつた。しかし「イラク戦争」から真剣に「ただの平和はない」と変化したようである。

（右上の写真はイスラエル国會議事堂の前に立つイスラエル・シンボルの燭台）



● 『スペイン・モロッコ・ポルトガル15日間』昭和60年(1985)5月1日～15日

成田～マドリード～トレド～バルセロナ～カサブランカ～
マラケシュ～カサブランカ～ラバト～フェズ～タンジール
～グラナダ～ゴルドバ～セビリヤ～ポルトガル

「マドリード」及び「トレド」は二回目のため記事は省略。
「バルセロナ」は建築家のガウディを生み、巨匠ピカソを育てた芸術家たちの母なる土地柄だけに、見るのに応答の暇がないくらいであった。先ずモンジュイックの丘から市全般を眺め、凱旋門からピカソ美術館を見学した。王の広場に行く道路の両側の家屋の屋根は奇抜を極め、グエル公園も他に類を見ない施設で印象は極めて深い。続く聖家族教会は未完成だが興味に引かれて上までエレベータで昇った。其の当時はオリンピックの誘致に懸念だったが、実現して何よりであった。(右は聖家族教会の塔)

「モロッコ」はフランス領モロッコとスペイン領モロッコ(サハラ砂漠)とジブラルタル海峡のタンジールを統合した国である。

「マラケシュ」我々はバルセロナから空路カサブランカに飛翔し、そこから234kmのマラケシュに向かってバスは疾走した。ここはサハラ砂漠との境界で雪を頂くアトラス山脈の麓の町で、全ての建物は赤色であった。マラケシュとはアラビヤ語で赤い色の意味である。ホテルに到着すると唄と踊りと太鼓の大歓迎で、フェズに次いで二番目に古い15世紀の首都であったと云う。

「カサブランカ」モロッコ最大の都市で、其の名は映画カサブランカで有名だと言われたが、私は映画を見ていないから良く解らなかった。ヨーロッパ風とアメリカ風の異文化が合体したような感じを受けた町であった。

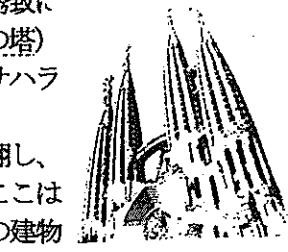
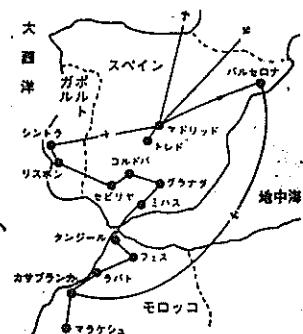
「ラバト」モロッコの首都である。王宮の門の両側に乗馬した歩哨が立ち、城壁と共に戦前の日本の二重橋の歩哨を思い出していた。アラブの王様の絶大な権力を誇示していた。

「フェズ」古都フェズは「メディナ」と呼ばれる旧市街が有名である。この巨大な迷路は世界一複雑で、案内人の後を付いて行かなければ迷子は確定である。2003年10月にNHKが報道したが、懐かしい思い出で見ていた。道路は極めて狭く

(直射日光を避けるために日陰を多くするため)、起伏に富み上がり下がったり、右に左に曲がったり戻ったり、昼も暗いトンネルがあり、太陽の方向さえも解らない。地図は役に立たずガイドに付いて行くだけで余所見もできない状態であった。しかしモロッコの最大の印象と言えば、この「メディナ」であった。

(右の写真はトンネルもあるメディナの迷路)

「ダンジール」ここからジブラルタル海峡を渡ってスペインに向かう自由貿易港である。連絡船の中で日の出を眺められたことが思い出となっている。地中海に面したスペイン領のアンダルシア海岸が見えてくると、先ず目に付くのは「ジブラルタル英國海軍基地」で、島のように見えるが実は陸続きであり、地下は要塞で飛行場もあると伝えられている。



ダンジールから渡航してスペイン領に到着した港は「アルヘシラス」港で、ここから温暖なアンダルシア地方の海岸を通過してグラナタに向かってバスは快走した。

「グラナダ」ここは約800年間近くイベリア半島を支配してきたイスラム教徒の最後の砦であった。ここに「アルハンブラ宮殿」は14世紀にイスラム文化が開花した所である。又、グラナダは木製モザイクの名産地で記念として小物を購入した。

グラナダのアルハンブラ宮殿の植樹した道路は記憶にある。

「ゴルドバ」10世紀のゴルドバは全盛時代で300ものイスラム寺院があり、絢爛豪華な宮殿が建ち並んでいる。ローマ橋や市街地を含めてスペインの第一の観光地だと私は感じている。(右の写真はゴルドバに建っている大モスクの内部で、メッカに次ぐ世界第二の大規模に驚嘆させられる)。

「セビリヤ」アンダルシア最大の都市で有名なフラメンコ踊りを観光した。又、河畔のレストランで昼食し、この町の記念として豹に似た毛皮を買いたい求めた。コロンブスの棺桶やサンタクロスの原形も見学し収穫は大きかった。

「リスボン」(ポルトガル)セビリアのホテルで朝食後、バスに乗車してハイウェイを走行してポルトガルとの国境を越え、夕刻にリスボンに到着す。夕食は大レストランを占有して音楽を聴きながらポルトガル料理を味わった。

リスボンは七つの丘に翼を広げたような町で、大航海時代には世界の表玄関として栄華を誇っていた。其の当時の遺跡や面影を遺す町は魅力が満喫していた。

〔大航海時代〕とは、15世紀から17世紀前半にかけて、ポルトガルやスペインなどのヨーロッパ諸国が、航海探検により海外進出を行った時代のことである。ディアスの喜望峰回航、ガマのインド航路開拓、コロンブスのアメリカ到着、マゼランの世界周航などが行われ、ヨーロッパによる世界支配の契機となった発見時代である。

(右上の写真は「海洋発見記念館」。右下は「ベレンの塔」)

「ベレンの塔」は「水牢獄」で桟橋を渡って入るのだが、桟橋は吊橋で、罪人が入れば吊橋が上って出られない仕組みである。

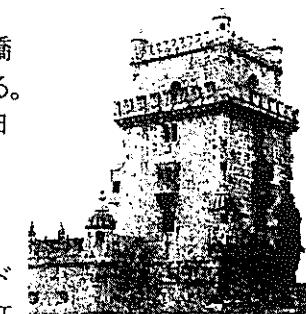
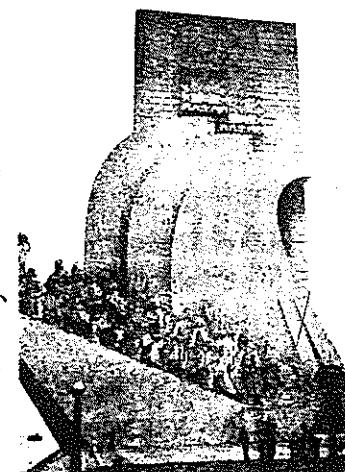
ベレンの塔の前の広場の地面に世界地図が描かれており、日本を最初に発見したのはポルトガルだと説明されていた。

「シントラ」2月13日の朝食後にシントラを観光したが、昔の王宮の跡に数本の煙突があったことが記憶に残っている。

「トレド」14日に空路マドリードに到着し、直ちにトレド観光にバスで出発した。前回訪れた時より道路が整備されて町は一変した感じで、荘厳な大型堂も二回目になると新たな目で見られるようであった。

「マドリード」午後はマドリードに引き返して自由行動となつた。前回の旅を想い出しながらスペイン広場から繁華街を回り、専ら御土産品あさりに時間を費やしていた。

5月15日の夕刻に成田に到着。



● 『河西回廊と天山北路の旅12日間』(中国北回りシルクロード)』

昭和60年(1985)10月4日~15日

紀行文 表題と同じ

アルタイ山脈

成田~上海~西安~蘭州~酒泉~敦煌~吐魯番
(トルファン) ~烏魯木齊(ウルムチ)~上海
(右の地図参照)

「西域」とは2000年来、敦煌から西方をさす語であった。「河西回廊」(黄河の西の渡り廊下の意味)とは蘭州の西を流れる黄河以西から敦煌までをさす語である。西域や河西回廊は東西文化の通路で、西洋にとって中国の絹を運ぶ道として「シルクロード」と呼んだのである。



「西安」成田を発して上海で一泊し翌日はシルクロードの出発点の西安に到着。一日目は西門・鐘楼に登って市街を眺望し、唐の玄宗皇帝と楊貴妃のロマンの舞台だった華清池を観光。私はロマンの舞台よりも、国民党主席の蒋介石が張学良にここで監禁され、国共合作となつたことの方が重要であった。監禁がなければ現在の中国は実現されていない。

続いて秦の始皇帝の兵馬俑坑の見学となる。「俑」とは死者を埋葬するときの副葬品として埋めた人形のこと、土俑や木俑である。その兵馬俑は髪形や服装は全部が異なり、容貌も各人が違い、始皇帝の権力の偉大さが窺い知ることができ、万里の長城に匹敵する。

二日目は前漢の第七代皇帝・武帝の「茂陵」と24歳で夭折した武将の霍去病(カッキョヘイ)の墓陵、及び楊貴妃の墓を参観し、続いて唐の第三代皇帝の高宗と、その皇后となつた則天武后が眠る「乾陵」を拜観し、参道の石獸・石人に圧倒され驚きであった。

三日目は玄奘三蔵等が仏教經典を訳し、1300年を経過した大雁塔・小雁塔に登る。また空海が密教を極めた青竜寺に詣で、市内の興慶公園を訪れ「阿部仲麻呂」の碑の前に立って当時を偲んだ。彼は日本遣唐留学生の傑出した代表者で、54年間も在住して日中文化交流に尽くし、科挙の試験にも合格した大人物であった。(右は阿部仲麻呂の記念碑)

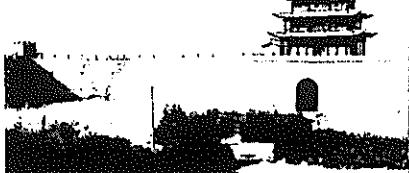


「蘭州~炳靈寺」翌日から河西回廊の旅となり、空路、西安から蘭州に飛び、船で劉家峠ダムを遡行すること3時間、戦後に発見された炳靈寺石窟の見学に一日かかった。そこでの収穫は「羊皮筏子」(ヤンピファズ)をダムで見たことである。「羊皮筏」は細い丸太で枠を組み、その下に羊の中身をくり抜き、皮だけを乾燥させた羊の袋を浮き袋にしたもので、実に原始的なものである。(右は羊皮筏子)



「酒泉」蘭州を早朝の飛行機で飛翔してゴビの砂漠を眺めながら嘉峪関空港に着陸した。酒泉は内モンゴル自治区に属し、回教徒(イスラム)が主力で漢民族は少数民族の町である。河西回廊の中心都市で、前漢の將軍・霍去病が匈奴(キョウド)を討伐し平定し、酒を泉のようにして全將兵と祝ったという故事から酒泉と称した。又、延長6700kmの万里の長城の西端である「嘉峪關」は酒泉の地であった。

この万里の長城は焼レンガではなく、高く盛り上げた土塙の長城であった。しかし駐屯部隊の城は煉瓦造りで1ヶ大隊(約千人)の將兵が守備していたのであった。(右は嘉峪關の長城の駐屯地の望樓)



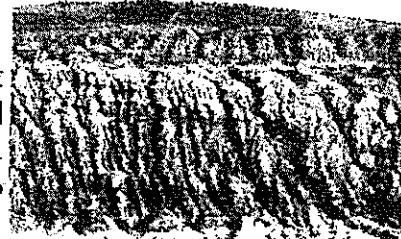
酒泉の町の中心に望楼があり、そこから放射線状に道路が四通八達して、古来から夜光杯と称している玉杯（玉杯）も有名で記念品として買いました。（右の写真は敦煌石窟中央の大仏殿）



「敦煌」酒泉で一泊し、450 km西南の敦煌に向かってマイクロバスは惡路の街道を走った。当時は敦煌には飛行場も鉄道もなくゴビ砂漠の彼方の辺境であり、ラクダの隊商を想像させる地でもあった。敦煌は余りにも有名で記述するが多く、ここでは割愛し紀行文に譲ることにする。（上は敦煌の鳴沙山を行くラクダの列）

「吐魯番」（トルファン）敦煌を出発して再びバスは北方230 kmの柳園駅まで我々を運んだ。ここから夜行寝台列車に乗車し、翌朝の8時にトルファン駅に到着した。出迎えた女性の通訳はトルコ・イランか不明だが中央アジア系で、鼻が高く肌は白い美人であった。戦後の西疆ウイグル地区は中国に侵略されるまでは「東カザフ共和国」であったからであり、内蒙古地区と同様である。砂利沙漠のトルファンはウイグル語で低地を意味し、海拔145 mは世界第2の低地であり、年間降雨量は16ミリ、夏の平均温度は40度、一日の温度差は約20度、冬は零下30度以下で、古代には「火州」と呼んだこともある。

漢の時代には匈奴の勢力下にあり、トルファン盆地の最大の遺跡の「高昌国」は、漢族王朝が初めて作った国で、玄奘三蔵も世話になっている。しかし再び匈奴に奪い返された。「交河故城」は前漢時代の「車師国」の王城で、「ベゼクリク千仏洞」の石窟寺院も名高い。



トルファンで最も印象的なものは「火焰山」で、灼熱の地・トルファンの代名詞と言われるほど有名である。長さ100 kmもある連山の山肌は赤銅色で、火が燃えている火焰のようであった。それは「西遊記」にも書かれている。（上は真っ赤に燃えている火焰山）

「烏魯木齊」（ウルムチ）トルファンから天山山脈を山越えしなければならないが、玄奘三蔵の労苦が偲ばれる。183 kmも彼方のウルムチまでは白雪の街道の谷間で、神仙が住むような街道を3時間半を費やして到着した。



（上は万年雪を頂く天山山脈、帰路の飛行機から撮影）

ウルムチは唐時代を除いては中国の支配地外であり、匈奴や突厥（トッケツ）・ウイグル族の争奪の地であった。清朝が天下を制してから満州族の屯田兵が配置され、今日でも一部が住んでいる。満州族はこの地方を「新しい土地」という意味で「新疆」と名付けたという。「疆」は強い意味や国境の意味がある。（現在は中国の原爆実験や宇宙打ち上げ基地）

現在ではタクラマカン砂漠の西端に鉄道が敷設されて便利になり、発展したことと想像している。西疆ウイグル自治区で思い出すのは、天山山脈の万年雪のお陰で炎熱の砂漠でも豊富な地下水が滔々として流れ、葡萄栽培が盛んで我々が口にしている葡萄は殆んどこの産物である。特に「ハミ瓜」の絶対的な珍味は忘れない。

西安から西の僻地も紀元前からシルクロードとしての交易のためばかりでなく、文化・宗教の路として大きな役割を果たしてきた。この歴史的な万水千山の道を踏破した先駆者の偉業を偲ぶことが叶い、歴史的にも意義深い旅であったと思い出している。

● 『タイ国四大王朝と古都チェンマイの旅』昭和61年(1986)1月9日～14日
 7日間 紀行文は題名の通り
 大阪～バンコク～チェンマイ～スコタイ～アユタヤ～バンコク～大阪

「チェンマイ」ランナータイ王国の王都として栄えた町である。ビルマ・ラオスに国境を接し、人種は山岳民族が多く、中国の影響が強大である。終戦時、私の指揮する大隊はビルマ中部のシャン高原で連合軍と戦闘中であった。その後、サル温川を渡ってチェンマイに後退すべしとの命令を受領し、約3ヶ月の日時を費やし、道なき道や象道あるいは河床を歩いてチェンマイに辿り着いたが、41年前の町は懐かしい思い出は一杯であった。

(右上の写真は城壁のなくなった水濠のチェンマイの景観)



当時のチェンマイは中国の都市と同じく水濠をめぐらした城壁に囲まれ、水濠の土手には楊柳が植えられていた。しかし現在は水濠は見えるが城壁は極く一部を除いて姿を消していた。これらの城壁は13世紀に造られたもので、待望していた景観との再会は一炊の夢であった。又、チェンマイに辿り着くと私を含めて大隊の将校5人がマラリヤで倒れた地でもあり、入院していた椰子の葉の建物も不明であった。年月とは争えないものである。

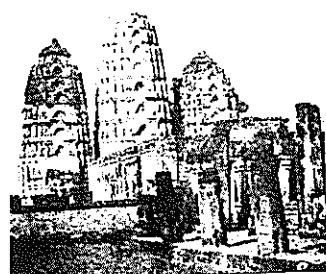
ビルマとの国境線にあった山岳民族が栽培していたケシの花は美しかったが、麻薬のケシを吸う光景は見たことがなかった。しかし今回はチェンマイ郊外のメオ族の山岳民族村で見ることができた。

(右はチェンマイ郊外の山岳・少数民族・メオ族のアヘンを吸う男)



「スコタイ」チェンマイに二泊して東南方約500kmのスコタイに向かってバスで走った。幸福の夜明けと呼ばれたタイ国の発祥の地で、過去の榮華を誇るように仏教遺跡が多く、レリーフも數え切れず、ビルマの古都パガンを小型化したような町である。しかし辺鄙な土地の為に観光客は少ないようであった。

(右はスコタイの仏教遺跡)



「アユタヤ」スコタイで一泊してバンコク北方77kmのアユタヤに向かった。日本人の山田長政で有名なタイ王族王朝(1350～1767)は、17世紀が全盛時代であった。しかしビルマのアラウンバヤ朝(パガン王朝)に滅ぼされた。当時の日本人町には精靈碑や鳥居があったが、次回に訪れた時にはなくなっていた。中国の圧力であろうか、残念だ。

(右はアユタヤの仏教遺跡の一部)



「バン・パイン離宮」は日本人観光客が多いところで省略する。

「バンコク」現在の王朝は1782年にチャクリ(ラーマ一世)が前王朝を倒して創建した若い王朝である。1932年のクーデターにより絶対王政から立憲君主制に移行した。チャクリ朝、ラタナコシン朝という。建国から220余年の若い国だが、戦前の日本以上に皇帝を神仏のように信仰させている。私は終戦後の日本に帰国するまでの約半年間、バンコク東方のナコンナヨーク県に滞在し、タイ国は懐かしい土地柄でもある。バンコクの記事は省略したい。

●『バリ島・ボロブドール・シンガポール8日間』昭和62年(1987)1月6日～
13日 紀行文は表題の通り
成田～ジャカルタ～デンパサール～ジョクジャカルタ～シンガポール成田

「デンパサール」バリ島の首都である。当時は現在のように日本からの直行便ではなく、ジャカルタでインドネシア航空の国内線に乗り換えなければならなかった。しかも未開の国の国内線の便数は少なく約3時間も待たされた。バリ島まで一日がかりであった。

バリ島はジャワ島の東隣の火山島で海拔3142mのアゲン山が聳え、インドネシア唯一のヒンズー文化の島で、古典舞踊とガグラン音楽で知られており、中心都市はシンガラジャーである。現在は日本人観光客が多いが、当時はオーストラリア人が主力であった。

バリ島で有名な「バロン・ダンス」は、良い魂と悪い魂との闘争の劇で、勝負がつかないまま終わる踊りであった。「ケチャップダンス」は古代インドの物語を基礎としたもので、ビシュヌ神の化身であるラーマ王子とその妃シーターとの波乱の生涯、ラーバナ魔王との戦いを描いた踊りである。同年の秋にヒンズー教のアンコールワットを訪れ、更にヒンズーの物語を理解した。現在は日本人観光客が絶対多数であり島の観光は紀行文に譲る。

「ボロブドール遺跡」デンパサールに二泊してジヨクジカルタに飛びボロブドールの観光となつた。

ここは世界最大の神秘な大伽藍で、その幾何学的な造形美を誇示している。8世紀に仏教王国・シャイレンドラ王朝時代に建造され、18世紀に火山灰と雑草の中から荒廃した姿が発見され、ユネスコの支援で修復を重ねた現在、仏教美術史の最大の傑作として雄姿な全貌が見られる。大小様々な巨大な石で累積されている巨大な山型の遺跡は、底辺が120m四方の正方形で9段層となっている。



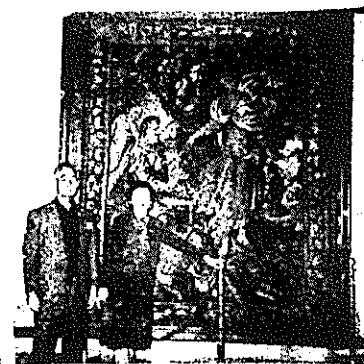
ピラミッド型でその中央のストゥーパ(塔婆)の高さは42m、各断層の回廊の石には仏教の物語のレリーフがある。遺跡の上部に点在しているストゥーパの中には仏像が安置されている。

(上の写真はボロブドール遺跡の前に立つ我等夫婦)

「シンガポール」私は昭和19年暮にビルマに赴任する途中、約20日間もシンガポールに滞在して待機した。あれから43年振りでチャンギ空港に着陸した。空港の名称は昔と変わらないが、当時は「星港」「新嘉坡」と漢字で書いていたことも懐かしい。空港から市内に向かう街道は当時の芝生が生えていた景観は消え去って市街化して家屋が充満していた。

懐かしいチャイナタウンを眺めながら宿泊していたホテルや、私の教えた初年兵の寺岡正輝君(主計中尉となっていた)の宿舎などは、我が脳細胞を刺激して当時を偲ばるのであった。現在は高級な通りとなっている国際通りに宿泊することになったが、当時はブキテマ高地に登る荒地であった。植物園も新設されたものでシンガポールの発展を驚異の眼で眺めていた。観光は省略する。

(右は国際通りセントラルホテル玄関前に立つ我等夫婦)



● 『秘境パプアニューギニア8日間』昭和62年(1987)3月6日~13日

紀行文 題名の通り

成田→マニラ→ポートモレスビー→ラエ→ゴロカ→ミンテーマ村→マウント・ハーゲン→カラワリ・ロッジ→イーマス村→マウント・ハーゲン→ポートモレスビー→マニラ→

当時は日本から直接、パプアニューギニアの主都ポートモレスビーへの直行便はなく、マニラで一泊してニューギニア航空を利用しなければならなかつた。しかし私にとっては有名なマニラ湾の落日の美観が見られ、湾の彼方に浮かぶ激戦地だったコレヒドール島の島影を望遠することができ好都合であった。

「パプアニューギニアの概要」 パプアニューギニアは5千年前の昔、アジアから移ってきた人類が居住していたと云われており、高地の谷間では8千年前も前の農耕集落の遺跡が発見されている。
(上の地図はパプアニューギニアの今次旅行用の地図)

「ニューギニアの発見」は1526年、ポルトガル人が島の北西部に上陸してパプアと命名した。「パプア」とはマレー語で「縮れつ毛」である。1545年、スペイン人のレテスが島の北岸に来航し、住民がアフリカのギニア沿岸の黒人に似ていることから、パプアニューギニアと名付けたと云う。

1884年、ビスマルクは太平洋のドイツ人擁護のために島の東北部を、イギリスは島の東南部を領有した。1914年、第一次大戦が勃発するとオーストラリア軍はドイツ領に進行し、ドイツの敗北によりオーストラリアの委任統治領となった。第二次世界大戦中は日本軍が進攻したが、1946年の国連総会でオーストラリアの委任統治領となった。1963年、西半分がインドネシア領西イリヤン(現イリアンジャー)となり、パプアニューギニアと共に1975年に独立した。

大小700もの島からなるパプアニューギニアは「地上最後の楽園」と云われ、「秘境」と呼ぶに相応しい国であるといわれる。世界を見てきた私も同感であった。通常はピジン英語という中国語と英語の混成語が使用されている。しかし内部の高地では部族ごとに言葉があり、部族の数だけ会話の数があるようだ。

「空中からの慰靈」 私が3年間に亘って中国戦線で戦った師団・聯隊は、昭和19年の秋にニューギニアの西部(イリアンジャ)に転戦し、聯隊主力は島の中央部に位置するビアク島とヌンホル島の死守の命を受け、上陸してきた米軍と飛行場の争奪戦を展開した。しかし残念ながら軍旗を奉焼して玉碎した。私はその前年に陸大受験に合格して内地に帰還して命拾いしたが、聯隊長以下の多くの将兵とは親交も深く慰靈の好機だと思い、乗務員にビアク・ヌンホル島の通過予定時間の通告を依頼した。快く私の心に感動した乗務員は、ビアク・ヌンホル島の上空を通過する時間を知らせてくれ、下界に向かって私なりに慰靈を申し上げることが叶えたのである。

「ポートモレスビー攻略戦」 昭和17年5月、日本海軍はポートモレスビーを占領する目的で出撃し、サンゴ海沖で米海軍と決戦となって敗北を喫した。次いで陸軍は南海支隊を編成(長・堀井少将)して4千m級の高山を越える攻略戦を強行したが補給は続かず已む無く後退した。6千名の部隊で生存者は僅かに2百名に過ぎず、無謀な作戦であった。

「ポートモレスビー」2月7日14:00にポートモレスビー空港に着陸し、市中心まで約13kmの途中にあった市場を見学した。ゴザがないらしくヤシの葉を敷いた上にサツマイモ、タロイモ、トウモロコシ、ヤシの実、バナナ、ナンキン、スイカなどを並べ、刺青（イレミ）をして胡坐（アグラ）姿の女性たちが商いをしていた。その光景は地球最後の楽園の風景であったが、臭気がぶんぶんとして堪えられなかった。人口14万人の首都の在住日本人は約300名で、観光客は日本、カナダ、米、オーストラリアの順で年間約3千～4千人という。海岸の浅瀬に建てた水上部落を眺め、興味を抱いてホテルに到着した。（上の写真はタロイモを売買する原住民の市場風景）



「ゴロカ」ポートモレスビーを発って「ラエ」空港に立ち寄った。ここは激戦のあった地で空港の横に慰靈碑が建ち早速、拝礼して慰靈した。約一時間の飛行でゴロカに到着。ゴロカの観光に移ったが首都の人達と比較すると生活程度は数段劣っていて、身に付けているものは簡単な肌着だけで素足であった。南方民族は何處も同様に男性の天下で男性天国である。女性だけが精々と働き、男性はぶらぶらしていた。ゴロカ博物館には数千年前の石器時代～準石器時代の物が多く、狩の道具や土器、戦闘用の面や盾などが並んでいた。

「首狩」の習慣は奥地では1970年頃まで行われていたと言う。1948年に欧洲人がコーヒ園を開拓して成長した地がゴロカであったが、山間僻地だけに寂しい町であった。

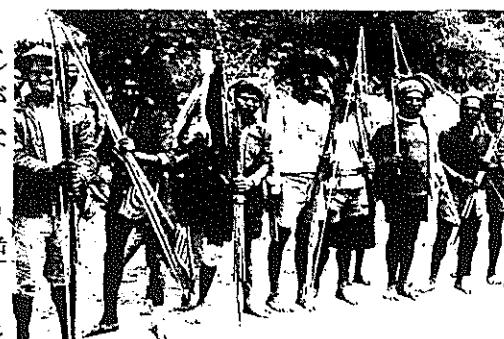
「高地の歴史」ニューギニアはヨーロッパ列強の植民地争奪の渦中に巻き込まれず、20世紀まで忘れられていた。人がこの高地に住んでいることが判明したのは1930年代である。彼らは後から来た人種に高地へと追いやられ、一万年の間、外部の世界に知られることもなく、大自然と対決して人間の営みを続けてきた。南米が起源というサツマイモは航海者からもらった物だが、それも300年ほど前であった。

第二次世界大戦後、気候の良い高地に入ってきたのはオーストラリア人の一旗あげ組で、無一文で出てきた連中である。1960年代に入ると高地人社会でも石斧は使用されなくなった。又、高地人にとって身体の装飾は単なる見せ物ではなく、富を誇示する物である。

「人口と人種」パプアニューギニアの人口は1950年代に300万と推定され、その内、非原住民は約5万で、その中で白人は約4万という。他はフィリピンと華僑である。白人はオーストラリア兵として従軍した者が、国で職がないから戻ってきた人達である。

「部族間の殺人事件」ゴロカとマウント・ハーゲン間に中間の山中でバスは停車を命じられた。弓矢を手にした原始姿の山岳民族が道路を塞ぎ、靈長類の人間社会では見られない光景が現われ、恐怖の眼で注目していた。

一週間前に隣の部族との間に闘争が起り、相手部族の一人を殺したのであった。その逆襲を恐れて警戒態勢を取っていたのである。彼等同士の争いの大体は「豚と女」が原因らしい。高地のパプア人は誇り高い人種で、険しい山や谷を隔てて群雄割拠し、何時でも何处でも闘争が絶えないらしい。（上は逆襲に備えて弓矢を手にし、警戒する山岳民族）



「ミンテーマ村の泥人間」ミンテーマ村は標高が次第に高くなつたマエント・ハーゲンの手前の或る村の名前である。ここでは「蜂の巣狩」「盗人狩」「火おこし」などを実演して見せた。「火おこし」は我々もビルマ戦線ではライターもマッチもなかったから、レンズや摩擦熱を利用して火種を作つた。しかし、この村では竹を細かく割つて削つた「竹ひご」を使用していた。

「泥人形」は男女を問はず裸の全身を泥で塗りつぶし、それに男は泥で作った面をかぶり、文字通りの「鬼面人を驚かす」という姿であつた。これこそ石器時代に逆戻りした感じで、原始生活そのままの姿であつた。この光景を見ただけでもパプアにきた価値があつたようだ、世界で唯一つのものであつた。

(右は泥の面をかぶつた泥人間の踊りの光景)

「マウント・ハーゲン」ハーゲンに接近してくると狭いながらも若干の平坦地があり、警察や刑務所の白い建物が見えてきた。未開の地でも警察は絶対的な権力があるようだ。夕刻にはハイランダー・ホテルに到着して旅装を解く。この町はゴロカよりも標高は高く、凌ぎよい気候であった。極楽鳥が飛んでいる鳥類保護園や植物園は見る値があつたが、閉門時間で見学できず残念であった。平屋建てのホテルは山間僻地の山奥で批難はできないが、夜の虫の夜襲に対してスプレーや蚊取り線香で応戦した。

「カラワリ・ロッジ」ハーゲンからカラワリまでは20人乗りのプロペラの軽飛行機で飛んだ。ビスマルク山脈の限りなく続く原始林の中に、先祖伝来の数千年前からあつた曲がりくねつた一本の細い山の道が延びていた。偉大な人間の生命力は前人未踏の山奥まで存在していた。フライト約30分で200mほどの草原に無事に着陸した。このパイロットはオーストラリア人で、普段はロッジの食糧輸送に使用する軽飛行機で、我々の携行品も重量制限が厳しく、許可されけるものは手荷物一個だけであった。残りの物はハーゲンのホテルに残置しなければならなかつた。

軽飛行機が着陸した草原の横を流れる黄河のような黄色い川の中を、ゆっくりとヤマハ発動機のついた小型カヌーに乗船して航行して行った。約20分後に山間を切り開いた川岸に、荒れ果てたヤシの葉で葺いた小屋のところでカヌーから降りて上陸した。

そこには我々一行を大歓迎する土人たちが男女を問はず、頭の天辺から足先まで花や鳥の羽で飾りつけて出迎えてくれ、それから踊り始めた。そこから我々はポンコツのトラックに便乗してカラワリ・ロッジに到着した。

(上の写真は着飾った土人の歓迎風景とロッジの正面)



「イーマス村の大歓迎」(カラワリ・ロッジ付近の村)

ゴロカからマウント・ハーゲンまでの民芸品は、極楽鳥の美しい羽毛や猪などの動物の牙が多かった。山の中に入れば入るほど変化が激しく、カラワリ村付近では男性自身を誇大に彫刻した木彫りの像や、長い瓢箪で作ったペニス・サックなどの漁色家たちが喜ぶ製品が多いようであった。

カラワリ・ロッジで昼食を摂った後、一行は二隻のカヌーに便乗して周辺の部落を廻って見学することになった。先ずイーマス村であった。

この部落でもカラワリ・ロッジの歓迎に優るとも劣らず、酋長を筆頭にして部落の老若男女が総動員されたのか、40～50人ほどの土人が出迎えて大歓迎であった。

(右の写真は動員された男女の大歓迎の出迎え)

花や色いろな羽毛で着飾った村人は踊りながら輪を描いて一行の周りを廻り続けていた。

文明国での女性では考えられないが、全ての女性は珍しく乳房は丸出しであった。その乳房の上に白い土を塗って化粧し、そればかりか上半身も白土で塗りまくり、顔は特別に色々な色の土で厚化粧し、髪の毛は羽毛と花で飾っていた。

腰は前面だけは藁のようなものと花などで隠していたが、後方から見ると一物もなく丸裸であった。そして珍しいことには男と女は入り混じっては踊らないのである。

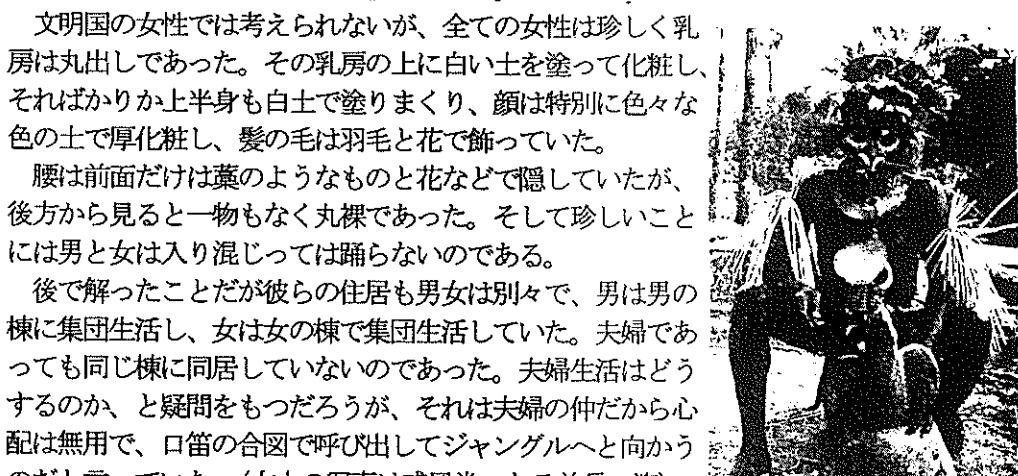
後で解ったことだが彼らの住居も男女は別々で、男は男の棟に集団生活し、女は女の棟で集団生活していた。夫婦であっても同じ棟に同居していないのであった。夫婦生活はどうするのか、と疑問をもつだろうが、それは夫婦の仲だから心配は無用で、口笛の合図で呼び出してジャングルへと向かうのだと言っていた。(右上の写真は威風堂々たる酋長の姿)



イーマス村からエンボインの郡役所や学校の見学した後、再びカヌーに便乗してカンディメン村でパン作りを見た。パンはパンの木から作るのが最も簡単なようだが、パンの木は無尽蔵ではない。それで太い木を切り倒し、その芯を削って其の芯に水をかけて澱粉質を取り出し、乾燥させて粉にしてパンを作つて見せてくれた。山奥の文明から遠ざかつた人たちであっても、そこに知恵が生まれて生活する姿を拝見すると、人間は偉大である。文明開化したから人間は幸福になれたという考えには疑問を抱くのであった。

当日の夜も踊りと太鼓の歓迎会の他に、結婚式や成人式などを披露してくれた。これらの記事は紀行文に譲ることにした。

李白は、天地は全てのものが来て宿る宿屋のようなもので、流れて行く月日は永久に次々と過ぎて行く旅人であると、言っている。その実感はこのような未開の地にきてひしひと感じたのであった。パプアニューギニアの彼ら彼女らにも楽しみがあるので、我々の基準で判断してはならないのだ。我が境遇に応じながら寂しさを克服して楽しさを生み出し、旅を続けたいとパプアの人たちから学んだのであった。



●『長江三峡下り』昭和62年(1987)9月18日10日間 文紀行 表題の通り

大阪～上海～重慶～長江三峡下り～岳陽樓～武漢～黃鶴樓～上海～大阪

この旅行の紀行文を私の友人に贈呈した。其の友人はこの紀行文を持参して長江三峡下りに参加したところ、これを読んだ中国の添乗員(通訳)は、「この紀行文は中国人でも書けないほど詳しく書かれており、是非とも分譲してください」と云われたとお礼状を頂いた。長年に亘り紀行文を綴ってきたが外国人に褒められたのは初めてのことである。

「重慶」戦時中は中国・蒋介石政府の所在地である。長江と嘉陽江の合流点で霧が発生し、この当時は午前中の航空便の発着はできなかった。現在は山の上を切り開いて霧の影響を受けない高い所に建設した。これを考えると、戦時中の重慶爆撃は午後しか行えず、今回来て見ると山に横穴を掘って爆撃に備えていたから、効果のほどは疑問であった。

重慶は、「喜びが重なる」と書くから暮らしには適当な地であったようだ。この奥地に日米英仏独の租界地が置かれたのもそのためであった。重慶は四川省で昔は巴蜀の国と言われたが、「蜀の栈道の難(カタ)きは青天に昇よりも難し」と言われた地である。又、天府の地と言って穀倉地帯であり、鉱物資源も豊富で蒋介石が重慶を選んだのは炯眼であった。

(私は乗船する前に重慶の書店で三峡下りの沿岸各県の歴史書をあるだけ多く購入した)

「長江と三峡下り」とは、一般に重慶から約1500kmの武漢までの船旅を言う。

重慶から湖北省の宜昌までは両岸が迫って流れは激しく、三峡の險と呼称した。古書には六大峡に大別されると書かれているが、現在は瞿唐・巫山・西陵の三峡の名で有名で、紀行文の記事もこれによって書いている。

三峡の北端の「白帝城」から湖北省の南津關(宜昌付近)までの198kmは両岸の風景が千変万化し、天然の画廊を思わせる船旅で世界的に名高い。昔の民船は10月から3月までの減水期に約1ヶ月を要して遡行し、増水期には2ヶ月を要したと言う。しかし万水千山の航路も変化し三峡の船旅も現在は三泊四日となった。(我々は武漢まで五泊六日)

「長寿」我々は「美なるかな水、洋洋乎たり」と孔子の詩を思い出しながら、重慶の朝天門埠頭から乗船して出航した。重慶から76kmの古い町が長寿で、昔は楽温と称した。名称の変更の由来などは長くなるから紀行文に譲りたい。

「豊都」伝説によると人の死後、そのり靈魂は豊都にある鬼城に来ると言わされてきた。詳しい記事は紀行文に譲ることにする。

「忠県」名称の由来は、巴の忠義の將軍「巴蔓子」の故郷と言うことからで詳細は略す。

「石宝寨」美しい物語が伝えられていて、特に「石宝姑娘(ケーニヤン)」が有名である。詳しいことは紀行文に譲ることにする。

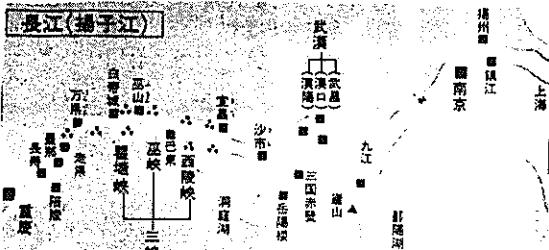
「万県」初日の投錨地で街の見学となる。「一葉落ちて天下の秋を知る」の名句の發祥地で、万県は桐油の産地である。「一葉」とは「桐油の木の葉」のことである。2千年以上の歴史があり、1926年、英人が船を沈めたのに抗議して英國船を押収し、英海軍が砲撃したために1000人以上の犠牲が出た「万県慘害事件」は有名である。織物の産地。

「瞿唐峡」四川省を表現する言葉に「蜀犬目に吠える」という語がある。霧が多い四川省は太陽が出ると犬が吠えるのだ。瞿唐峡は三峡でも峻陥で峰は天に届かんばかりに聳え、川幅は100mほどで狭く、流水はうなつて奔流している名勝である。

「雲陽」は「渺々たる予が懐い、美人を天の一方に望む」と蘇東坡が詠んだ心境で壮大な風致を楽しんでいた時、白壁の廟堂が見えてきた。これが雲陽の「張飛廟」であった。

「張飛廟」張飛は关羽と共に劉備に仕えた蜀の武将で魏吳と戦い、勇猛は万人に匹敵したという。この廟は長江の南岸にあり瑠璃瓦の壇の中に金色燁然と輝く殿堂が立っていた。

長江(揚子江)



(上は重慶から上海までの長江・揚子江の地図)

「奉節」三峡の素晴らしい景観はここから始まる。群峰連綿と集まり奇岩屹立する瞿塘峡の入口に、秀麗な山城が見える。これが古い歴史を秘めた街、奉節県城であった。

「八陣圖」古書によると諸葛孔明が四川省に入る時に石畳を築いて蜀軍の陣営とした。縦横八つの六十四塁を江岸の砂浜に八陣圖を作った。細部は紀行文に譲る。

「白帝城」蜀の皇帝「劉備」は关羽の仇を討たんと兵を起こしたが、吳の陸遜の火攻めによって大敗し、この白帝城に引き上げて悶々のうちに死を迎えた。劉備の死に臨んで蜀の国事と息子の阿闍のことを諸葛孔明に頼んだ地である。以下略

「長江支流の小三峡」巫県（上の地図では巫山）は四川省の東の門戸で人口は一万五千で寧河が長江に合流するところ。寧河は小三峡と称し、古栈道（コサンドウ）が延々と西に延びており、中国では最長と言われている。
(右は寧河と古栈道の景観)



「巫峡」三峡の中で最長と言われる巫峡は40kmに及ぶ。巫峡の両岸は12峰が屹立して最も美観で山容は様々で、最高峰は有名な「神女峰」でひときわ高く聳え、伝説上の神女である。神女についての神話は多く、これは紀行文にゆずることにする。

「碚石」四川省と湖北省の境界で巫峡の中で川幅が最も狭く、突き出た巨岩が雲を突き天を刺すような形をなし、天高く水低し、為に太陽の山頂に昇るのも遅い。
(右は碚石の長江の景観)



「屈原沱」（クツゲンダ）県城から1km離れた所に屈原沱と呼ぶ所があり、その岸上に屈原廟が建っている。沱は涙が流れることである。屈原は戦国時代の楚の人で愛国詩人でもある。長い間、高位の役人として国政に携わっていたが、同僚たちの悪意の中傷のため王の信頼を失い、辺境に追放された。屈原は洞庭湖畔の南にある汨羅江（ベキラ）に身を投げて自殺した。

「西陵峡」「香溪と王昭君」香溪は長江北岸の支流で西陵峡の西口で、香溪鎮で長江に合流している。その上流が明妃村で、漢時代の有名な王昭君の古里である。漢の元帝の時、北方の匈奴の烏孫（ウソン）は漢との和睦の条件に、漢室との婚姻関係を望んできた。それで元帝は王昭君を烏孫王に嫁がせ、その後60年間、友好が続いたと言う有名な話である。

「洞庭湖と岳陽楼」洞庭湖の入口の城陵磯で下船して陸地を進んで行くのだが、湖は霧でかすんで見えない。洞庭湖の面積は季節によって変化が大きく、冬季の乾季には陸地となるから「莊子」には「洞庭の野」と書いてある。一般的に琵琶湖の約六倍と言われている。洞庭湖畔の町が岳陽市で岳陽楼で有名である。

岳陽樓は江南の三大名楼の一つで、洞庭湖の辺に聳え立っている。この前身は三国時代の、呉国の將軍・魯肅が水兵を訓練したときの閱兵台であった。唐の時代に始めてこれを岳陽樓と名づけられた。宋の時代に岳陽樓を建て直した際、その時の著名な大文豪「范仲淹」は有名な「岳陽樓記」を書き残している。洞庭湖畔の丘の上に高さ15mの三層の名楼が聳えて天を衝くような威容は、洞庭湖の咽喉の地を扼している。以下略す。

(右上は芸術的な岳陽樓の全景で、兜式の屋根が特徴である)



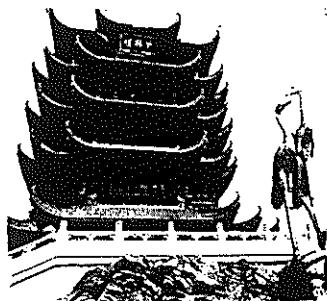
「赤壁の古戦場」岳陽から武漢の中間の長江河畔に三国志で有名な赤壁の古戦場が見えていた。寡少の呉軍が南風を利用した「火攻め」で大軍の曹操の軍を破った古戦場で、三国志を読んだ者は忘れられない名場面である。詳細は紀行文に譲りたい。

「武漢三鎮」戦前は漢口、漢陽、武昌を別々に呼んでいたが、戦後何時の間にか武漢市になっていた。漢口や漢陽は省略し、武昌の黄鶴楼に付いて少々記述する。

「黄鶴楼」これは漢口、漢陽方面から武昌城に入る漢陽門内にある蛇山、一名を黄鶴山とも称した山の山頂にあった名楼が黄鶴楼であった。

三国時代に創建されたが度々の戦火を浴びながら再建を繰り返し、最終的には武漢長江大橋建設のために撤去され、昔のものは何も残らず、位置も河岸から遠く離間し、古い面影は完全に消えてしまった。

現在の黄鶴楼は河岸から1kmも離れた蛇山の北山麓に後退し、三層であったのが五層に変わり、木造建築が鉄筋コンクリート建築に近代化されていた。天下の名楼は陽の上昇につれて鶴の鳴き声に立ったような威容を現し、辞を以て表現できないような貴賓のある高さ52mの勇姿であった。



楼内の壁面に伝説の由来が書いてある。武昌の辛氏という人の酒屋に或る日、一人の仙人が現れ、酒を要求されて大杯で飲ませた。酒屋の主人は半年ほどの間は、ただで飲ませていたところ、ある日、仙人は酒屋の主人に向かい、酒代もたまつたが金がないと言って、おれにと店の壁に黄色い鶴の絵を描き、立ち去ってしまった。しかしながら不思議なことに、酒を飲みにきた客が手拍子を叩くと、壁に描いた鶴が踊りだしたのである。

忽ち評判になって店は大繁盛し、十年ほどで酒屋は大金持ちになった。するとある日、また別の仙人が現れ、その鶴に乗って天上に行ってしまった。そこで辛氏は儲けた金で楼閣を建て、黄鶴楼と名付けたと言う。

「人生の禍福は皆念想より造成す」と菜根譚に書いてある。人生の幸せとか禍とかは、自分自身の心の中から起こってくるもので、決して境遇に左右されるものではない、と言うことである。

旅は人生だと言い古された比喩だが、私は人生が旅そのものだと思って旅をした時に、初めて旅の醍醐味を満喫することができると思う。そのことが上記した言葉のように感じて旅を続けてきた。長江三峡の群峰、逆巻きながら奔騰する怒涛を文章や写真で表現し、肌に肌に感じさせることは不可能に近い。そこに憧れの旅の真価があるのだ。旅をして初めて山登りの人たちが頂上を征服した心境を、知ることが出来るのではないか?

● 『ベトナム・カンボジア（アンコールワット）15日間』 紀行文 表題通り
 昭和62年（1987）12月27日～昭和63年（88）1月8日
 成田～バンコク～サイゴン（ホーチミン市）～アンコールワット～プノンペン～
 サイゴン～バンコク～成田

仏教三大遺跡のインドの鹿野苑とインドネシアのボロブドゥールを訪れた我等夫婦は、カンボジアのアンコールワット訪問の機会を狙っていたところ、今回、ベトナム戦争後、初めて募集した無名の旅行社の旅行に参加し、三大遺跡巡礼の願望を達成した。参加者は弁護士・医師を始め高学歴の人が多く、このようなインテリ集団の旅は始めてである。

「米国」は1960年からのベトナム戦争で敗退し、1973年に和平協定が成立して米軍は撤退し、75年に南ベトナム政府が崩壊して南北ベトナムは統一した。

「カンボジア」は民主カンボジア連合政府（1982成立）と、カンボジア人民共和国政府（1979発足）の二つの政府が成立し、内戦の戦争状態が続いている。

北ベトナムが米国に勝利した結果、南北全土が北ベトナム政府（ホーチミン政権）の支配下に置かれた以降は、カンボジアも又、北ベトナム・ホーチミンの権力下となった。

12月27日に成田を飛翔した我々はバンコクに一泊し、翌28日はサイゴンに飛び一泊、29日はサイゴン市内観光となつたが、旅行の計画や実権はベトナム政府が握っていた。30日も市内及び近郊の観光となり、カンボジアの声は聞こえてこない状態で、果たしてアンコールワットに行けるのかどうか不安であった。（サイゴンに就いては戦争末期に私はビルマに赴任する途中に立ち寄り、見学済みであった）

31日は「鉄の三角地帯」と言われる地域の「地下壕」の観光で、ベトナムが米国に勝利した原因の一つを我々を見て欲しかったからであろう。（右は地下壕の構造の概要図）

「地下壕」は河川の底の部分が入口となっているから米軍はわからず、住居・炊事場・倉庫・非常用出入口等が完備していて生活には困らない。これでは火力に依存する米軍は威力を發揮できず、文明国軍はグリラやテロに弱いと言われるとおり、敗退したのであった。

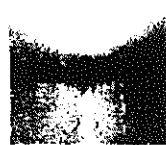
1988年元旦 今日だけは何処の国でも休日なのか、観光も一切なく、このような旅行は初体験であった。今年の初日の出をメコンの河畔で迎えよう夫婦で大通りを歩き、赴任時に泊まったホテルの前で黎明を迎えた。

（右の写真は1988年のメコンの初日の出。暁がメコンを照らす美景）

1月2日 漸くカンボジアに飛ぶことが許可された。成田出発から8日目である。ベトナム政府の指示によりトランクなどの荷物はサイゴンのホテルに残置し、手荷物一つで30人乗りのチャーター便に搭乗して6時に出発した。機はトンレサップ湖を越えて「シェムリアップ」空港に8：20に着陸した。空港付近のホテルはボル・ボト軍によって破壊され、宿泊するにも電気・水道はなく、簡単な食堂のみが営業している哀れな状態であった。（上の写真はチャーター機内の我等夫婦）

空港に出迎えてくれた現地の通訳は「ボルボト事件」以来、この地を訪れた外国人は我々一行が始めてのことだと話していた。

「カンボジア」は国名で民族名は「クメール」である。伝説ではインドのバラモン教の僧侶と酋長の娘との結婚からインド文明が伝えられ、紀元2000年頃にインド化した国



が成立したと言う。だからヒンズー教が発展したのであろう。アンコール・クメール王朝時代を経てフランス植民地となり、戦後は独立運動が起こって中立政策に移行したが、ロンソル将軍の政権奪取からシアヌーク殿下は解任され、クメール・ルージュ（赤いクメール）から民主カンボジア、そしてカンボジア人民共和国を経て再びシアヌーク時代に移り、歴史は複雑怪奇である。細部は紀行文に譲りたい。

「アンコール遺跡」は古代クメール王国の遺跡である。凡そ紀元900年から1431年まで古代クメール王国の首都として栄え、アンコール様式と呼ばれる数多くの石造建築物が造られた。そのクメール建築は殆んど寺院や神殿であった。

特徴としてはインドの宗教から遊離し、「神格化された王の祖先に対する崇拜」と「神と一体となった王に対する崇拜」という二つの目的があつたようである。寺院に祀られている「ビシュヌ」や「シバ」などのヒンズー教の神々を始め、仏陀などの諸仏は、その名前と姿を借りた特定の王などと一体化したものである。従つて神像や仏像の名と実在した者の名を結びつけたのであり、これは日本でも勿論あることは間違いないことである。

「アンコール・ワット」（ワットは大きな寺院の意）（下はアンコールワットの全景）

この寺院は東西1500m、南北1300m、幅190mの堀によって囲まれ、アンコールの遺跡で最大で最もよく保存されている。

前記したようにアンコール文化は、ヒンズー教的、仏教的文化の強い影響のもとに発達したことが、見学すると理解できた。

神なる王とシヴァ神との靈的な交わりによって王は初めて「山の王」となって王座に就くことになる。これは「須弥山」（シユミセンと読み、宇宙の山の意）を頂くインドの古代的な宇宙観によって証明される。

「シヴァ神」の信仰と王権を象徴する「リンガ」
(男根・シヴァ信仰で繁殖を象徴している)は、
豊作をもたらす大地を崇拜することになるのだと言う。寺院内の各所に「ナーガ」(蛇神・
男根を表す) や「天女」の彫刻があり、如何にも旺盛な繁殖を祈っていることは明瞭だ。

アンコール・ワットの見学の望みを達成し、シェムリアップ空港から首都プノンペン空港に到着し、当夜はメコン河畔に建っていたホテル・カンボジアナに旅装を解いた。

翌3日は市内観光となり、ポル・ポト時代の監獄所を始め有名な各寺院と王宮を見学し、最後に締め括りのように国立博物館を訪れた。4日は戦乱が遺した氣の毒な孤児院を訪問して大歓迎を受けたが、このことは生涯忘ることはできない強烈な印象を残した。

翌5日はサイゴンに飛び、同空港からエア・フランスに乗り継いで19時にバンコクに到着した。ここで一応は解散となり、我々夫婦はバンコク日本大使館一等書記官の甥の官舎に3泊4日の間宿泊し、泰国内を観光して1月8日に帰国した。細部は紀行文に譲る。

如何にして歳をとるかを知ることは、生きると言う偉大な技術の中で最も難しいことである。どのように死ぬかではなく、どのように生きるかが問題である。その意味では今回の旅行では漠然ながら、生き方を学んだような気がする。空中の楼閣のアンコール・ワットの須弥山は、クメール人の心の聖地である。彼らは他に何一つ世に遺さなかつたとしても、これだけでも大民族であると賞賛されると信じて疑いないのであった。

●『ハワイ家族旅行6日間』昭和63年(1988)3月26日～31日 紀行文なし
孫たちを引き連れての思い出の旅となつた

「ハワイ空港にて記念写真」



宿泊したホテル
ハイアット・リージェンシー



左より信次(70歳) 伸一(3歳) 文代(7歳) 光子(11歳) 直子(5歳) 幸子(9歳)
ハワイ空港へ出迎えた歓迎のハワイ人、美貴(38歳) 昭子(62歳)

●『雲崗石窟・五台山・泰山・曲阜の旅12日間』

昭和63年(1988)5月27日～6月7日 紀行文 仏教聖地五台山～孔子の里
成田～北京～大同～五台山～太原～石家莊～泰山～曲阜～上海～大阪

「慕田峪長城」(北京市内・郊外の観光は省略)新たにオープンした慕田峪長城には日本製のケーブルカーが設備されていた。長城は修理せずに昔のままの姿は良い感じであった。

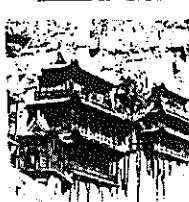
「大同」北京から夜行列車で早朝に着く。大同は戦国時代以降、戦乱の地で匈奴・鮮卑などの基地で古都らしく寺院が多い。炭鉱の町で薄汚くSIL工場の煤煙で薄暗い感じだ。

「大同石窟」は中国三大石窟の一つだが、中国には526ヶ所も石窟があると言う。「仏」(佛)という字は、「人」と「費」からなっている。「費」は人間を否定することだと言う。即ち「仏」(佛)は、優れた人間を超越しているのである。このことは大同石窟を訪れて得た最大の学問である。

(右は大同石窟寺院の最大の仏像、大仏の前に立つ私)

「五台山」中国山西省北部の五台山脈の主峰で五峰からなり海拔3058m。古くからの靈山で仏教寺院が多く、唐時代には日本の僧も学んだ。元代以降はラマ教寺院も多くなった。

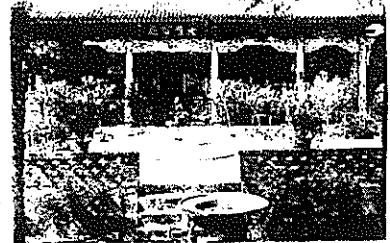
大同から五台山へ行く街道に中国の五岳の一つの「恒山」がある。その山中に「懸空寺」があった。この寺は断崖絶壁に横穴をうがち、そこに土台となる材木を差込み、外に出ている材木の上に建てた珍しい建築物があった。この懸空寺を拝観した。北魏末の6世紀の建築で1400年の歴史がある空中の楼閣であった。楼閣には仏像が10、道教の像(老子)が5、儒教(孔子)が1の割合で祀られ、全部で80体の木、塑像が祀られていた。(上の写真は懸空寺の遠景)



懸空寺から3000m級の連峰街道を南下して、五台山中央の台懷鎮の栖賢閣に宿泊。

五台山は浙江省の觀音靈場・普陀山、四川省の普賢菩薩・峨眉山と並んで、文殊菩薩の靈山として中国の三大佛教聖地である。この寺院群の見学は数多く紀行文に譲りたい。この五台山佛教は日本人留学僧によって我が国にも伝えられた。ここで最も有名な寺は文殊菩薩の居所と伝えられる「菩薩頂」で、青息吐息で108段の石段を登り参拝した。

「太原」は山西省の省都で、2泊して市内、近郊を観光した。特に「玄中寺」は今日の「淨土宗・淨土真宗」の祖庭（庭は場所の意）である。そのために此のツアーには淨土宗の僧侶が多く参加していた。所在地は太原西南約60kmの交城県から更に北西に10kmほど山奥に入った処であった。淨土宗には七人の高僧があり、第3番目が「曇鸞大師」、第4番目が「道綽大師」、第5番目が「善導大師」の三人の高僧が玄中寺に祀られていた。（右は玄中寺本殿）日本の淨土宗の開祖の「法然上人」（京都・知恩院）は、この玄中寺で修行したのであった。



太原から山西省の玄関口で事変当初の激戦地「娘子關」を通り、懐かしい「石家莊」から新設された鉄道で山東省の省都の「濟南」に向かった。濟南観光は省略する。

「泰山」 济南から高速道路を南下して名峰泰山の麓にある登山基地の泰安市に到着。泰山に関する多くの説明等は紀行文に譲るが、泰山は中国五岳の第五位で、秦の始皇帝以来、皇帝が「封禪の儀式」を行った所である。道教信仰の中心地で、海拔1524mである。（封禪の「封」は、土を盛り壇を造り天を祀る。「禪」は地をならして山川を祭ること）泰山登山は現在は労せずしてロープウェーで登れ、年間五千人の日本人が登山している。山頂に「天街」と彫刻した石坊が立ち、歴代皇帝が天に誓った「詩碑」が立っていた。

（右の写真は泰山山頂の歴代皇帝が天に誓った詩の石碑）



泰山を下りた所に「岱廟」（タイビョウ）がある。岱は泰に通じ、泰山の神靈を祀る神殿が岱廟であった。歴代皇帝が「封禪の儀式」を行った所が岱廟で始皇帝以来受け継がれている。即ち、山上での封は天を祀り、山麓の禪は地を祭るのであった。

「曲阜」泰安市の南方の曲阜は孔子の生誕地で、孔子の墓と廟がある地である。そして孔子の直系の子孫が住む家の「孔府」も曲阜にあった。曲阜は春秋時代の「魯」の国都で「魯城」と呼ばれ、その古城の一部を視ることが出来た。「孔林」という地区は孔子の一族の墓地のある處で、「至聖林」とも呼ばれて曲阜の北方700mの地にあり、檜・楓・松・柳などが10万本以上も植えられていた。又、墓の数も10万以上もある大墓苑であった。

（右の写真は孔子の墓）



孔子の墓碑には「大成至靈文宣王之墓」と刻まれていた。この称号は元の武帝が追贈したものであった。孔子は唐の玄宗の時には「大宣王」、宋の真宗の時には「至聖文宣王」と送り名され、明時代になって大論争の結果、単に「至聖先師孔子」と称すことになったと言う。しかし墓碑には上記したように、明時代の初めまで改刻されずに存在していた。

「孔廟」は孔林の南にあり、老柏の林の中に建っていた。紀元前1世紀の前漢時代の半ば以降、儒家思想は封建社会の正統的な思想となり、18世紀の清まで20王朝が61回も拡張して現在の廟となった。以下は略す。

●『スイス・北イタリア・南フランス・パリーの旅13日間』 紀行文 表題通り

大阪～ソウル～チューリヒ～ツェルマット～マッターホルン～コモ～ミラノ～
ヴェネツィア～フィレンツェ～ピサ～ニース～モナコ～カンヌ～マルセイユ～
パリ～ソウル～大阪

昭和63年11月

15年も前に欧洲12ヶ国を歴訪してから先年、地中海沿岸からポルトガルを旅し、今回漸く欧洲各国を再び訪れることが叶えられたのであった。

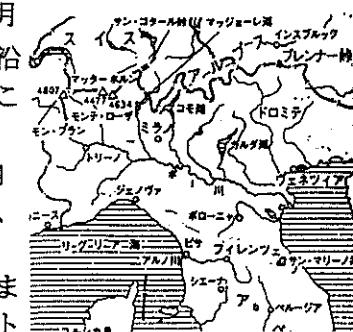
名称は「水」を意味するスイス最大の都市「チューリヒ」は二回目だったが、町の教会から橋の欄干まで雪に覆われ、清廉潔白な感じが一杯であった古都も格別な味があった。

チューリヒからマッターホルンの山麓の町ツエルマットまでは強行軍であったが、スイスの高速道路は四通発達してトンネルが多く、除雪は完備してアルプス観光には支障なしであった。 (上は関係図)

バスはチューリヒ南方のルツエンで停車して屋根のついた「カペル橋」を見学し、その後は一路ツエルマットに向かって進出した。冬季のスイス・アルプスも地下トンネルで難なく突破してバスは「テッシュ」駅の大駐車場で停車した。ここからツエルマットまでは全車両の進入は許されず、自然環境保護のために登山電車を利用しなければならない。

夜が白々と明け始めると4478mのマッターホルンの名峰が、窓一杯に映ってきていた。谷底の街ツエルマットから乗車した登山電車は暖房が効きすぎて汗ばむようだ。

急勾配を電車が登っていくとピラミッド姿のマッターホルンは神々しく感じ、標高3090mのゴルナーグラート駅まで所要時間は45分であった。真正面のマッターホルンの氷食尖峰の斜面の傾斜は45度で、テレビ映像で見る映像とは比較にならない鋭さを感じ、天上で遊んだ恍惚感は私の筆舌では表現できない。(右はマッターホルンを背景)

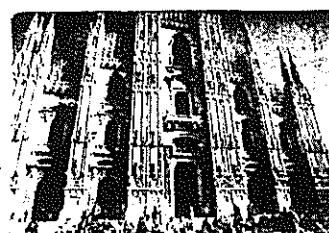


翌日は名峰の姿や登山電車に離別してバスは北イタリアの「コモ」にむかった。気宇壮大なスイスアルプスの中でも有名な「シンプロン峠」(標高2005m)には、ナポleonのイタリア遠征を記念するイーグル像が立っていた。

アルプスの南麓に拡がるマッジョーレ湖の湖畔街道を快走し、イタリア北部の「コモ市」に10時間後の午後6時に到着した。コモ市は織物で有名で中世の寺院の多い街であった。

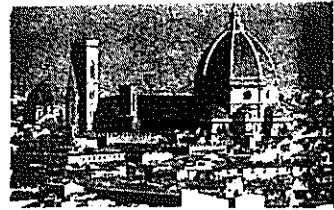
「コモ」で宿泊し、イタリアは北が働いて南を養っているという言葉を思い出しながら、「ミラノ」に向かい、1974年の前回の訪問を思い出していた。

「ミラノ」はイタリア第二の都会であり経済の中心地である。高層建築物の近代都市であるが、古い町並みに足を踏み入れると芸術の国イタリアの空気が溢れ、この街を一層魅力的に感じさせていた。(右上の写真は中世イタリアの大聖堂)



「ヴェネツィア」アドリア海に面した港湾都市で122の島と400以上の橋からなる「水の都」。サン・マルコ大聖堂などの史跡が多く、ゴンドラなどの風物で世界的観光地として有名である。ガラス細工も有名だが、細部は紀行文に譲りたい。

「フィレンツェ」とは「花の都」の意味で美しい街並みであった。イタリア・ルネサンスの中心地だけあって歴史的な建築物や美術品が多く、アルノ川を渡った丘の上からの眺望は忘れられない。(右の写真はフィレンツェの景観)



「ピサ」は小学生の時から知っている名前である。紀元前10～6世紀に栄えた町で、洗礼堂、納骨堂などの並んだ奥に建っている塔が、有名なピサの斜塔であった。1174年に工事を開始したが、地盤の沈下の為に完成は1350年であった。幸い私は斜塔に登攀して頂上の鐘も突けたが、現在は傾斜が甚だしくて登れないらしい。(右の写真は斜塔を背景にした私)

「ニース」ピサから地中海に臨んだイタリア最大の港湾都市・ジェノヴァに立ち寄り、コロンブスの生誕地と聞いて敬意を表し、フランスとの国境を通過した。するとニースの夜景が宝石のように映り出し、パーク・ホテルに旅装を解いた。



地中海に臨んだ海岸は風光明媚な温暖のためコート・ダジュールと称した避寒避暑地である。文化の中心アクロポリスやオペラ座・旧市街の城壁などを見学し、ニースのカーニバルを想起していた。詳細は紀行文。

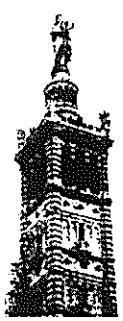
「モナコ」子供の頃から世界で一番小さい国と教えられていたから、夢のようであった。建国の由来は複雑だから紀行文に頼らなければならないが、フランスの保護国として生き延びていることは国民の総意であろう。美しい港湾都市の丘の上に「大公宮殿」が海洋を見下ろすように建ち、衛兵も毅然として立哨していた。

「グラン・カジノ」は王宮のある旧市街を下っていくと、そこに劇場や社交場があった。そこが紳士淑女の遊ぶ街・モンテカルロでカジノの場所である。しかしながらアメリカのラスベガスを知っている私には、このグラン・カジノは全く子ども扱いの感じであった。カジノからニースに戻り、ニース最高のホテルの夕食に鼓腹撃壊し、ツアーチの連中と夜のニースの街を徘徊して思い出をつくった。(上はモナコ王宮と衛兵)



「カンヌ」ここもニースと同じく避暑・避寒地でコート・ダジュールの中心都市として有名である。他に一つ有名なのは、ニースとカンヌの中間に「ナポレオンがエルバ島を脱出して上陸した地点」があった。そこには彼を記念して教会も建てられ、凜然とした彼の立像も立っていた。(右下の写真はマルセーユの丘の上に立つ教会の塔)

「マルセーユ」はフランス第一の貿易港で、南フランスの中心の百万都市である。紀元前600年頃、ギリシア人の殖民によって建設され古称はマッシリアである。我々はマルセーユと云えばフランス革命の時、マルセーユの市民がパリへと進撃したときに歌った「ラ・マルセイエーズ」を思い出す。自由と平和を求めるフランス国歌の発祥の地で懐かしさを覚えた。バスの中の我々を歓迎するかのように手を振る姿は印象深い。残念ながら時は11月30日で日没は早く、観光箇所には案内されたが闇の見学であり、記憶に残るのは高い丘の上に立っていた教会の塔だけである。これは旅費が実に安く、それに参加した我々は一言半句も文句は言えないものであった。私個人としては翌日の早朝に暴走族のオートバイに跳ねられて一日入院する不名誉な事件を体験した。



●『大草原のモンゴル紀行15日間』昭和64年(1989)6月30日～7月14日

紀行文 表題の通り

新潟～ハバロフスク～ウラン・ウデ～イルクーツク～ウランバードル～ホジルト～カラコルム～ゴビ～ウランバードル(ナーダム祭)～イルクーツク(バイカル湖)～ウラン・ウデ～ハバロフスク～新潟

当時のモンゴルは東西冷戦下のソ連邦の隸下に属していた関係から日本からの直行便ではなく、新潟からハバロフスクに飛び、その先の予定はあって無いに等しい状態であった。そのために予定に無かったウラン・ウデに往復とも立ち寄り、ハバロフスクも二泊させられ、肝心のモンゴルの滞在時間が削られてしまった。細部は紀行文に譲る。(上はモンゴル地図)

6月30日に新潟を飛翔してハバロフスクに着いてから、何の案内もなくイルクーツク間に滞在させられ、ウランバードルに到着したのは7月4日の夕刻であった。

『モンゴルの歴史は「元朝秘史」が唯一のもので、これが無かつたらモンゴルの歴史は伝えられなかつた。今年で763年(平成15年現在)前に書かれた。詳細は紀行文を』

「ウランバードル」中国語では庫倫(クーロン)と称し、17世紀頃、この地にチベット仏教の高僧(活仏と称す)が廟を建ててから、この地方の中心地となった。その寺の名は「ガンダン寺」で、モンゴルのラマ教の総本山である。モンゴルの最古の宗教はシャーマニズム(巫術)で、男巫・女巫を通じて神靈の世界と交渉した。チンギス・ハーンが西夏王国を滅ぼすと、その国に広まっていたラマ教(チベット仏教)がモンゴルに伝わった。そして、モンゴルのハーン(汗)は宗教には寛容でラマ教を保護したのである。

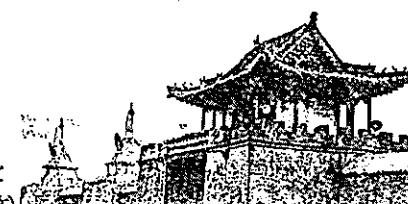
ガンダン寺は総本山らしく山門は三層で院内には七堂伽藍が建っていた。(上は山門)

「ソ連兵忠靈塔」ウランバードル市の南のセレベリ川を渡った丘の上に立っていた。日本軍の軍旗が降伏する絵が描かれていたが、恐らくノモハン事変の光景であろうか。憤慨。

「ボクド・ハン宮殿」ウランバードル最後の活仏のボクド・ハンの居所で豪華であった。「活仏」とは生き仏ではなく、佛・菩薩・聖僧などの転生者と考えられている高僧のことだ。ダライ・ラマなどを言う。

「ホジルト」モンゴルの3日目は外国人観光客専用のベース・キャンプの見学で、ウランバードル西南450kmの地点に設備されていた。外人用ゲル(ペオのモンゴル語)が30個ほどが整然と並び、ゲルの内部は中央に薪ストーブが置かれて湯は常に払引き、寒さも感じず快適な感じであった。(右上は蒙古服を着用してゲルの前に立つ私)

「カラコルム遺跡」モンゴル帝国の王都の遺跡である。世界を席巻したモンゴル帝国の金城湯池は白い城壁で囲まれ、現在は孤城落日の姿のみを残して世界制覇の面影はない。400m四方の城壁で囲まれ、城壁の上には108個の煩悩を表現した卒塔婆が建ち並んでいた。支那大陸から中央アジアを越えてボーランドやハンガリーまでも手中にした帝国の王宮も、今は城壁と一部の小さな宮殿のみで、「創業は易く守成は難し」と古語の通りであった。(右はカラコルム遺跡城壁の跡)



「日本人墓地参拝」7月8日、予め我々がウランバードルに到着時にモンゴル政府に対し、日本人墓地参拝の許可願いを提出してあった。それが許可されたから早速参拝となつた。ソ連はジュネーブ条約を踏みにじり、満州の関東軍将兵60万人をシベリアを始め衛星国の復興の為に酷使し、その犠牲者が6万人と言われる。ウランバードルのスフバードル広場を中心とした市街地は全て日本人捕虜を使用して建築したのであった。到着すると早速、出てきた墓守に志を与えて鍵を開けさせ、低頭して慰靈を申し上げた。

(上は日本人墓地の墓の横に立つ私)



「ゴビの町・ダラン・サダカド」漸く7月9日になってゴビの玄関口に着いた。「ゴビ」とは「草の生育の悪い荒地」という意味で、南北500~1000km、東西1600kmの地域である。放牧に適した土地ではなく、放牧に適さない土地がゴビであった。

ダラン・サダカドのゲルのキャンプに一応は落ち着くと、オリホン砂丘の見学に疾走した。日本のような砂丘はゴビでは珍しい存在であった。それが終わって砂漠で生活している遊牧民のゲルを訪れた。羊やラクダはゲルを遠く離れて、草の少々多い場所へ行って草を食み、水のあるゲルの傍には子供の家畜と人間だけが残っていた。夕刻になると放牧した家畜を集めるために乗馬した男の出番となり、ゲルへ連れ戻すのであった。

翌日の7月10日はゴルハン・サイハン山のイリヨンヨン・オム氷河の見学となった。道もない砂漠の中を疾走したバスは山に突き当たって停車した。そこには氷河が横たわり、標高は1974mと記されていた。全く仙境である。ゴビと云えば砂漠と思うと間違いで氷河まである2000m級の連峰まであった。その氷河を眺めてジンギスカン料理を味わったが、これは格別であった。

(右はゴビの氷河)



「ナーダム祭」7月11日は革命記念日で祝祭日である。

「ナーダム」とは蒙古語で「人が集まる」という意味で、我々一行は9時にゴビを出発してウランバードルに到着し、スフバードル広場で軍隊のパレードを見学した。その後は各種競技が行われるスタジアムに向かう、歓迎されながら貴賓席に着いて観戦した。

「角力」はモンゴル人を最高に沸かせていた。体重制限も時間もなく無制限で、草原の上で土俵もない。勝負は相手を地面に倒した時に決まり、手や膝を突いた程度では勝負にならない。敗者は勝者が抜けた腕の下をくぐり、勝者は帽子をかぶって両手を高々と挙げて舞っていた。



「弓技」古来からモンゴル人は弓の名手で、そのためには世界制覇も果たし、鉄砲の出現までは戦闘は弓矢であり、今でも伝統が引き継がれていた。

(上は角力、右上は弓矢競技)

「競馬」文明国の競馬とは異なり、2歳馬は15k、3歳馬は20k、4

歳馬は25k、5歳馬は28k、6歳馬は30kと別々に行われ、馬は去勢した牡馬に限定、旗手は6歳~12歳までの少年少女であった。

「バイカル湖」ウランバードルを7月12日朝7時に離陸し、9時にイルクーツクに到着し、東方70kのバイカル湖の遊覧となつたが名前は有名だが施設は皆無で寒村であった。(左の写真はバイカル湖で)



●『トルコ古代遺跡とガンダーラ仏教遺跡11日間』

紀行文 表題の通り

平成2年(1990)4月13日～23日

成田～カラチ～イスタンブル～イズミール～ペルガモン～エフェソス～アンカラ
～カッパドキア～イスタンブル～ボスボラス海峡～イスラマバード～タシクラ～
マリ村観光(カシミール地方)

(下図はトルコの地図)

成田を発ってイスラマバードに立ち寄り、カラチに20時に着陸して宿泊したが翌日の夜中の4時に飛翔し、思いがけなくもサウジアラビアの「ジェッタ」空港で翼を休めて、イスタンブル空港に滑走したのは11時で、発展途上国の航空機は時間厳守はない。

「トルコ」は中国の古代史では「突厥」(トッケン)で、私のトルコ旅行は二回目であった。

「イズミール」は古代ギリシアの植民市で小アジアの重要な海港であった。それからローマ時代を通じて繁栄し、ローマが没落してトルコが侵入した。この地はトルコの英雄ケマルパシャの活躍したところで、トルコの反ギリシア、反ロシアの理由が理解できた。



「ペルガモン遺跡」はイズミール北方100kmの古代都市で、ペルガモン王国の首都となってから、ヘレニズム文化(ギリシア的な思想や文化に由来する精神)が盛んになった。古代は「ペルガモン」と称し、二つの遺跡に別れ、一つはアスクレピオンという区域で、列柱廊の参道、円形神殿、竜堂、野外劇場で、他の一つのアクロポリス王城はアテネ神殿、ゼネス神殿、野外劇場などがみごとであった。以下は紀行文に譲る。

「エフェソス」紀元前11世紀にギリシアの植民市として始まった港湾都市で、世界最大のローマ遺跡として有名である。エジプトの最後の女王クレオパトラ7世も歩いたと言うアルカディアの道や、半円形劇場、体育館、図書館、浴場、数々の神殿など、眼を見張るものばかりであった。

(右は古代の図書館で紀元前の建物に驚く)

「アンカラ」古代ローマ、イスラム帝国時代の遺跡が多く、旧称はアンゴラであり、3000年以上もの歴史がある古都で、アナトリア高原の中心で標高は1000mである。「アナトリア博物館」は必見の所で、欧州のように略奪品ではなく質の高いことで有名である。「アタチュルク廟」我々の学生時代には「ケマル・パシャ」と教えられたが、チュルクは「トルコの父」という意味で、第一次大戦ではギリシア軍を攻撃して帝政を打倒し、トルコの近代化に勤めた将軍であった。(右は夫婦でシシカバブを食べたアンカラのレストラン)

「カッパドキア」とはトルコ東部の古代地名で、紀元前15～前12世紀にはヒッタイ王国の中心地となった。ヒッタイとは紀元前2000年頃以降、小アジア一帯で活躍したインド・ヨーロッパ諸族の言葉を使用する民族の一派の称で、それが繁栄した国家でもある。鉄製武器や戦車の使用により雄大な王族が建設したが、前12世紀ころ海上から異民族の侵入を受けて急速に衰退した。楔(クサビ)形文字と象形文字の記録が残っており、6～13世紀の洞窟修道院が多数残っていた。(右は妖精の煙突)



「ボスボラス海峡クルーズ」カッパドキア～アンカラ～イスタンブルと夜行寝台列車でハイデルバシャ駅に到着し、クルーズとなつた。ボスボラス海峡はギリシャ語で「日出する国」という意味で、10年前に訪れたが時間の経過は実に速い。海峡の両側にある要塞を眺めて通過すると重要性が窺われ、現在は大橋が二本も架けられ景観は抜群であった。（右の写真はボスボラス海峡クルーズの船上の妻とトルコ国旗）



「軍事博物館」クルーズが終わって金角湾の北の町に入ると、大口径の砲身が数多く据えられた軍事博物館に案内された。親日国家のトルコは軍楽隊の演奏で歓迎した。館長の将校に挨拶して記念に撮影し、帰国後に各一枚を送付した。（右の写真は左は軍楽隊、右は隊長と私）



「イスラマバード」4月21日、トルコのイスタンブルからパキスタンの首都に到着。インドから分離独立した時はカラチが首都だったが、最南端の不便から移動したのである。イスラマバードで記事にしたいのは型破りで貴賓のある大モスクである。イスラム各国のモスクはドーム型だが、此處のは三角屋根の略大理石の建築で、ラマダンの時期だったが拝観を許可され、素足になって内部も全部見学できた。（上は華麗なモスク）



「ガンダーラ美術」とは、紀元前後頃から5世紀頃までの間に作られたギリシア・ローマ風の仏教美術の総称である。ガンダーラ美術を代表するものは仏像彫刻で、仏教社会で仏像が作り始めたのはガンダーラだと云われている。「ガンダーラ仏」の特徴はギリシア的な表現によって釈迦像を造っていることだ。高く豊かな眉（マガ）を頭に戴き、ヨーロッパの風貌をもち、肉体は逞しい姿である。インド彫刻のような官能は見られない。それはギリシア的な男性像を理想、美の表現を出発点としているからである。5世紀に近くなると塑像の彫刻が多くなり、ガンダーラ彫刻の作風を脱却した独特の美しさを持ったものとなつた。タクシラの塑像彫刻はその意味で興味深い。

「タクシラ」元来はギリシア語である。発掘された遺跡で確認されたものは前6世紀のペルシアのものが最古で、続くアレキサンダー大王による支配が前326年に始まり、彼の帝国の崩壊後、インドのアショカの時代に仏教が根を下ろした。（紀元前3世紀）その後も幾度か支配者が交代したが仏教は衰えず、約200年にわたりはタクシラは仏教及び仏教美術の中心地となつた。

「タクシラ博物館」アフガニスタンのカイバル峠の手前にあり、ガンダーラ美術の宝庫で、仏像、彫刻、金銀細工、コイン、宝石など、遺跡からの出土品を多く保存していた。右の写真の右側の「断食する仏陀」や左側の「西洋人の顔をした釈迦像」や涅槃像など、釈迦の一代記の彫刻が整然と陳列されていた。その他シルスフ遺跡やシルカップ遺跡は紀行文に譲ることにした。



「マリ村観光」インドとパキスタンの争点となっている「カシミール」問題に日本人に关心を持たせたい目的か、特別に国境の村の見学に出向いたことは幸運であった。細部は紀行文に譲るが、宗教問題のヒンズー教とイスラム教との大問題で、我々のような門外漢が関わることではない。万年雪を頂いたカラコルム山脈が見えていた印象は強く残つた。

● 『52年目の満州と北京独り旅10日間』 平成2年(1990) 6月14日～23日
 紀行文 表題の通り

成田～北京～大連～奉天(瀋陽)～新京(長春)～ハルビン～北京～成田

何時も同じ場所、同じ人間関係、同じような時間の流れの繰り返しでは精神的に解放されず、旅は精神的な家出だと満州の地を選んだ。昭和13年以来の52年振りであった。

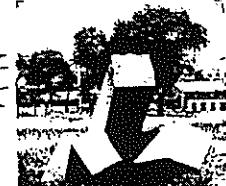
成田を発った搭乗機は大連は濃霧のため北京に飛んで一泊、翌午前中に大連に到着した。(右は旧満州地図)

「大連」日清戦争で日本、三国干渉で支那～ロシア、日露戦争で日本へと変わった気の毒な土地である。それらのことは紀行文に譲る。



「奉天」、途中の「鞍山」は製鉄所で思い出が深く、「撫順」は更に懐かしい。「遼陽」は橋大隊長の奮戦の地で記憶は明瞭であった。奉天(瀋陽)の観光は先ず市内にある清朝第二代ホンダイジ・太宗の陵墓の「北陵」の見学から始まった。それより驚いたのは「纏足」(てんそく)を見たことである。纏足は漢民族の習慣であり、満州は完全に漢民族に支配されたことの証明であった。「故宮」奉天の故宮(故=古)は清朝第一代ヌルハチ、第二代ホンダイジの皇居である。規模は北京の故宮に比べると面積は十二分の一と小さいが、造りは北京と同様である。「張学良旧居」、蒋介石を西安で幽閉して国共合作をさせたのは張学良で、現政権の共産党にしてみれば神様である。共産党国家の恩人としてこのように祀られていることは驚きであった。しかし上官である蒋介石を部下の張学良が幽閉したことは肯定できず、下剋上である。

「柳條湖」の満州事変発祥の地には、記念に三本のレールの形をしたコンクリート製の軌条が立っていたが、現在は引き倒して野原に捨ててあった。北大営の敵の兵舎を探したが見つからず残念であった。



(右は柳條湖の線路の傍らに記念碑として立てた軌条は横倒した)

「張作霖を爆死させた皇姑屯駅」にタクシーを飛ばして見学したが、策士が策に溺れたような感じを受けた。まだまだ上策があった筈だと線路の上に立ってみた。

「長春」(新京)、昭和13年時分は駅から軍司令部の建物が見えたが、大都市となった今は面影は何一つ見えない。「旧皇居」は今は「偽皇居」と呼び、内部の参観も自由に許可されていたが、昔の莊厳な感じは消えていた。新京と言えば甘粕大尉の「滿映」(満州映画会社)が有名だったが、これを引き継いだ会社は現在も映画を製作し、「ラストエンペラ」もこの会社の製作であった。

「関東軍総司令部」は日本の城郭の天守閣を模した建築である。現在は中国共産党吉林省委員会の看板が掲げられていた。(右は旧司令部)



「ハルビン」昔はロシアの満州の総基地司令部のあったところで、駅頭にあった伊藤博文の銅像も撤去されていた。その他は紀行文に譲ることにする。

「731部隊跡」は正式名は関東軍防疫給水部である。化学戦や細菌戦の研究機関で、タクシーで20kmほどの地点にあったが、跡は中学校となっていて化学戦や細菌戦の臭いのするものは何一つ残されておらない。私が北支那戦場で使用した化学戦時代では、この731部隊の存在も知らない状態で、戦後になって初めて知ったのであった。

「北京郊外独り旅」、戦時中から数えると北京の観光は十数回にも及び、団体旅行の観光コースは決められた場所に限定されているから、出発前から単独行動を計画して旅行社に依頼し、タクシーの予約を依頼した。

「盧溝橋」は支那事変（戦後に日中戦争と呼ぶ）の勃発の地である。その後いかに変化したか、中国側が如何に宣伝しているかを調査したいから訪れたかったのである。一般的の観光は北京の北方の地区が主体で概ね盧溝橋は外されていた。今回は個人だから時間をかけてゆっくりと見て回った。盧溝橋は戦時中とはすっかり変貌して橋と言わず、皇帝の書いた詩碑と言わず全てが新設され、橋の両側というか川の两岸の砂地であった原野はぎっしりと家屋が建ち並び、昔日の面影は全くなくなっていた。事件当時に有名になった一文字山も消え去り、日本軍の侵略を誇大化するために「盧溝橋史料陳列館」を新設し、嘘八百の歴史と陳列物を並べていた。憤慨しながら見て回ったが、そもそも盧溝橋事変は共産党の「劉少奇」の一昧が発砲したことが発端である。事変を起こして国民党の軍と日本軍とを戦わせ、漁夫の利を獲得しようとしたのが共産軍であった。これが定説となっている。細部は紀行文を。（上の写真は盧溝橋の大理石製の欄干の彫刻と私）



「香山公園・碧雲寺」、香山公園は膨大な面積で見学するにも広く過ぎて、入らずに眺めるだけで反対側の碧雲寺を見学した。驚いたのは「白松」の大木であった。白い木肌の樹に青葉が茂り、世にも珍しい松の木であった。この寺は1925年に北京で急死した孫文先生の遺体が二年間も塔の中に安置され、それから南京の中山公園の墓に移された。

「居庸関」、何回も八達嶺の万里の長城の見学に訪れたが、その直ぐ手前にある居庸関の関所は見たことがなかった。今回は自由な独り旅だから初めから絶対に見たいと所望していた。この居庸関は元時代（1271～1368）に作られたのが始まりで、関所の堡壘は今と違っている。元代のものの関門のレリーフは梵語・チベット・漢・西夏・蒙古・ウイグルの六種類の文字で、仏典が刻銘されていた。清時代（1616～1912）の関所は元時代の関所の南側にあり、年代の差は一目瞭然であった。騎馬民族以来の戦場となった居庸関は、観光客が八達嶺の万里の長城にとられて寂しい限りで残念であった。一見する値は充分あると信ず。（上は居庸関と私）



「雍和宮」場所は故宮の東側の東單（トンタン）の通りである。王府井（ワンプチエン）の東側にある東單通りは戦時中は酒場の町であったが、酒の飲めない私はここに足を運んだ記憶は無い。雍和宮の敷地の奥行きは1000mほどもあり、時間をかけてゆっくりと拝観する時間はなかった。この宮は清代の雍和帝が造った「ラマ寺」である。この寺で有名なのはダライ・ラマが乾隆帝に寄贈した大仏で、一本の白檀の木で彫った弥勒菩薩像であった。その高さは33m、幅は8mの巨大な仏像で乾隆帝時代にラマ寺院になった寺である。

今回の旅路は運命的な出会いとの懐古、あるいは回顧の旅で、「夏草や兵（つわもの）どもの夢の跡」の旅であった。そして旅は又、旅を作る気持ちで旅をしなければ旅でないと、痛感したのも此の旅であった。

過去のことを思い出して懐かしく想い、親しみを深めることが懐古であり、懐旧である。一方、やや反省を含めて振り返り、過去のことを思うことは回顧ではないだろうか。その意味は大同小異で、今回の旅は懐古の意味が強かったかも知れない。

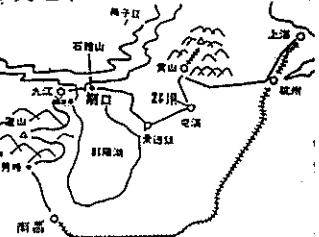
● 『南昌～廬山～九江～景德鎮～黃山～杭州～上海 13日間』 紀行文 表題の通り

平成2年(1990)9月20日～10月2日

古希を過ぎた我が身も草木のように枯れていく運命にあり、人間も自然の一部だと悟りながらの旅であったと、今でも強烈な印象として残っている。そして共産党の南昌、詩で有名な芦山、陶器の景德鎮、中国第一の奇形の「黃山」が含まれる稀な名企画であった。

(右は今次旅行の経路図)

ツアの人たちは中国語を話せる中国通ばかりで意気投合だ。



「南昌」ここは1927年8月1日、朱徳の指揮する紅軍が武装蜂起した故地である。人民解放軍(共産軍)の発祥の地で、蜂起した革命軍が蒋介石の国民党軍を撃破した歴史的な都市であるから、町中に8・1の名称が氾濫していた。私は市内観光後、単独で輪タクに乗車して南昌八一蜂起記念館や朱徳と周恩来の居宅などを見学した。それは紀行文に譲る。南昌の庄巻は、武昌の黄鶴閣、岳陽の岳陽楼と並ぶ江南の三大名楼の「藤王閣」であった。唐時代の創建で江西省出身の民族的英雄「文天祥」が最後に戦った地でもある。名称の由来は唐の藤王が命名した。(上の写真は江岸に聳える藤王閣)



「長征」蒋介石軍の総攻撃で共産軍は敗退し二年間も退却したことを長征と称している。

「香炉峰～廬山」南昌を発つて北方160kmの廬山に向かう。廬山は霧に覆われていたが運よく香炉峰は顔を出し、一条の白滝も見えていた。香炉の蓋のような形から名が付けられたと言うが日



本では珍しい形ではない。(右上の写真は雲の上に顔を出した香炉峰)

「廬山」、北は長江、南は鄱陽湖に望む廬山は水氣のために雨や霧が多く、晴れることが少ないと有名である。だから我々も霧の中の觀光となった。下と上では1000mの標高差があり夏でも涼しく、美景のために文人墨客の集まるは当然だ。その中で素晴らしい景観は「天橋」であった。天橋の由来は、明の始祖・朱元璋が戦いに大敗して逃げたが、断崖絶壁で対岸に渡れず万事休すとなつた。その時、天から下りてきた竜が横臥して橋を作り、竜の背中を渡って廬山に退却することができたと言う伝説である。(右の写真は断崖絶壁の天橋の奇観)



「九江と湖口」、廬山を下山して東林寺の見学を楽しみにしていたが、道路工事のために進入できず長江に出た。そこは「陶淵明」の生誕地であり、彼の有名な「帰去來の辭」の石碑が立つ「九江」であった。九江を過ぎ鄱陽湖の入口にある町が湖口で、後方の「石鐘山」は歴代の詩人が天然の長江の美を讃めた詩は750に及んでいた。

「景德鎮」中国最大の陶磁器の生産地で、初めて公表された24の歴史文化都市の一つである。唐の武徳年間に土民の「陶王」という者が初めて焼窯を作り、白磁を焼いたことが、「陶」の字の起源だと古書に書いてある。景德鎮は2000年の陶磁器の歴史を持ち、北宋の景德年間(1004～1008)に今迄の昌南鎮を景德鎮に改名し、景德鎮と呼んでいる。景德鎮磁器の特徴は「白如玉、明如鏡、薄如紙、声如磬」と形容される。即ち玉のように白く、鏡のように明るく、紙のように薄く、磬(古代の打楽器)のような音がすると賛美している。工場も見学したが場内には運搬用のレールが敷かれ、大規模には驚嘆させられた。



(右上の写真は市内に煙突が林立する景德鎮)

「屯渓」(黄山市)、黄山市は悠久な歴史を持つ街で秦時代に黟県が設けられている。その官庁街が屯渓で、宋時代、明時代、清時代に建てられた「老街」と書いた「牌坊」が入口に建っていた。黄山登山の基地となっている屯渓の街は賑わい、群衆であふれて我々一行も一泊した。(右は屯渓の老街の牌坊)



「黟県」(イケン)、屯渓の西北15kmの古い村の見学となつた。山間の部落には「小桃源郷」と書いた岩石が多く、訪れた村落は2200年の歴史があると書いてある。現在でも明・清時代の住宅が3000余戸もあり、中国古代民居建築の芸術の宝庫だと記していた。この黟県では宏村、西遞村などの数箇所を見学したが、風光明媚はもちろんのこと、室内の備品は骨董品ばかりでその見事さは驚きであった。それに加えて村民が精魂こめて作った栗料理の味は、生涯忘れられない珍味であった。



(右うえの写真は明時代の古い町並)

「黄山登山」(黄山は麓で一泊、山上で三泊)

黄山は東西30km、南北40kmの大山塊で、36峰の大峰と36の小峰があつて黄山峰と称されている。標高は千m以上が30、最高峰は1860mの蓮花峰。昔の寺の跡が宿泊所で、他には一軒の家屋もない仙境である。夏の黄帝がこの山中で不老不死の妙薬つくりに明け暮れたと言う伝説から、唐朝以来、黄山と呼ばれるようになった。

(右の地図は黄山の全般図、西海飯店に三泊)

黄山の美観を表現するのに「黄山四絶」という言葉がある。それは奇松、雲海、怪石、温泉を言う。又、二湖、三瀑、六溪、二十潭(深い淵)があり、これらの水と山とが相映じて美観を一層高めている。全長2804m、高低773mのロープウェーは麓から山頂の駅まで8分間で到着し、遊歩道が東西南北に通じている。

「夢筆生花・筆架峰」これはロープウェーの中間の西側に見える奇峰で、細かく孤立した筆の形の石峰の上に松が生えており、これを「夢筆生花」、即ち夢の中の筆に花が生えたという意味だという。筆架に数本の筆が並んだ形の岩山も見えていた。



(右の写真は夢筆生花(右端の岩)と筆架峰(左側)の景観)

「清涼台」は黄山観光の中心で見晴らしが良く、日の出は最高の景観らしい。どこの国の山でも同じように宣伝材料にしているが、この黄山の清涼台の日の出の景観は別格であった。



(右は清涼台から谷をへだてた獅子峰を望んだ景観)

「飛来石」はどの山の峰からも遠望できるほど高く聳えていた奇石で、黄山にきて飛来石に登らなければ黄山に来たことにならないだろう。そのように思いながら青息吐息で征服し、拍手喝采であった。巨大な石の高さは12m、重さ360tである。(右は飛来石の遠望した景観)



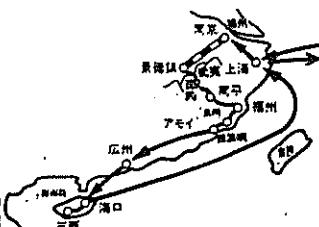
数限りない黄山の記事は紀行文に譲る。三泊して下山した10月1日は中国最大の祝日「国庆節」で建国記念日で大賑わいであった。我々は「杭州」に一泊して何度目になるか西湖の三潭印月にも訪れ、翌日は上海から帰国の途についた。

●『海のシルクロード15日間（中国編）』平成3年（1991）3月5日～19日
紀行文 表題通り

上海～楊州～南京～景德鎮～武夷山～福州～泉州～アモイ～広州～海南島～
(旅立つ1週間前の2月24日から多国籍軍がクエートに進入し湾岸戦争が勃発)
(3月3日に寺前大隊の慰靈祭が長崎・大村で開催され、同日、田島計彦様の好意により天草四郎のキリスト教徒の原城を見学し、翌日の福岡空港発で上海へ飛ぶ)

「揚州」、日本人なら「鑑真和尚」(688～763)の故郷だと誰でも知っている地である。隋の煬帝(ヨウダイ)が黄河と揚子江を結ぶ運河を建設したこと有名で、日本の遣隋使・遣唐使も揚州を経て長安(現西安)へと向かった。当時の海のシルクロードの基点でもあった。揚子江の名称はここから起きたのである。

(右は今次旅行の経路図)



「景德鎮」南京は省略。夜行寝台列車にて7日9時に景德鎮に到着。出迎えた中国の通訳は又、お会いしましたねと挨拶し私を覚えていた。観光は略す。



「武夷山」景德鎮を8日5時発の快速列車で邵武駅に15時に着き、東北方85kmの武夷山麓の山荘に着く。北側には大王峰が聳えて南宋の儒学者「朱熹」の生誕地であった。武夷山は道教の中心的な聖地で、急斜面の登山道を登りつめると山頂に「天遊觀」と言う二層の大樓閣があり、そこからの展望は絶景中の絶景であった。

(右上の写真は天遊觀の展望台からの景観)

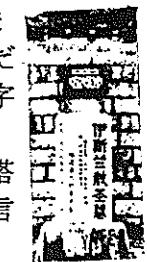
下山した午後は武夷山36峰の渓谷を流れる九曲の流れを竹筏で下った。その岸壁で初めて「風葬」の穴を見た。さすがに道教の山らしい感じがしていた。細部は紀行文を。

「福州」、黒龍茶で最高の岩茶の名産地・武夷山を離れ、再びノンストップの快速列車で温泉町の福州に着き、駅前の温泉ホテルに旅装を解く。我が国の「和菴」が暴れまわった地方で、南蛮の福建省の省都「福州」の歴史等は紀行文に譲る。翌日の福州観光の第一は「空海入唐之地」の石碑が立つ「湧泉寺」であった。空海は50日間、この寺に滞在したという。清水が湧き出ている回廊の岸壁に「寿」の彫刻があった。元来、「寿」の意味は「帰ることを忘れる」ことだと知った。故に「ひさしい」「命が長い」となるのである。福州で忘れてならないのはアヘンの没収・輸入禁止した欽差大臣・「林則徐」である。彼を祀る祠堂に参拝したが、石人・石獣が並んだ参道は皇帝や偉人と同様の待遇であった。(右は林則徐之碑)



「泉州」ここは唐時代から宋・元の7世紀から14世紀にかけて海上交通で大発展し、アラビア、イタリア、インド、東南アジア、日本などとの貿易船で賑わい、シルク、陶磁器、茶などが積み出され、香料、貴金属などが輸入した。当時はアレキサンドリア港と並ぶ世界の二大貿易港で、「第二のヴェネチヤ」とマルコポーロの東方見聞録に記している。それが泥が堆積して水深は浅くなり、國際貿易港は過去のものとなった。泉州観光は当時のイスラム寺院「清淨寺」の参観で、「神はアラー神一人である」という意味の「認主独堯」の額が正面玄関に掲げられ、アラビア文字のコーランを刻んだ石板が並んでいた。清淨寺の裏山はイスラム教徒の墓地で、イスラム教は漢字で「伊斯蘭教」と書いていた。

(右の写真はイスラム教徒の墓碑)

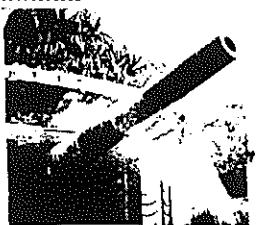


墓地の西側に「解元寺」という中国四大古刹の一つが建っていた。その石塔は中国最古のものと言われている。そこには「老君岩」という道教の開祖と言われる老子の石像が立ち、野外の宗教博物館のような感じがしていた。

「アモイ」この地は宋、元時代から南洋方面との貿易によって栄え、清代以降は華僑の主な送り出し港となった。廈門（アモイ）は明時代の1387年、外国の侵犯に抗議するため、島に城と堡塁を築いたことから「大夏之門」（大きな家の門の意）と呼ぶようになつたことが、名称の由来である（夏=家）。観光は華僑博物館から「南普陀寺」へと進み、

「胡里山砲台」の見学となつた。砲台の対岸の「金門島」は台湾政府が占領中である。かつて中国大陆と台湾の両政府が強く対立していた時代には、年中、対砲兵戦が実施されたが、その時に使用した砲台は現存している。

(右の写真は胡里山砲台の大砲)



「鼓浪與島」（コロンス島）はアモイ島から約500mほど離れた大小16の島からなつていて、島の西南海岸に一つの巨石があり、波浪がぶつかって太鼓のような音を出したことから、明朝は鼓浪與島と命名したと言う。島の中央の丘の上に「日光岩」という岩山が聳え、観光客はその岩山を目標に登山するのであった。歴史的には明末、清初に民族的英雄「鄭成功」はアモイと金門島に兵を駐屯させ、ここを水軍の訓練場として練兵し、日光岩を指揮場としたのであった。（右は日光岩、下は英國人別荘）



「鄭成功」（母は日本人で平戸の人）の銅像は島の北端に立つていて。

1843年のアヘン戦争後は南京条約によって、アモイは5港の一つとして開港すると、コロンス島は英国に強制的に占領され、1902年には英、米、仏、独、日、蘭等の領事館が進出し共同鍾開地をつくった。だからコロンス島に渡ると世界各国の建築博物館の感じがしていた。鄭成功等については紀行文を参考にされたし。

「広州」アモイから空路広州に着いたが、ここは11年振りで二回目であった。天安門事件から1周年になるが、中国の添乗員は共産党を徹底して非難していた。紀行文参照。

「海南島」3年前の1988年に省に昇格した新しい省である。三国時代に海南島の一地名に過ぎなかつた部落名が、島全般を指す島の名称となつており、省都は島の北端の港町・「海口」である。島の人口は650万で、漢民族が最大で約500万人、黎族81万人、苗族4万人、残余は回族、壮族などの少数民族。海南島は海のシルクロード上にある島であった。1泊。〔右は海南島（省）の全國〕

海南島參觀游覽圖



「海口」は省都だが見るべきものは公園程度で、昔は「さいはての島」「毒ガスの島」と言われ、罪人が流された島であった。

南端の「三亞」までに鹿を養っている「觀鹿園」、島の中央の「五指山」、少数民族の街「通什」（一泊）などを観光し、「三亞」では有名な名勝地「天涯海角」の海岸の遊歩道であった。海浜の岩石には「天涯」「海角」「天空」「海角」などの石彫があり、唐・宋時代に流されてきた流刑地の海岸で、無限に広がる海を眺めて「天と海の境」と呼んだのであった。（上の写真は三亞の天涯海岸の景観）



三亞で一泊して翌日は東側の海岸道を北上し、椰子の木が生えた「興隆温泉」で昼食を摂り、夜は海口泊。翌日は海口空港～上海泊。翌々日に帰国の途に着く。

● 『メキシコ・アステカ文明とマヤ文明8日間』平成3年(1991)5月4日～11日
 紀行文なし(2回目につき)

成田～メキシコシティ～テウティワカン遺跡～ウシュマル遺跡～チ첸・イツア
 一遺跡～カンクン遺跡

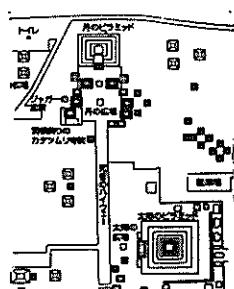
「アステカ文明」は14～5世紀にアステカ族が
 メキシコ高原に築いた文明で、マヤ文明を継承し、
 特異な絵文字や暦を使用している。多神教信仰で人
 身供養を行い、壮大な神殿を建設した。しかし15
 21年にスペイン人のコルテスに滅ぼされた。



「マヤ文明」は中央アメリカ、グアテマラ高地から、ユカタン半島にかけて栄えたマヤ族の古代文明で、紀元前後に亘って4～9世紀が全盛であった。トウモロコシの焼畑農業を基盤として神權政治を確立し、巨石建造物を造り、天文・暦法・象形文字などを発達させた。(上はメキシコシティ～ユカタン半島の地図)

「メキシコシティ」先ず「三文化広場」の見学から始まった。アステカ時代の神殿の遺跡と、17世紀初頭にその上に建造された教会、それと現代高層建築の三時代の文化が共存しているから名付けられた駅付近の大遺跡であった。「カラドラム」はメキシコの全ての教会を統括する総本山で、前回よりも更に大きく増築されていた。「独立記念塔」などメキシコシティの交差点には塔や記念碑が聳えており、一つの特徴であった。「チャブルテペック公園と城」は巨大な森林公園で、中には七つの博物館、動物園、遊園地と四つの湖があり、市民の憩いの場であった。園内の小高い丘に城砦があり、現在は大統領官邸であった。

「テウティワカン遺跡」はメキシコシティの東北方45kmにある大小数多の神殿の基壇がある神都で、メキシコ中央高原の最大の古代都市遺跡である。紀元前200～150年頃に出現し、200～500年頃にピークを迎えたという説が有力である。しかし其の興亡の歴史には多くの謎がある。13世紀末にこの地を支配したアステカ族が壮大な廢墟を見て、テウティワカン(神の都)と名付けたことだけが解っている。私が1976年に訪れた時は草ぼうぼうで未整理だった。遺跡の東側から太陽のピラミッドの248段の石の階段を登って高さ6.6mの頂上に立った。頂上は正四角形の台地となっていて往時は神殿が建っていたと言う。(右上は遺跡の配置図)



「死者の道」テウティワカンは南北のメインストリートは幅40m、全長2300mで、アステカ人がこの地を見た時、道の両側に建ち並ぶ朽ち果てた遺跡を見て、墓所と間違えたことから、この名が出たという。(右の写真は死者の道の東側にある太陽のピラミッド)

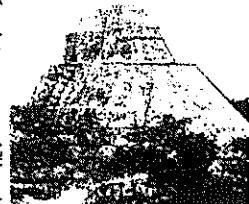


「太陽のピラミッド」は高さ6.6m、一辺の長さが225mと言うテウティワカン最大のもので、太陽崇拜の宗教観の存在を示している。「月のピラミッド」は死者の道の北端にあり、高さ4.7m、底面は144mと128mで第二の規模を誇っている。太陽のピラミッドは一日数千人の労働力で少なくとも50年は要したと言う。遺跡は海拔2400mの高原盆地に建設され、人口は10～20万と推定。(右はピラミッド頂上にて)



「ウシュマル遺跡」メキシコシティから空路、ユカタン半島の「メリダ」に到着してマヤ遺跡の観光に出発。メリダは「野口英世博士」が黄熱病の研究で足跡を残した町である。

「魔法使のピラミッド」はマヤ古典後期を代表する宗教都市の遺跡で、5～6世紀頃に始まり、9～11世紀に最も栄えた。平地に高さ30mの丸みを帯びたピラミッドがあり、東西の階段は急勾配で、卵から生まれた魔女の子供が一夜にして造ったという伝説がある。実は300年以上もかけて五の神殿を積み重ねたものである。(右は魔法使ピラミッド)



「総督の館」はマヤ建築の最高傑作の一つに数えられる壮大な建築物で、縦153m、横180m、高さ18mの第一の基壇に、更に二つの基壇を重ね、其の上に建てられた長方形の建物は全長約100mである。

「チチェン・イツァー遺跡」は西暦900～1200年にかけて繁栄したマヤ後期最大の都市遺跡である。ユカタン半島で最も重要な観光地である。チチェンは「泉のほとり」、イツァーは「水の魔術師」というマヤ語で、マヤ族の一派のイツァー一家を指している。平坦な樹海の中に2～3km四方の広域にわたり、数百の建造物が残されている。

「カスティーの城」城と名付けられた底辺は55m、高さ23mの壮麗なピラミッド型神殿である。別名を羽毛のある蛇・ククルカン神殿という。北階段の脇から内部の階段を登ると、もう一つの神殿があり、ヒスイの目をもつ赤いジャガーの玉座と、チャックモール像が安置されている。



又、神殿全体がマヤ暦を表わしている。9層の基壇は階段で二分されて計18ある。ピラミッドの四方にある階段は各々91段で、 $91 \times 4 = 364$ 。これに頂上的一段を加えて一年365日を表している。(右下は戦士の宮殿・千本柱の間)

「戦士の宮殿」カスティー城の東北に戦士の宮殿(千本柱の間)があり、そこには有名な「チャック・モール」があった。



「カンクン」カリブ海に面したメキシコを代表する国際ビーチ・リゾートである。

「トゥルム遺跡」はカンクンから129kmのカリブ海に面した宗教都市遺跡で、高さ12mの断崖の上に立つ「カスティージョ(城塞)」と、均整のとれた建物、それに壁面の美しい「フレスコ神殿」が見所であった。ここはカリブ海に面した遺跡としてマヤでも特異な存在であった。(右下はトゥルム遺跡の景観)

トゥルム遺跡は海辺以外の三方を城塞で囲い、海辺は6mの断崖絶壁で、四方をがっちりとガードした城塞都市となっていた。出入口のある場所は五ヶ所しかなかった。この都市が建設されたのが紀元1000年から1400年頃で、マヤ文明の末期にジャングルを抜け出したマヤ人たちが、新たな道を求めて海に出て、海上貿易に乗り出したことは想像に難くない。同時に都市の守りを固めた方式は過去の影響を受けていることが良く解る。1517年から始まったスペインのユカタン侵攻の前、海を渡ってきたスペイン人が最初に見たのがこの要塞都市で、1847年から勃発したマヤの反乱の際、マヤの兵士を迎撃するために軍隊がこの要塞に送り込まれたが、要塞都市の利用価値が証明された。以下は省略する。

●『五丈原～漢中の旅9日間』平成3年（1991）9月4日～12日

紀行文 表題の通り

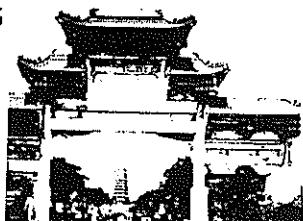
北京～西安～五丈原～宝鸡～天水～漢中～西安～
 「北京独り旅」9月4日夜、北京着。5日前中は一行と離れて独り旅。郊外の「玉泉山」へとタクシーを飛ばしたが未開放地区のため立ち入り禁止で、直ぐ市内に引き返して道教の本山である「白雲觀」を訪れた。「觀」は道教寺院の大きな寺を言う。この白雲觀は唐の玄宗皇帝が老子を敬い建立した寺で、全道教中で第一位、老君（老子のこと）を祀る。次いで「白塔寺」を訪れた。ここには中国最古・最大のラマ塔があり、元のフビライ汗が国策の一つとして建立したもので、チベット式の仏塔であった。午後は一行と合流して久しぶりに北海公園に行き、それから西安に飛翔す。西安の有料道路を走り西安賓館に宿泊。

(上は旅行の経路図)

「武功鎮」、翌日6日は漢の第五代の武帝の陵墓や楊貴妃の墓を六年ぶりに訪れた後に、武功鎮を見学する。ここは諸葛孔明と魏の仲達が戦った古戦場の一つで、孔明が陣を五丈原にするか、武功鎮にするか思案した地であった。（場所は西安～五丈原街道の中間）

「法門寺」は洛陽の白馬寺（1981年に訪問）と並ぶ古刹で、5千年の歴史を有し、黄帝は臣・周呂を封じ、殷の大史周もこの地に封ぜられ、紀元前11世紀に周はここに建国。漢の明帝の時に仏教が伝来してこの寺院が建築され、北魏の孝文帝の時に仏舍利が奉納された。中国史に興味のある私にとっては貴重な訪問参詣であった。

(右の写真は法門寺の山門と仏塔)



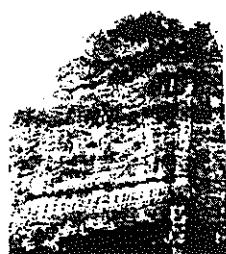
「五丈原」、五丈鎮部落で下車して丘を眺めた途端、私の頭は1800年前に逆戻りして三国志の世界が脳裏に浮かんできた。五丈原の名称の由来は、丘の高さが五丈ほどであったから名付けられた。丘の上に通じる曲がりくねった石段を上りつめると大平原が展開し、古色蒼然とした老樹の茂った中に「五丈原諸葛孔明廟」が建っていた。我々年代の者にとっては、諸葛孔明は精神的な目標として崇拜され、私は自然に襟を正して参拝した。「死せる孔明、生ける仲達を走らす」という有名な言葉が生まれた五丈原については、紀行文に譲りたい。

(上の写真は五丈原に建つ孔明廟の山門)



「宝鸡」は孔明が「泣いて馬謖（バショク）を斬る」と言ったことで有名である。孔明の信任を得た馬謖が孔明の命に背いて戦い、魏軍に大敗した結果、孔明が馬謖を斬ったという地が陣倉（ゼンソウ）の谷の「街亭」（ガイティ）で、現在の「宝鸡」の地であった。宝鸡で一泊したが、今年の日本人のツアーは二回目と聞き、日本人の関心は薄いことに驚いた。

「天水～麦積山」宝鸡から天水までの渭水に沿った道ではなく、250kmの山間道で8時間要した。即ち孔明が出陣した祁山道であった。天水から45km離れた麦積山は、地層が麦を積み重ねたようだから名付けられた石窟寺院である。崖の下から岸壁を仰ぐと大仏を中心にして54の石窟があり、全山の140余の石窟は1953年に発見されたもので新しい。



「天水」は甘肃省の東南部で古代文化の発祥の地の一つで、春秋時代の秦の発祥地であった。この地方はチベット族の血が入っており、玄奘三蔵も先ず天水を目指して西安を出発している。（右は麦積山石窟）

「漢中街道」(蜀桟道)、天水から漢中までの街道には秦嶺山脈があり、蜀の桟道を突破する難コースであった。李白の詩にある「蜀道の難きは青天に上るより難し」と言われた街道は諸葛孔明の進軍、補給路である戦略道路であった。(右は漢中地区の地図)



「張良廟」は韓信及び蕭何と並ぶ前漢時代の三大功労者であった。張良は作戦計画・情報収集の神様として劉邦に仕えた。韓信は直接戦闘の指揮に優れ、蕭何は内政・補給に長じていた。この三将軍の協力によって劉備は天下を制したのである。私は張良廟がこの蜀の桟道中にあることを知らず、バスが門前で停車して初めて知った。蜀桟道の嬉しい山間の廟は豪華絢爛で細部は紀行文に譲りたい。



張良廟の位置は右上の図の中央の上付近。(右の写真は張良廟)

「漢中」と「中華思想」

(漢中は上図の中央の真下で、付近に名勝旧跡が多い)

「漢中の名の由来は」、武漢市で長江に合流する「漢水」の流の中流に位置していたから名付けられた。(間違い易い「閔中」は閔所の中の意である)。漢の高祖は未だ劉邦と名乗っていた頃、相手である楚の項羽から漢王(漢中の王)に封じられた。その後、垓下の戦いで劉邦が項羽に大勝して王朝を建て、その際に漢中の「漢」をとって国名を漢とした。

「漢」は「天漢」から由来しており、「天漢」とは「天の川」や「銀河」を意味している。天の中央に多くの星が集まるように、「漢」を中心にして世界のものが集まることである。

中国は漢帝国の建設以来2000余年、世界の中心であると言う「中華思想」は、実はこの「漢」から始まった。その意味から私は「天府の國・漢中」は憧憬の地であった。

「木牛流馬」は木製の一輪車のことである。蜀(四川省)の桟道は断崖絶壁の危険な路で、一輪車で軍の物資を運ぶことが最適だ。当時としては大発明で「戦闘は補給なり」である。

「武侯墓」は諸葛孔明の墓で五丈原と同じく漢中にも祀られ、墓陵や墓碑・建物があった。

「古定軍山」は、定軍山という小高い丘で孔明の遺言通り最初に葬った地である。過去に蜀軍と魏軍が激突した古戦場でもあり、孔明が部下を練兵した処でもあった。

「古漢台」は漢帝王の興業の地である。古漢台は漢中市の劉邦の宮廷の遺址で、城内中心よりやや東にあり、又の名を「七星台」と言う。現在は漢中市博物館となっている古漢台は、高さ8m、四周を石垣で囲んだ台上に古桂が数株あり、多くの楼閣が聳え、その雄姿は典雅で古朴であった。古漢台の東側の大門から中に入ると直ぐ右側に「石鼓」があった。



「石鼓」が漢王朝の基礎となったもので「天漢の祥」と言われている。

「天漢」とは上記した通りで、世界の中心が「漢」である。国号を「漢」とした由来もここにある。故に「石鼓」は古漢台の中心的、最古的なもので、「中華思想の根源は石鼓にある」と言われている。

(右の写真の亭櫓の下に自く見えるのが中華思想の根源である石鼓)

「押将壇」は、武将の韓信が大将に任命された由緒ある地であった。206年、壇を設けて大将に任命された韓信は、大軍を統率して赫々たる武勲をあげた。劉邦は魏・齊・燕・趙等の五大国を平定し、ついに宿敵である「項羽」を四面楚歌のうちに「垓下」(安徽省)で破り、漢王朝を建設したのであった。



三国志の中でも陝西省の「閔中」から「漢中」にかけての最後の場面を見聞きし、特に「中華思想の根源」を学んだ今次の旅の意義は真に深く、まさに天の時を得たと喜んでいる。他は省略し紀行文に譲ることにする。(右は押将壇)

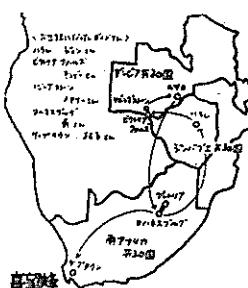
● 『喜望峰とビクトリア大瀑布10日間』

紀行文 題名の通り

平成3年(1991)12月28日～平成4年1月6日

台北～ヨハネスブルグ～ジンバブエ・ハラレ～ビクトリア・フォルズ～ザンビア・リビングストン～迎新年～ヨハネスブルグ～プレトリア～ゴールド・リーフ・シティ～ケープタウン～ケープ半島～喜望峰～ヨハネスブルグ～台北～

「台北」、東京・関西・九州の人達は近くの空港から台北に集合し、ヨハネスブルグに飛行することになった。私は一行とは別行動をとり、空港まで出迎えてくれた台北の友人「林忠誠」と再会し、次男の運転する車で彼の住宅に案内され大歓迎を受けた。私と同年輩の彼は旧制台湾一中出身で旧台湾総統の「李登輝」氏と中学同級生、現在は台湾の財界人で各種の事業の経営者であった。残念ながら数年前に他界し謹んで哀悼の意を表します。(林忠誠氏との記念写真と今次の旅行経路図)



「ヨハネスブルグ」に到着が5時間も延着のために市内観光は中止。ジンバブエの首都の「ハラレ」に向かって飛び立った。ジンバブエについては紀行文を参照されたし。

「ビクトリア・フォルズ」、ハラレ空港を5：30に飛翔した機の操縦士は女性で、我々に好意を寄せてビクトリア大瀑布の真上を旋回してくれ、フォルズ空港に9時に到着した。この大瀑布はジンバブエとザンビアの国境を流れる「ザンベジ川」の中流にあり、世界三大瀑布の一つに数えられている。ビクトリア瀑布は高さ108mで、水量は豊富で断然トップである。発見者は当時の英國のビクトリア女王の名をとって付けたのであった。この峡谷はイスラエルの死海から続く巨大な断層陥没地溝である(上は瀑布)



「ザンビア共和国」、ビクトリア・フォルズからバスで移動して二泊した町が、「リビングストン」という「ザンビア」の町であった。瀑布の大轟音はどこまでも響いていた。「ザンビア」には72の部族があり、言葉も違い、その一つを訪れた。やや平坦な土地に大小の茅葺の原始的な住居が並び、太陽の国らしい景観であったが、数奇な運命を背負う彼らに同情は禁じ得なかった。



「サファリ一見物」続いてザンベジ川クルーズに出掛けたが、船上からカバの姿が見えていた。次はサファリーの見物に移った。自動車にも怯えないキリン・シマウマ・インパラ・ヴァフアローだけで、肉食動物のおる「ボツナワ」の「チョベ国立公園」はキャンセルになった。(上はザンビアの原住民部落、下はザンビア・サファリーのキリンとシマウマ)



「ザンビア・ホテルの大晦日と元旦」リビングストン博物館を見学してホテルに着くと大晦日の「年越しそば」が用意されていて、明けた元旦は薦樽の鏡開きで始まり、海外でのこのような歓待は初体験であった。(上の写真の左は大晦日、右は元旦の宴会風景)

「南アの概要」1652年にオランダ東インド会社をつくり、オランダ移民（ボーア人と呼ぶ）が入植した。18世紀～19世紀にかけてナポレオン戦争の時、オランダと連合するフランスがケープタウンを占領することを恐れたイギリスは、1795年に予防的に占領した。一時、オランダに返還したが、ナポレオンの敗北後の1814年に再度占領してイギリスの植民地とした。その結果、ボーア人（オランダ移民）は北方の内陸に移動し、ナタール地方に共和国を樹立した。しかし、イギリスに敗れてナタールはイギリス領となった。

その後の金鉱の発見等が原因で「ボーア戦争」が勃発した。南アの歴史は複雑では非とも紀行文を必読されたい。

「ヨハネスブルグ」南アの歴史とともに紀行文を必読されたい。

「ブルートレイン」、南アが世界に誇る豪華列車ブルトレインに乗車して行政府の首都の「プレトリア」に行くことになった。白人専用列車で日本人は「白人待遇」として乗車が歓迎された。この列車は速度を競う列車ではなく、車内の設備の豪華さを誇る列車で、ゴールドラッシュで儲けて万金を惜しまずに製造ただけに、他に比類の無い列車であった。

「ユニオン・ビル」は行政府の首都で、立法上の首都は「ケープタウン」、司法上の首都は「ブルームフォンティ」であった。このビルはプレトリアのシンボルで市街地を展望できる高台に建ち市民の憩いの場。（右はユニオン・ビルの景観）

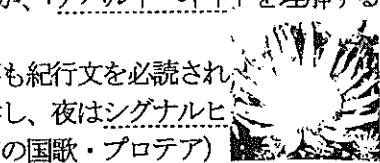


「開拓民記念堂」は南アを築いたオランダ移民のボーア人の子孫が建てた。紀行文必読
「ゴールド・リーフ・シティ」は1886年に金鉱が発見され、18世紀後半から20世紀前半にかけてゴールドラッシュにわいた当時の町を再現したものであった。

「ヨハネスブルグ」はゴールドラッシュ当時のテント村が近代都市に発展した都市で、ラッシュ100周年を記念して1986年にオープンしたのであった。細部は紀行文に譲る。

「ソウエト蜂起」は飛行機が延着して見学できなかつたが、「アバルトヘイト」を理解するためにも紀行文を一読されたい。

「ケープタウン」人口120万のケープタウンの概要も紀行文を必読されたい。この国の「国花のプロテア」の見学に農園を見学し、夜はシグナルヒルから夜景を楽しんだ。（右の写真は南アの国花・プロテア）



「テーブルマウンテン」は町の西側にある自然の山の造形美は神秘的な魅力にあふれ、本当にテーブルのような形をしていた。ケーブルカーに乗車して1086mの山頂に上ると、ケープタウンの海岸から市外が眼下に展望され、そのパノラマに絶景哉と叫びたい心境であった。



（右はテーブルマウンテンと下は市街地と港の景観）

「ケープ半島」テーブルマウンテンからケープ半島の大西洋岸をドライブして喜望峰に向かった。途中に数百頭のアザラシが生息する「シール・アイランド」を小型船で見学し更に野生の「ヒビ」や駄鳥に遭遇したことは幸運であった。昔は獅子・象・豹が棲息していたと言う。



「喜望峰」は、1488年にポルトガル人のディアスがインド洋に出ようとしたが、強風のために岬を越えた地点で漂着し引き返した。他国には「嵐の海」と称して航路を独占していた。大西洋とインド洋の合流点は温度差が大きく、海が荒れたようだ。（右は喜望峰の突端）

●『中国仏教聖場・普陀山・天台山～紹興～杭州の旅10日間』 紀行文 表題の通り

昭和4年(1992)5月22日～6月1日

成田～上海～船・普陀山～船・寧波～天台山～紹興～杭州～上海

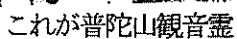
先に文殊菩薩の五台山、普賢菩薩の峨眉山を参詣した際に、観音聖場の普陀山は是非とも参詣したいと念願していた。今回のコースには道元禅師の天童寺や最澄大師の天台山も含まれ、杭州の岳王廟にも参拝したいと思って友人井上氏と共に参加した。(右は上海～普陀山～舟山群島の関係図)



「舟山群島」上海の有名なホテル上海賓館に一泊し、黄浦江の港から舟山群島の普陀山に出航すると思っていたところ、市中から南へバスで二時間余りの「芦潮港」からの出航であった。舟山群島は大小400余りの島嶼からなり、鄭成功の歴史や倭寇の歴史でも有名な列島である。



「觀音聖場・普陀山」は、中国五代時代の後梁の貞明2年(916)、日本僧・惠鑄が山西省の五台山から觀音像一尊を押領し、日本に持ち帰ろうと明州(現在の寧波)から出航し、普陀山沖を航行中に風浪のために運行不能となり、惠鑄はこの普陀山に寺を建立して觀音を祀ろうと祈願したこと、風雨は静まり「潮音洞」付近に上陸して小さな寺を建てた。これが普陀山觀音聖場の始まりだという。(上の写真は惠鑄が上陸した潮音洞付近の景観、手前に觀音堂がある)



「普濟禪寺」は中国各地に「普陀」を名乗る寺が78ヶ寺あるその総本山で、島の80余の寺の本山でもある。觀音とは觀世音の略称で、世間の衆生の声を聞いて解脱せしめ、慈悲の化身といわれる菩薩の名である。詳細は紀行文に譲る。

「梵音洞」は島の東海岸の中ほどにある断崖絶壁の海岸にあり、本堂には徳利(男性性器と推察する)を手にした觀音が祀られ、本堂の右側の崖の唐けい目が「女性性器」にそっくりであり、数百人の信者が合掌して祈っていた。恐らく子宝祈願だろうが、日本でも女性性器のことを觀音様と称しているが、ここが発祥の地かも知れないと解釈した。



「寧波」日本との歴史は古く往時の遣隋使・遣唐使は寧波を目標に航海した。しかしまともに着く船はなく、そのために波を鎮める意味で「寧波」と命名したと言う。我々一行も普陀山觀音聖場を去り、連絡船に乗船して「寧波港」に向かった。(右は今次旅行の関係図)

「天童寺」の創建は西晋時代(265～316)で、咸康10年(869)に皇帝から「天童寺」の称号を下賜された。中国の禪宗は宋時代になって隆昌し、南宋になってから天童寺は禪宗の名刹になった。1,100年頃には僧侶は1000人以上となり、4000人収容の僧堂が完成した。我が国の「曹洞宗の開祖」の「道元禪師」は、1223年に入宋して如淨(ニヨジョウ)大師に習禪し、帰国して永平寺を建立して曹洞宗を開創した。天童寺には道元禪師の肖像画と靈蹟碑が祀られていた。

「阿育王寺」、インドのマウリヤ王朝第三代の王(在位前272～前232)が「アショーカ王」である。漢訳仏典では「阿育」「阿輸迦」などと訳され、インドを統一した最初の王である。この阿育王寺は4世紀頃から造営が始まり、当初は「律」を専門とする修行の寺であったが、後に臨済宗の根拠地として栄えた古刹である。この寺の精進料理は有名だ。

「天台山」と「開祖・智顗(チキ)」、寧波の天童寺と阿育王寺を参観した一行は、蒋介石の生まれ故郷の奉化市を通過し、寧波～天台間160kmの街道を4時間で快走して午前中に、天台山の麓にある「国清寺」に到着した。天台山といえば開祖の「智顗」に関して述べなければならないが、師の修行期間が長期であり、これらは紀行文に譲ることにした。

「天台山・国清寺」国清寺は天台宗の總本山で總道場である。旧名を「天台寺」と称し、隋の593年の創建である。現在の寺院は中国で最も完備した寺院の一つだと言われる。

「国清寺の名の由来」、智者大師（智顥）が575年に天台に入山してきたが居所が決まらなかつた時に三人の僧が現れた。一人は天台山の下に適地があるから使いなさい。そして大師に寺を建立するのは何時ごろかと尋ねた。大師は寺を建立するのは今ではなく、混乱している國が治まり、世が清くなつてからだと答えた。これが国清寺の名の由来であった。寺の前には清流が流れ、そこで信者は斎戒沐浴したのであろう。橋を渡ると「隋代古刹」と書いた「照壁」があり、山門を入ると七堂伽藍が建ち並び精舎の気が満ちていた。

「宗派の存在」、元来、律宗、浄土宗、禪宗、天台という分け方は後世のものである。往時の仏教は最も総合的に把握されたもので、戒律の大家であった「鑑真」にも、天台宗の開祖の「智者大師」の思想にも、密教が含まれていたが宗派は未だなかった。「宗派の争いは釈迦の恥」という言葉を忘れてはならない。『密教』とは、仏教の教説のうち、最高深遠で、境地に到達した者以外は、知ることの出来ない教えである。「蜜」はひそかに隠して人に知られない、もらさない、内密、隠密なものである。

「最澄」（伝教）大師は貞元20年（804年）9月に入唐し、翌年3月に帰国した。その間、天台山の諸寺で天台教学を学び、禪や密教も学んだ。天台山の諸寺は紀行文に譲る。

「紹興」、天台山から紹興酒の産地の紹興に到着。紹興は古い歴史を有し、古代から有名人が輩出し、産物も豊富で「文物の邦、魚と米の里」と称されている。伝説によると四千年前、夏の禹王が全国の治水事業を終えた後、「諸侯を江南に集めて功績を図った」ことから、紹興は「会稽」（カイケイ）（稽=考えることで会議を意味す）と呼ばれるようになった。春秋戦国時代には南方民族の中心地で、越王「勾践」は都を紹興に築き、吳に敗れて「臥薪嘗胆」したと言う故事は有名である。私は別行動をとり単独で「越王勾践」を祀る「越王台」を訪れた。歴史の細部は紀行文に譲る。（右は越王を祭る越王殿）



紹興は「酒と水と橋」の三つの町で、橋の数は二千二百、酒は二千年以上の歴史があり、越王勾践が吳王夫差に献上したのが始まりである。この町の「臥薪嘗胆」「吳越同舟」「会稽の恥」などの故事が懐かしく思い出される。（右は八字橋の景観）



紹興では酒造工場の見学は欠かせず、旧制中学の漢文で習った有名な「会稽山」を遠望するために郊外に走り、水の都の景観を堪能するために橋とクリークの町並みを見学したが、実に素晴らしい由緒ある歴史を実際に肌で感じて回った。



私は中国戦線で三年間に亘り黃河流域を主戦場として戦闘した。この江南の水郷地帯を見ると大兵力の使用は困難であり、小部隊指揮官は頭痛の種であったと思う。（右はクリーク地帯）

「杭州」、私は四回目であった。今回は「岳王廟」だけは是非とも訪れたいと思っていた。その岳王とは「岳飛」のこと、南宋の勇将であり河南省の湯陰に生まれであった。私も湯陰に滞在した経験があり、彼が宿敵「金軍」を打ち破らんとして河南省都・開封の西方20kmの朱仙鎮まで攻撃したが、南宋の宰相「秦檜」の召還命令のために今一步のところで引き返した。彼が恨み骨髓に徹して引き返した「朱仙鎮」は、私が中隊長として初めて赴任した古戦場で、いざれをとっても私には因縁の深い思いがする将軍であった。幸いに岳飛廟（岳王廟とも称す）に足跡を残し、杭州を訪れた価値があった。

●『オーストラリア（含タスマニア）一周の旅18日間』

紀行文 表題の通り

平成5年（1993）1月13日～30日

大阪～成田～シドニー～パース～エアーズ・ロック～ダーウィン～カカドウ国立公園～キャサリン国立公園～ケアンズ～グレート・アドベンチャー・クルーズ～タスマニア島～メルボルン～シドニー～ブルー・マウンテン～成田～大阪

本年は「世界先住民国際年」と国連は発表した。オーストラリアの先住民の「アボリジニ」に引き付けられ、この旅に参加した。シドニーは二回目であり、オーストラリアの発見等に関しては紀行文に詳細に亘つて記述してあるから、それを参考とされたい。

「パース」、オーストラリア西部の英國領土宣言は、東海岸より遅れること59年後の1829年である。

囚人なしの植民地開拓は画期的なことだったが、労働力不足が発展を阻害した。日本の零下地帯から来た私は一挙に40度の熱帯にほり出され、紫外線も3倍もある人口120万のパースは緑が豊かで気に入った。市内観光の第一はアーケード街

の「ロンドン・コート」で、中世の英國を再現した感じがしていた。続く「カルチャー・センター」では特別に「アボリジニ」のコーナーの参観が許可された。彼らはアメリカ・インディアンの密集隊形



の戦闘方式を知らないから、白人はそれ程の被害は受けなかった。しかし入植者は毒を混ぜたメリケン粉を与えるなど、悪辣な手段で殺している。(左上は市内の高層ビルが建ち並ぶ景観、右上はロンドン・コートの玄関で特殊な感じがしていた)

「フリーマントル」はパースから19km離れたスワン川の河口の港町で慰靈塔が聳え立ち、古都の奈良・京都を思わせると共に、慰靈塔に捧げる市民の慰靈心に感心した。それに比べて我が国は皇室をはじめ政府も国民も慰靈心に欠けていることは嘆かわしいことである。丘の下に古城のような建物が見えていた。これは昔の監獄（1855年完成）の跡で、トンネルは鯨を運ぶ通路であった。紳士づらをしたアングロサクソンは、本心は野蛮きわまりない罪悪人であることを証明していた。（上は監獄の跡）（フリーマントルは上図）



「ロットネス島観光」、乗船はスワン川を下ってフリーマントルに寄港し、インド洋に浮かぶロットネスはフリーマントルの沖合い19kmに位置し、長さ11km、幅5kmの小島でマリン・レジャーの基地である。島には「クオッカ」という有袋動物が生息し、これを鼠と思い込んで「鼠の巣」という意味で「ロットネス島」と命名したと言う。第二次大戦の遺物の大砲が未だに撤去されていなかったが、気分の良いものではなかった。

「エアーズ・ロック」、1月16日、パース空港を発って東方1500kmのエアーズロックに向かった。その時、モンゴール旅行で一緒だった法貴氏が「閣下」と声をかけてきて驚いた。マウント・オルグを見たいと考えて操縦手に依頼すると快諾を得て操縦室に入り、マウント・オルガ～マウント・エアーズロックを上空からの写真撮影に成功した。オーストラリア大陸の中央部は赤茶げた大平坦地で、日本の14倍もある南北1800km、東西2000kmの面積だという。その砂漠の中の岩塊がマウント・オルガや、エアーズロックであり、赤茶げた土質は鉄分を含んでいるからだ。搭乗機は4時間の飛行でエアーズロックに到着。

搭乗機から降りた見渡す限りの不毛の大地にも草木の生命が育ち、ユーカリの低木の街道を走り、銀色に輝く三角屋根のホテルに着いた。セールズ・インザ・デザート・ホテル（旧名はセントラル・ホテル）は「ユララ公園」では最高級ホテルで収容人員は5000人であった。「ユララ」とは、この地方の先住民のアボリジニの部族の名称である。

「フライング・ドクター・センター」、砂漠の中の観光は暑気を避けて午後4時からで、先ず広漠とした砂漠の中に建っていた一軒家に入った。そこでフライング・ドクターの活動状況を映画で観賞したが、全て日本語であった。砂漠では小型飛行機はタクシーのようなもので、不毛の砂漠での救急医療は全てが飛行機を使用し、医者は小型飛行機の操縦免許も持っていた。緊急の場合は機内で手術も可能で、全てアボリジニ対策の医療である。感動した私は金一封をこのセンターに寄付したところ、防暑帽一個を提供された。

「マウント・オルガ」は36峰からなり、展望台は何箇所もあり、詳細は紀行文に譲る。
「エーズ・ロック」はオーストラリアを代表する観光名所で、一日中、どこからでも見えていたが、夕陽を浴びる時刻が最も美景だといわれ、18時にホテルを出発して「サンセット・ストリップ」といわれる地点に向かって砂漠の中を疾走した。この地は太陽光線が次第に弱くなつた夕陽に、岩肌がオレンジ色から暗赤色へ、さらに紫色にと七度も変化し、夕闇の中に沈んでいく山姿を眺める最高の場所であつた。一行は辛抱強く岩肌が七色に染まる光景を固唾を呑んで待機したが、砂漠の落日はあつと言つ間に沈んでしまつた。ガイドの説明では昼間の太陽光線が強烈だったため、色彩の変化が現れなかつたらしい。（上はサンセットから眺めたエーズ・ロックと私）



「暁のエーズ・ロック」4時に起床して神秘的な暁の山容を眺めようとサンセット・ストリップに向かつた。黎明が明けるにつれて絵のような光景が映し出された。しかし地平線は靄に包まれ、日の出のドラマチックな変化は見られずも残念と言うしかなかつた。

「セスナ機でエーズ・ロックを観下する」、健脚者は徒步で登山したが、私のような足の不自由な人のためにセスナ機（65\$）が飛び、オルガの山並みから峡谷を遊覧してから、エーズ・ロックの上を低空飛行してアボリジニの靈地に陶酔すること30分。満足する。

「アリス・スプリングス」（前頁地図の中央）、エーズ・ロックから北方470kmの砂漠の大都市「アリス・スプリングス」までの飛行は45分間で到着した。ここには400人のアボリジニが居住する大都会であった。単線ながら大陸横断鉄道も通過し、圧巻は「カンガルーの分厚い焼肉」にありつけたことであった。生まれて初めての終わりで、味は牛肉などは問題にならないほど柔らかく美味しく、食は砂漠の中のカンガルーが筆頭だ。アフリカや中東に輸出する産業となつた「ラクダ牧場」、1870年時代に本国への無線通信に使用された「無線中継所」などを見学し、アボリジニーの生活状態を直接的に拝見した。大陸中央部の産業は羊毛から石炭、鉄鉱石、ウランの開発で彼らの分け前は饅のぼりで、土地代だけでも莫大であった。そのため帰人たちでも大型乗用車を乗り回していた。

「ダーウィン」（前頁地図の中央北）、アリス・スプリングスを10時に飛翔して1000km北方のダーウィンに12時に到着した。市の名称の由来は、進化論で有名な「ダーウィン」が1839年に、ビーグル号で来航したことによる命名したという。人口7万の発展途上だが、アボリジニーが最も多く居住している土地柄であった。その理由は年間を通じて暖かく彼らの体質に合致しており、彼らの聖地が多いからであった。華僑も多く經濟は華僑が握っていた。世界第一と言われる「植物園」の観光から始ましたが、バスの窓から日本人墓地が目に入り、私は観光を中止して「日本人墓地」の慰靈に単身で向かつた。

第二次世界大戦時、日本軍の上陸を警戒して建造した旧要塞跡を見学の後、「州立博物館」に立ち寄った。早速、係員はビデオにスイッチを入れ、日本海軍爆撃機がダーウィン市街を灰燼に帰した大爆撃の映像を映し出した。昭和17年2月19日、宣戦布告なしに行われた海軍航空部隊の空襲は、市民は永久に忘れられない打撃で、怨念とも思える反日感情は簡単には消えないと感じた。日本人はハワイの真珠湾の攻撃は知っているが、ダーウィンの爆撃は知らない人が多く、友好の花が開くには長い年月を要するであろう。

「カカドウ国立公園」、右図のアーネムランド・アボリジニ領は、北海道と四国を合わせたほどの面積で、アボリジニは約1万人で、経済的には政府に移管され、自治は原住民に任せられている。この中のカカドウ国立公園は東西100km、南北200km

で、動植物の育成地としての世界遺産である。2万5千年前～5万年前に原住民が住み着いた場所がカカドウであった。目的地までダーウィンから300kmで、最初に目にしたのは人間の背丈の3倍もある「巨大な蟻塚」が、草原地帯に林立している光景であった。熱帯雨林を抜け出るとアラフラ海に流れるアリゲーター川の中流で、遊覧船に乗船して水上を走ると、天空に鶴が飛び、黒鳩が湿原に翼を休め、鱈は悠然と昼寝をしていた。

(右は蟻塚、大きさは両側の人間と比較せよ)

下船してから古代アボリジニの洞窟と岩壁画の見学となった。そこは精靈が住むような赤色の砂岩の断層で、洞窟の岩壁にはカンガルの壁画が薄く見えていた。石器時代の人間の生活は、彼らが遺した岩壁画を見れば明瞭に理解できた。細部は紀行文に譲る。

(右の写真は洞窟の壁にアボリジニの古代人が描いた岩壁画)

「キャサリン峡谷国立公園」(上の地図を参照)、

この峡谷はダーウィン東南350kmにあり、延々と続く蟻塚とユーカリの熱帯雨林を通過して、4時間後にキャサリン市街に到着した。この町でアボリジニの描いた樹皮画や点描画、幾何学模様の抽象画を売る店があり、一行は記念に買い求めていた。他は省略。

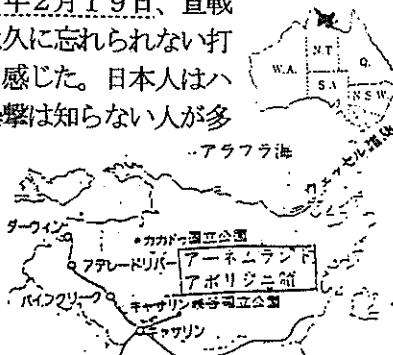
「ケアンズ」はダーウィンを飛翔して4時間後に到着。昼食後は19世紀後半のゴールド・ラッシュで賑わっていた「バロン峡谷」を見学となった。ケアンズの海岸には大砲二門がすえられ、50羽ばかりのペリカンが波の上を泳いでいた。ケアンズは歴史は浅く見るべき名勝もない。ドル箱は世界最大の珊瑚礁「グレート・バリア・リーフ」であった。

「グレート・アドベンチャー・クルーズ」

グレート・バリア・リーフの一つ「グリーン島」の観光のため、ホテル前のマリン桟橋から乗船し、海上2kmの珊瑚礁・グリーン島へと走った。ここはサーフィンを楽しむ若人向きで、老人には不向きだ。

(右の写真は海上に浮かぶグリーン島)

「タスマニア島へ飛ぶ」直行便で飛ぶ筈であったが変更となってメルボルン経由となり、16時に漸くタスマニアの「ホバート空港」に滑走した。人口45万人のタスマニアの名は、オランダ商船隊の船長「アベル・タスマン」から取ったという。面積は北海道の8割でアボリジニは7000人程度である。1803年に英國の流刑地



として入植が開始され、領有が宣言されてからは流刑囚たちはアボリジニを虐殺し、1830年には僅か300人となり、今では混血以外は死に絶えてしまった。私はビルマ戦線で英軍と戦火を交えたが、彼らは紳士づらをした殺人鬼である。

「ホバート市内観光」、人口22万のホバートは最初は捕鯨で賑わい、

次いでアザラシにまで手を伸ばし、南極への前進基地となつた。開拓当

時の面影を残すサラマンカ・プレイス通りには、レンガ造りの倉庫群が

一直線に伸びていて歴史を物語ついていた。（右は古い倉庫群の景観）

次いでネルソン山に登つた。ここは入植当時の湾内の監視所で旗信号

の古い建物が残つてゐた。南極に近いホバートは白夜の影響を受けていたのが印象的だ。



「タスマニア島縦断」、南のホバートから大陸との連絡船が出航するデボンポートまで300kmの旅となつた（前頁地図参照）。途中、ボノロング動物園で「クロアナグマ」を見、

「ローンセストン」（前頁地図参照）で昼食を摂り、キャタラク峡谷などを見物して16時

に港に着き豪華連絡船タスマン号に乗船す。全行程は個室を予約をしたため安眠できた。

「メルボルン」8時にメルボルン桟橋に接岸して市内に向かう。この地は1835年に

入植が始まり、51年からゴールド・ラッシュと蒸気機関の発達によって今の発展の基礎

となつた。それまではアボリジニが住んでいた土地で、歴史を感じながら市内に入った。

市の中心部には大丸百貨店が見え昼食は「くに」という寿司屋で日本食を摂つた。日本人

は2000人で小中学校も開校していた。歴史等は紀行文に譲る。

「フィリップ島観光（ペンギン・パレード）」はメルボルン南東130km

のフィリップ島に、暗夜にペンギンが集団で上陸

し、丘の草むらの巣に帰つて子育てる行動が、

パレードみたいに見えるからペンギン・パレード

と名付けた。昼間は20kmの沖で餌をとり、予定時刻に同じ地点に上陸する習性に驚く。

（上は暗夜に同じ場所の海浜に何百羽のペンギンが上陸して列を成して巣に向かう光景）



翌日はこの国の建国記念日で午前中は自由行動となり、大丸百貨店、ビクトリア博物館

等を市内電車に乗車して見学する。午後は「戦争犠牲者慰靈堂」を表敬参拝し、「キャプテン・クックの家」の見学となつた。細部は紀行文に譲る。

「キャプテン・クック」はオーストラリアを発見して建国の基礎を作った人物で、この家は1934年、英國から移築された小さな石

造りの家と庭で、聖地に近い存在であった。（右上の写真はキャプテン・クックの家）

（キャプテン・クック）はオーストラリアを発見して建国の基礎を作った人物で、この家は1934年、英國から移築された小さな石

造りの家と庭で、聖地に近い存在であった。（右上の写真はキャプテン・クックの家）

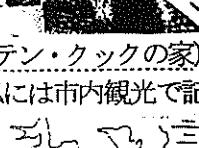
「シドニー」夜行寝台列車で早朝に到着した。11年振りである。私には市内観光で記載することなく、今次旅行で印象に残つたのはシドニー湾の入口の「サウス岬」である。「ワトソン湾」を望む「サウス岬」に立つと興奮を覚えた。第二次大戦開始の翌年1942年、日本海軍の特殊潜航艇3隻がポート・ジャクソン湾に潜入り、補給船一隻を撃沈した。この時は私は北支那戦線で戦闘中であったが記憶している。今も首都キャンベラの戦争記念館に特殊潜航艇2隻が展示されている。（右上はサウス岬からの地図、下はサウス岬と湾の入口の写真で貴重である）

（シドニー）夜行寝台列車で早朝に到着した。11年振りである。私には市内観光で記載することなく、今次旅行で印象に残つたのはシドニー湾の入口の「サウス岬」である。「ワトソン湾」を望む「サウス岬」に立つと興奮を覚えた。第二次大戦開始の翌年1942年、日本海軍の特殊潜航艇3隻がポート・ジャクソン湾に潜入り、補給船一隻を撃沈した。この時は私は北支那戦線で戦闘中であったが記憶している。今も首都キャンベラの戦争記念館に特殊潜航艇2隻が展示されている。（右上はサウス岬からの地図、下はサウス岬と湾の入口の写真で貴重である）

1月28日は終日・自由行動。29日は「ブルー・マウンテンズ観光」となつた。これは初めてのコースで、シドニーの西方に

南北に走る山脈の景勝地の観光で、「三姉妹の奇岩」やトロッコ

電車にしての観光は印象的であった。細部は紀行文に譲る。



●『サハリン（樺太）の旅5日間』(他に往復とも稚内に一泊)

紀行文 表題の通り

平成5年（1993）7月30日～8月4日

小松空港～千歳空港～札幌～稚内～大泊（コルサコフ）～豊原（ユジノサハリンスク）～真岡（トンナイ）～野田（チエーホフ）～泊居（トマリ）～久春内（イサンスク）～真縫（アルセンチエフカ）～白浦（ブズモーリイ）～落合（ドリンスク）～豊原～大泊～稚内～札幌～千歳～小松空港

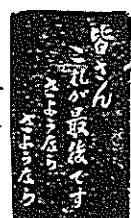
「樺太の地名」は「唐人」（カラビト）がなまって「樺太」と呼ばれたと言われている。
（右の地図は今次旅行の経路図）

軍人時代の私の出身原隊は札幌歩兵第25聯隊で満州（中国東北部）に駐屯し、終戦の時には樺太に帰還して第88師団の隸下にあり、私はビルマ戦線に出陣して激戦を展開中で、原隊の状況は全く知らず、戦後になって漸く細部を知った状態であった。今次旅行は終戦時の原隊の状況を調査したかったからであり、終戦後になって無謀なソ連軍の攻撃を受け、同期生をはじめ多くの友人知人が犠牲となった彼等の慰靈が目的であった。

「稚内～大泊（コルサコフ）」、樺太旅行の参加者の120名は定員120人乗りの「ユーリー・トリーフォノフ号」（4,575t）に乗船し、6時間の航海で深夜の24時に大泊港に接岸し、入国検査に多大な時間をとられ、真っ暗い豊原街道を走行して豊原の駅構内のユーロシア・ホテルに旅装を解いたのは午前3時であった。

「ホテル列車の旅」、樺太各地にはホテルはなく、夜は日本が寄贈した寝台列車に宿泊し、上図の上半分のみを列車で一回りする旅であった。参加者は120名中の30名である。

「逢坂」、豊原を出発してから約30分、プラットホームもない線路上で列車は停車した。ソ連・樺太はガイドも付かず只走るだけであった。ここは我が原隊が終戦時に軍旗を奉焼した場所だと直感したが、荒れ放題の廃屋が一軒だけ残っていた。駅舎だろう。（右は豊原～真岡間の鉄道図）



「真岡」、豊原～真岡間84kmを4時間もかけて漸く真岡の高台の駅に到着した。見下ろす真岡港は我々を万斛の涙をさそっていた。日ソ不可侵条約を一方的に破棄したソ連は昭和20年8月9日に対日宣戦布告した。8月15日、日本は連合国に降伏を承諾しているのに拘わらず、8月20日午前6時30分、無謀なソ連軍は無抵抗の真岡市街に艦砲射撃を開始した。そこで特記すべき事件は、真岡郵便局の電話交換手の「9人の乙女の集団自決」である（当時の郵便局は電話局を兼ねていた）。終戦までの日本では、職場は国のために死ぬ場所だと教育されていた。ソ連軍の艦砲射撃で真岡の町は戦火に包まれ、局舎にも銃砲弾が飛び込んできた。野蛮なソ連兵が上陸してくれば彼女らは凌辱されると危惧し、「もうこれまで」と覚悟した彼女たちは隣局の泊居郵便局の交換手たちに、「皆さん、これがさいごです。さようなら、さようなら」と最後の電話をかけ、青酸カリを服毒して自決したのであった。この「9人の乙女の碑」は現在、右上写真のように稚内公園に建立されている。細部は紀行文に譲る。

「荒見沢・熊笹峠の戦闘」真岡の日本軍は住民の被害の増加防止のため、市街北方2kmの荒見沢と熊笹峠に布陣して応戦した。此處の大隊長は私と中国戦線で共に戦った人で、吾が身のような感じで戦況の跡を眺めていた。これも細部は紀行文に譲ることにする。

「野田」は真岡北方 50k の田舎町で、今次列車の旅は停車しても案内ではなく、何時間かの自由行動であった。野田の通りには人影はなく、2人の朝鮮人婦人が僅かの野菜を台の上に並べて商いをしていた。戦後の樺太に残留した朝鮮人の苦労はテレビ画像で承知していたから、ライター・ボールペン・チュインガム等を進呈したところ、花とキューリを私の手に握らせ、流暢な日本語で「有難う」と涙を流して何回も礼を言っていた。帰国を考えないのかと尋ねると住みつけた所が好いと答え、「住めば都」であった。それはソ連は南北朝鮮人ともに北朝鮮にしか帰さなかったからである。

(右上は今次列車の旅の経路図、下は野菜を売る樺太に残留した韓国人老女)



「泊居」は野田の北方 40k の荒涼とした灰色の町で、人家はまばらながら建っていた。日本時代の遺物としては、泊居大橋のコンクリートの門柱は壊せないから残っていた。山手に神社の鳥居と燈籠が見えていたのは、当時の日本人は神國日本の不敗を信じていたからである。真岡郵便局の9人の乙女が最後のお別れの言葉を送った所が泊居郵便局だが、その跡形もなかった。



「久春内」は真岡北方 125k の樺太を東西に結ぶ最短距離の西側で、間宮林蔵もここを横断している。僅かに駅員の棲む小屋が浜辺にあるだけで、ハマナスの真っ赤な花が寂寥を慰めていた。(右は寝台列車)



「真縫」(マヌイ)真夜中に列車が停車していた処で目覚めて気が付いた。古い駅舎あるのみ。

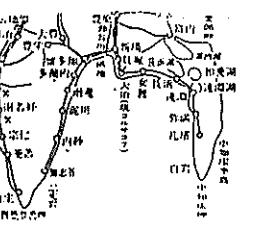
「白浦」は3両の廃車が鉄道員の宿舎で、駅前に朝鮮人の老婆が野菜を売っていた。町を歩いていくとロシア人の老夫婦に逢った。お辞儀をしてライターなどを提供すると一変して態度が変わり、彼等のアパートに案内してくれ、室内写真を数枚撮影して記念とした。



(上は町の住宅)

「落合」は戦前から炭鉱の町で王子製紙の工場があり、王子製紙経営の樺太鉄道と樺太庁鉄道の連絡駅であった。鉄筋の旧駅舎が残っており、珍しく「柳絮」の綿のような花が空中に飛んでいた。懐かしい光景である。ここにも朝鮮人の老婆が野菜売りをしていた。

「大泊と富内湖」、一泊二日の列車の旅が終わって豊原のホテルで宿泊し、翌日は大泊の観光となった。大泊は1790年、松前藩によって漁場と交易所が開かれた「九春古丹」で、日本領時代の1000mの長い棧橋が見えていた。大泊から最後の緊急疋開船が出航したのは8月23日で、それ以降はソ連海軍が海上封鎖してしまった。「富内湖」は間宮林蔵記を読むと詳しく記述されている。



「豊原市内観光」駅前広場には珍しくレーニン像が立ち、明治41年に発足した樺太庁舎はソ連の市庁舎となっていた。終戦成立後の豊原は役所を始め学校、病院、各家庭に至るまで白旗を掲げていたが、無謀なソ連機の爆撃で人口18万の豊原は灰燼と化してしまった。観光は青空市場、

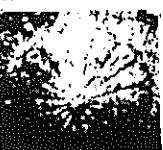
旧豊原公園、樺太神社跡を見て、最後は日本時代を偲ばせる日本式城郭の「樺太博物館」で、現在はサハリン州博物館となっていた。



しかし展示品の殆どは日本時代の物であった。

(上の写真は旧樺太博物館)

懐かしく思い出されたのは、我々時代の小学校の読本に掲載されていた、北緯50度の国境線を示す「菊の紋章」の石であった。(右は菊の紋章の石)



私の調査によると樺太に残留させられた日本人は約20万人、朝鮮人は約4万3000人で、戦争の被害は各所に見られたが詳細は紀行文に譲る。

- 『アラビア半島一周の旅 15日間』 平成6年(1994)2月8日~22日 紀行文 表題通り
成田~カラチ~クエート~バーレーン~カタール~オマーン~アラブ首長国連邦~カラチ~
「カラチ」に一泊して市内・郊外を観光したが、何回にもなるから省略する。

(右の地図は今次旅行の経路図)



「クエート」、「湾岸の歴史は重要だが長文となるため紀行文に譲ることにする」。真夜中にクエート空港に到着。宿泊先のシェラトンホテルの支配人以下多数が空港まで出迎え、機内食を済ませている。我々を深夜に拘わらず、ホテルに着くや否や歓迎の大宴会を開いた。コーランでは「客人は神が遣わしたもので、全く見ず知らず人でも歓待せよ」と教えている。「湾岸戦争の回顧・クエートの概要」は長文のため紀行文に譲る。

「クエート観光」湾岸戦争の戦火で荒廃していると予想していた。しかし予想は外れて大発展して戦禍の跡は見えなかった。淡路島の約3倍の面積で、人口は出稼ぎの外国人を含めて200万人、それに対しオイル・ドラーの成金は復興に如実に現れていた。

「戦争記念品」として残置されていたのは無傷に焼け残った

米国豪華客船と、イラクの戦車群約200両(ソ連製)が広場に整然と並べられていた。

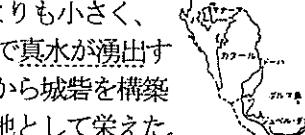
(上は捕獲されたイラクの戦車群200両)



夜の連なる金銀宝石市場(ゴールド・スク)は、買いあさる女性天国であった。その女性は目だけを出した真っ黒いガウンを着用していた。食料品の買い物も男性の仕事で、女性の一人旅も禁止、自動車の運転も禁止で、よい女性は子供を沢山産む女性だとコーランに書いてある。(目だけを出した女性と市場)



「バーレン」は大小33の島からなる国で、総面積は対馬よりも小さく、人口は50万である。「バーレン」とは「水のある島」の意味で真水が湧出する島国であった。大航海時代にポルトガルは、真水があるから城砦を構築し、メソポタミア文明とインダス文明時代の海洋貿易の中継地として栄えた。現在も立派な城砦が保存されていた。

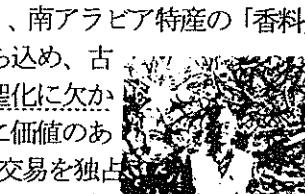


(上図の左上の島がバーレン、半島部がカタール)

「カタール」は長野県よりやや小さく人口は50万で、半島の長さは160km、最大幅は85kmで、標高は100mを超す地点はなく平坦である。現在カタールを支配したい王家は18世紀前半に移住してきた遊牧民で、第二次大戦後の油田発見で急成長した。しかし今でもラクダの生産は盛んで、王族の鷹狩りも盛んで、女性の夜のゴールド・スクは大繁盛だ。

「イスラム教の概要」と「石油と戦闘の関係」は紀行文に詳細に記載した。必読されたし。

「オマーン」は他のアラビア半島の諸国と同様にスルタン(君主)制度で、面積は21,2万km²で、人口は150万、1970年7月14日、現在のスルタンは革命によって即位した。カタールからオマーンの首都の「マスカット」に到着し、ラマダン(絶食月)のため郊外で昼食を摂り、再び搭乗してオマーン第二の都市「サラーラ」に飛んだ。ここでは西の隣国イエメンと共に紀元前の「シバの女王と乳香」の歴史で有名である。



「シバ王国」を繁栄させたのは東西貿易の中継貿易だけでなく、南アラビア特産の「香料」の「乳香」であった。乳香は炭火で焚くと神秘的な香りが立ち込め、古代エジプト王朝やローマ皇帝は宗教的な儀式や、我が身の神聖化に欠かせない必需品であった。乳白色に輝く靈妙な香料は、金以上に価値のある最高級品として古代の経済を動かした。「シバ王国」はその交易を独占して莫大な利益を得たのである。

(右は乳香の木の前に立つ私)

「シバ王国」は今のイエメンとオマーンの一部(サラーラー一帯)で、南アラビアはアラブ文明の発祥の地と言われている。旧約聖書の一節に、前10世紀ころ、イスラエルのソロモン王と榮華を競い合った「シバの女王」に就いて、次のように記されている。

『シバの女王は主の御名によるソロモンの名声を開き、難問をもつて彼を試そうとやってきた。彼女は大勢の随員を伴い、香料、金、宝石を積んでエルサレムに来た。ソロモンのところに来ると、彼女は予め考えておいた全ての質問を浴びせたが、ソロモンは全てに解答を与えた。王に分からぬこと、答えられないことはなかった。』(右はノートルダム寺院に保管のシバの女王)



『女王は持参した宝石を全てソロモン王に献上したが、「このシバの女王がソロモン王に贈ったような香料はかつてなかった」という。

王は彼女が贈った品々以上に、「女王の願うものは何でも望みのまま」と書かれている。ソロモン王がシバの女王の望みのままに

与えた贈り物の中には、財宝以上のものがあった。女王はソロモン王の子を宿して帰るのであった。誕生した息子はエチオピア建国の祖となったのである』(上は乳香積み出し港)

「サラーラ観光」、先ず乳香の積み出し港として紀元前に栄えた「サムハラム港」を見学した。港の上の台地はシバの女王の宮殿跡で礼拝堂の跡もあった。(上の写真の手前が宮殿跡)

「マスカット」、サラーラを発って到着したマスカットは人口60万のオマーンの首都で、1494年、喜望峰を回るインド航路を発見したポルトガルは、ペルシア湾の入口のマスカットを植民地化した。しかし17世紀にヤールビ王朝が奪還した。翌日、自然歴史博物館から王宮、海岸線に並んだマトラ城砦、ミラニ城砦、ジャラリ城砦等を見学した。

「ニズワ」マスカットから2930mのアフシャム山脈の陸路を走り、オマーン第三の都市のニワズに行く。ナポレオンのエジプト遠征によって東洋への脅威を予測した英国は1798年、オマーンと同盟を結んでフランスを排除し、ニズワのイマーム(尊師)の統治も粉碎した歴史がある。ニワズではアルゼッタ要塞、ニズワ要塞、バハラ要塞を見学した。

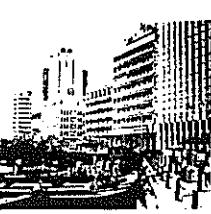
「アラブ首長国連邦」の面積は北海道と同じで人口は約200万である。連邦国家はアブダビ、ドバイ、シャルジャ、アルアインなどの七首長国で構成されている。ベトウイン(アラブ遊牧民)のバニ・ヤース族は首長に率いられて1793年、内陸からアブダビに移住。また同族の一派は1833年にドバイに移住。一方、真珠採集と海運活動をしていたカーシム族はシャルジャに国を樹立した。そして古くからイラン、パキスタン、インド人の居住者が多く、服装や住居にもその影響が見られ、アフリカの黒人の子孫も見られた。

「アルアイン」に入ると砂漠に緑が一杯で、この世のエデン(楽園)のような感じがした。今まで経てきたアラビアとは別天地のようだ。



「アブダビ」は連邦の首都で、「アブダビ」とは「カモシカの父」の意だという。現在は砂漠だが、かつては緑豊かで四千年前から文明が発達していたと伝えられている。(右上はアラブ首長国連邦図)

「ドバイ」には12kmに及ぶ運河があり、かつて真珠の採集船で賑わっていた面影を残していた。現在はダウ船に乗船して市内見物が大繁盛であった。アブダビやドバイを見ていると、世界の文明国の大都会に劣らないほど繁栄していた。(右はドバイ海岸)



「シャルジャ」はアブダビ、ドバイに次ぐ首長国である。ここで私にとって忘れられないのは、「砂漠のダイヤモンド」と言われる「カシム・ストン」をオールド・スクで手に入れたことである。アラビア半島一周の旅の詳細は紀行文に譲る。

●『サイパン島紀行』平成6年（1994）4月30日～5月3日 紀行文 表題の通り

当年は1944年にサイパン島が玉碎してから満50周年目の年であった。この時に当たり女婿・駒谷康文がサイパンの家族旅行を企画し、我々夫婦も招待された。サイパンが玉碎した時には私は陸軍士官学校に奉職して60期生の教育に従事していた。刻一刻と伝わってくる戦況を彼等に説明し、教育の一端としていたことを記憶している。

米軍のサイパン上陸から、これを迎え撃つ日本軍の状況は、詳細にわたって紀行文に記載してあるからそれに譲り、ここでは主として写真を掲載して当時を偲びたい。（上はサイパン島の位置を示す地図）

戦後、私は中国やビルマの慰靈巡礼の旅を幾度も経験したが、玉碎の島サイパンは激しかった戦闘の傷跡を未だに生々しい姿を残していた。陸の上には大砲や戦車、海中には艦船や戦闘機の残骸が残り、戦友や遺族が建立した慰靈碑が各所に建っていた。

（右は家族写真と平和観音碑の前に立つ私）

当時の思想として神国日本は不敗だと信じ、国家と運命を共にしようと決意した将兵や民間人までが、「天皇陛下万歳」を唱えて断崖から飛び下りて自ら命を断った

「バンザイ・クリフやシイサイド・クリフ」は、我々に何かを語りかけてくるようであった。太平洋の美しい海に囲まれた珊瑚礁のサイパン島で、なぜ日米が鬭わねばならなかつたのか、もっと早く停戦できなかつたのか、と自然に当時の歴史を回顧して感慨無量であった。

（上の左側はバンザイ・クリフを背景にした家族、右側はバンザイ・クリフに立つ私）

昭和17年6月（1942）のミッドウェー海戦で我が海軍は主力の空母4隻を始め、優秀な飛行機と操縦手が全滅するという大損害を被り、この時点で日本海軍は戦闘を継続する能力を失っていた。しかし海軍は敗戦を秘匿して陸軍にも知らせなかつた。（右は身を投げて自殺したシイサイド・クリフ）

昭和18年1月のガダルカナル島の敗戦から撤退、ニューギニア島の大敗という状況の中で、今まで海軍が守備していたサイパン島に、1944年3月から逐次に3万の陸軍を送り込んだ。サイパン島は淡路島の半分にも満たない小さな島に過ぎず、地上軍だけでは固守することは不可能である。太平洋戦争の主役は海軍と空軍の戦闘でなければならなかつた。無闇に陸軍を送り込んだ大本営は、無能だったと評価する。

サイパン島北端の高台にあった指揮所と思われる洞窟の銃眼から海岸線を眺望すると、絶海の孤島に陸軍の大兵团を派遣することは、海中に塩をまくようなものである。消えて無くなるだけである。（上は指揮所の洞窟と銃眼）

平和を謳歌する中で育った我が子や孫たちよ。平和の陰には悲惨な犠牲が秘められていることを知れ。そのことが戦争で死亡された軍人や同胞に対する供養である。（右は海中に残骸を残した艦船）



（右は身を投げて自殺したシイサイド・クリフ）



● 『東欧7ヶ国の旅13日間』 平成6年(1994) 7月5日～17日

紀行文 表題の通り

成田～ベルリン～ポツダム～ポーランド～チェコ～ルーマニア～ブルガリア～
スロバキア～ハンガリー～成田

第二次大戦後、ドイツは東西ドイツに分離して1961年にベルリンの東西間に境界線を設けて遮断した。これが「ベルリンの壁」であった。しかし1989年、東欧諸国は歴史の大きな曲がり角に遭遇し、ベルリンの壁は取り除かれ、西側に接した国々は完全に国境を開放した。私にとってはブルガリアを除いて東欧・中欧は初対面の国ばかりであった。

(右上は東欧・中欧の地図)

「ベルリンの壁」は、東西両陣営の冷戦状態がソ連邦の崩壊によって解除されたが、歴史の証拠として、代表的な「ブランデンブルグ門」を中心にして残置されていた。ブランデンブルグとは、ベルリンの西方80kmのプロイセン王国(プロシア)の中核の一州で、詳細は紀行文に譲りたい。(上の左側はブランデンブルグ門、右側はホテルの隣のベルリン大聖堂写真)

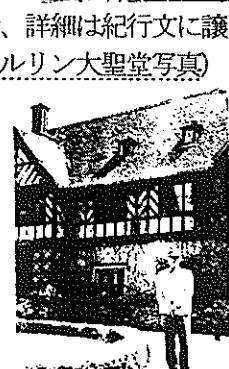
「ポツダム」はベルリン西南60kmのハーフエル川に臨む約10万の古都で、プロイセン国の牙城である。第二次世界大戦の末期、トルーマン米大統領・チャーチル英首相・スターリンソ連首相の連合国首脳が此處で会談し、日本の戦後処理を協議した場所である。私個人にとっても公職追放令に指名され、嵐の中の戦後が決定された地でもある。(右は連合国三巨头が日本の戦後処理を決定した会場前に立つ私)

「ポーランド」、ベルリンを8時に飛翔して1時間後には首都であるワルシャワに到着。昭和14年(1939)9月1日、ナチス・ドイツのポーランド侵攻によって第二次大戦が勃発した。戦後は東部をソ連に割譲して強制的に社会主义国家へと進んだ。ポーランドで書き残したいことはアウシュヴィッツである。

「アウシュヴィッツ」ワルシャワ市内観光に次いで古都クラコフの市内観光した後、ユダヤ人を大量虐殺した「アウシュヴィッツ」強制収容所へと向かった。ナチスは戦況の悪化にともない大量殺人の工場へと変化し、毒ガス、銃殺、人体実験など、その殺人の方法は数え切れず、その数は四百万人とも言われ、現在は博物館として公開されている。(上は収容所の玄関と建物)

収容所に到着した我々は先ず、当時の収容所内の様子や死体焼却光景、当時の人々の表情などを撮影した記録映画の見学から開始された。収容所建設の構想の発端は、囚人が溢れていたことと、ポーランド住民の大量逮捕の必要性が生じてきたからであった。この地はポーランド軍の撤退した跡であったことに加え、密集地から遠く離れた交通不便であったからである。詳細な記事は紀行文を是非とも読んでほしいと思っている。

「東欧のユダヤ人」、欧洲で数千年の長い歳月を離散の民として生きてきたユダヤ人の歴史の中で、東欧は特別な位置を占めている。中でもポーランドは、かつて西欧から追放されたユダヤ人の最後の避難場所で、ユダヤ人の「約束の地」としての記録が生きている。又同時に極端な人種差別主義を生み出したかつてないユダヤ人の迫害、即ちナチスの強制収容所での民族虐殺計画が実施されたのであった。欧洲社会がユダヤ人にキリスト教徒と対等な権利を認めだしたのは18世紀末で、早く認めておれば虐殺は回避されただろう。



「チェコ共和国」、昨夜、ポーランドから夜行寝台列車に乗車して早朝の6時に首都の「プラハ」に到着した。「チェコ」と聞けば支那戦線で悩まされたチェコ製機関銃が思い出される。軽快な発射音の機関銃は当時では世界一を誇り、小国ながら外貨獲得の筆頭であった。チェコの歴史は複雑で簡単には説明は出来ない。1993年1月1日、「チェコ」と「スロバキア」が各自独立するまでは、「チェコスロバキア」として国が成立していた。(右はチェコとスロバキア地図)

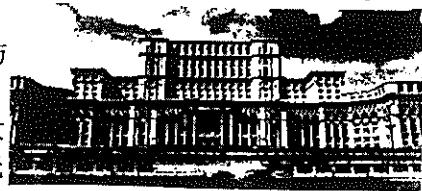


14世紀初めに「ボヘミア」王はポーランドとハンガリー王を兼ねた中世の強国となり、ドナウ川流域を中心に北はバルト海、南はアドリア海まで支配した。ボヘミア王国の最盛期の1355年は、神聖ローマ皇帝に選ばれたカレル四世時代のその繁栄ぶりは、プラハの「カレル橋」などに残っている。(現在もプラハはボヘミアの中心である。右上は百塔の街プラハの景観)
「スロバキア」は約一千年間、ハンガリー領で、教育水準も低い後進の農業国家であった。

「プラハ」観光はカレル橋、プラハ城、百塔の街の数々の建物などで、紀行文に譲る。

「ルーマニア」の首都「ブカレスト」、プラハから

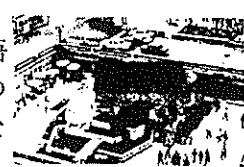
飛行機で約3時間でブカレストに到着した。我々が訪れた時は、日本のテレビを賑わしていた「民族革命」の直後で、ルーマニアと言えば「チャウシェスク」大統領の失脚の歴史の数々であった。ルーマニアは紀元



前から栄えていたダキア人の國家で、106年頃から約400年の間、ローマ人の支配下に入ってローマ化して繁栄した。これが「ローマニア」～「ルーマニア」の語源である。第一次大戦では連合国側に、第二次大戦では枢軸側に付いたが、戦後は独立が実現した。

1965年に政権の座に付いた「チャウシェスク」は自主外交を目標とし、1980年代初めに約100億ドルの対外債務を返済するため、国民には生活を切り詰めさせ、1989年には対外債務は完済した。このような強引な政策がチャウシェスク体制の負の遺産となり、1989年12月22日、民主革命によって共産党は崩壊した。

ルーマニア陸軍士官学校の前に建つ「人民宮殿」は部屋数は二千～三千とも言われ、米国の国防省に次ぐ世界第二の建物の前に立った私は唖然とした。地上11階、地下6階で、大統領夫妻はこの宮殿内に居住していた。国民は貧困に悩み、大統領は絢爛豪華な生活を続けたが、巨費を投じた宮殿も完成を待たずに独裁者は倒された。洋の東西を問わず終わりを全う出来る者は少ないようである。(上の写真は人民宮殿、国会宮殿と言われる建物)



「ブルガリア」は1982年に訪れてから12年振りであった。小型のプロペラ機で首都の「ソフィア」に飛んだ。ブルガリアの語源は「鋤を持つ人」を意味する「ブルガル」に由来している。この小さな国に二回も訪れても見るべきところは少なく、余り変化がないと感じただけの印象である。(右はソフィア中心にある地下教会)

その他に山奥に残る「リマ僧院」の見学だけであった。詳細は紀行文に譲ることにする。

「スロバキア」の首都は「布拉チスラヴァ」で、ブルガリアの首都ソフィアを16時に発つて、オーストリアの首都のウィーンに降り、そこからバスで布拉チスラヴァに疾走した。翌日の朝食後から観光となつたが、見るべきものは石造りで「ロマネスク様式」の布拉チスラヴァ城だけであった。紆余曲折の結果、完成は1960年代である。(上は布拉チスラヴァ城の威容)



「ハンガリー」は欧州で唯一のアジア系民族の国家で懷かしさを感じさせた。東洋系のマジャール人がハンガリー平原に侵入してきたのは9世紀で、スラブ系を平定する一方、欧州の農業文化とカトリック信仰を受け入れた。13世紀にはモンゴルの侵入で荒廃し、16世紀にはオスマントルコの圧迫を受けて3分割された。即ち西部は「ハプスブルク家」の支配する「ハンガリー王国」となり、東部はオスマントルコ帝国保護下の公国となり、中部はオスマン帝国の占領下に置かれた。その後、オーストリアのハプスブルク家の勢力が拡大し、17世紀にはハンガリー全土が同家の支配下に入り、首都はプラチスラヴァに移った。しかしマジャール人は民族意識を高め、1867年に自治を獲得して「オーストリア・ハンガリー」の二重帝国が成立した。ブダペストが首都を回復した。

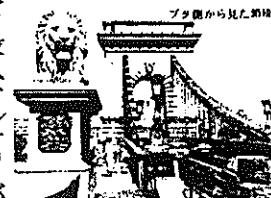
(上は関係各国の関連する概要図)

第一次大戦ではドイツ側に立って崩壊し、1918年にはブダペストで革命が起り、ハンガリーはオーストリアからの独立を宣言した。第二次大戦では1944年5月にドイツ軍に占領され、45年4月にはソ連軍が全土を制圧し、社会主义の道を歩まねばならなかつた。しかし、ソ連型社会主义に対する国民の反発は強く、1956年には国民運動が巻き起こり、ハンガリー動乱となってソ連軍が侵入してきた。このような歴史の経過をたどつたハンガリーは、1989年の東欧革命の先導役を果たした事は不思議ではない。

「ブダペスト」、スロバキアの首都のプラチスラヴァからヘレントを経由して、ハンガリーの首都のブダペストまでの200kmの行程を快走すると、両国の格差の大きな違いが理解できた。やがて全長2900kmのドナウ川に架かった数本の橋梁の中の一本を渡つた。それは有名な「くさり橋」であり、橋の袂にあつたホテル・フォーラムに三連泊となつた。

先ず驚いたことは、全従業員が日本語で「イラッシャイマセ」と歓迎の言葉を連発していたことであった。彼等の祖先がアジア系という誇りと、日本人の頭脳明晰、勤勉、発達した経済力に対する尊敬心が現れていたのである。(ブダ=右岸の町。ペスト=左岸の町)

「ブダペストの観光」は、ライオン像が表徴的な「くさり橋」を渡ることであった。ここを起点にして1896年に欧州大陸で最初の地下鉄が走つたのである。その対岸の左側には絢爛豪華な王宮が聳え建ち、その右側の高台には巨大な宮殿とマーチャーシー教会が見え、更にその右に漁夫の砦が見えていた。(右は鎖橋)



ドナウ川を渡つて振り返つてみると、堂々とした国會議事堂が川に面して建つていた。更にブダ側の標高235mの岩山ゲレル丘に登り、かつて要塞だった跡地から市街を眺望した。ドナウの両岸に建ち並ぶゴシック式の建造物は素晴らしい景観であった。夜に再び岩山に登つてゲレル丘から眺めると、「ドナウの華」と絶賛される光景が手に取るようで、我が生涯でも市街地の光景では筆頭だろうと思えるのであった。

ブダペストの観光すべき箇所は數え切れないが、私としては「英雄広場に聳え立つ慰靈塔」の参拝だけは、欠かすことが出来なかつた。慰靈塔には各民族によつて型式は異なるが、精神は同一である。我が國では代々、靖国神社に参拝し、國のため(我々の時は天皇のためであった)に生命を捧げた人の靈を祀る事が慣わしであつた。ハンガリーではブダペ



ストの慰靈塔に参拝することが慣わしであつた。(上はブダペストの英雄広場の慰靈塔)此の塔は1896年のハンガリー建国1000年を記念して創建し、国内の建築家が総力を結集して1929年に完成したものである。他は紀行文に譲ることにした。

●『東部カナダの紅葉探訪の旅8日間』平成6年（1994）10月4日～11日
 成田～トロント～ケベック～モントリオール～ローレンシャン高原～オタワ～
 「森と湖のリゾート・ハンツビル」～トロント～成田 紀行文は表題の通り

米国は民族の「坩堝」（るつぼ）と言われるが、カナダは民族の「モザイク」と言われる。カナダは民族が地域的に変在しているが、今回の旅行は「メープル街道（紅葉の楓の旅）」の旅であり、オンタリオ州のトロントから～東部のケベック亘っている。

（右はトロントからケベック、ローレンシャン高原を含む地図）

カナダの歴史は浅く16世紀半ばにフランス人によって開拓が始まった。16世紀にフランス人探検家がセントローレンス川を逆行してフランス領と宣言した。同じ頃セントローレンス川の南側を英国はイギリス領と宣言し、英國の海外植民地の最初の地となった。

欧洲に於ける英仏本国同士の戦いであった七年戦争に呼応して北米大陸でも、フランスは1759年の「アブラハムの戦い（ケベック市）」で敗北し、領土を英國に譲渡してた。英國の植民地から大英帝国の一員となった自治領に昇格したのは1867年であり、我が国の明治維新のころに創建された新しい国である。

「トロント」、前回のカナダ旅行は18年前で、トロントはナイヤガラ大瀑布を見るために通過しただけであった。トロントとはインディアン語で「人が集まる所」を意味し、元来は毛皮の交易の場所であった。オンタリオ州の州都のトロントはイギリス人が建設した町で人口350万はカナダ最大の都市である。オンタリオ州はアメリカの独立革命に反対し、アメリカ合衆国を離れた王統派（反独立派）は約10万と言われるが、そのうち約4方が北上して現在のカナダの地に移住した。彼らはアメリカ革命（独立）を支持しなかつたが、封建制度の濃厚なフランス系のケベック植民地の統治下に入ることも好まず、此の地に分離したイギリス系カナダ植民地（アッパー・カナダ）が創設された。

本国からの新しい移民はナポレオン戦争後にやってきた人々である。明治維新とほぼ同時に誕生した新国家は、イギリスとの関係、長い国境線を共有する強大なアメリカ合衆国との外患に加え、イギリス系、フランス系の社会的、文化的統合の困難という内患を抱えていた。第二次大戦後の政府の積極的な移民政策により欧洲、中南米、中国などの世界中から多くの人が移住し、多くの文化の混血によって生き生きとした大発展をしたのである。

「トロント市内観光」、新設都市らしく碁盤の目のように道路が走って花で埋まり、先ず北上して州議事堂を見学し、反転、南下して市議事堂を訪れ、市中のどこからでも見える高さ533、33mのタワーを見学した。これは1976年に完成した世界一の高さで、ナイヤガラ瀑布も見えるらしい。（右は市中に聳えるタワーと、その右は州議事堂）

零下30度以下に冷え込むトロントは大地下街をつくり、詳細な地図まで我々に配布した。

「ケベック市」、トロント空港には日本の関西空港の直行便を祝って「鳥居」を飾り、ケベック空港には和服姿の日本女性の大写真を掲載していた。ケベックは上記したとおりフランス植民地の拠点として建設され、カナダで最も古い歴史のある都市である。古くからフランスとイギリスの植民地支配の争奪の的となり、戦いが繰り返された因縁の地である。イギリスの支配下の時代を経てきた現在でも、住民の80%はフランス系カナダ人で、完全なフランス文化圏である。フランス語を母語とするばかりか、気質や習慣までフランス色が浸透している。1535年にフランス人探検家ジャック・カルティエがケベックを訪れ、1608年にサミュエル・ド・シャンプランの入植により、町の第一歩を踏み出した。



イギリスの支配下に入った当時のケベックは90%がフランス系であった。それにも拘わらず横取りしたのは、132頁に記述した南アフリカをオランダから分捕ったボーア戦争と同じ手段である。イギリスは紳士の国ではなく、悪の権化の国であったのだ。

「ケベック市郊外の旅」はアメリカと同名の「グランドキャニオン」から始まつた。黄葉一色で染まつた渓谷美は圧巻であった。帰路にナイヤガラよりも一段と高い「モンモランシ滝」を眺望し、セントローレンス川に浮かぶ瀟洒な建物の「ゴエリッシュ・ホテル」で昼食を摂つた。外国人観光客で大賑わいで、ここで始めてメープルシロップを味わつた。(上はゴエリッシュ・ホテル)



「ケベック市内観光」議事堂横のサンルイ門から入ると旧市内は石畳の道路で「ダルム広場」や郵便局が軒を連ね、其の中での圧巻はケベックのシンボルで名高い「シャトー・フロンテナック」であった。このホテルは後に何回となく訪れたが、見れば見るほど圧倒された。(右はシャトーの偉容)



カナダ発祥地の「ロウータウン」を目指した私はケーブルカーに乗車した。崖下の港町は1608年に発見されて以来の古い石畳の街で、櫛の歯のように商店が連なつていて。その一角に「勝利のノートルダム教会」が建つていた。「ノートルダム」とは

「我らの貴婦人」の意味で、「聖母マリア」のことであった。此のときはフランスがイギリスを打ち破つたときで、その記念であった。市内の200余りの教会は、カトリックが潜在的な影響を及ぼしている。(右はノートルダム寺院)



「モントリオール」旧市内は1462年に、フランス人のメゾンヌーヴが上陸したことがモントリオールの発祥だけに、道路は狭く車両も少なく、総てのものは地下に潜つてゐる。街の前面に横たわつた丘はロイヤル公園で、岡の麓に聳えた巨大な大聖堂が「莊厳な姿の聖ジョゼフ礼拝堂」の姿であった。カナダの守護人の聖ジョゼフはケベック州の三大巡礼地の一つで、内部は総てエスカレータが完備し、名実共に近代的礼拝堂であった。(上は聖ジョゼフ礼拝堂)



「ローレンシャン高原」モントリオールのセントローレンス川を渡ると、全長8000km大陸横断ハイウェーが東西に走り、総てが「メープル街道」であった。23km²の広さと7万個の湖を有するローレンシャン高原は、原始林までも錦秋に彩り、一行は高級リゾートとして脚光を浴びてゐる ホテル・シャーモンテベロで休息し昼食を摂ることになった。(右は丸太を組み合わせて造つたホテル・シャーモンテベロ) 湖水に面したこのホテルは「オタワ・サミット」の会場として使用された別荘地であった。



「オタワ」国会議事堂の聳える塔の中で中央に聳える高い塔は、「平和の塔」と称し、第一次大戦で戦死した66,600人のカナダ将兵の慰靈のために建てられた。我が日本は歴史は古いか戦没者に対する慰靈心は皇室を始め政府も国民も欠如し、オタワを模範とすべしと絶叫したい。オタワは英と仏に分割される境い目に当たり、首都が置かれたと言う。(上は国会議事堂)



「森と湖のリゾート・ハンツビル」この公園はトロント及びオタワの北方約250kmに亘る7600km²の大公園で、黄葉の森と湖の自然がひろがつてゐた。膨大な敷地に建つ棟は55棟を数え、我々は第一号館に宿泊となつた。他は紀行文に譲る。(右は地図)



●『斐ジーの旅6日間』平成7年(1995)1月5日～10日 紀行文 なし
避寒の目的で息子の秀一に連れて訪れた。12年前にニュージーランドに飛んだ際に斐ジーの首都スバに立ち寄ったことがあるが、島の観光は初回であった。成田を20時に発って斐ジーの西海岸のナンディ空港に朝の7:30に到着。最高級ホテルのリーゼント・ホテルに旅装を解く。

(右は斐ジーの位置図)

斐ジーは大小あわせて320余の島から成り、約100島は無人島である。かつて斐ジーは凶暴な人喰い人種の島として知られていた。しかしイギリスの植民地となってからは其の風習はなくなった。現在は日本人のハネムーンのメッカの一つとなっていた。

斐ジー最大の島は我々の訪れた「ビチ・レブ」島で、大部分は火山島である。一年を通じて23度～28度で、12月～2月が最も暑く30度を越すこともある。5月～11月が乾季で15度以下になることはなく、西部は乾燥している。

斐ジーの原住民は紀元前五千～七千年前にインドネシアから渡って来たメラネシア人で、15世紀頃にポリネシアのトンガ人が移住ってきて混血したのが斐ジー人である。(右の写真)
は椰子で葺いたホテルの客室棟と、日本人用の和服姿の私)



この島を最初に発見したヨーロッパ人は1643年のオランダ人・アベル・タスマニアである。次いで1774年にキャップテン・クックは望見している。19世紀前半に白檀商人やヨーロッパ人が居住し始め、1844年には初の宣教師が来島。これと同時に鉄砲が伝来し、6王国の部族間の対立が深まった。この抗争に終止符を打ち斐ジーを統一したのはバウ族のザロンバウ首長で、1874年にイギリスの植民地となった。その1世紀後の1970年に自治領として独立し、1987年、斐ジー共和国となった。

総人口は約4万人、うち70%がビチ・レブ島に住んでいる。人種は48%がインド人、46%が斐ジー人、残りが欧州、中国、ポリネシア人で、宗教はインド人の70%がヒンズー教徒、25%がイスラム教徒、残りがキリスト教徒であり、公用語は英語である。

「観光」、先ずタクシーで島全体を見渡せる「アイスランド」の丘に登り、「ナンディ」市街を眺望すると、南洋桜が美しく咲いていた。植物園は特別に珍しい品種ではなく、夕食は各人種が入り混じった歓迎の宴となった。

(右は丘の上から眺望する私)



翌日はホテルの海岸の桟

橋から観光船に乗船して、

マナ島で一日中、ゆったりと時を過ごした。片言の日本語を話す島民と懇談したことも思い出である。両関節炎を患っている私にとっては幸いなことで、孝行息子に感謝しなければならない。

(上の写真はホテルの横からマナ島行きの観光船が出航し、着岸するマナ島の桟橋風景)

① 次の日は昭和初期まで日本にもあった軽便鉄道(①)で海岸

②

④

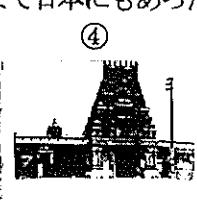
線を走り、沿線住民

のトタン葺き住宅

②)を眺め、乗馬

③)を楽しみマイ

ント村(④)を見学。



● 『イラン（ペルシア）の旅12日間』平成7年（1995）3月16日～27日

紀行文 表題通り

成田～テヘラン～レイ～コム～カシャーン～ヤズド～ケルマン～バム～シラーズ～ペルセポリス～イスファハーン～テヘラン～成田

2003年（平成15）12月26日、午前5時30分ごろ、イランでマグニチュード6、3の地震があり、私の脳細胞の中に鮮明に残っていた「バム城塞」が崩壊し、死者は4万人以上と報道された。其の当時を想起しながら、ここに哀悼の意を表したい。

イランの国名は第二次大戦中の「テヘラン」（1943）会談で初めて耳にした。それまで我々はペルシアと教育されてきた。

そして中央アジアからエジプトに至る広大な地域を支配していたペルシアは、強大国で文明も発達していた。メソポタミア文明

（現イラク）とインダス文明（現在パキスタン～インド）の中間に位置し東西文明の通路でもあった。（右はイラン地図）

ホメイニ革命によってペーレヴィ国王夫妻が追放された映像も鮮明に私の記憶の中にあり、ペルシア湾の対岸のアラビア半島を周遊してから、イラン訪問に心が奪われていた。今日まで世界を旅してイランほど見るべき箇所の多い国は少ないと感じた。詳細は紀行文に譲りたい。

3月16日の16：45に成田を飛翔した搭乗機の乗務員女性は、日本人乗務員であっても全員がチャドル（ベール）を被り美しく感じていた。のみならず乗客の女性も同じくチャドルを着用しなければならず、イスラムの戒律の厳しさを痛感したのであった。

3月17日、00：30にテヘラン空港に到着すると、先ず目に付いたのは「ホメイニ師」の大写真であった。アラブの各国は総て最高指導者（国王など）の写真を掲載していた。空港からグランド・ホテルまではタクシーを利用して旅装を解いたのであった。（右の写真は空港に掲げたホメイニ師の大写真）

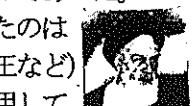
「レイ」、人口700万の首都テヘラン観光は最後に廻され、イラン最初の観光は小さな農村の「レイ」であった。それはホメイニ師を祀る廟が新設したからで、絢爛豪華な廟は石油成金であろうか、追放されたペーレビ国王も顔負けするぐらいであった。

「コム」は第8代イマーム（最高指導者・聖者）の妹を祀った聖地で、外国人は廟の中に入ることは禁じられ、訪れる外国人の女性はチャドルの着用を義務付けていた。（チャドルを着用した一行の女性たち）

「イラン革命」「白色革命」の理解は必要である。これは紀行文に譲ることにした。

「カシャーン」はサファヴィー朝（16世紀初期の王朝）の王に愛された街で、砂漠ながら地下水が豊富でオワシス都市であった。ペルシャ絨毯をはじめ磁器、シルク、果実などの産地であった。人々は砂漠の極寒・極暑から身を守るために、厚い土で造った円い屋根の家に住み、開口部は最小限にした円い屋根は最高部である。（右は円い屋根の家）

「ヤズド」は古来からゾロアスター教の聖地として発展した街で、3世紀にはゾロアスター教はイランの国教となつたほどである。別名を「抨火教」と称して現在でも信仰の殿堂である「抨火神殿」があり、中国にも南北朝時代に「祀教」として伝わっている。ゾロアスター教はイラン固有の宗教で、世界で最初の宗教である。抨火神殿の中の奥にある鉄格子の内陣には銅製の火炉が据えられていて、聖火は絶対に絶やさないように薪を投じていた。（右上は1500年間燃え続ける抨火神殿の火）



「沈黙の塔」はゾロアスター教の墓場の意味で、教徒の遺体を葬る「鳥葬」の場として使われていた岩山の塔である。ゾロアスター教徒は火・水・土を神聖なものとし、これを汚すことになる火葬土葬を嫌った。屋根のない塔だから禿鶴や禿鷹などの鳥が飛来し、食い尽くして自然に還す方法である。



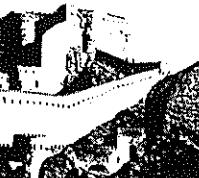
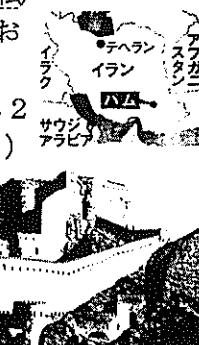
チベットやパキスタンにもゾロアスター教があり鳥葬が見られた。(上は鳥葬の沈黙の塔)

「ケルマン」カビール砂漠の40万の州都で標高1750mで冬は極寒となる。丁度金曜日であったからモスクは殷賑を極め、バザールも大混雑していた。昔の公共浴場は公衆博物館として展示され、横の「チャイハネ」(紅茶を飲む処)初めて入ってチャイハネを吸って休憩した。チャイハネで水タバコを喫煙したが要領が悪く煙が出ない。(右は水タバコを吸う私)



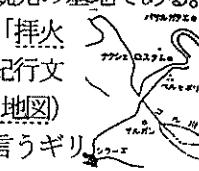
「バム」(正式にはアルゲ・バム) イランの記事の冒頭に記述したとおり大地震に遭遇し、これからはあの壮大な景観は見られないだろう。

バム城塞はアルサケス朝パルティア王国時代(紀元前247~紀元226)に築いたという説が有力で、サファビ朝時代(1501~1736)に我々が見た姿になったという。日干し煉瓦を基調としたこの種の城としては世界最大級と言われる。この城塞は無人の廃墟の城址であり、地震により貴重な世界遺産が崩壊したが、死亡した四万人の人達は新しく造った新市街の住民たちであろう。廃墟となった理由は私の調査によると、アフガニスタンやパキスタンに近いため、度重なる異民族の侵入を受けて疲弊した。1722年頃、サファヴィ朝を倒したアフガニスタン軍がイスファハーンを目指して進撃する途中、途上にあったバム大城塞を襲撃し、住民は避難して無人の街となった。城塞の正面は3km、奥行き2km、面積は6km²の偉大なものであった。(上の写真の上はバム城塞の位置図。下は城塞の一部の壮大な景観である)



「シラーズ」、塩湖眺めながら3000m級の山脈を踏破してシラーズのホテルに到着すると、今日はイスラム暦の正月で、ロビーにはご馳走を飾っての大歓迎であった。ここで初めて東京地下鉄サリン事件の発生を知りショックであった。ここは観光の基地である。

「ペルセポリス」、パサルガダエの「キエロス大王の墓」、「宮殿跡」、「挙火壇」、ナクシェ・ロスタムの「四人の帝王の墓」は見学したが省略し、紀行文に譲りたい。(右はシラーズからの観光名所に至る地図)

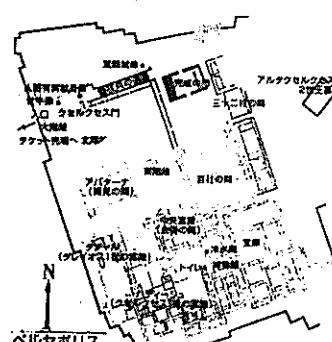


ペルセポリスはイラン最大の世界遺産であり、「ペルシア人の都」と言うギリシア語の語源でもある。紀元前512年頃、アケメネス朝ペルシアのダレイオス1世が建築に着手し、その子のクセルクセス1世によって完成された総面積はおよそ125,000km²の宗教上の都の跡である。即位式や祭儀などの重要な儀式は總てここで行われた。

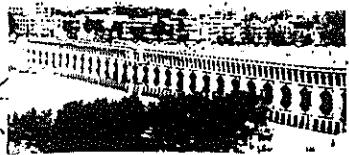
緻密なレリーフなどからも、西はエジプト、東はインドまで勢力を振るったという王朝の栄光が窺えた。

しかし紀元前331年にペルセポリスはマケドニアのアレクサンダー大王によって陥落した。そして、ある夜、百柱の間

から出火して宮殿は廃墟と化した。(右は階段のレリーフと配置図)



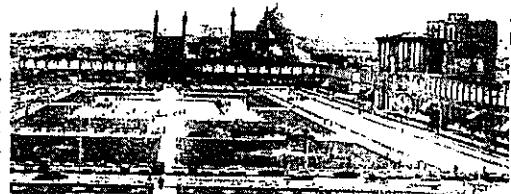
「イスファハーン」（エスファハーン）とも言う。シラーズからイスファハーンに飛んだ。イスファハーンのホテルの窓から美麗なシオセ・チュシュ橋が見えていた。街の中をイラン高原で最大の川・ザーヤンデ川が流れ、「イランの真珠」とも言われるよう市内には10本の橋が架かり、旅人の目を楽しませていた。（右はシオセ・チュシュ橋）



イスファハーンの歴史は古く、アラブの侵入時に野営地になったことから「アスピハーン」と呼ばれた。その意味は軍隊の地を意味し、イスファハーンの名の由来となった。

（右は橋の袂が公園となって大衆が集まるハージュ橋）

イスファハーンは1597年、サファヴィー朝の王、アッバース大帝（1世）がこの地を首都と定め、自ら都市計画を立案設計した。エマーム広場（旧シャーの広場）を中心に宮殿や寺院、バザールなど、壮大な街並みが造り出されていった。絹の輸出を中心に発展し、細密画やタイル美術、陶器など、ペルシア芸術を開花させ、繁栄を極めた。17世紀に欧洲から訪れた商人や外交使節は称賛した。他は省略。



あの有名な「イスファハーンは世界の半分」という言葉もこの頃に生まれたのである。

（上の写真はイスファハーンの王の広場や王のモスク、手前は大バザールであった）

「テヘラン」の語源は4000m級の峰が連なるアルボルズ山脈の麓の端の意である。

テヘランの観光は考古学博物館、絨毯博物館、宝石博物館、ガラス陶器博物館など、紀元前6000年から19世紀までの重要な美術品が展示されていたが詳細は紀行文に譲る。

我々の子供の頃にペルシアと呼んでいたイランに対する知識は僅少で、ペルシア絨毯ぐらいの記憶しかない。1925年にレザー・シャーが即位してからの、イラン最後の王朝「パフラヴィー朝」からのことは知っている。西洋化～近代化で急成長したが、1970年代の石油マネーに沸いたのも束の間で、富の分配の矛盾の噴出などによって、1979年に「ホメイニー」師の率いるイラン革命で失脚し亡命した。これも紀行文に譲る。

革命の主導権を握ったイスラム勢力が支配する現在のイランは、強い反米政策で知られる独特の政治体制のイスラム共和国によって統治されている。記憶に新しいイラン・イラクの8年間の戦争も1988年に停戦し、漸く国家再建に乗り出すようになった。しかし、2001年9月11日の同時多発テロ事件からアフガニスタン戦争、引き続くイラン戦争で、前途は不明である。圧倒的な支持を得て大統領になった「ハータミー」師の内政外交に注目している。（上は追放になったシャーの夏の宮殿）



夏の宮殿は宿泊したホテルの近傍にあったが未開放で（現在は開放）、写真撮影も禁止であったが、隠れて撮影したものである。

「アーザーディ・タワ」は逆Y字型の塔で1971年に、ペルシア建国2500年を記念して建てられた白色の塔で大草原の中に建ち、遠くに真っ白い万年雪を戴くアルボルズ山が見え、この英姿はテヘランの貴重なランドマークの一つとなっている。（右は高さ45mのアーザーディ・タワ）

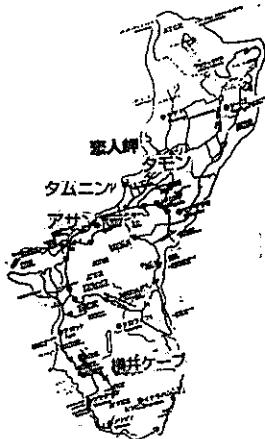


●『グアム島紀行4日間』平成7年(1995)8月11日~14日

紀行文なし

サイパン島に足跡を残し、テニヤンは遠望し、^{正日*}
父・母島も訪れた私はグアム島だけは絶対に行き
たいと念願していた島であった。其の時、小松空
港発着のチャーター便の募集があり、猛暑の中を
参加した。単独の旅のために機内は最後尾の最低
の席で、ホテルも一人で自由に振舞った。

グアムの面積は淡路島とほぼ同じでミクロネシア最大の島で南北に細長く、長さは48km、幅は14~18km。北部は平坦な高原で、南部はラムラム山(406m)などの低い丘が連なる密林である。中部は行政の中心でありタモンやタムニンが繁華街である。(右上は位置図とグアム島図)



グアムの人口は約15万で、うち約40%がチャモロ人、約20%がフィリピン人で、その他米国、中国、韓国、日本人などが居住している。

先住民はチャモロ人と呼ばれる海洋民族で、1521年にマゼランが上陸してから欧洲文化が急速に流入した。1565年、スペインの探検家レガスピーがスペイン領を宣言し、1898年に米国の領土となるまでの300年以上の間、スペインが統治した。そのため島の各所に当時の名残が現在でも数多く見られる。

アンダーソンなど北部を中心に島の五分の一もの面積を米軍関係施設が占めている。

「横井庄一の洞穴」戦闘体験者としてグアム島では、これだけを見学できれば目的達成だと思い、一行の中から数人に声を掛けて募集し、ホテルにマイクロバスを依頼した。横井氏らの潜伏地は島の南部(上図参照・横井ケーブ)でタロフォフォ滝を目標に疾走した。この滝からジャングルを歩いて草原に出ると、草原の中の一部が崩れ落ちていた。そこが横井氏が戦後28年間も潜伏していた地で、現在は崩れて洞窟は埋まっていた。
(上の写真の白い部分)

案内人は横井氏よりも現地では有名な「皆川洞窟」を案内してくれた。横井洞窟とは約千mほど離れていた。入口は鍾乳洞の乳石が垂れ下がり、奥へ行くと狭くなり、そこから三段も下がった狭い所を通ると、平になっていた。そこが横たえることが出来る居間であった。真っ暗な中を右に左に上に下にと窮屈な穴の中を通り抜け、其処に達することができた。偉大な生命意欲と精神力の賜物だと胸を衝いたのであった。当時の軍隊では敵の捕虜になるよりも死を選んだ証左であった。
(上の写真の左側は洞窟の途中の迷路となった所で、右側は入口の鍾乳石で幾本にも分かれていた)(人物は私)

「横井庄一の写真」、横井氏や皆川氏が潜伏していた鍾乳洞の丘を下りて海岸に出ると、そこにレストランがあった。その玄関に横井庄一氏の大写真が掲げられていた。横井氏は中々の役者で、反対に皆川氏は地味な性質のようであると判断された。将来、横河氏は参議院選挙にも立候補した。

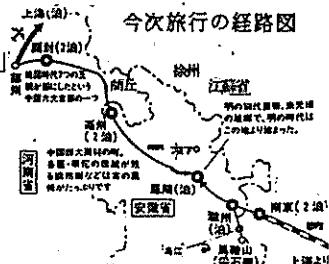
「その他の観光」は西海岸線の何処からも見えていた「恋人岬」(若いチャモロの男女が結婚に反対され、互いに髪を結んで身投げした岬)や、スペイン総督があった「スペイン広場」、スペインの砦であった「アプガン砦」などが観光名所であった。(左の写真はレストランに掲げた横井氏の写真)



- 『長江～黄河間の霸王街道の旅10日間』平成7年（1995）9月15日～24日
 紀行文 「長江～黄河間の霸王街道」、
 「南京大虐殺30万人記念館」、「我が古戰場開封と中牟の旅」
 成田～上海～徐州～鳳陽～亳州～開封～上海
 「南京大虐殺記念館」

今回の中国の旅は一年十ヶ月振りで戦後17回目である。
 南京観光の中華門、中山陵、明の孝陵、玄武湖、英愁湖など
 は割愛して紀行文に譲り、ここでは「南京大虐殺記念館」の
 みを書き残すことにした。

(上は今次旅行の経路図、南京～開封間)



これは1985年（昭和60）3月15日、共産党の中国政府が抗日戦争勝利40周年を記念して建立した記念館である。しかし、我々のように中国戦線（当時は支那戦線）で戦火を交えた戦闘体験者は、中国に負けたとは誰一人として感じていない。太平洋で米国に負けたのである。しかも当時・我々が戦闘した敵は国民党の蒋介石軍で、共産党軍は極く少数で敵軍というほどの存在ではなかった。日本が米国に降伏した後にソ連軍の支援によって内戦に勝利したに過ぎず、中国共産党は日中戦争を語る当事者能力は全くない。

この記念館建立の目的は、中国国民の目を国内から国外にそらし、中国政府の失政（悪政）を善政だと宣伝し、悪は総て日本にありとすることであった。戦後40年も経過してから古い過去を持ち出すことは即ち、「遠交近攻」の中国の外交戦略としか考えられない。

「毛沢東」は日本のお陰で天下が取れたと感謝し、続く「登小平」は日本に学べと「四つの近代化」を力説して日本に感謝した。戦争を知らない第三代目の「江沢民」から日本攻撃を開始したのであった。これまでの日中友好ムードは1989年6月の「天安門事件」によって水をさしたのである。私は2002年（平成14）10月に「江沢民国家主席」を非難して「中国外交戦略は遠交近攻」と題して89頁の小冊子を発刊した。この旅行の紀行文にも詳細に「南京大虐殺事件」を取り上げた。日中友好の打ち壊しへ江沢民である。

南京大虐殺記念館に掲載されていた写真は出鱈目の合成写真ばかりであった。生首を土に埋めた写真は、中国の軍隊が満州（現東北部）の馬賊の首を切り落とした写真で、中国の各地に展示されている。



(上は満州馬賊の合成写真)

南京攻略戦で「百人斬り競争」をしたとの毎日新聞の戦意高揚記事によって処刑された、向井、野田両少尉の記事も、全くの作り話で真実ではない。両少尉は大隊副官と大隊砲小隊長で、両者ともに戦闘に直接参加する立場にないことは戦闘経験者であれば理解できる筈である。このように出鱈目の写真や記事を掲載したのが南京大虐殺記念館だと抗議する。

「鳳陽」（徐州は省略して紀行文に譲る）

明（ミン）の太祖の朱元璋は安徽省中部の農村の出身者だとは知っていたが、鳳陽の出身だと初めて知った。一時は皇城も置かれた城址を見学し、鳳陽の皇陵は朱元璋の父母を葬った墳墓で立派に保存されていた。中国では「孝」が人倫の根本であり。革命ごとに主権者は変わるが親子の関係は不变である



朱元璋は帝位について南京を「應天府」、現在の開封を「北京」とし、彼の故郷である鳳陽を南京と北京の中間にあるから「中都」としたのであった。

(右は鳳陽・中都の鼓樓と中心街)



「亳州」(ハクシュウ)、鳳陽から「四面楚歌」で有名な「垓下」(ガイカ)の古戦場に立ち寄らず、徐州の西方で河南省と安徽省の省境に近い「亳州」へと向かった。戦時に私は公用で商丘に出張したことがあったが、「亳州」の名称も歴史も知らなかった。不勉強の至りであった。(右は亳州の位置図)



亳州は3500年以上の古い歴史をもつ文化古城で、中国・中原文化の発祥の地の一でもあり、傑出した人物が数多く輩出している。今次旅行の最大の収穫は「亳州」であった。

亳州は古代王朝「商」(のちに殷と改名)の湯王(トウオウ)の故郷であり、その墓も残っていた。又、歴史上有名な「道家」の祖父の「老子」(生年月日不詳)は、孔子とほぼ同じ春秋戦国時代末期(紀元前570年)の人で、史記・老子伝によると楚の苦県の人とされている。苦県は現在の亳州である。

政治家で軍事家であり文学者でもあった「魏」の始祖の「曹操」(ソウソウ)(155~220)も亳州の出身で、彼の造った運兵道(地下道)や一族の墓群ものこっていた。

特筆すべきは私が傘寿を過ぎてから、東洋医学の効果が抜群であることを知ったことである。それは後漢末の世界的な大外科医の「華佗」(カク)が亳州出身で、麻沸散(一種の麻酔薬)を飲ませて世界で初めて外科手術を行った名医であった。「華佗」を祀る廟も亳州にあり、特に「神医」として祀られていた。私は鍼灸によって末梢神経障害の四肢の痺れを治療しているが、そのツボの名称に幾つかの「華佗」の名称があり、効果は抜群である。

「華佗」(118~207)は内科・外科・婦人科・小兒科・鍼灸など、総ての医術に長じた名医で(最も専門は外科)あるばかりでなく、徳が高いから「神医」と尊敬され、古代中国的一大名医である。彼は1800年近く前に普通の病気なら鍼灸、あるいは薬で簡単に治したが、重傷のものは麻酔薬を飲ませ、腹や背中を切開して病根部分を除去した。腸や胃の悪い場合は切開して洗浄し、潰瘍部分を除去して縫合し、膏薬を貼っておくと4~5日で傷がふさがり、1ヶ月で本復したと言われている。



東洋医学の先駆者を祀る「華佗廟」の正面に立った黄金色の塑像は、我々の精神を渙発するように熱誠があふれ、腰には瓢箪をつるし、救世の活的な神医の風格を感じた。「一針三国を定む」と言われた通りの姿であった。

記念館には「華佗」の医史文献(外科手術・麻酔術・麻沸散・鍼灸術・寄生虫駆除・回春養生術・五禽戯の創造)と実物の資料が展示されていた。(上の写真は華佗の立像)

「五禽戯」というのは虎、鹿、熊、猿、鳥などの禽獸の動作から学び取った「長寿や延命や保健体育」のことで、即ち運動によって汗を出すと身体は軽くなって食欲が出る。これを根本原理として五禽に似た運動を、「華佗」は考案して普及させたのであった。現在の中国が体操王国として世界のトップに立っているのも、「華佗」のお陰ではないかと思う。

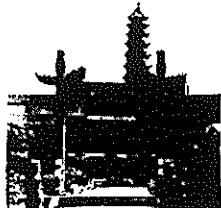
「華佗庵」を去るに当たり私は「恭則寿」(うやうやしければ即ち寿(命が長い))という詩を思い出した。「うやうやしく小さなことにも注意深くすることが、最も長生きする方法であると言うのであった。

「漢方薬市場」、「亳州」は中国一の「漢方薬市場」で一日の出入り客は五万人以上と言われる。固定店舗は五千軒以上で、臨時の店舗も五千軒以上だと言われている。また動・植・鉱物で生薬として供せられるものは約三千種以上で、供せられないものはないと言う。

漢方薬も医術も要は「長生きのためである」。老子の教えの中で「長生久視の道」、即ち、長生きの方法を説いている。「久視」とは瞬きもせずにじっと見つめる事で、道家(道教を信仰する者)で久視を長生法だと説くのは、その道に一心不乱になれと言うことである。

華佗時代の権力者は中国・三国時代の「魏」の始祖「曹操」である。亳州出身の曹操は名医の中の名医、「華佗」を召し華佗は診断した。「大王閣下の頭痛は脳の内部の深いところにあり、薬では治せません。手術によって頭痛の根源を除去しなければだめです」と申し上げた。すると曹操は脳の手術と聞いて怒ってしまった。俺を殺す気か、と牢獄に入れて殺してしまった。これ以降、曹操の頭痛は、ひどくなる一方であったと言われている。

「古都開封」、亳州から北上し商（後の殷）の古都「商丘」を通過し、我らの古戦場である「開封」に向かって西進した。開封城外は発展して工場団地に変貌し、遠くから見えていた有名な鉄塔は見えず、開封の貧民街だった西南角に新築した東京大飯店に旅装を解く。



（右は孤立していた鉄塔は周囲に建物が密集し、昔日の面影なし）

前宋の都だった時代の紫禁城の「龍亭」は、すっかり姿を変えて中山路も昔の面影はない。戦国時代の魏の「大梁」、五代時代の「東京」（トシキン）、晋、漢、周、宋はここに都し、金時代には「汴京」（ベンキョウ）としたが、私が記憶する前宋時代の建物では「清明上河遊覧図」に残る二層の建物のみであった。（右は楊家湖と播家湖の間に真っ白い玉帶橋が架かり景観が一変した龍亭前の風景）



「死闘の古戦場中牟城」

出発前から旅行社を通じて中牟城へのタクシーと通訳を予約してあった。その通訳が東京大飯店の副社長「劭珍女史」（北京語学専門大学日本語科卒）であった。開封市内は未見学のために彼女は主な市内を通過して中牟に向かった。開封～鄭州街道は高速自動車道路となっていて、中牟まで一時間足らずで到着した。中牟市街も亦、無から有に変化したほどに変化し、戦火で廃墟と化した姿は全く消滅していた。



女史は中牟県人民政府（県）内に入り、知事に日本軍の隊長が面会したいと申し出たが多忙を理由に断られ、代わって秘書課長との面会が許可された。先ず第一に戦時中、私は中牟県民の人達に多大な御迷惑を掛けたことをお詫びすると鄭重に謝意を述べ、持参した記念品を課長に手渡した。若い課長は戦時中のことは全く知らず、私は持参した地図を広げて現状を聞いたりして時間は経過した。旧部落名の「洞上」「大播庄」は今はどうなっているかと質問すると、自動車で案内しますと先導してくれた。街は都会化して県庁所在地らしく発展し、洞上の我々を苦しめた高地は平坦地に変化し、発電所が建設されていた。



（右上は戦闘間の北門トートカ、右下は南門トーチカで現在はなし）

中牟城は昭和16年9月までは、国民党蒋介石軍の牙城であった。10月1日を期して私は新任中隊長として初めて新黄河を敵前渡河し、中牟の南側（我々から見ると裏側）から敵陣を攻撃して中牟城を無血占領した。しかし、その後は、我が中隊を基幹とした歩兵・砲兵・工兵・野戰病院その他の部隊約400名を指揮し、背水の陣を敷いて奮戦力闘する戦場と化した。敵は砲兵を有する我に数百倍の兵力であり、我が守備隊全員は黄河を背にして死を決し、累卵の危ういの如き孤立無援の戦闘を継続して中牟城を死守し、任務を完遂した。その戦功が上間に達し（天皇の耳に入ること）、戦功をねぎらう為に侍従武官を中牟に差遣されたのであった。しかし、笑みを含んで地に入った殉國の人達に対し、何時までも否瞬時も、慰靈の誠を捧げることを忘れてはならない。

●『深圳単独旅行4日間』平成8年(1996)3月18日～21日 紀行文 なし

単独旅行の行き先は中国ばかりだが何回目になるだろうか。今回は広州を経由した。

前日、3月17日は新大阪駅前のホテルに宿泊、18日08:20に日本エアシステム・カウンターで搭乗手続きを終え、10:20発JAS11便に搭乗して広州へ向かった

中国国内旅行なら単独でも旅は可能だが、深圳は「経済特別区」でもあり、万一の事故を考えて出発前に通訳と車を予約した。広州空港に到着するとローマ字で私の名前を書いたプラカードを掲げた青年が待ち受け、名刺に「東広省中国国際旅行社・旅遊接待部日本科「張宇」(日語翻訳)と書かれていた。直ぐに旅行社の車だろうか乗車して出発した。

通訳の張氏は先生は広州はご存知ですかと尋ねた。6, 7回は来ているから殆ど知っていると答えたが、車は越秀公園に入って坂を登り鎮海楼の広場で停車した。ここは何回も来ていると言うと、今度は白雲山の方に進んだ。其処も知っているからと言うと、今度は流花公園に向かった。そこにも行っているからホテルに直行するようにと指示し、広州・中国大酒店に入って旅装を解いた。このチャイナオテルは1984年にオープンした5つ星のホテルで、部屋の窓から流花公園や越秀公園が見えて申し分なしであった。但し単独旅行の食事は王侯貴族の気分を味わせるようにと個室に入れられ、特別にサービス係が付きっきりであったが、食事は矢張り会話が大切だ。それに「食は広州にあり」というが、老人向きではない。

3月19日、ホテルに車が迎えに来て深圳に向かった。香港から何回か広州に向かう列車の窓から深圳を見たが、鉄条網が張り巡らされていたことを思い出す。広州を発ってどれほど時間が経過したか不明だが、「深圳經濟特区県東検査站」で停車した。外国人は勿論だが中国人もパスポートの検査が行われ、パスしなければ境内に入れないものであった。

検査站に深圳の通訳の「羅潔」という若い女性通訳が出迎えていた。広州の通訳は深圳では通訳の仕事が出来ないのだ。だから驚くほど高価な旅費となったことを思い出す。

『世界之窓』の案内から始まった。ここは広大な敷地に世界之觀光名所「128」ヶ所を造り、園内には列車が走行して乗車しながら世界観光が出来るという仕組みである。びっくりするほど豪華に出来ていて、日本では皇居、法隆寺、姫路城、鳥居など、私も入ったことのない桂離宮まで造られていた。



(右上は京都の本物の桂離宮を拝観したことのない私が、深圳「世界之窓」で見た桂離宮)世界を股にかけて旅をした私は大体観光してきた名所でばかりで、通訳も驚いていた。

『錦繡中華』(キンシュウ)は世界之窓に続いた膨大な土地に、中国の觀光名所82ヶ所を造った大公園であった。これだけ見れば中国全土を観光した感じがする。「繡」は美しく飾った・美しい意である。皮肉なことに台湾の阿里山まで造られ



ていた。造形しなかったものは映画観賞できるようになっていた。(上はラサのボタラ寺院)

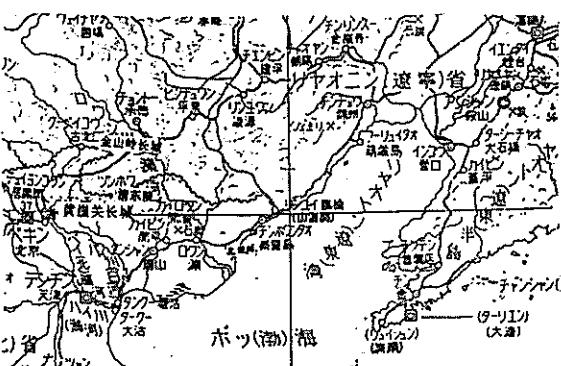
「経済特区」とは、中国が独自の国家建設を推し進めながら、社会主义経済の発展に資本経済の方法を導入するため、特別に外国企業に向けて開放している都市を言う。広東省には、深圳を始め珠海、汕头(スワトウ)が経済特区として建設を推進している。無名で寂れた漁村に過ぎなかつた深圳は、数年後にビルや工場が造られ、レジャー、リゾート、観光ホテルが建設され、忽ち近代的な都市に変貌し、特区にくれば人が変わるとまで言われる。(右は宿泊した新都酒店)



●『癌を押して旅順要塞の旅11日間』平成8年（1996）6月27日～7月7日

紀行文「癌を押して旅順要塞へ」「数々の万里の長城に登る」「清王朝ゆかりの地の見学」
成田～大連～203高地～東鶏冠山～瀋陽～山海關～秦皇島～北戴河～清東陵～承德～
北京～成田

「胃癌の宣告」、我が寺前家の遺伝子
に胃癌があるようで、私は40代の後半
から胃カメラの検診を継続してきた。当
時は自治体・事業所の検診は行われてい
なかつた時代である。平成8年6月5日
の検査で早期胃癌が発見された。しかし
私にはショックは全くなく、国立中山病
院の水野医師と相談して手術は8月14
日と決定し、旅行の承諾を得て旅順要塞
見学の旅行に出発した。（右は旅行地図）



「203高地の見学」、胃癌を宣告されたが我が生命は永遠なりと言う感じで6年振りに
大連を訪れた。大連の記事は省略し、先ず「水師營」を訪れたが、この意味は兵士の駐屯
する所で中国の各地に存在している。我々の小学校時代の唱歌に歌われていたから有名だ。

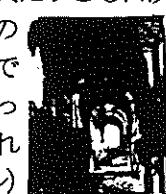
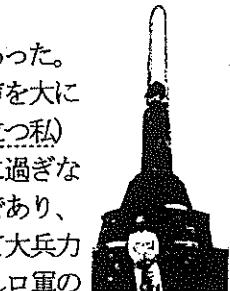
旅順要塞の攻撃の重点は東側の永久堡壘「東鶏冠山堡壘」から「盤龍山堡壘」「二龍山堡
壘」に指向した。しかし犠牲多くして攻撃は失敗した結果、攻撃の重点を「203高地」
に移し、漸く同高地を占領して旅順要塞は陥落した。しかし当初から203高地に攻撃の
重点を指向していれば、もっと早く旅順要塞は陥落していたとし言う囂囂（ゴウゴウ）とした
非難の声が上がった。乃木大将を愚将だと攻撃した。

旅順要塞の攻撃は戦的に見れば、世界初の永久堡壘の攻撃戦であった。
私の戦闘経験から断言すれば、戦略戦術は何よりも経験が第一だと声を大に
して叫びたいのである。（右は2.0.3高地の記念碑の前に立つ私）

203高地は永久堡壘ではない。戦術用語で言えば「前進陣地」に過ぎない。前進陣地は陣地前の要点を過早に敵の手に渡さないための陣地であり、
警戒陣地を少し大きくしたような陣地である。これに重点を指向して大兵力を
投入していれば、容易に占領は可能であったと思われるが、しかし口軍の
全堡壘の砲台と旅順港の艦隊の主砲の集中砲火を浴びて山影は一変し、一兵たりとも占領
を続けることは不可能であったと思われる。203高地は敵の罠であったの
であった。当初から攻撃の重点を203高地に指向しなかったことは正当で
あった。今から100年も前に、八年間の日時と莫大な量のセメントを使って構築した永久要塞は、私は地下の設備を見学して愕然とさせられた。それ
は鉄壁の陣であった。（右は東鶏冠山堡壘の縦横無尽に通じる地下トンネル）
明治38年1月1日、口軍が降伏したのは食糧が底を衝いたからで
あった。乃木大将が非難されたのは、6万という甚大な犠牲者を出
したことが問題とされたのであろう。

東鶏冠山堡壘を見学しての感想は、旅順要塞は遠巻きの兵糧攻め
で陥せたかも知れないと言うことであった。しかし当時の戦闘に直
面した戦場心理を度外視して判断してはならない。

（右は東鶏冠山堡壘の地下に潜った二階建鉄筋コンクリート兵舎）



「瀋陽」大連から瀋陽までは高速自動車道路が開通し、約5時間で瀋陽に到着して懐かしい鳳凰賓館に宿泊した。瀋陽は6回も観光しているが、満州事変の勃発した柳条湖には、南京大虐殺記念館と同じように嘘八百の博物館が建立されていた。満州事変当時は共産軍は全く日本軍と関係はない。満州は張作霖～張学良親子の軍閥の勢力下にあったのである。

「山海關」は万里の長城の東の起点の「天下第一關」で過去6回も眺めていたが、足跡を残したのは今回が初めてであった。私は万里の長城の西端の「嘉峪關」から北京北方の「居庸關」の三名關を訪れ、その他



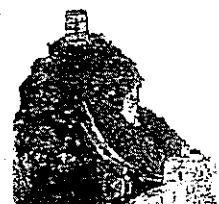
(上は海中に突き出た長城の東端・老龍頭)

「北戴河」は白砂青松の海岸で700余の別荘があり、歴代皇帝や政府高官、外国公使、財界人たちのために開拓された高級保養地である。今回私も高官待遇で北戴河でも有名な外人専用ホテルに宿泊し、蟹料理をはじめ鮮魚料理を満喫した。



「清の東陵」、北戴河から薊縣(ケイケン)～黃崖關長城を見学して「清の東陵」の見学となった。北京郊外の「明の13陵」は有名で観光客が多い。しかし「清の東陵・西陵」は知られておらず、私は狙っていた唯一の地であった。清の第一代のヌルハチの墓は瀋陽の東陵、第二代のホンダイジの墓は瀋陽の北陵で、最後の皇帝で満州皇帝となった愛新覺羅・傅儀の墓は北京郊外の八宝山公墓にある。それ以外の皇族は「この東・西陵」に葬られている。詳細は紀行文に譲る。(上の写真は、重畠として鬱蒼たる天然の屏風のような連峰に囲まれた東陵)

「古北口長城と金山嶺長城」、古北口長城は金山嶺長城の玄関口の長城で、「承德」から北京寄りの重要な関所である。古来から兵家必争の地で「一夫関に当たれば萬夫も進むあたわづ」と言った険峻な隘路を形成していた。(右の写真は険峻な山頂を連ねた金山嶺と古北口の長城)



「承德」は内蒙古から北京に通じる要路で、古くは北方の騎馬民族が馬で駆け巡った所であり、以前には温泉が流れ冬も凍結しなかったから「熱河」と呼ばれた。承德は一山城であったが、夏でも涼しいということから清朝は離宮「避暑山莊」を造り発達した都市である。承德は清朝の康熙・乾隆時代から有名で、私が軍人時代から憧憬の地であった。

満州族(清朝)は蒙古族の一派で、武力的には蒙古の方が優れていた。蒙古族は文化がなかったからチベット仏教(ラマ教)を取り入れ盛んになった。そこで満州族清朝の大陸支配の構想は、チベット、青海省、甘肃省、陝西省、蒙古族らの漢民族を包摶している民族で、一致団結をすることを第一義とした。その外交的な見地から承德に避暑山莊を建設し、包摶網を形成する諸民族との軍事訓練場や狩猟を目的としたのであった。

「外八廟」は承德の「避暑山莊」の周囲に11のチベット仏教のラマ寺院があり、山莊の南に市街地が広がっている。外八廟は山莊と同じ頃に建立され、山莊の宮殿を警護するように並んでいるから、そのように呼ばれる。各寺院の額には満・漢・蒙・藏の文字が刻んでいた。



「避暑山莊」は、熱河を巡視した清朝の康熙帝が承德の優れた自然環境が気に入り、約90年をかけて建造した避暑のための山莊である。康熙帝から158年間に皇帝10人のうち7人までが山莊に宿泊し、皇帝は半年間はここで政務を行い、行楽や娯楽を楽しんだという。(上は避暑山莊を取り巻く「外八廟」の一つ「普寧寺」の莊厳な外觀)他は紀行文。

● 『人生最後の旅路 11 日間』 平成 10 年(1998)1 月 7 日~17 日

紀行文 ビルマ戦跡巡りと慰霊巡礼紀行

関西空港~ラングーン~ヘイホ~インレー湖~タウンギー~ヘイホ~ピンドヤ~カロー~サジー~メークテーラ~ポッパ山~パガン~ア马拉プラ~マンダレー~サガイン~ペグー~チャイティーヨ~ラングーン (右下はビルマの今次経路図)

今次のビルマ慰霊巡礼は 19 年振りである。前回はサガインに第 33 師団(弓兵团)が建立したパゴダが唯一の慰霊塔であったが、今回は各地にパコダ或は慰霊碑が建立されていた。それだけ日本国内が経済的に発展し、戦友会のビルマ訪問の数が急増したからであった。ビルマの戦場は彼我ともに大軍が展開し、ビルマ全土が戦場と化したが、貧しいながらも日本などからの経済援助が効果は顕面(ケキメン)であり、素晴らしい発展したと感じられた。

胃癌手術をしてから一年を経過した私は既に我が墓も建立し、その敷地内に戦友の靈の鎮魂が目的でパゴダと中国の黄河を造園した。その上、私が死亡した時には、我が遺骨をビルマの河と中國の黄河に「撒骨」して鎮魂することを家族に遺言してあつた。

それを承知した妻はビルマの夫の戦場を是が非でも見て置きたいと言い出し、関西空港が完成してからビルマ直行便が週 3 便も運行し、飛行時間は 6 時間に短縮されたから尚更で、意を決して夫婦でビルマ戦跡巡りと慰霊巡礼に旅立ったのである。

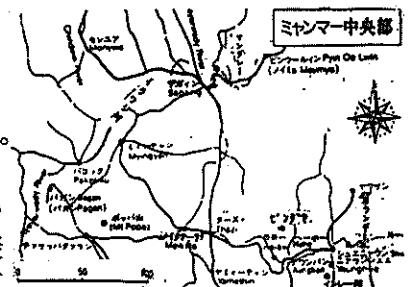
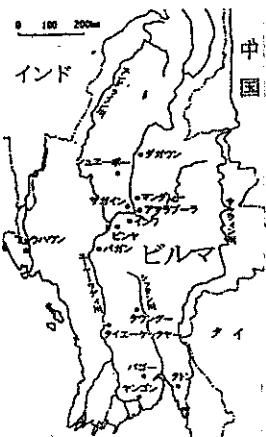
「ラングーン」(現ヤンゴン) は、前回の紀行文を紐解くと大發展し、氾濫する自動車はタイのバンコクに引けを取らない状態で、高層ビルも出現して市場は殷賑を極めていた。シュエダゴン・パゴダは一変して参道はエスカレーターで登り、御土産品店は消えていた。新築した駅の西に新築した市場は盛況で、日本語を話す商人もおおくなり、記念にロンジンを購入したが、日本人に人気の品はシャン・バックのようであった。

「ヘイホ~インレー~湖~タウンギー」の古戦場は、敵軍の東南アジア連合軍最高司令官マウントバッテン将軍から「逆感状」の形で賞賛された戦場であった(英軍中尉ルイス・アレン著の戦闘詳報による)。この敵は急遽タウンギー方面に派遣された日本軍第 56 師団の一部隊(寺前大隊)で、今まで遭遇した日本軍とは違い、格段と攻撃精神が旺盛し、指揮官の戦闘指導は卓越して山稜での作戦は抜群であり、部下将兵の士気も充満していた、と戦史に書かれている。『訳は我が 56 師団捜索聯隊・村野新一中尉(56 期)戦史研究家』これは敵の猛火力を避けるために、私の発案による谷底陣地が奏功したのであった。

「タウンギー~ヘイホ~ピンドヤ」、ピンドヤ以西は処女地であった。敵軍が何時来るかと待ち構えていた地名で、聞きなれた街の名であった。今回は 8094 体の仏像を安置したピンドヤ洞窟寺院を見学し一泊した。

「ピンドヤ~カロー~サジー~メークテーラ」

進撃してくる敵軍の進路に当たり、忘れたことはない地名で、カローはタウンギーと同じくシャン高原の避暑地であった。それから鉄道交差点のザージから以東はシャン高原(約 1000m~1500m)となり、ヘアピン・カーブの急峻な山間道を通過しなければならなかった。敵軍の進撃もこの難所で手古摺ったことであろうと想像する。



メークテーラは平原の中に大湖もあり、パガン王朝時代からの静養地である。このメークテーラでビルマ方面軍は強敵に一大決戦を挑んだが、敵軍の大戦車群に圧倒されて惨憺たる結果に終わった。戦車群との経験を知らない方面軍首脳部を無謀と言わなければならない。私の面識のある吉田聯隊長も此の地で亡くなり、謹んで慰靈塔に額すいた。

「ポッパ山」、メークテーラを過ぎた大平原にポッパ山が聳えていた。これが大ポッパ山で、西側に一段低い小ポッパ山(736m)の岩山が見えた。これがパガン王朝時代からのナツ信仰の中核であった。ナツ信仰はビルマの土着信仰で仏教の守護神である。そのために各家にはココヤシの実に赤い布を巻きつけて飾ってある。ビルマでは現世で功德を積んだ者は死後、理想の天国であるナツ国に行けるという。(左は小ポッパ山、右は参道の我ら夫婦)



「パガン」は20年振りに訪れたが、古都の各地には慰靈碑や卒塔婆が建ち並び、人生を懷古するのには最も相応しい静寂な聖地であった。私の脳髄の深部に刻み込まれていた記憶が蘇り、夫婦で再び足跡を残すことが出来たことの幸福を肌に伝わってきた。特にゆっくりと拝観ができた「アーナンダ寺院」



は奥底深い感じが溢れていた。釈尊の十大弟子の一人で従兄弟である「アーナンダ」は、漢字で「阿難陀」と覚えていた。(上左パガンの落日とパゴダ、右は落日を見る我が夫婦)

「マンダレー」前回は王城内は草ぼうぼうの荒地だったが、今回は城内に王宮も建立され、観光名所として整備されていた。王城を取り巻く水濠の中にレストランまで建造し、マンダレーの感じは一掃していた。(右の写真は王城を巡る水濠の中に建った水上レストラン)

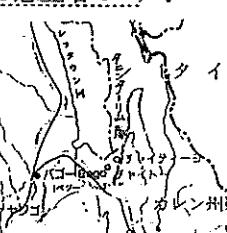


マンダレー・ヒルは前回は青息吐息で登ったが、現在は山頂まで自動車で登れ、イラワジ川を見渡す観覧台も整備され、大きなホテルも麓に新築されていた。

慰靈塔

「サガイン・ヒル」はマンダレーからイラワジ河を西に渡った死闘戦場で、数え切れない慰靈碑・鎮魂碑・パゴダ群は鬼哭啾啾として建ち並び、イラワジ河を睥睨していた。現在は頂上まで自動車で登れることが幸いであった。(右は慰靈塔の一)

「チャイティーヨ」、サガイン～マンダレー空港～ラーングーン空港を経て、バスに移乗してペグー(現パゴー)に急行して一泊した。翌日、ペグーからシッタン河を越えた東方 110k の「チャイティーヨ」の観光となり、約5時間の山岳の悪路を強行軍した。「チャイ」はパゴダの意味で「ティーヨ」は傘をさしている形を言う。バスからトラック・バスに乗り換え、更に頂上まで「鶴籠」を利用した。



チャイティーヨは伝説によると 11世紀、隠者が仏陀の頭髪を自分の頭髪の中に隠し持ち、国王は海底から丸い岩を山頂まで運び上げ、其の上にパゴダを建立して仏陀の頭髪を祀ったという。ここは昔からビルマ屈指の巡礼地となっているという。パゴダは海拔 1080m の山頂にあり、球状の大岩の周囲は約 24m で、高さは約 8m、パゴダの高さは約 4、5m である。チャイティーヨとはモン族語で「僧侶の坊主頭に載った仏塔」の意味だといわれている。ビルマ慰靈巡礼の旅は紀行文に譲る。(右はチャイティーヨの位置図と奇岩)



●『ラオス紀行 8日間の旅』平成11年(1999)1月10日~17日 紀行文 ラオス紀行
成田~バンコク~ヴィエンチャン~ルアンパバーン~メコン川遊~ピエンチャン~バンコク
乱世に生きてきた我ら夫婦は昨年、息子と娘の両家によって東京・
帝国ホテルに於いて金婚式を祝ってくれた。娘夫婦は銀婚式を今年迎
えると聞き、その祝いに海外旅行を思いついた。しかし小さいながら
会社を経営する立場上、夫婦揃って一週間も会社を留守にすることは
許されず、一週間以内の娘だけの参加を条件に選定した結果、ラオス
紀行となった。

(右はラオスの位置図)



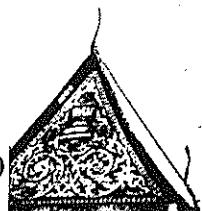
[ラオス周辺図]

日本とラオスの交流の始まりは不明だが、朱印船制度の頃には象牙、毛皮、香料などが、この地域からシャム(現タイ)、ベトナム、カンボジアを通じ交易していたと推察される。例えば煙管(キセル)を昔から「羅宇」(ラオ)と呼んでいたのは、江戸時代から「管」に「ラオ」(スは複数)から渡来した竹を使用したようだ。

北陸地方は数年ぶりの大雪で降雪中ながら定時に小松空港を飛翔し、成田発バンコク行便も定刻に飛び発ち、翌日の0時20分に滑走して30分後にバンコクのホテルに到着した。

「ラオスの首都・ヴィエンチャン」昨年のビルマ訪問を「人生最後の旅路」と書いたが、今回の旅は当然のように、奮闘した私は妻や娘におんぶに抱っこ旅となったことは事実で、これが最後の海外旅行となったのである。朦朧として恍惚状態の私は世界で最も人口の少ない国都・ヴィエンチャンに到着し、漸く記憶は少しずつ脳膜に刻まれ始めたようだ。

「タラート・サオ」、ラオスに関するガイドブック類は全くなく、今でもラオスの人達はメコン川にナーガ(蛇神)が棲んでいると信じている敬虔な仏教徒である。タラート・サオは朝市のことと貧困の国の観光らしい。東洋的な三層の屋根は仏教寺院の屋根を真似したもので、その三角の破風(ハブ)に描かれた曼荼羅模様は仏教国らしい。(右は破風の曼荼羅)



ラオスの歴史やヴィエンチャン歴史は紀行文に譲るが、ラオスの言語文化は、異なる民族から構成されたモザイク国家のようで、市場の商品も特筆する物なし。

「革命記念塔」はビルマのパゴダや、タイのワットと同じく白亜の仏塔で、頂上に赤い星をつけ、ラオスを訪れた外国の要人が必ず参拝する場所であると言ふ。願わくば日本の靖国神社も是非そうなって欲しいものである。

「凱旋門」は仏国の植民地だった遺物のようだが、実際は内戦時代の戦没者の慰靈が目的である。頂上に登って見渡す眺望は素晴らしい、此処を中心に道路は放射線に伸びていた。(右の写真はヴィエンチャンの凱旋門)



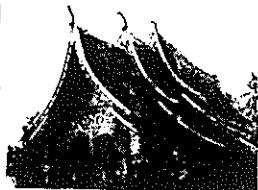
「ブッダ公園」正式名称は「ワット・シェンクアン」で、寺院である。多くの仏像が無造作に据えられており、ブッダ・パークとなつたらしく、数千体に及んでいた。

「ワット・ホー・パケット」は1560年、「ルアンパバーン」から「ヴィエンチャン」に遷都された時、「エメラルド仏」を安置するために建立された寺院である。1730年と1828年にシャム(現タイ)の侵入によって寺院は破壊され、「エメラルド仏」はタイに持ち去られてしまった。そのエメラルド仏が現在のバンコクの「エメラルド寺院の仏像」である。

「タート・ルアン」これはヴィエンチャンだけでなく、ラオス全土のシンボルである。起源は紀元前3世紀までも遡ると言われる。当時の王がルアンパバーンからヴィエンチャンに遷都した1566年に建設を始めたが、1873年に中国の侵攻で破壊され、1930年代に入つて修復され、現在の姿の仏塔になったと言う。一边約85mの正方形で仏塔は三段である。

「古都ルアンパバーン」ヴィエンチャンからプロペラ機で 50 分後に到着。この小さな古都は街全体が世界遺産に登録されていて、私の今次旅行の最大の目的地であった。

「ワット・シェントーン」、「シェントーン」とはルアンパバーンの旧名である。ラオスの京都といった風情豊なこの街には 80 もの由緒ある古寺が建っている。この寺は世界遺産都市の数ある寺院の中で最も有名な寺院で、最高の美を誇っている。本堂は「ルアンパバーン様式」と言われるスタイルで建てられ、優雅で大胆に湾曲した屋根に最も特徴が出ている。それは幾重にも重なったデザインが特徴で、背面の壁は「黄金の木」をモザイクで表現し、見事な装飾であった。(上はワット・シェントンの美麗な屋根)



「ワット・マイ」、完成までに 50 年を要したと伝えられる屋根は五重に折り重なり、典型的なルアンパバーン様式の寺院である。「マイ」とは新しいという意味で、ラオスに於ける仏教芸術が最盛を誇った頃を髣髴させる、絢爛豪華さである。寺院の壁に描かれたレリーフも亦、ワット・シェントンに劣らない豪華であった。(上の写真はワット・マイ)



「ワット・ウイスナラート」はスイカを半分に切ったように見えるから、別名をスイカ寺と言う。寺の本堂の窓はアンコール・ワットの石の窓枠と同型で、クメール・シャム様式と言われる特徴的なスタイルであった。本堂は 19 世紀に中国・雲南省のホ一族の侵入で破壊され、現在の物は珍しく外壁は白く塗られていた。以上が世界遺産の三大寺院である。(上はウイスナラート寺院)



「メコン川を遡上して各地を見学」、市内観光は終わり昼食後は、ルアンパバーンの船着場から上流約 25K の「サンハイ村」や「タムティン洞窟寺院」、「パークウ岸壁」の見学となつた。サンハイ村では原始的な砂金採集の光景を始めて目にし、モン族の民族衣裳を簡単な機械で織る姿を見学した。モン族は強大な漢民族に追わられてラオスやビルマなどに流れてきた民族である。タムティン洞窟は「仏像の墓場」と言われている。仏教信者のラオス人は四月のラオスの正月にこの洞窟寺院に詣で、古くなった仏像を納めると言う。500 年以上も前からの習慣で 4000 体以上の仏像が安置されていると言う。



「プーシー丘」メコン川の上流からルアンパバーンの船着場に上陸し、直ぐ前に聳えている高さ 150m のプーシー丘に登った。王宮前から 328 段の石段を登りつめるとルアンパバーンの市街は手に取るようであった。ここは二人の仙人が神に導かれてこの丘に辿り着き、ルアンパバーンの街を造ったと言う伝説から、「仙人(ルーシー)の山(プー)」と名付けたと言う。(右はプーシー丘の頂上で親子三人が撮った記念写真で世界遺産の街を印象)

「ナムグム・ダム」国道 13 号線を北上すること約 3 時間、モン族のバンビエン村から遊覧船に乗船し、日本政府が出資して建設した「ナムグム湖」を遊覧した。



「晩餐会」、東南アジアの最貧国のラオスで、しかも極貧で未開の山岳民族がヴィエンチャンの高級レストラン(?)で晩餐会を開催してくれた。披露してくれたのはマーヤ物語や悲恋物語の踊りで、これらは親日感の現れであり、日本の経済援助を懇願する目的でもあった。

「精霊信仰」は仏教国であるビルマの「ナツ信仰」と同様で、各家庭には必ず「精霊祠」が祀られていた。精霊信仰(アニミズム)は未開な民族の間にはまだ残っている原始宗教で、祈祷師や占い師は尊敬されていた。(上は各家庭に祀る精霊祠の一つ)

《人生最後の慰靈式典》

今次の大戦に於いて私が第四代中隊長として戦闘を指揮した北支那派遣東二九二九部隊歩兵第219聯隊の慰靈祭は、昭和40年(1964)から靖国神社に昇殿参拝をし続けてから今日に至った。又、最後の大隊長として統率したビルマ派遣龍六七三五部隊歩兵第146聯隊第二大隊は、昭和49年(1974)2月に長崎市で慰靈祭を催行し、それ以降も毎年挙行されて来た。昭和58年には生存者の熱烈な願望が叶って聯隊の「慰靈之碑」が建立され、それ以来、碑前に於いて神式による慰靈祭が今まで當まれ続けて來た。

然しながら両部隊ともに若い戦友でも齡を重ねて既に傘寿を過ぎ去り、生存者は数少なくなってしまった。「鐘鳴漏尽」(ショウなりロウつく=時を知らせる鐘が鳴って水時計の水が尽きる=即ち、残された人生の年月が少なくなったこと=悲嘆)の老年となり、昇殿参拝や慰靈祭を続行して慰靈式典を挙行することは出来なくなってしまった。嗚呼、悲しい哉だ。

生存者戦友会としては隔靴搔痒の歯軋いギシリをする思いであったが、今回の慰靈式典を以て最後とすることに衆議一決した。人の世と水の流れは引き潮になり逆流になることもあることを思いながら、断腸の想いは感慨一入であった。

誰も経験しなかった最後の御別れを『弔古』と言うのである。昔を偲んで痛み悲しみながらの離別であった。しかしながら人力の最善の至誠を尽くした私は落涙しながら『含笑入地』(笑みを含んで地に入り)することが出来ると信じております。



平成16年10月17日

最終慰靈祭

歩兵146聯隊合同慰靈祭 於長崎県大村市・聯隊慰靈之碑前
右上の写真は慰靈碑に祭文を奉唱する私・寺前大隊長

下は部隊戦友諸君に配布した『招魂』の意味

『招魂』

紀元前九十一年に完成した中国最初の紀伝である「史記」に「招魂」の二字がある。即ち現存する書物の中で、最初に「招魂」という字句が「楚辭」の中に出てくるのである。

「楚」は中国の春秋戰國時代の一國で、紀元前七百四十年(西暦前507年)に存在して揚子江の中流域を領有した。首都は「郢」(今、現在の湖北省の江陵市)で、その後漢國七雄の国として廟を廢ったが、秦に滅ぼされた。

古代の民族の魂を後世に祀したもののが「楚辭」であり、その中の中心人物が日本でも有名な「屈原」(クンイエン)である。諱言(ケンゲン)。夢遊抄(ムイヨウシヤウ)によつて楚の懷王から疎(タラソ)じられた屈原は、憂愁國思(ヨウシウノシ)、深愁苦(シンカクス)を抱いて「招魂」(ハイバ)川の邊に身を投じた。それは紀元前二七八年のことであつた。彼は何らかの形で祖国の伝統を後世に傳へようとしたのである。

司馬遷(ジバツエン)、南漢の屈原歌を記述は「これに深く感動して史記に記載し、彼の「屈原の志」は中國の人々のみならず、我々日本人の胸の中にも深く刻まれて伝わってきたのである。

史記の「屈原生平列伝」に「招魂」という一篇があり、それには民族の歴史とともに連絡として詠われた頃東の思想が流れている。そして遠ざかれた人々は「魂魄離散(コンパクサン)せん、その魂を招」(と祖国の死者を吊り、我々を「招魂の世界」に近づけている。(註は原文、原文は古文書)

序段は、巫陽(ウヨウ)、醫嬢(ヨウジョン)が魂を招き寄せよつとする時である。第一段では、「魂を帰り来なれ」と二回も繰り返され、夷よ、あなたの帰るところは、皆が待っている祖国であると詠つてゐる。第二段では、魂を迎える準備が整つてゐると詠つてゐる。即ち「招魂」のために大駕馳走を献じ、歌姫たちは絶やかな音や音楽を奏し、魂の帰られる事をひたすら願つてゐる。その最後には、遠ざかれた者の心の悲しみが、何かにすがりつきたいように表現されている。

以上は楚辞の「招魂」である。

人間には古来から死者の鎮魂のためと同時に、遺された者の悲しがりたい悲しみを越えさるために、種々と巧妙な手段を尽くしてきた。その心は姿だらうか。(原文の参考は東京招魂社のもの)

本日が正解!「百十九聯隊第三中隊の数少なくなった生徒は皆大田原」と、靖国神社に参詣後参拝して御廟の御火事など、これまでいたる歴史をよりよく理解する機会となりました。中庭や境内を歩いて、周囲の樹木や花壇の緑豊かな風景など、心地よい空間でした。

次に、「百十九聯隊第三中隊の数少なくなった生徒は皆大田原」と、靖国神社に参詣後参拝して御廟の御火事など、これまでいたる歴史をよりよく理解する機会となりました。中庭や境内を歩いて、周囲の樹木や花壇の緑豊かな風景など、心地よい空間でした。

別冊 卷一 (御別れの挨拶)

歩兵第一二九聯隊第三中隊隊員各位殿 寺 前 信 次

懇親の交わり (ほんしんのかたわり) はなづかにまつたのは國に在籍で歸國した心 でありまつて生き残りを願ひたと申しますが、左連最後の「喜び」であります。

我々隊員一同は我が身に配った骨牌に榜を飾つて火を灯す、或は先祖を祀る壇に供奉を焚く心境で靖国神社の参拝を続けておりました。しかし今まで數十年にわたつて昇殿参拝して參らました生徒候たる心 無事出癆 (へいじゆめい) に済んでいたことは申しますが老齢に遡る、哀愁を心に深へ感しております。

戰場の骨丸祭の中で死に直面して初めて生の戦場を経いたのですが、終後の平和に歸れた我々は、「現を慕 (ねらう) ひ、日を食 (く) ようだして五十九年を度して」してきました。戰場の間に身をおこした時と、然後に度してきた我が身を顧みます。反省すべき数々の想いが錯綜してあります。

行き暮れといろは生死を分からずつて戻つて戦い、つむかかしい生命を國家のために犠牲にされました「御忠義の眞義」に帰着するのでありました。そして生き延びてきた私どもに対し、天は「榮」を与えよといつして「お見送」を述べ、近く我々を休まずために死を賜 (さしつ) うことでしょ。今回のお見送参拝と同時に、我が「三友会」や守衛を以つて解散となります。これがこの世の最後だと思つて、悔か抜かれたよくながれが致します。終夜無量は一入であります。

ただ悔やまれることば、我が國の總理大臣が正々堂々と國民の代表として靖国神社への公式参拝が出来なかつたことと、戰後六十年近くも過過した今日、中國や韓国に何を遺憾するかと申しますが、どううか。

天皇の靖国神社への御祝辞の表現を見ながらたゞは常に禮節であります。

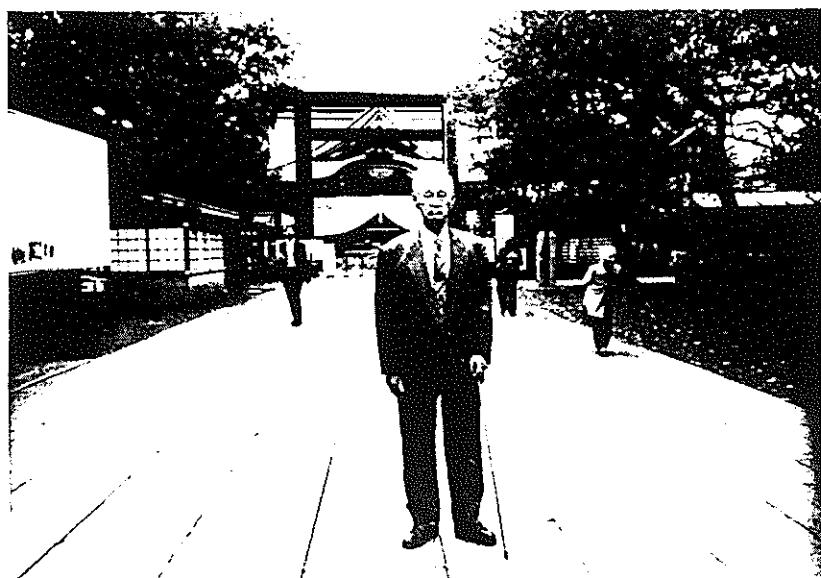
明治天皇が東京招應社を造られ、靖国神社を創建されてから今年は百三十五年になります。明治・大正・昭和天皇の御志を受け継いだ今上天皇は竟てに靖國神社への公式参拝が出来なかつたことと、戰後六十年近くも過過した今日、中國や韓国に何を遺憾するかと申しますが、どううか。

天皇の靖国神社への御祝辞の表現を見ながらたゞは常に禮節であります。

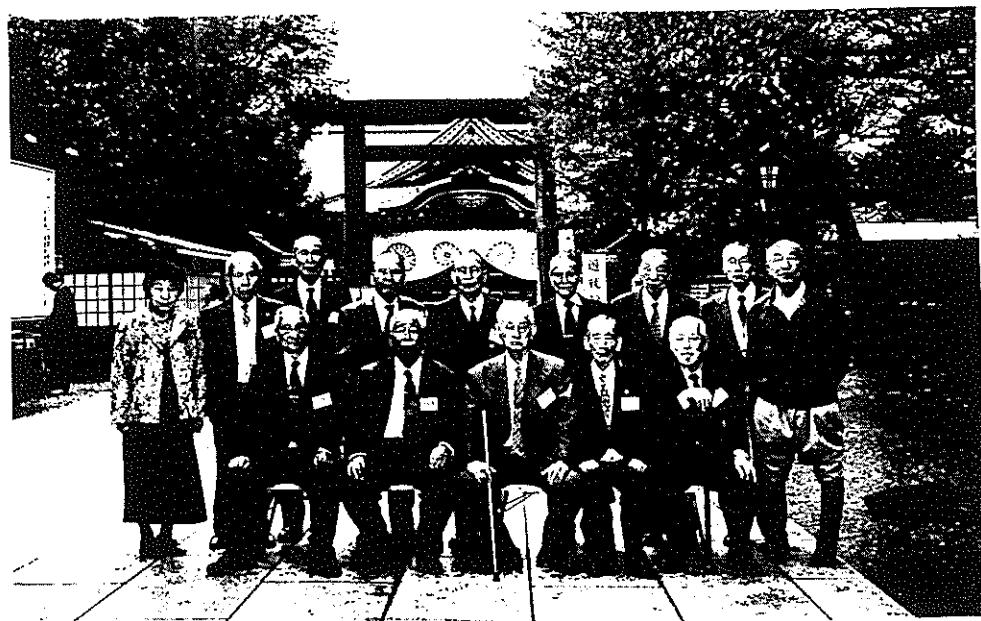
明治天皇が東京招應社を造られ、靖国神社を創建されてから今年は百三十五年になります。現在は過去の延長であつます。國會議事の極端状態の中で感つて幾度とないれた靖國の神々と我々は愚昧 (ぐゑい) 、日々愚昧 (ぐゑい) で愚昧 (ぐゑい) で愚昧 (ぐゑい) の交わりがあります。春秋の國語の「オソシニハシタリ」のメタリストたるとの面接と結構ですが、靖国神社の御祭事の「レバ」は御祭事の御祭事の後方へ退けてやるとは許されることはありません。

始める者と終る者と死んでから「死生一致あり難むべから」と申しますが、これは人力で立たつて死んで死んでしません。三友会の諸君とも今回を以つて御別れですが、どうか一回きりの掛合のない人生ですから、幸福に大事を全うする

靖国神社拝殿前にて



歩219 聯隊第3中隊最後の昇殿参拝記念撮影(前列中央が寺前信次)



歩兵第219連隊 三友会 慰靈祭記念 平成16年10月31日

病魔に悩んだ晩年

この世は苦しいこと、辛いことが多くて、安らかなことがすくない。これを「三界無安」(サンガイムアン)と云う。我が人生を回顧すると、若い時代は死と背中合わせの戦闘に明け暮れ、負傷すること三回に及んだ。戦後は身を挺し身命を賭して戦った軍人は戦争の責任を負わされ、弊履(ヘイリ=破れた靴)の如く捨てられて追放の身となり、難没苦渋(ナンシュウクジュウ)の生活を強いられた。私にとっては忘れられない三界無安の時代であった。

戦後二十数年を経過して子供二人は独立した。其の機会に「人生は行楽せんのみ」と悟り、金は天下の回り物だと国内の名所旧跡を訪ね歩いた。昭和48年(1973)からは当時としては人も羨むような海外に向かって飛翔を続け、快楽主義にふけっていた。

心を遊ばせたいと思っていたところ、「月に叢雲(ムラクモ花に嵐)」と云うのか、晩年に入った喜寿の歳に初期胃癌が発見された。しかし心の動搖は些かもなく、念願だった日露戦争の激戦地であった「旅順要塞」を訪れた。それから懐かしい旧満州の各地を回って山海関・北戴河などを経て、各所の万里の長城を訪れ、有名な清朝の御陵群と避暑地であった承德に遊び、北京を回って帰国した。

7月7日に帰国して旅の疲れを癒し8月14日の手術に臨んだ。しかしながら運命の悪戯(イタズラ)と云うのだろうか。執刀手術する専任の外科医は経験未熟な青二才の若い医師に決まった。その結果、手術は失敗に終わってしまった上に、担当医の術後の処置も納得できないのであった。

その為に、私の身体は投棄された薬害によって「病の器」のようになってしまった。全身に各種の障害が発病して不具廢疾の状態に陥り、我が晩年は心底から苦しい難病奇病との闘病生活を余儀なくされてしまった。これを「諸行無常」と云うのであろうか。

何歳まで齢を重ねて不帰の客となるのか知らないが、本当に「老いることは難しい」と痛感している。長命であっても寝たきりの状態であったり、痴呆症になった戦友たちを見ていると、家族に迷惑をかけてまでも生きたくないという人生観だ。修羅場の極限状態の戦場で幾度も捨てた命だが、傘寿を過ぎたこの長寿は予想もしなかったことである。

世間のために役に立たず、ただ生きていると云うだけの「陶犬瓦鶴」(トウケンガケイ=役に立たないものたとえ)の状態で、氣息奄々(キソクエンエン)として生き続けることを私は望まない。しかし私を含めて医療に対して不満や不信を抱いている患者や家族が多く存在していることを、医療に携わる関係者は知るべきである。

医師に耳が痛いことを云うことは一般に勇気がいることである。しかし私は軍人生活時代に軍医を部下に持つ指揮官の身分であった。激戦中の軍医を指揮してきた経験も豊富で、世間一般の患者よりも医師を見る眼が備わっていると思っている。

私の「今生の想い出」の中に「病魔に悩んだ晩年」と題して医師～医療を糾弾することは、医療全般の質の向上に繋がると信じている。医療ミスを隠してはならないと考え、私の病苦から推量し、敢えて「病む人の心」や「医師に対する教育的なもの」まで記述した次第である。これは医師には分からない患者自身の心境の極く一端に過ぎない。

私の体験では医療ミスは組織ぐるみで隠蔽していたことは確実であると思う。医師仲間では関与しないことにしているのは隠蔽の始まりである。医療ミスは組織の構造的な問題から起り、医師個人の過失だけを責めても医療ミスは無くならないと推察している。

ジンジュツ 《医は仁術なり》

戦前の医術の思想は「仁術」だと言われていた。この思想は儒教の最高の徳であった。五常(仁・義・礼・智・信) の一つで「仁」が最高の徳である。「仁」の意味は「いたわりのある心」のこと、相手の気持ちや立場に立って考える「思いやりの心」である。中国語では「仁」と「人」は同音で、仁の心を持っていればこそ、人間だと云われていた。

「仁」は「医」ばかりでない。道徳や政治の根本は人を深く憐れみ、慈しむことが始まりであり、「恻隱(ソクイン)の心は仁の端始まり」と云われたものである。

「仁」という字は「人と二」と書き、人と人の間に通う親しみの意味を表している。私は軍人時代に、「仁」とは、二人以上の人の間で守らなければならない道徳だと教えていた。死を超越した弾丸飛来の戦場では、指揮官と部下との間は「仁」で結ばれていなければ戦闘は出来ないと言っていた。

四書五経の一つの「大学」では、「いつくしみ楽しむことを仁愛」だと教え、中国・明の張浩(チョウコウ)の仁術便覧では、明瞭に「仁が医術」だと明記している。即ち仁道を行う方法・手段が「医」であると言っているのである。

我が国の戦前の教育は小学校から儒教思想が重視されていた。そのために国民全体に「仁の思想」が蔓延し、特に医者には仁者が多かったように記憶している。医師は絶対に金儲け主義ではなく人道主義に活きてきた。それでなければ患者は寄り付かなかった。戦前は今日のように国民の健康保険制度はなかったから尚更であった。我々の子供の頃を思うと、医者の診断を受けるということは、一般庶民は金がないから無関係なことであった。死の直前に受診できる人は幸福だったのである。だから医者に受診できる患者の数は至って少なく貧乏医者とまで云われていた。我々の旧制中学校時代に旧制高等学校の医学部コース(理乙)を受験できる人は極めて少なく、一部の裕福な資産家の家庭出身者だけであった。

大正時代から昭和一桁時代の田舎町では自家用自動車ではなく、病人が入院するにも病院は殆どなかった。当時、流行性感冒に罹ると、医師は自動車をもっていないから長靴を履いて一人で深い雪道をテクテクと歩いて往診していた。患者の為に懸命に歩く姿を思い出すと誠に氣の毒である。その姿こそ「仁」の姿であったと尊敬していた。

我々の青少年期は肺結核が死亡原因の筆頭で、若い患者がドンドン死んでいった時代である。そのような時代に医療代を取らない医者も存在していたが、誠に「仁術」であった。

「杏林」(キョウリン)とは医者のことである。これは古代・中国の「神仙伝」に由来している。芦山(江西省)の仙人「董奉」(トウホウ)と云う医者が人を治療しても礼金をとらず、治った患者に記念として杏(アンダ)の木を植えさせたところ、数年にして杏の林ができたという伝説がある。だから杏林は医者の異名となった。これは私が1990年に芦山を訪れて知ったことであり、まさに医は仁術であるという生きた証明であった。

孟子(前372~前289)は「仁者に敵なし」と述べている。仁を重んじる人はどんな人でも親切心を以って付き合うから、敵となる人はおらないと云うのである。孟子は又「仁は人の心なり。義は人の道なり」と述べている。即ち、「仁」は人の心の自然であり、義は人の踏み行うべき正当な道だ、と諭しているのである。

老子(中国・春秋戰国時代の楚の思想家で道家の開祖)は「大道廢(スターして)仁義あり」と述べているが、これは「仁や義が取り沙汰される時は、大道が廢れている証拠だ」と云う警鐘である。

古い俗語の文句に、「医者の墓礼と高嶺(タカガ)の桜、取りに行かれぬ先次第」というのがある。治療代を患者のもとに催促にも行けず、先方の申し出を待っている。花びらに触れるには散るのを待つしかない高みの桜と同じだね、という意味である。「医は仁術」であつた昔には、そのような奥ゆかしい風情も残っていたのだろう。

しかし当節は高い山をも崩し、桜の幹を切り倒してでも墓礼を増やすのが医者の流儀であるらしい。診療報酬を決める中央社会保険医療協議会(中医協)を舞台にした汚職事件で、日本歯科医師会の会長らが逮捕された。これは改定を有利に進めるために中医協の委員に現金を与える接待を重ねた疑いがあるからだ。汚い裏工作で国民の懐に手を突っ込むことは許されないことである。

私の最も尊敬する医者

その人は栗山軍医中尉である。彼は福島県郡山市出身で旧制二高から旧制新潟医大を卒業し、短期現役軍医を志願して陸軍軍医学校に学んだ現役軍医であった。(医師は三代目)

私は昭和16年9月に中隊長を拝命して黄河渡河作戦に参加した。其の後、黄河を背にした孤立無援の橋頭堡陣地の死守を命ぜられ、百倍の敵を迎撃して死中に活を求める奮戦力闘した。しかし唯一の補給路である黄河の渡河点が射撃されるため、出撃して敵陣を破碎した。この戦闘で佐藤久義兵長(東京都町田市出身)は敵の拠点陣地(トーチカ)を攻撃し、逃げて出てくる敵兵を次々と刺殺して五人を倒した。しかし不幸にも六人目の敵兵に彼の左上腕部が撃たれ、複雑骨折の瀕死の重傷を負ったのである。

このまま放置すると出血多量で生命は危篤だと瞬時に判断した栗山軍医は、敵弾飛来の集中火の戦場で、我が身の危険を顧みず意を決して手術を断行し、素早く上腕部を切断して止血の応急処置を施し、後方に搬送した。その結果、佐藤兵長の尊い生命は救助された。

我が身の危険までも冒し、軍医の責務を果たしたいと決心した栗山軍医は、専門の歩兵科将校に勝るとも劣らず、軍医の亀鑑(手本・かがみ)であり、私の最も尊敬する軍医である。

戦後、両氏ともに再会したが、佐藤兵長は瀕死の重傷でありながら栗山軍医の手術を覚えていた。左腕は失ったものの佐藤兵長は命の恩人だと栗山軍医を感謝し尊敬していた。

一方の栗山軍医を郡山市の医院を訪れ、感謝の御礼を申し上げたことがある。栗山軍医は尊い一人の命を救うために緊急医療を強行したことは、軍医の任務であり、第一線軍医の本分を尽くしただけだと謙遜していた。このことは「言うは易く行うは難し」の格言の通りである。口で言うことは簡単だが、それを実行することは難しいことだ。

この栗山軍医の行動が即ち「仁」であり、この件は拙著「両忘」の128頁に記述した。中国・唐の太宗と臣下との間の政治論議を編集した「貞觀政要」(ショウカンセイヨウ)は、中国・日本の為政者にひろく読まれた。その中に「万死を出でて一生に遇う」と書かれている。これは助かる見込みのない危険な状態を脱して、命拾いすることを言うのである。まさに栗山軍医の行動は貞觀政要そのものであった。

再び古代中国の話になるが、「猗観寮雜記」(イカクリョウザッキ)という書に、死んだ馬を生かそうとする医者のことを「死馬医」と云うと書いてある。危篤で手の施すこともできないのに、なお生かそうとすることで、どうにも致し方ないのに、あきらめないで手段を尽くすことの譬だと記してある。栗山軍医の行動は「死馬医」で「医は仁術」に該当する。

死戦場に臨んで戦った我々は「言葉を尽くし医を尽くす」と云う「医は仁術」の美談を我らの目の前で体験した。栗山軍医中尉(当時)殿のことは銘肌鑿骨(メイキロウコツ=深く心に留めてわすれない)して語り伝えたいものである。

《医は算術なり》

戦前の医は確かに仁術であった。戦前派の我々から現在の医療を見ると堕落している。これは残念だが、敗戦によって精神的に日本の各社会が変化を余儀なくされたからである。戦前は気骨のある人は「武士は食わねど高楊枝」式であり、あくどく金儲けに走る人のことを「悪錢身に付かず」とまで、陰で非難する世相であった。

「医は算術」と云うことは、現代は金儲けに走りすぎる医者が多いと言う意味である。我々の小学校時代の算術は、数学と同義に用いられていた。しかし戦後の算術は計算を中心とする初等数学のことを意味するから、「医は算術」と言われるのである。このことを簡単に表現すると「儲け主義」のことを言うのである。

昨年(2004)の一例を挙げてみる。私自身が風邪で受診して点滴を受けた甲医院の請求額は、診察料1,300。注射料740。保険合計2,040。老人の私の窓口請求額は¥200であった。同じ風邪で受診し同じ点滴を受けた乙医院の請求額は、診察料335。注射料67。合計は4,220で、窓口請求額は¥420であった。同じ病気で同じ治療の点滴を受け、甲は¥200円で、乙は¥420で、請求額は乙は甲の2倍以上であった。政府が医療費がかさむと嘆いているが、原因は患者に非ずして医療機関の過剰請求にあるとが清明し氷山の一角である。隠れ蓑を着た偽装窃盗医集団と云うべきで、患者側にも責任があり留意すべき事柄である。

「儲」(モウケ)という字は、「人」と「諸」からなっており、「諸」は「貯」に通じて「タクワエル」の意味である。「人」を付けて「備える」という意味が本当の意味であった。しかし連合軍は戦前の日本の総てが悪だと指摘した。日本人は金品の物欲に対する執着心のみに捕らわれ、利益を得ることに力点が移ってしまった。本来の意味である「備える」意味が、金儲けだけに使用されるようになり、「算師は得易く仁医は得難し」となってしまった。

心の琴線(キンセン)に触れる「栗山軍医のような美談」(前記)は通用しなくなった。細菌学者の「野口栄世博士」(福島県出身、1876~1928、アフリカで黄熱病の研究中に感染し死亡)のような偉大な医者は、金銭万能主義の現代では出現しないだろう。

明治以来、わが国民は「国家があつて個人がある」という思想の中で育ってきた。敗戦後の今日は国家意識は完膚無(かんぶなき)までに消されてしまい、個意識だけが強調されている。これが戦前・戦後の最大の相違点である。国家を守るために命を捧げる戦前の義務観念は、完全に消滅して彼等の思う壺にはまり、その匂いすら消えてなくなってしまった。このことが米英以下連合国の大日本国支配の最大の目的であった。その結果、左翼思想は全ての面で蔓延し、特に教育界に対する浸透は取り返しの付かないことになった。

昔の若者は「花は桜木、人は武士」と賞賛し、戦前・戦中の心ある青少年は憧憬の的であった軍人を志し、陸軍士官学校や海軍兵学校・陸海軍軍医学校等への志願者は殺到した。このことは己の生命を犠牲にして国難に当たるという崇高な精神の発露であった。

戦後の青少年は日教組教師の責任に負うところが大きいとは言え、全国民は金銭ばかりの思想に慣れ、親もまた同様、子供を最も儲かる医者にすることを希望するようになった。嘆かわしいことだが、国家・国民の為という思想は完全に消滅してしまった。

戦前の医者と比較すると「提灯(ショウチン)と鉤鐘(ツリガネ)」の感じがして、その差の余りにも大きくなつたことに驚愕している。これでは日本民族は世界の先頭に立って率先垂範できる民族にはなれないだろう。小学校からの精神教育の重要性を訴えたい。

金銭万能主義が跋扈(バッコ)した現代の人類社会での「医」は、「遼東の豕(イノヨー世の中のことは何も知らず、自分だけが優れていると自惚れていること)」という格言の通りである。

「算術は得易く仁術は得難し」と言い、「医は仁を無視して算に走る」と言い、現今の医療関係者に対し決して誤った言葉ではない。毎日の新聞を賑やかす医療関係の不正行為を見ると、医師の「常識」は世間の「非常識」と言われても仕方が無いのではなかろうか。

「金は三欠(サンカク)にたまる」と云う格言がある。それは「義理、人情、交際」の三つを無視する人に金がたまると謂う意味である。即ち思いやりのない「仁」のない人が金儲けが上手だというのである。この金儲けに走る姿は本来の医師の姿ではない。

「命に過ぎたる宝なし」という我々のような生き物には、生命ほど大切な宝は無いのである。その命にかかる診断や治療を職業とする医者が、算術ばかりに走っていたのでは、世の中は暗闇だ。仁術を旨とすべき医者先生よ、初心を忘れること勿けかれと申したい。

論語に「苟(イヤシク)も仁を志せば悪しきことなし」とも書いてある。その意味は、「仁」に生きることは純粋な心をもって行動することで、良心に恥じるところが無いことである。

医者は最初の純真な志を忘れてはならない。「医」は人間を幸せにする為にあることを肝(キモ)に銘じ、常に謙虚で緊張した気持ちを失ってはならないのだ。これは孔子の第一の弟子「顔淵」(ゲンエン)が謂った「知者は自らを知る」に通じている。

人間は「自分の盆の窪(ボンノクホ)は見えない」。即ち自分の欠点に気がつかないのである。私の初期胃癌の手術の失敗の原因は、経験不足の若い医師の実験台に立たされたようなものであった。執刀医の本人もさることながら、外科専門の院長及び他の二人の先輩外科医の責任も問題で、「鼎(カナエ)の軽重を問う」(その資格を疑う)一人である。

中国やビルマ(現ミャンマー)戦線の屍山血河の激戦を身をもって体験した私は、唐の曹松という人の「万卒は得易く一将は得難し」という詩を思い出す。多くの兵卒は得やすいが名将は得ることが難しいと云う意味で、戦後の限りなく増え続けた悪徳医師を見ていると、彼の詩と同じ感じを抱くのである。{全医師が悪徳ではないと思いたい}。

貧しかった戦前の日本では、臨終になっても医師の診断を受けることが出来ないような状態であったと前記した。戦後は全国民が各種健康保険に加入するようになった。その結果、医師に権利やすくなつたから患者の数は鰐上(ウナギノオリ)に増加した。それと同時に医療収入は確実に増加の一途をたどってきた。特に高齢化は莫大な収入源となった。そのことが医師を精神的に堕落させ、仁を失い医は算術となつたと考えられる。

戦後の日本医師会の会長を長らく務めた「武見太郎」会長は、医療費の値上げ問題で一躍有名になつたことを記憶している。政府が彼等医師会の主張(値上げ)を承認しないならば、保険医を総脱退すると驚かして強引に医療費の値上げを認めさせている。

戦後の労働運動が酣(タケナツ)であった頃は「昔陸軍、今総評」と呼ばれた。それは戦前戦中の陸軍が大威張りだったことを非難し、現代は総評が大威張りして賃上げをしていると非難する言葉である。その総評よりも紳士面をした思い上がりの我利我利亡者(ガリガリモウシャ)が日本医師会であったと思う。このことは「医は算術なり」の実態を暴露している。

患者から見ると、「医師」というだけで、一通りの診断、治療について最新の知識と経験があるように思ってしまう。しかし、それは買いかぶりである。病気の種類は多く、新しい研究報告が出ると診断治療の考え方は変わる。よほど勉強熱心な医師でないと、各分野の最新情報に通じていると云う訳にはいかない。現実では医師は自信がなくても診断をして処方箋を書いているのが通例である。金儲けに走って勉強する意欲もなくなり、それを忙しくて勉強時間がないと逃げている。一般に惰性で動いているようにしか見えない。

役所も患者も医療の質とサービス向上をはかるため、善医悪徳医を見分けるべきである。

《我が早期胃癌手術の失敗と経過》

平成8年5月、山代温泉の掛かりつけの医院に於いて、金沢大付属病院から週一回来診する消化器内科の医師による胃カメラの検査によって、早期胃癌が発見された。同医師は手術は何処の外科医でも良いだろうと言うことで、胃潰瘍で入院したことのある国立(Y)病院の懇意にしていた消化器内科の(M)医師の診断を受け、手術の相談をした。

後日、(M)医師のカメラによる再検査をしていた時に、その検査室に若い外科医の(N)医師を呼び寄せ、映像を眺めながら(M)医師は(N)医師に詳しく説明していた。

早期胃癌を宣告された私は些かも心の動搖はなく、(M)医師の同意を得て、予定していた6月27日から7月7日までの間、日露戦争の激戦地である203高地や東鶴冠山堡塁を見学し、大連～瀋陽～山海関～北戴河～承德～北京の旅に出で無事に帰国した。

国立(Y)病院の外科医は院長を含めて四人が勤務していた。其の中で私の手術を担当することになった執刀医は、三十歳前の最も若い(N)医師に決定した。これは消化器内科の(M)医師が推薦した外科医である。その当時の私は、このような早期胃癌の手術は外科医であれば誰かの区別はなくできる。失敗などは聞いたこともない単純な手術だと思っていた。

手術日は8月14日と決定して8月1日に入院し、手術前の諸検査を受ける事になった。入院すると看護婦長(当時の呼称)は、執刀医は誰ですかと私に尋ねた。私は(N)医師だと返答すると、(N)医師は大丈夫ですよと応答した。後日になって考えてみると、看護婦長は医師に対する不信が重なり、医師の名前を確かめたようにしか思えてならない。普通であれば、このような質問をする必要がないのである。

手術当日の8月14日の正午に手術室に入り、約5時間で手術は終了した。其の後、私が妻子は(N)に呼ばれて手術の成功を告げられて安堵したようである。患者の私は医術や医師を信用して全く不安はなく、月日が経過すれば退院だと信じていた。(約1ヶ月半の予定)

人気のない個室の天井を眺め、「死闘戦場」と「開腹手術」の心理を病床に臥しながら考えていた。その最大の差は、手術には生命の不安は全く感じず100%生きられると言うことであり、死と背中合わせの最前線の将兵の心境とは完全に異なるものであった。

手術した翌々日だったか、定かな記憶はないが、数日後に胃のレントゲン写真を撮影した。そこで初めて胃の三分の二を切除して、そこを縫合した部分から胃液が漏れている映像を、執刀した(N)医師とともに患者の私も見て驚いたのであった。

そこで(N)医師は再手術をするか、抗生素によって化膿を防止しながら縫合するのを待つか、迷ったようである。(N)医師は院内の他の外科医と相談したか否か不明しないが、私に(N)医師は後者(自然縫合)にすると説明した。そして普通なら一ヶ月半で退院できるのだが、三ヶ月の入院になるだろうと予告した。

このように縫合部分がはじけるような下手な手術では、全く素人の医者の手術である。これまで77年間も生きてきた私は、ホッキスで縫合した部分がほどけるなどと夢にも思ったことがない。憤慨やるかたなしの私は医師に身を任すより処置なしであった。

これが私の早期胃癌手術の失敗による『術後障害が不幸の始まり』となったのである。

早期胃癌などは私の癌を発見してくれた金沢大付属病院の消化器専門医は、手術は外科医であれば誰でも何処でも良いと判断してくれた。だから私は、どの外科医の手術が上手だとか下手だとか思案したことは全く無かった。今にして思えば、入院した時に看護婦長は常識外れのように、何の医者が執刀するのですかと質問してきた。後日になって、その意味の重大さを身にしみて感じてきたのであった。

術後の病状は高熱が続く毎日々で、抗生素質や栄養剤等の点滴を受け、腹部に開けた小さい穴から腹内を消毒するガーゼの交換などが行われた。老齢となった患者の私は苦しみに耐えられず、一時は生を諦めて魂が抜かれたような心境になっていた。

或る日のこと、執刀医の(N)医師は私を手術室に運び、手術と同様に麻酔の処置をしてから、鎖骨の下にある太い中央静脈に大量の抗生素質を注入した。(N)医師は用心のために念には念を入れて抗生素質を入れたと説明した。これが誤りの根本だったと私は思っている。

その当時は薬害の恐ろしさの認識は薄く、患者は医師に責任能力があると信じており、処置は万全を予期したものだと信じ込んでいた。

正確な日時は忘れたが、概ね手術から1ヶ月ほど経過した入院中の某日のこと、(N)医師は何も言わずに眼科の診断を受けるように指示してきた。だから当初は何のために眼科に行くのか分らなかった。診断の結果、眼科医は網膜に黒い斑点が出来ているから、毎日治療に来るよう指示した。放置すると失明の疑いがあると診断したが、発生の原因に就いては何も述べなかつた。

執刀医の(N)医師は何にも言わずに何故、眼科の診断を受けさせたのであろうか。後日になって私が調査して判明したことだが、この網膜の黒い斑点は「カンジタ症」と称する、抗生素質の過剰注入が原因で発生するのであった。

(N)医師は他の外科医からカンジタ症を教えられたのか、或は自分から他の外科医に聞いたのか、一切、患者の私に説明はしなかつた。その時点から私は手術の失敗による抗生素質の過剰注入が原因であり、このような症状が発生したのではないかと疑い始めた。

入院中は毎朝、担当の(N)医師の回診があり、週に一回は院長の回診があった。しかしながら患者を苦しめに追いやった(N)医師は、手術の失敗や抗生素質の多投によるカンジタ症に就いて、一言半句の説明も謝罪の言葉を発しなかつた。勿論、院長も謝罪しない。

しかし執刀医の(N)医師を推薦した消化器内科の(M)医師は、担当医師でもないのに関わらず毎朝必ず私の個室を訪れて謝罪し続けた。初めは何のために謝るのか判らなかつたが、「私(M)が手術の担当医として(N)医師を推薦したことが誤りで、このようになってしまった」と、涙ぐんで平身低頭して詫びるのであった。

消化器内科の(M)医師こそ「仁」に燃えた責任観の強い医師だと感激しながら、担当医の(N)医師の無責任に憤慨の心が爆発してきた。入院時に看護婦長が執刀医が誰ですか、と質問した意味が歴然として判明したのであった。

(N)医師は歳は若くて経験も浅いために手術の機会にも恵まれず、消化器内科の(M)医師に患者を廻して欲しいと懇願していたのであった。だから責任を痛感した(M)医師は私の個室を訪れて、毎朝、私の責任だと謝罪し続けたのである。

生命に関わる医師は戦場に於ける軍隊指揮官のように責任観に生きなければならない。医者を養成する学部で精神教育が行われているのだろうか、と疑うのである。手術の失敗、術後の処置の誤りから、私は取り返しの付かないことになったのである。経験したいばかりに試験台に乗せられた患者は虫けら同然の扱いであった。

「経験豊な一人前の外科医を養成するのに十年はかかる」と言われている。だからと言って、経験を積ませるためにと称して、未熟な医師に執刀させていいのか。このような場合は、当然ベテラン医師を横に付け、「そこはこうしろ」「これはいいかん」と教え、監視しながら手術を進めなければならない。執刀する医師と助手、看護師は、手術の進行や手順を繰り返し練習して体に覚え込ませ、実際の手術では殆ど声の指示がなくともスムーズに手術が進むようでなければならない。病院全体の医師が技術の向上を考えるべきである。

《薬害による五感喪失》

苦しい思いをした入院生活は3ヶ月を経過して漸く退院することができた。それは胃癌手術が終了したという意味なのか、否、傷口が塞がったと云う意味だけである。これから手術の失敗による症状が出ることは皆無だということではない。だから眼科のカンジタ症は未だ通院治療を継続しなければならなかつた。そして退院後の(N)外科医の診察は最初は一週間に一回程度であったが、次第に間隔が延びて月一回となつていつた。

(N)医師の手術の失敗例は私だけではなかつた。噂(ウワサ)は噂を呼ぶように、(N)医師による手術の失敗談が彼方此方から聞こえてくる。死亡した患者まで伝わつてきた。そうこうしている内に(N)医師は出身の大学病院に転勤してしまつた。これは「後は野となれ山となれ」式であり、「雲隠れ」するようでもあり、「敵前逃亡」と云わなければならない。

転勤することに決定したからには、大打撃を与えた責任を痛感し、患者の私たちに一言の挨拶があつてしかるべきである。手掛けた患者には一生涯に亘つて心を尽くすことが即ち「医は仁術」である。(N)医師とは正反対に消化器内科の(M)医師は病院で拝眉する毎に、同情をしてくれて御詫びの言葉を掛けてきた。これこそ仁術であったが後の祭りであった。

医師は大学の医学部や医大を出て、僅かな研修を受けただけでは一人前の腕前ではない。世に蔓延る万病は個人個人によって症状は異なり、決して同一の症状の患者は少ないとと思う。これは私の数多くの実戦場を体験してきた経験から言えるのである。

書物で学んだ乗馬法をもって馬を馴(キヨ)しても、馬は乗りこなすことはできない。これを「書を以つて御(キヨ)す者は馬の情を尽くさず」と云うのである。

若い経験の少ない未熟な(N)医師は机上の学問だけを学んだに過ぎず、実際の現場では役には立たない。人の生命や身体を物品のように軽く見て、先輩医師の協力もなしに軽率に一人で手術を実行したことは、一種の犯罪的な行為だと断言したい。「言語道断」である。大学で学んだ学問だけでは、「脣の上の水練」、「炬燵(コタツ)の兵法」の空論である。

将来の為に申し述べておきたいことは、執刀医に「この手術は何回実施した」ということを表示する責任を負わすことである。簡単に一人前の医師にすることは患者としては大反対で、断じて許すことはできない。

病院は医師のための存在であつてはならない。医師には際立つた技術差があることを真剣に考えよ。病院としては最も大切な患者を蔑(ナイガシロ)にしていた現状を、私は心の底から訴えたいのである。私の受けた(N)医師の手術の失敗は不祥事であると絶叫したい。

退院して二ヵ月後、網膜の黒い斑点は概ね良くなつたと診断された。しかし視力は毎年低下して0.8あった右目が現在(05年)は0.1に低下した。左目は0.8の視力を維持している。右目の視力は眼鏡の調整で対応し、一応は一般生活には対応できるのである。

「眼、耳、舌、鼻、皮膚」を通して生じる五つの感覚を「五感」と言う。眼に次いで今度は「舌」が痛み出して四六時中、痛みは消えない症状が出てきた。その為であろうか熱い物は一切、口にすることはできず、手術から8年後の今日も熱い味噌汁を飲めない症状が続いている。冬であつても冷たい御茶しか飲めない哀れな状態である。

購入した「医学書」には、これを「舌咽(セツイン)神経痛」と称していた。しかし専門医であつても、医学書に書いてあるような典型的な患者を診たことがないと著者は書いている。

舌咽神経には感覺神経と運動神経が混じつており、医学書には「焼きつくような痛み」が出ると書かれている。常に「違和感」があつたり「異物感」がざーと続き、ヒリヒリとした痛みが続いて耐え難いほどの痛みだと書いてある。正に我が症状である。

市内や近郊の病院の耳鼻咽喉科を訪れて何回となく「舌」の受診をした。良く分からぬといふのが実情であったと推察するが、医師は患者に対して分からぬとは絶対に言わない。分からぬのに関わらず投薬の処方箋を出している。出版するほどの名医が書いた医学書でも判らないことを、一地方病院の医者が分かるだろうか。最後は「歳ですから」と老齢を原因にするのが通例であった。

舌とともに「鼻」までが匂いを嗅ぐことを忘れたのか、嗅覚(キュウカク)・臭覚(シウカク)が無くなつた。これは匂いを感じる知覚がなくなったことで、普通の生活に痛痒を感じることはなかつた。女性なら絶対に必要だろうが、私は男性だから助かつたのである。

眼・舌・鼻に続いて「耳」が遠くなつてきた。耳鼻科という耳鼻科に通つて検査したが、総ては老齢によるツンボだと診断された。そしてその進行速度は迅速であった。退院した翌年であった平成9年の秋の聴力検査で「補聴器」の使用を勧められ、左の耳は補聴器に頼らなければならなくなつた。その翌年は右耳も難聴となつて補聴器の厄介になつた。

近代社会に生存する人間にとって最も重要な感覚は「聴力」である。舌の味覚が欠けて食事の楽しみを失い、さらに今度は情報社会の今日では欠かすことのできない聴覚神経まで冒されれば、生きる楽しみが消え失せてしまった。毎日の家族との会話にも不自由を感じ、テレビの音声も聞き取れない状態である。これは生命が終わるまで付き纏うのだ。

旧制中学生に還つたつもりで医学書を紐解くと、「聴覚神経」は脳と内耳とを連絡している神経で、三半規管から発する平行機能と、蝸牛間(カギュウカン)から発する聴覚機能の二つを伝達する神経であると、書いてある。そこで舌も鼻も目も耳も総ての神経が侵されていることに気がつき、抗生物質の多投による神経障害だと確信した。

補聴器は耳穴の型を取つてつくる特徴のために高価である。それが軽度の難聴から中度の難聴へと進行すると、補聴器も新調しなければ案山子(カガシ)に物を言うようにツンボである。胃癌手術してから三年が経過すると、左右の耳は完全に重度の補聴器を使用しなければ全く聞こえない状態になつた。平成13年2月16日に「両感音性難聴」と云うことでの「身体障害者」に認定された。然し補聴器を使用しても良く聞こえないのが実情である。自分の病気と闘うために私は各種の医学書を読むようになった。「抗生物質」は使用すぎると薬剤に対する耐生がついた菌が増えてくる。だから抵抗力が落ちた患者らが感染すると重症に陥るのである。医師が抗生物質を使用する際、届出を義務付けている病院は15%に過ぎないと云う。使用を個々の医師に任せている病院が多いのである。

薬害による副作用が原因と見られる病気の、発生の仕組みは良く分かっていない。厚生省によると、報告された「薬の副作用」の1064件のうち、62件は後遺症が残っている。

発生を予期できない以上、副作用の可能性を常に頭に入れて薬を使うことが重要である。医師や薬剤師は安易に薬を出さず、患者側にも良く説明することが重要である。

「医療ミスの被害者」の一人である私は、大学在学中から医療の第一線に就いてからも、医師には「道徳教育」特に「責任観念」の養成・教育に尽力すべきであると言いたい。現在の医師免許は、いったん取得すれば、取り消されない限り、生涯にわたつて有効である。米国や英国などでも免許の更新制度を実施している。

ドイツでは医師会が医師の任務や患者との対応を定めた職業規則を制定している。違反すれば罰則の対象になり、医師の義務違反や倫理違反を裁く「医師職業裁判所」までも設置されている。

日本でも「医療不信の元凶である医療ミス」の防止のため、免許更新制度が絶対必要である。更新しなければ医師は勉強はしない。旧式医療の継続で被害を患者に織り寄している。

《痛みやシビレの難病奇病》

初期胃癌手術をしてから約3年後ころから、「両肘から手先にかけた部分」と、「両膝から爪先までの部分」に、「シビレ」を感じるようになった。その「シビレの症状」は、長く正座して立ち上がった時に感じる「シビレ」と同様で、「堪え切れない痛さを感じる難病」であった。その痛さや辛さは、その病に罹った人でないと分からぬ難儀なもので、一日中、休みなく続くのである。冬夏を問わず特に夕刻から夜にかけてが最も酷い症状だ。

これで人間の感覚の総称とも言える「眼・耳・舌・鼻・皮膚」の「五感」が、總て冒されたことになる。手術をした国立Y病院の診断では薬害だとは認めず、口癖のように「老齢」だからとの診断ばかりであった。病院の医師は毎年のように交代していたが、医師仲間は援護射撃をして相互にかばいあい、失敗は認めないことになっているらしく、抗生物質の多投だと抗議しても受け入れてくれないのであった。責任回避も甚だしい。

仕方なく市内外の公立病院から私立病院、それに各医院を廻って受診したが殆ど相手にされず、軒並み「老齢のため」だと診断して投薬するだけであった。(薬の名称は知らない)

これまで八十数年間も生き続けてきたが、このような辛さは経験したことがない。ビルマ戦場で頸部盲貫銃創の瀕死の重傷を受けた時でさえも、十日後には激痛は和らいだ。年老いた今、私が何故このような苦しい病になったのか、と「愚痴」を言う毎日であった。長らく激戦地の第一線の中・大隊長を勤めてきた私が、病の苦痛に耐えられずに早く死なせてくれと、敵前逃亡のような心境にまで追い詰められてしまった。實に哀れなことだ。

一向に効き目がなかったが各医師を廻って一年後に、一般的に「神経科」の医師の診断を受けることは恥ずかしいことだが、意を決して市内の神経サナトリウムの門を叩いた。すると、その病院の医師は親切であった。この「シビレ」の病気は「神経内科」の分野で、一般の医師は神経内科の名称さえ知らない状態であることを告げてくれた。

現在は大学病院にしか神経内科はないから、紹介状を書いて差し上げますという返答であった。そこで自宅から最も近い福井医科大学の神経内科の受診となったのである。

神経内科の名称さえも知らない多くの医師の存在に憤慨を感じた。日本の医師のレベルの低さを理解した。神経内科の名称さえも知らずに投薬する現状は呆れるばかりである。

「医は算術」の金儲けばかりに走って、「医は仁術」の本義を忘れてしまっていた。

福井医科大学附属病院でも十数か所の内科の診察室がある中で、第⑤番の診療室が神経内科の診断を受け持っていたが、「神経内科」の表示は掲げていない状態であった。それだけ未だ一般に宣伝されていない内科で、患者の数も少ないようであった。

この大学病院ではあらゆる医療の検査機械を使用して検査を受けた。初めて体験した機械は「神経伝道速度測定」という名称の機械で、「運動神経と知覚神経」の「伝道速度」を測定した。これは私の病名である「末梢神経障害」の検査の機械であった。

渡された薬の名称は医薬分業前で処方箋が手渡されていないから不明だが、医学書を繙(ヒモト)いて調べてみると「ビタミン B12」で、破壊された末梢神経を修復する働きがある薬で、漸く専門家に辿り着いたと一縷の安堵感に打たれた。

『医療に何を求めるか』私の経験から医療はこうあるべきだと願うことが多い。医師は自分を頼って来た患者の病気が、自分の専門でないと思ったら、適当な医師を紹介すべきである。しかし、これは殆ど実行されていない。何処にどのような専門医がいるということを、医師自身が余り知らないようである。その医師の専門外だったら、あとは患者が自分で何とかしなさいと云うことになってしまう。これで「医は仁術」と言えるだろうか。

《神経内科と末梢神経障害》

日本の医学界には、科学以前のところに大きな問題があるようだ。それは昔の武士階級や旧軍人社会と同様に、自分たちはレベルが上であるという思想的弊害がある。患者に対して傲慢で、診断がつかない時、治せない時には特に不親切であったと痛感した。

外見は病気と認められないような苦しい症状でも、四肢のシビレが強くて痛いために、夜も眠れない日が続いた。それから私は自分で自分の病を知らなければ思い、私の病状や、それに近い症状を書いた医学書を何冊も購入した。そして適当な書籍を見つけるまで、新しい医学の本を買いあさって読み破した。「病気も我が人生」だと思ったからである。

四肢の痛みとシビレを訴えてから約一年半、十数人の医師を巡って漸く神経サナトリウムの医師の紹介で、福井医科大精神内科に辿り着き、「末梢神経障害」と云う病名が判明した。その原因は胃癌手術の失敗から「抗生物質を多投」したことにあった。これは地下鉄サリン事件や水俣病患者が抗生物質を多く注入された症状に良く似ていた。

「神経内科」とは、人体の中核(脳、脊髄)から、体の隅々まで張り巡らされた末梢神経に至るまで、あらゆる神経系の障害から起こる病気を的確に診断し、治療する診療科である。我が国では1975(昭和50)年6月25日に正式に「神経内科」という診療科が認められた。しかし一般の医師は不勉強で神経内科の存在も知らない状態で、嘆かわしいことである。

CTやMRIといった最新の機械を用いて検査しても、それだけでは捉えられない種類の痛みやシビレの数が多い。このような原因がはつきりしない痛みやシビレは、脳、脊髄、末梢神経組織が原因で出てくる場合が少なくない。そして神経内科の専門医以外の医師にはあまり正確には知られていないのが実情である。

「神経系」は、脳、脊髄、末梢神経などと呼ばれる部分から成り立っている。このうち、脳と脊髄を合わせて「中枢神経」と呼び、脳や脊髄から出て全身にひろがっている神経を、「末梢神経」と呼んでいる。

全身に枝分かれした末梢神経には、「運動神経」、「感覺神経」、「自律神経」の3種類がある。運動神経は脳から筋肉へ命令を伝え、感覺神経は体のすみずみの感覚を脳に伝え、自律神経は血管などにつながって拡張や収縮をつかさどり、また胃腸の動きや発汗などさまざまな身体機能のコントロールを行っている。

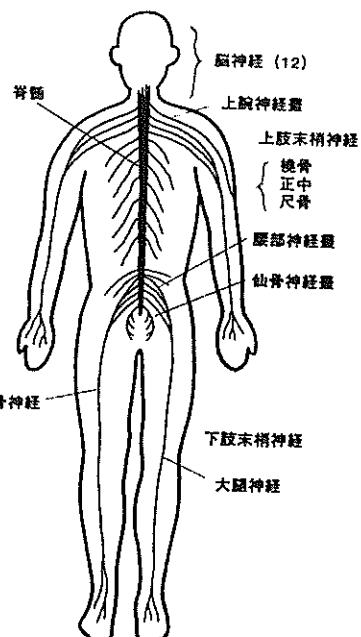
末梢神経が正常に働いている時はよいが、異常が起こると、障害された部分より先(末端)で知覚脱失とよばれる症状が表れる。

神経が一応つながっていたとしても、その伝わり方に異常が起こる場合もある。それが異常知覚と神経痛で、「異常知覚」では、ピリピリした感覚がずっと続き、坐骨神経また、「冷たく」感じるといった、実際とは異なった感覚として伝わることもある。

知覚脱失や重い知覚鈍麻を起こすほどの末梢神経障害は、電気的な検査である「神経伝導速度検査」などで病変を捉えることができる。しかし医学的には未だ推定の部分も多いようである。

下は末梢神経系の区分図

図2 末梢神経系の区分



「神経内科」は中枢神経系(脳、脊髄)と、末梢神経系(脳、脊髄)、および筋肉系の病気の診断と治療を専門とする独立した診療科と定義

されている。原因・治療法が未解決の難病まで、取り扱う病気の数は多く、右の表のように複雑多岐にわたっている。

その中で「神経難病」とは、神経の組織が侵されているものを云い、未だ治療法は確立されていない。この病は社会復帰が難しく、患者や家族の負担は大きく、たいへん深刻な病気である。

私は神経難病ではないかと多くの医書を読んだ。片目が見えなくなる、ものが二重に見える、手足の麻痺、シビレなどの症状が現わると書いてある。これは私の症状と同じで、原因不明で治療法がないらしい。

医師に相談しても確固とした原因是言わず、抗生素質の多投が原因だらうと云うだけであった。医科大の医師が手術したのではないか、原因は解らないのも本当だ。私の述べた手術からの経過から判断したことで、これ以上のことを聞き出すことは困難であった。

末梢神経は周辺の毛細血管から血流を受けているが、これらの血管に障害がおこると、神経は血流から栄養を受け取ることができなくなり、破壊されてしまう。そのために末梢神経障害がおこる。感覺神経を中心に症状が現れるとシビレとして自覚されると云う。

基本的には神経組織に障害があるわけで、それを修復させることが治療である。末梢神経は一日に大体1ミリくらいしか再生しないから、かなりの時間がかかり、少しづつ良くなっていくらしい。しかし、治らない場合もあるという。ビタミンB12は末梢神経を再生したり、神経痛を抑える薬で、福井医科大学でもこの薬が投薬されたのである。

東洋医学(鍼灸)に傾倒

福井医科大学病院に月一回の受診を続けた。その時、平成7年(1995)に長江と黄河の間の街道を旅して、「華佗」(カダ、118~207)という名医が存在したことを知り、このことを想い出した。この医者は後漢の時代に麻酔薬を患者に飲ませて、開腹手術をしたと云うから驚きである。この地は「亳州」(ハクシュウ)という殷(イン)時代の都でもあり、現在でも中国・最大の漢方薬市場のある街であった。(詳細は紀行文に譲ることにする)

その旅を機会に私は「漢方」(東洋医学)に興味を抱き、漢方(中国では中医といふ)の書籍を読むよくなつた。末梢神経障害の奇病に取り付かれて難儀の末に、漢方の鍼灸院の門を叩くことを決心した。それは近所の「左近作鍼灸院」で傷寒軍人出身者であった。

現代医学は決して万能ではないと私は判断した。東洋医学(漢方)は現代(西洋)医学と違つて、身体全体を治すことが根本である。鍼灸院の治療は初めは鍼を打ち、その後は灸にきりかえ、身体全体の約50ヶ所に週二回、灸をすえ続けて今日に至つてゐる。

神経内科で診療する主な病気

神経系の感染症	脳炎：ウイルス性、細菌(化膿)、結核、真菌(かび)、梅毒、黒髪 髄炎：单純ヘルペス脳炎、その他の脳炎(日本脳炎など) ワクチン後急性感生性脳脊髄炎 遷発性感染(クロイツフェルト・ヤコブ病)
脳血管性障害	脳出血とともに梗塞出血(脳外科へ連絡) 脳梗塞、一過性脳虚血発作
神経	急性脱髓 慢性脱髓(片側麻痺、群発筋痛、緊張型頭痛など)
神経系の変性疾患	大脳：アルツハイマー病と老年痴呆、正常圧水頭症 大脳皮質下：パーキンソン病、ハンチントン舞蹈病、ジストニー、 本態性振戻、進行性核上性麻痺 小脳：脊髓小脳変性症など 脛神経：脚面けいれん 脊髄：在動ニューロン疾患、その他
神経系の脱髓性疾患	多発性硬化症
脊髄の病気	脊髄炎、脊髄空洞症、脊髄血管障害 脊髄後傷、頸椎症(整形外科、または神経外科へ連絡)
末梢神経の病気	ギランバレー症候群 各種多発性ニューロバチー発児障害(阿片、アルコール)、遺伝性(シャルコ・マリー・トゥース病)代謝性(糖尿病、尿毒症)、 中毒性(各種重金属、有機溶媒、医薬品など)
発作性の病気	てんかん、失神、めまい、ナルコレプシー
自律神経の病気	中暑、物理的原因による病気 各種の中暑(ガス、金属、ハロゲン、農薬、有機溶剤、胃酸、草木、食中毒)
筋腫瘍、骨部外傷(脳外科へ連絡)	
内因性疾気(合併する神経の障害)	血栓病、膠原病、内分泌病、肝臓病、肺の病気、その他
筋肉の病気	筋シストロフィー、ミオトニー、重症筋膜炎、多発筋炎、 周期性四肢麻痺、内分泌性ミオパチー、代謝性ミオパチー

《医術は経験第一》

医師は経験が「モノ」を言う。患者は先ずこれに気付かなければならない。しかし初めから気が付くことは困難だ。これから診療を受ける際には、遠慮せずにどの分野が得意であるか尋ねるべきである。そこで対処が困難な場合は他の施設を紹介してもらうことだ。

私は阿鼻叫喚(アピキョウカン)の累卵のような修羅戦場で、死をかけて戦う方法を学んだ。「兵法に常勢なし」と云う通り、学校や書籍では習得できない異質なものである。微妙で分かりにくくい能力を身に付けることは、経験以外に習得できない。医の社会も同然である。

学校の成績ばかりに力点を置いた社会では、気位ばかり高くなりすぎている。殊に医術に於いては、学問と実際の医術とは根本的に心理状態まで異なり、人間性が現れてくる。私の戦後の体験では、医師は地位があるのか、能力があるのか、患者を見下げしている。

中国・明時代の儒学者「王陽明」は、『人生の最大の病気は、「傲」(ゴウ)の一字に尽きる』と述べている。中国・左氏伝でも、これを『鼎(カネ)の輕重を問う』と言っている。

何故、これを書いたかと云うと、胃癌手術を受けてから十数人の医師の診断を受けた結果、結論として医師に反省を求めるため、私をして上記のように書かせたのであった。

福井医科大病院の神経内科医は受診から約一年後に転勤となった。しかし此の医師は、患者は適当な専門医師を探せとは言わなかつた。私の通院距離を考慮して自動車で15分ほどの距離にある、「やはたメディカルセンター」の神経内科を紹介してくれたのである。

一概には言えないが、「医師も味噌も古いほどよい」。これは「経験第一」だと言っている言葉である。若い未熟な医師に私が経験させられたように、患者を試験台にしてはならない。「習うは一生」であり、これで良いと云うことはないのである。

「やはたメディカルセンター」(以降はやはた病院と記す)の神経内科の担当医は、四十歳前後の神経内科医長であった。紹介状を渡すと、福井医科大の薬の服用を一時中止して一ヶ月後に来院するように指示した。(神経内科医は四人勤務)

薬の服用中止は、ビタミンB12の効果を診るために私は判断した。中止すると若干だが薬の効果は明瞭に解った。各医書に書かれていたように末梢神経障害は難病で、即効性的の薬ではなく、長期の闘病生活か、一生涯にわたっても根治できない「久疾」だと覺悟した。

一ヶ月後に「やはた病院」で受診し、今まで経験したことのない医療検査機械(名称不明)で長時間に亘って検査を受けた。そして投薬は「ランドセン」という「癲癇」(テンカン)の薬であった。説明書に、「痙攣(ケイレン)の予防薬」で神経の過剰興奮を鎮めると書いてあった。

この投薬を朝夕の二回服用すると効果は良好のようであった。今までよりも少しは「痛みとシビレ」の感覚は和らいた感じがした。しかし夕刻になると今までと同じように激痛を覚え、「貼るカイロ」を腰に貼らなければ耐えられないほどのシビレを感じた。

「久疾(キュウシツ)」と上記したが、私の病は「長いわざらい」だと自覚しなければならなかつた。しかし、このような病気になった原因は、国立Y病院外科医(N)医師の手術の失敗に続く、術後の抗生物質の多投であった。毎日つづく激痛は死ぬよりも辛く、家族には心配と迷惑をかけ通しで、(N)医師に対する痛憤は胸を焼く思いであった。

某医書によれば、神経内科で診る病気の一つである癲癇(テンカン)病にも種類がある。大発作の場合には手足のシビレ、筋肉の痙攣(ケイレン)があると書いてあり、一定レベルに達しなければ薬の効果は現れないと書かれていた。医師は又、テンカン剤は「眠気をもよおす」から自動車運転は要注意と言われながら、感謝の気持ちをもって月一回の通院を続けた。

《賢い患者学》

人間の生命は有限である。その現実を前にして患者の私たちが良く考えなければならぬのは、限りある命をどう生きるか、今そのために悩んでいる現在の病気と、どのようにして共生して行くかである。それは闘病生活であり、ひいては人生観にかかわる。

医師のお世話になることも大切だが、自ら我が病を徹底的に研究して対処していくことの方が、更に重要なのではないかと私は考える。これを私は「賢い患者学」と称したい。

医療ミス、薬漬け、検査漬けばかりをする医師は、その多くは不健全な医師のように私の眼に映っている。どうだ、このような医療器械を使用する医師は偉いのだと言わんばかりで、大衆患者を愚かだと思っている医師こそ、世間知らずの愚か者でないだろうか。

私が見てきた多くの医師は、患者の将来について責任を負うという心があったであろうか。患者を診断してカルテに書き込んで処方箋を書き、患者の数だけ増やしているようにしか見えないのである。

未熟な付焼刃(ツケヤキ)は剥(は)げ易く、このような医師に手術を任せている医療現場の責任を追及したい。「名あって実なし」の医師の多いことは国家的問題である。医師の能力には「提灯(チヨウチン)と釣鐘(ツリガネ)」ほどの差があることを、患者は見定めなければ、その被害は我が身に及ぶことを思わなければならない。

悪意でしたことではなくとも失敗に帰したことは、患者にとっては許すことはできないだろう。悪意と受け取られても仕方のことである。要は結果が重要なのである。そして私の受けた(N)医師の手術の場合で申せば、患者の将来について責任を負うという心が全く見られない。これに私は憤慨している。これから医師に患者中心の医療を切望したい。

私の難病である「手足の痛みとシビレ」の病気に就いては、殆ど知られておらず、治療法も確定していない状態であり、医学書も実に少ない。病例が少ないからだろうか。

痛みとシビレの症状は、わかりやすく云えば「冷え症の裏返し」である。冷え性は手足の先の皮膚温度が低く、冷たくなる現象である。冷え症の原因の一つに、自律神経による影響が考えられる。自律神経には交感神経と副交感神経があり、それぞれ反対の作用をしてバランスをとりながら身体の各組織を調整している。血管も自律神経の支配されている。

交感神経が作用すると血管はちぢみ、副交感神経が作用すると血管がひろがる。冷え症の人では、血管がちぢんで末端の血流が悪くなるのである。

これに対し副交感神経の作用が相対的あるいは絶対的に強くなると、動脈が広がる。動脈がひろがるために、熱感、ジンジンとしたシビレ感や痛みがあらわれる。

特に手足の末端部分で自律神経の作用やバランスが悪いと、痛みやシビレの原因となってくる。どうしてそうなるのかという深い原因是、解らない点が多いと云われている。

治療としては、自律神経も神経の仲間だからビタミンB12を服用するしかない。非常にやっかいなジンジンとした痛みやシビレが続くから、患者にとっては大変な辛さである。現在までのところ、これと云った治療法がないというのが実情のようである。

私は糖尿病ではないが、若干ながら血圧は高く降圧剤を服用している。高血圧から毛細血管の障害がジワジワと進んできたとも考えられる。高血圧によって末梢神経などにも異常が起こっているのかも知れない。末梢神経は周辺の毛細血管から血流を受けているから、これらの血管に障害がおこると神経は血流から栄養を受けることができなくなり、破壊されてしまう。そのために末梢神経障害が起こるのである。末梢神経障害は体の遠い部分の神経から侵されることが多く、両方の下肢、特に下腿や足首の症状が多いようである。

更に進むと両方の上肢にも症状が現れるが、私の場合は下肢と同時に上肢にも症状が現れた。しかし若干上肢の方が弱いように感じていた。

慢性病による痛みやシビレだから仕方がないのかも知れないが、困ったことに此の痛みやシビレは非常に治りにくく、むしろ治らないと明言した医学論文もある。

対応策は前記したようにビタミンB12だが、私の場合のように治療効果が期待できないという意見もあるようだ。ある医師の経験では、抗テンカン薬を服用すると、痛みが一周り和らぐ患者もいたと云う。「やはた病院」の精神内科医長はテンカン薬の投薬をしてくれたが、この薬では神経の修復をすることはできないと云う。痛みが常に続いている私の病状を診て試みたのだろうか、一時は非常に良い効果があったことは事実である。(T)医師に心から感謝いたします。

最も長い末梢神経は、腰髄(ヨウズイ)から枝分かれして下肢に向かう神経で、次に長いのは頸髄(ケイズイ)から枝分かれして上肢に向かう神経である。そして病気が軽ければ両方の足の先だけ、もう少し重ければ両方の手の先にも症状が出る。(上図は手足の先だけの症状)

私の症状は両方の膝から足先までと、両方の肘(ヒジ)から手先までシビレと痛みがあるから、上図よりも重症である。そして末梢神経の症状は、末梢優位性と呼ばれるように、先に行くほど強くなるのである。

末梢優位性によって、私の痛みとシビレが、「病魔に悩んだ晩年」と言わしめたのである。

末梢神経は感覚神経、運動神経、自律神経の3種類の神経が混在し、沢山の神経が束になっている。1本1本の神経を見ると、中央部に神経の線維(軸索)があり、そのまわりを髓鞘(ズイショウ)という組織がとりまいている。ちょうど電線のようで、軸索が金属部分で、髓鞘がそのまわりを被っている绝缘物だと考えればよい。通常の末梢神経障害では、髓鞘に障害が起こっている。しかし髓鞘は修復していく。

然しこの末梢神経障害では、髓鞘ではなく軸索の病変が中心になるタイプがある。此の場合には、軸索の上方の神経細胞にも障害が及ぶことが多く、そのため神経が再生されなくなると云う。重金属による中毒や、特殊な薬物による中毒では、このような軸索変性を起こす。このタイプの神経障害は、残念ながら治らないと書いてある。私の症状から診て、特殊な薬物すなわち抗生物質の多投が原因だと推察している。

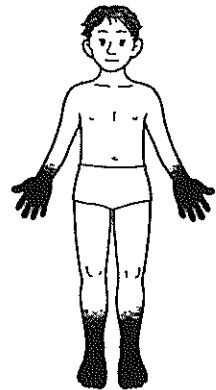
通常の末梢神経障害では、神経が修復されつつある時期には神経をの働きを抑える薬は使わない方が良く、既に固定してしまった軸索性には神経抑圧系の薬が必要で、「やはた病院」のT医師は抗テンカン剤をしたようだ。適切な処置と思う。

高齢である私は痛みとシビレに対し、「使い捨てカイロ」を使用して効果を上げている。

普通の胃癌手術では、術後は一般的に腕あたりの静脈から抗生物質を注入するのだが、私の場合は医師の技術不足から縫合部分がはじけたため、(N)医師は急速、手術と同様に麻酔をかけて鎖骨の下の大静脈から大量の抗生物質を注入した。これが薬害の原因となり末梢神経障害となった。そのことは福井医科大学の神経内科主任医師は明言していた。

ただ手術するだけの医者は不要だ。その後に起こりうる諸症状を想定し、其の対策まで研究し習得することが医師の医師たる所以であり、責任である。医師は抗生物質から起こりうる諸病にも精通している責任がある。それが医師に必要な人命尊重だ。

老齢の私でさえも医学書を紐解けば理解できる。執刀医だった若造の(N)医師は、ただ免許を取得しただけの医師に過ぎない。運転免許と同じく経験不足で責任観念のない医師だ。



《医は意なり》

中国・五代・後秦の宰相「劉昫」(リュウク)(旧唐書の編者一人、887~946)が書いた書物の一つに、「医者意也」(イはイなり)と云う書がある。これに「人の思慮に在り。又、脈候は幽微にして(脈ガカスカナ意)、その難きに苦しむ。意の解く所、口よく宣(ノ)ぶることなし」と続く。

この解釈は、「医術は思い考えるものだ。脈はわずかで判別に苦慮する。そこを解決するのが思慮分別というもので、これを口で説明することはできない」と云っているのである。

唐の名医の「許胤宗」(キヨインソウ)も、医学書を書かなかつた理由を、このように口では説明できないと説明したといふ。

「意」の字は、「心」と「音」を合わせた字である。人の言葉にならないおとの意味。言葉になる前の、こころ、思いの意味を表している。「医は意なり」というのは、医師は患者の心の動や、思い、考え、気持ち、願い、望みを診ることが第一だというのである。

昔の日本では医者と坊さんは「商売」には數えず、それだけ心が尊敬されていた。時代が変わって社会保険点数制度になった現在でも、昔のように心で診断をして欲しいと思う。これが今まで何回も書いてきた「仁」の医術である。心で診る名医も新米医師も同じ点数では不平等である。この護送船団方式は何とか改正しなければならないだろう。

上記したように医は意(心)であって欲しい。私の手術の体験から言えば、どの医師に手術をしてもらうかの選択権は、患者にあることは明確で、それが「医は意なり」である。特に外科医には今までの経験数を表示さすべき義務を負わすべきだと訴えたい。

「経験は生きていくための肥料である。経験は人を変える」と言われているが、戦陣生活を長く体験してきた私は全く同感である。又、「医師の文明」は心の状態であり、心を高尚にするための教育(道徳教育)を終生に亘り行うべきである。

「鼠(ネズミ)、壁を忘れる。壁、鼠を忘れず」と云う諺がある。私の痛みやシビレは不治の病となり、上記の諺の「壁」の心境である。私の胃癌手術の主治医の失敗は我慢ができます、一言の謝罪の言葉も述べずに立ち去った、医師の心に憤りを感じている。

やはた病院のT医師は一年を経過した時分に転勤となった。この医師は親切な「心」の医師で、自分の出身校である金沢医科大学K教授に紹介状を書き、診断を依頼した。

平成15年10月21日に大学病院を訪れた。K教授の診察室には「総合診療科」の表示があり、「漢方薬」の表示も掲げていた。K教授は、やはた病院のT医師の紹介状を読み、私が病気の経過などを述べると、先ず同情の意を表された。さすがに教授だなと感動した。

K教授は私の病である神経内科の「痛みとシビレ」に対して、漢方薬を試したいと言わされた。今までの投薬は所謂(イフュル)西洋医学用の薬で、過去二年以上も服薬しても顯著な効果はないからであろう。それに親切にも漢方製剤の小冊子まで手渡して戴いた。

老齢になった今日まで、医師の先生から本などを貰ったことは全くない。このこと一つ取り上げても「医は意なり」と痛感した。K教授は患者の心をも診たのであった。

この病が発病してから熟読した医学書は二十冊に及び、東洋医学(漢方)にも心が引かれて何冊かを読んだ。東洋医学は、体の一つひとつ、臓器や各部位などの細部からアプローチする現代医学と違い、体を全体からとらえて治療する医学である。別な言い方をすると、「現代医学は病気を診る、東洋医学は一人の病人として診る」ことであるようだ。

当日の投薬は、四肢のシビレや冷えに効果のある「ツムラ牛車腎氣丸、ツムラ桂枝茯苓丸」の漢方薬で、一ヶ月後にはシビレが弱くなり、名医・心医に出会ったことを感謝した。又、他の医師は灸の効果を認めなかつたが、K教授は灸を認めて現在も続いている。

《病気に対し心の挑戦》

K教授の診断を受けた感じの第一は、「遠慮なく質問できる雰囲気」が漂っていたことである。これは医師の絶対条件である。私の末梢神経障害の原因は薬害であり、薬は毒にもなり薬にもなるのではないか、と質問すると肯かれていた。

前記したように、西洋医学は診断した病名に対して治療を行う。一方の漢方医学は医師が五感を使って身体全部を診断し、患者の訴える症状や診断の結果を総合して、漢方薬を処方する医学である。

私の読んだ漢方医学書に、「同病異治」(同じ病気でも治療は異なる)、「異病同治」(異なる病気でも治療は同じ)ということが書いてあった。同じ症状でも人によって効果のある漢方薬は異なり、一つの漢方薬で幾つもの症状が同時にとれることもあり得るのである。

「麝(ジャ)あれば香(カンタ)し」(麝香)と云う通り、才能のある医師は宣伝しなくとも患者が宣伝し、自然に認められるものだ。一般に「名あって実なし」の方がが多いようである。

K教授の処方された漢方薬の服薬を続けていると、歴然として効果が現れて痛みやシビレが和らいできた。「地獄で仏に逢う」とい云う言葉の通りであった。今迄、このような病に冒されてまで生き長らえる価値がどこにあるのか、と嘆いたこともあった。この辛さに耐えられず死の早からんことを願っていたことも、あったのである。

痛みやシビレが和らぐと、自然に私は心の中に大切であるべき「生きがい」のようなものを感じ、人生最後の「総攻撃」だと病気に対する挑戦を決意した。死生を超越して驚天動地の戦場を駆駆してきた私は、心の持ち方や精神状態がいかに人間の生命力に影響するかは体験済みである。これこそが病気を制圧する最大の薬であり、生命力を活性化させる療法である。人間は心から病気に陥れば終わりだと自覚した。

人間は医学的な条件だけで生きているのではない。それは本人だけにしか分からないだろう。人生は応用問題を解くようなもので、私が医学書や闘病記を読むことは、応用問題を解く能力をつけるようなものであった。百人いれば百人の人生があり、百の闘病記には百人の人生が書かれていた。患者は医師に対し我が人生観を述べておくことも必要だ。

私の末梢神経障害は何人の医師の診断を経て、精神科の病院で漸く神経内科が診療科だと教えられた。それまでの一年は浪費した時間であり無駄だった。私の体験から言えば、患者は「もっと良い療法があるのではないか」と感じたら、別の病院なり医師の門を叩くことも必要である

K教授は最初に私の末梢神経障害を診断された際、この病気の根治はできないと初めから言い渡した。そして又、漢方薬にも薬害はないことはないとも言わされた。一年ほど経過した頃から腹痛を覚えた。自己判断で服薬を中止して経過を診ていると、時間の経過とともに腹痛は自然に治癒の方向に向かっていた。

次のK教授の診断時に報告すると服薬の中止を命じた。最初に漢方薬にも薬害があると言われた通りである。現今の医療では薬が不必要な人までに医療機関は薬をばら撒いている。これが発癌や薬害の可能性があることを、患者の方から見抜くべきである。

私は十年ほど以前から少々、高血圧ということで、降圧剤を毎朝食後一錠あて服用している。これは掛かりつけの医院の処方である。しかし中高年になれば動脈硬化によって血圧は上がる。しかし血圧はその人の体の状態に合わせて変化するから、むしろ我々のような高齢者の場合、血圧が少々高いほうが元気だとも言えるのではないだろうか。

どこまで病気に挑戦できるか？ 聞いて覚えた学問より体験した知識が正確だと云える。

《医は信頼から始まる》

「医」は「商売」であってはならないと、182頁11行目に書いた。「人助け」が医療の根本である。しかし現状を眺めてみると患者側にも責任がある。患者の「お任せ医療」の傾向が日本の風土に根強くはびこり、患者中心の医療に変えなければならない。

一般的の国民は如何にして信頼できる医師と危ない医師を、どのようにして見分けることができるのか。患者から医師全般を眺めると次のような言葉が頭に浮かんでくる。

日本医師会長の権威の象徴といわれた武見太郎会長は、会長時代に「会員の三分の一は欲張り村の村長さん」と言った。それは医師が診療報酬のアップを主張するだけで、自己研鑽(ケンサン)や医療の品質保証といった、本来の取り組みを怠ってきた日本医師会に対し、反省が求められているのだと言明した。

病院の診察室の前に○先生は学会のため○日は休診の貼紙をよく見かける。しかし学会の講演会で講師の説明を聞くだけでは、実践的な実技教育にならないと推察する。「信頼できる良医」が患者にも分かるような仕組みにすることが、絶対必要である。

免許更新や専門医養成も急務である。又、薬剤知識が不十分な医師が不適切な薬物療法を行ったため、副作用が頻度に起こって私のような障害が発生し、患者に不信感を植え付けたことは確かである。私は本物を見分けるために医学書を読むようになった。「論語」に「過ぎたるはなお及ばざるが如し」とあるように、「薬も過ぎれば毒となる」のである。

医師の生涯教育の究極の目標は、医療の質の向上とともに患者の信頼と安全確保である。医師の臨床能力や資質が今日ほど厳しく言われている時代はないが、一方では医療は日を追って高度化し、複雑化して、相次ぐ医療事故が医療不信を広げている。

診断したり執刀する医師は、患者にとっては「上見ぬ鷦(ワシ)」である。その意味は、恐れる者がいないという医師の地位のことを言っている。「溺れる者(患者)は藻(ワラ)をも掴む」という心理状態が患者である。それほど信頼されている医師の責任は重大である。

責任観念の希薄な人が医師になっても、上に立つ人は、その医師に責任ある仕事をさせではない。私の経験から申せば、必ず「馬脚(バキャク)をあらわす」のである。このような医師に限って、家族からの御礼の金品を遠慮なく受け取る悪習慣だけが身に付き、患者に対する医師の責務の感覚が麻痺している。

論語の「身を殺しても仁を成す」とは、自分の身命を犠牲にしても、「仁」の徳を成就させよ、とのことである。誰も知らないと思っていても、いつか誰かが知ると「四知」(後漢書)に書いてある。即ち「天知る、地知る、我知る、君知る」で、秘密は在り得ない。

アラビヤを旅した時に「神のみが医者」という格言を知った。患者は一心に病に集中しているから、「患者のことは患者に習え」と云うことで、医師は神様と同様に尊敬され信用されていた。即ち医師として善く生きることで、医師は神にならなければならない。又、「医者に聞くな、経験者に聞け」という格言も知ったが、経験ある医師が第一だの意味だ。

誰しも自らの失敗を告白することは嫌である。しかし隠せば隠すほど嘘を上塗りしていく、被害が広がっていく。剣電弾雨の極限状態で戦う戦場指揮官は、部下の戦死や戦傷を隠すことは出来なかったばかりか、そのような心は微塵もなかった。指揮官と部下との関係は一心同体であり、立場の相違はあっても人格は同じであった。

医師と患者の関係も戦場の指揮官と部下のようでなければならない。医師にもピンからキリまであり、俗医、偽医、騎医、学医、名医等がある。全医師が信頼医になって欲しい。

《自然治癒》

「医者の十全」。十全という言葉は病院の名前として多く使われている。「十全」の原典は紀元前千年ほどの周代の官制を記した「周礼」(シュウライ)に出ている。ここでは『一年が終わると医師のその年の治療成績を審査し、その成績に応じてサラリーを決めよう。全部に対して適合(十全)なら「上医」としよう。一割二割三割の間違いはあるだろう。しかし四割間違えば「下等の医者」とする』と。「何故かと云えば、人の病気はひとりで五割は治るもの、六割治したと云っても最低医者だ」と。なかなか手厳しい。(医師は官吏であった)

これに付いている「注」がまた面白い。「薬は大体毒でもある。飲んでクラクラと眩暈を起こす薬でないと効かないものだ」と。紀元前に今日のガン治療薬のことを述べている。

さらに下って紀元千年ごろの宋の時代、「程」という兄弟学者の出した「二程全書」に、十全の定義を次のように補足説明している。

『治る病気と治らない病気の区別をはつきりと見定め、治療に当たるのを十に対して十の良い治療(十全)を施したと言えるのだ』と書いてある。(周礼は十三經の一つとして有名)

我が国でも「荻生徂徠」(オギュウソライ=江戸中期の儒学者・兵法家、1666~1728)は問答集に、「薬は皆毒にて候え共、毒と名を付申さず候事は、長所を用い候故に候」と書いている。この意味は、「薬といふものは、もともと皆、毒になるものだが、その長所だけを用いることによって、体をいやす薬になる。ばい菌を殺し、神経を麻痺させて痛みを抑えるなど、薬の作用は一步間違えると、毒になるものばかりだが、その性質をうまく利用することで人間の役に立っている」と云うのである。

「十全とは即ち少しの欠点もなく完全なさま」を云つており、「医師の目標」である。現今は薬が不必要な人にまで、医療機関の利益のために薬をばら撒いている。

前記(182~3頁)したように私の難病である痛みとシビレに対し、金沢医大のK教授が出した漢方薬を服用してから約一年が経過した。突然その頃(平成16年春)から「腹痛」が起きたために受診し、腹部全般をエコーで隅々まで検査した。結果は何の臓器にも異常は認められない。私自身では腹部一帯の末梢神経障害ではないかと自己診断した。

そこで私は「十全」を思い出し、各医療機関からの一切の投薬を中止した。約二ヶ月を経過すると不思議なことに腹痛は完全に消えていた。腹痛ばかりではなく、シビレや痛みも以前に比べて和らいでいた。早速、K教授にも報告したが、これが「自然治癒」であった。

平成16年の夏が終わる頃から「便秘と下痢」に悩まされ、掛かりつけの医院の投薬を服用し続けていた。しかし長時日が経過しても一向に快方に向かわなかつた。そこで再び上記した腹痛の時と同様に全部の服薬を中止し、「十全」の自然回復を期待した。この便秘と下痢の症状はしつこく、発病三ヵ月後の平成17年に入つて症状は消えた。しかし時々再発するが、現在の私の心中は「自然治癒力」を固く信じ、病気に負けてはいない。

脊髄の中には下方に向かう無数の神経経路が入っているから、陰部に向かう神経経路も入っている。この機能が低下して排尿や、排便の異常も出てくる。排便で最も多いのが便秘である。私の場合は排泄機関そのものに異常はないから、それをコントロールしている「神経機能の異常」でないかと自己診断し、自然治癒力で効果を奏したのであった。

「十全」に書いてあるように、人間には元来体内に備わった「自然治癒力」があることを私は体験した。これは偉大な発見であった。自然治癒力が病気を治すのであって、医師はその力を引き出す補助者の役割をしているに過ぎない。そのための「環境装置」が病院であり、「手段」が手術や投薬などの医療技術である。

《有終の美》

『病魔に悩んだ晩年』を綴ってきた。その最後に「生への意欲」と云うべきか、「病気を克服する方法」と云うべきか、「元気を出す老齢患者」と云つたものを書き残しておきたい。

寿命は天から授かったものである。年齢は数字であり、中身とは関係はないと思うようになった。泣いても笑っても一生は一生だ。生きることは年齢ではなく、「意欲」である。今日を楽しく生きることに集中すべきだと思いながら、敵である病気に対する正しい知識と情報を収集し、「生き方」に挑戦したいと勇気を出している。

「自然、時間、忍耐は三大名医である」と西洋の諺に書いてある。「自然」は前頁に書いた偉大な自然治癒力であろう。それには「時間」が掛かり、病人は「忍耐」が肝要である。又、人間の命は精神生活を営んでいる点から、決定的に他の生物とは違っていると思う。それが「生きがい療法」、「自ら生きていく療法」となっているのではないか。

「闘病生活」とは、病気を自然に自分の生活や人生の中にどのように位置づけ、如何に生きるかを、考えながら実行していく「戦」である。私の青年期は「戦闘」に明け暮れていたが、戦闘は敵をよく知ることから始まる。即ち患者自身が病気に対する「正しい知識と情報」を持たなければならない。「任せ医療」から「病人中心医療」への転換である。

「生きがい療法」とは、いろいろと前記したように、自分が主治医になった積もりで、病と闘っていくことだと私は思っている。そのためには名医から良く病気の知識を吸収し、患者自身が納得することが緊要となる。幸運にも私はK教授という名医に遭遇した。

[私の早期胃癌の手術は胃の三分の二を切除して縫合した。現在の早期胃癌手術は腹部に一キロほどの穴を数箇所開け、小型カメラと手術器具を入れて胃を切除する。早期胃癌のうち、粘膜表面にとどまる小さな癌は、口から器具を入れる内視鏡治療の対象である。]

手術で胃が小さくなると、食べ物が急に小腸へ落ちるため、二・三割の患者に冷や汗や眩暈の症状が起きる。神経も一緒に切除するため「下痢」を起こしやすくなる。以上は現在の医学で、手術当時の医療程度は知らない。しかし「手術件数は胃癌治療の実力の目安」だと、元日本胃癌学会会長の中島聰総氏は語っているから、私の手術は失敗であった]。

「死の不安や恐怖」と云う点に就いては、私には不安は全く「無」である。中国戦線やビルマ(ミャンマー)戦線で多くの部下を失い、戦後はその責任を痛感して慰靈一心に勤めてきた。そのために不安も恐怖も絶対にないと信じている。慰靈は我が人生の綱であった。

「孤独」との挑戦も私には不安はない自信を以って言える。我が身を犠牲にして戦ってきた戦場指揮官は、常に孤独であった。依頼心も禁物であり、それらは習性となっていた。死生を超えて戦った戦闘体験記「兩忘」を上梓したことも天命と考え、満足している。

死を近くに迎えて何故このような苦しい「シビレと痛み」の病になつたのか、と愚痴をこぼす精神状態も消えて無くなり、上昇志向で生きようと決心したことは一步前進だった。本当に大切な生き方は、名譽や財産でなく、「心の豊かさ」である。

難病を経験した私は「医師を見る眼」が備わったと云つても過言ではない。それは多くの医学書を読み、多くの病院・医院で受診した影響であろう。米国では判断ミスを防ぐため病理専門医は二人一組で診断するのが一般的らしい。それを参考にすると、日本では二つ以上の医療機関の診断によって、医師ばかりではなく、患者も判断すべきだと訴える。

残り少なくなった人生の最後を飾るべき「有終の美」を、「幽愁」(深い物思い、深い憂い)や、「夢愁」(悲しみ嘆く)にしてはならず、「優秀」と言われるような人生を全うしたいと心掛けたい。そのためにも「賢く病気と付き合いたい」と考えている。

賢く病気と付き合う一手段として、私は平成17年2月までの三年九ヶ月間、「お灸」を頸椎から脊髄、腰椎、四肢にある四十三ヶ所の経絡(ツボ)に据えてきた。「灸」は命のある限り続ける積りである。

現代医学は決して万能ではなく、原因不明の病気も多い。そのため医療事故も多発している。(右の写真は我が背中の灸の跡)

次々と開発される新薬による副作用問題、抗生素の多用によって出現してきた耐性菌の問題なども、新たな問題として増えてきている。

漢方薬は各病院や開業医も使用し始めている。しかし一般の医師は「お灸」には頭を傾げて同意しない。その原因は根本的に東洋医学は西洋医学に一段劣っていると見ているからである。

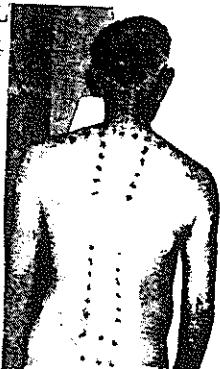
私は現代医学(西洋医学)の医学書を数多く読んだが、神経系の難病は殆んど原因不明で治療法が無いと書いていた。一方の東洋医学の書物からも利点を読み取った。「灸」は「熱の刺激を経絡(ツボ)に伝えて温める」作用だから、「冷え症状」に効果が大と書かれていた。私の末梢神経障害は、「貼るカイロ」を腰椎に張らなければ耐えられないほどの症状で、「灸」は絶対だと信じた。その結果は徐々に現れ喜んでいる。

平成17年の年賀状を見ると、返信の無い数が急激に増加していた。その原因是「老化現象」である。脳梗塞、癌、言語障害、心筋梗塞、糖尿病などであった。私の戦友たちは即ち私自身だと考えていた人達である。加齢による老化には個人差があることは承知しているが、その姿を想像すると、「頭がぼけて、寝たきりのまま長生きしても幸福だろうか」と考えさせられる。そのためと云う訳ではないが、長い間、習慣のようにして実行している例を記してみたい。

- ①「脳」の作用は外来刺激に対する反応が主体で、脳は使わなければ衰えると判断した
私は、脳の活性化のため50歳半ばより拙文ながら時事問題から紀行文、今はこの「今生の想い出」を書いている。手がシビレて字が書けないから「パソコン」を使用している。(タイプライター、ワープロ、パソコン歴は約30年)
- ②「自動車の運転」は通運業時代から通算55年もあり、脳の刺激のために続けたい。
- ③「読書」は意味を理解し、記憶し、想像させる為に適当である。脳の活性化のために読書欲は旺盛だ。その理由は難聴でテレビの音声が聞こえず、見られないからだ。
- ④「手紙を書く」辞書で文字を確認し、忘れた文字を思い出す為にも良く書く方だ。
- ⑤「新聞の囲碁」を見るのは日課で、適当な集中力を高め、脳の刺激になると思う。
- ⑥「運動」健康を維持するためにはスポーツが最高だ。20年ほど前までは毎日4キロは歩いていた。現在は長年の両膝関節炎と末梢神経障害のため、運動と云う動作はできない。しかし天候が許せば、杖をつき休憩しながら千㍍程度の「散歩」は実施している。歩くことは足腰を強め、脳に刺激を与え、思考力や記憶力を高めるために有効だろう。散歩が終わると爽快感で一杯だ。
- ⑦「温泉入浴」は数十年の習慣である。季節を問わず毎朝五時半に起床し、今は軽自動車を運転して「温泉の総湯」に行き、腰から下を約10分以上は湯に浸かり、血行を良くしている(五年ほど前までは往復約1500㍍の距離を徒步)。

私の顔色を見て誰もが顔色が良いと言ってくれる。しかし医者でない私は判断できない。強いて云えば「朝風呂と灸」ではないかと思っておるが、依然として五感喪失である。

最後になつたが、八十も半ばになると、「天は我に『樂』を与えるとして『老境』を与える、近く我を『休』ますために『死』をもたらすことだろう」と感じて來るのである。



あとがき

「人生という旅」は万言の書を読むようなものだったと懐古している。その人にとって一冊の美しい価値のある書物である。私が八十数年に亘って体験してきた時代や、日用に使われていた言葉や文字に至るまで、その総ての背後には其の中で生きてきた多くの人がおり、生きた歴史が存在しているのである。

戦争(戦闘)を始めとして苦しかったことは、生きているからして経験できたのである。試練に耐えてこそ人は成長し、よりよく生きることができるるのである。其の中で最も大切なことは「心の問題」であったと回顧している。

何の役にも立たないかも知れないが、我が八十数年の人生の一部を書き遺しておきたいと、「蛙鳴蝉噪」(アメイセンソウ=蛙や蝉のように喧しいだけの下手な文章)の駄文を綴つてみた。

「あとがき」を大別すると、①「国家意識だけの前期」、②「自分意識だけの中期」、③「病魔に悩まされた後期」に分けられるから、三項目に分けて記述することにした。

①『国家意識だけの前期』

私のような大正時代に生を享けた者は、「国民も国土も一つになって神・天皇に仕える」と説いた国体觀で教育され、終戦を迎えたのである。八十年前の小学生時代に習った國語讀本巻一は、「ハナ ハト マメ マス」で始まり、唱歌は「白地に赤く日の丸そめて」の大日本帝国國歌であった。

小学生の頃から国民の公約数は「國家」だと教育されてきた。国民の三大義務の一つが「国民皆兵」で、総ての成年男子は兵役に服務する義務を負っていたのである。

「燕雀(エンジャク)安(イズク)んぞ鴻鵠(コウコク)の志を知らんや」(ツバメやスズメのような小人物はオトリやクゲイのような大人物の志はわからないの意=史記)と人生意気に感じ、國家の為に軍人を志した私が陸軍士官学校に入学したのは昭和十二年であった。当時の国内情勢は举国一致、尽忠報國、堅忍持久を目標にした「国民精神總動員運動」が推進されていた時代であった。

昭和二十年八月十五日の終戦までは、日本国の名称は大日本帝国であり、主権は天皇であった。軍では天皇を大元帥と称し、「天皇は神」、「國は神國・神州」であった。

神州不滅を感じ、必勝の信念を貫いて戦った大日本帝国軍人の我々は、天皇の命により、刀折れ矢尽き、耐え難きを忍んで降伏したのである。旗鼓(キコ=軍隊を指揮し、号令を伝えるのに用いた旗と太鼓のこと)の命令により降伏を告げられた将兵の心境は、将(マサ)に古代中国の越王勾践がうけた「会稽の恥」(敗者の耻辱)を嘗(ナ)めたのと同じであった。

敗戦後、米国を主体とした連合軍は、日本民族を抹殺する替わりに総ての点に劣悪化を図った。それが押し付けられた現行憲法であり、教育基本法である。特に愛國心が否定され、左翼思想が跋扈(バッコ)し、国旗は立てられず国歌も歌えない敗戦国は珍めであった。

愛國心の喪失ばかりか道徳心も壊滅して価値観も亦、大変化してしまった。生きて再び還らないと固い誓いを残して戦ってきた私は、これを「昔勇敢、今臓病」と名付けている。

我々が戦った「大東亜戦争」を連合国総司令部(GHQ)は「太平洋戦争」と称している。そして東京裁判は侵略戦争だったと決定した。しかしGHQ最高司令官マッカーサー元帥は帰国後、米国議会で「日本が戦った戦争は侵略戦争ではなく、自衛のための戦争であった」と証言した。しかし、これは日本を再起できない状態にさせ、尚且つ、戦前の日本は総て「悪」だと決め付けた後のことであった。

『今生の想い出』の最初に「辞訣」を掲げたことは、死の準備であった。そして又、私の「心の古里」は波乱万丈の「国家意識に燃えていた戦闘」であり、それに就いて述べてみたい。

『戦闘』

人類 5000 年の歴史は戦争の歴史であった。又、古代の歴史は平和こそ人類最高の理想だと説いている。そこで自ら身を以って体験した戦争(戦闘)は一体何であったのかと疑問を抱くのである。平和が見つからないと云うのは、見付けようとしない人類の怠慢である。人類が希求する平和は、人類が死に絶えた地球にしか来ないと言い遺しておきたい。

顧ると、我が青年期は戦闘に明け暮れ、将(マサ)に「少壯幾時ぞ」という時代であった。軍人は昔の武士の後継者だと自認して国家の為に死を賭して戦った。「死」は人生の到達点でありながら、それは願望でも目的でもなく、総て途中であると考えた。だから其の途中が重要なのだと、身を挺して国家のために戦ったのである。

昭和 15 年から支那(中国)戦線、昭和 20 年はビルマ(ミャンマー)戦線の屍山血河(シサンケッカ)の戦闘で獅子奮迅に戦った。熾烈(シレツ)な戦闘に参加した我が人生は順風ではなかったかも知れない。しかし日本男児の軍人熱が最高潮していた時代の戦闘に遭遇したことは本懐であった。人生に挫折感などはなく、満足感が漂っていた時代であった。

今にして当時を振り返ってみると、『戦争には勝敗はあるが正邪はない。戦勝国と敗戦国はあるが、その間に「正義」が割り込む余地はない』と思っている。戦争(戦闘)に参加した人たちとは同感だと私は考えている。

戦闘を体験しない限り戦闘の真相・真髓は書けないものである。戦記は数多く出版されているが、第一線歩兵指揮官の上梓した戦記は極く稀まれである。その最大の原因を探索すると、実戦の「戦場心理」を表現することは至難の業で、日時が経過するにつれて戦場心理を思い出すことはできないのである。

私が戦陣の間で体験した聯隊旗手を始めとして小・中・大隊長の戦闘記は、敗戦 35 周年の(昭和 55 年・1980 年)記念として「両忘」(生と死を忘れる)ことと題して上梓した。

人生の栄枯盛衰は短く、はかないことを「邯鄲の夢」とか、「黄粱一炊の夢」と言われているが、老人になった現在の私も「一生のうちで素晴らしい時期は短かった」と回顧している。

『慰靈・靖国神社』

尊い生命を鴻毛(オオドリ)の羽毛のように、極めて軽いと云うたとえよりも軽いと、忠君愛國の精神で死んでいった御靈(ミタマ)を祭る社が靖国神社である。その御靈を慰める為に我々戦友は靖国神社の参拝を続けているのである。

善人悪人を問わず死者は神仏として礼を尽くし、慰靈するのが日本の慣習である。総理大臣が靖国神社に参拝するのは自然であり当然である。しかし中国は古くから「屍(シカバヘ)を鞭(ムチ)打つ」習慣があり、自国の習慣で日本を非難することは許されない。

中国・春秋時代、「楚」の名族である「伍子胥」(ゴシヨ)は、父の奢(シャ)、兄の尚(ショウ)が「楚」の平王に殺されたので吳の国に逃れ、吳を助けようと先導して「楚」を征伐した。しかし「楚・平王」の子である「昭王」をとり逃がしたので憤慨やる方なく、平王の墓を暴(アハ)き、その屍を三百回も鞭打ったと云う故事がある。

中国は古代から日本を「倭」(ウ)と称した。「倭」は「小さな人」、チビを意味し、今でも悪口を言う時は「小日本」と呼んでいる。三国志の「魏志倭人伝」にある「耶馬台国」の女王「卑弥呼」(ヒミコ)の「卑」は「いやらしい」、「耶」は「よこしま」で軽蔑語である。

②『自意識だけの中半生』（旅遊）

如何にして歳をとるかを知ることは、生きるという偉大な技術の中でも最も難しいことである。私はどのようにして死ぬかでなく、どのようにして生きるかが問題だと思って、旅をしながら生き長らえてきた。

「旅」は心に感動という刺激を与え、生き方を教えてくれた。「旅」を人生の友とした旅心は理性や理屈ではない。「人生即旅、旅即人生」であった。旅は「自分孝行」でもある。

『国内旅行』

私の軍人時代の「刎頸の友」（フンケイ=生死をともにし、頸をはねられても悔いないほどの交わり）は、主として北海道、関東、北九州地方の出身者であった。其の人たちの郷土の地で行われる春秋の慰靈祭には必ず出席し、生存戦友と邂逅して久闊を温めた。又、陸軍士官学校の同期生や先輩後輩、特に私が教育の任に当った陸士 60 期諸君は全国の津津浦浦に点在し、その人達との再会は、「有朋自遠方來、不亦樂乎」〔論語=朋（トモ）有り遠方より来る、亦た楽しからず乎（ヤ）〕のとおりであった。

時代や地域を越えて生きてきた人々の背後には、生きた歴史があることを知った。これが論語の「故(フル)きを温(タメ)ねて新しを知る」〔温故知新=オンコチシング〕である。古い事柄を良く研究して新しい道を発見することであり、古事は今を知る所以であった。

燃やすのには古い薪がよく、飲むのには古い酒、信頼するのには古い友人が良い。そして読むのにも古い書物が貴重であった。

『海外旅行』

国内旅行だけでは飽き足らず、眼が海外に移っていったのは、戦闘という桎梏（シッコク）から開放された反動だったかも知れない。支那（中国）大陸やビルマ（ミャンマー）の亡き戦友が眠る古戦場を訪ね、慰靈することは私の義務であり責任であった。しかし両国との友好条約が締結され、入国できるまでには長い年月を要したのである。

日本のみならず海外の歴史も亦、人間の苦闘の記録であった。古典は人間の英知の結晶であり、遺跡は生きた文化遺産だと思うと、もう旅への病は膏肓（コウモウ）に入っていた。

歳月は移ってビルマ・古戦場の慰靈巡礼の旅は昭和 54 年（1979）11 月、中国の慰靈巡礼は昭和 56 年 4 月（1981）で、ともに初回であった。其の時、敗戦の日本を重ね合わせて脳裏に浮かんだのは、下に書いた唐代詩人の「杜甫の春望」である。

「国破山河在 城春草木深 感時花溅泪 恨別鳥驚心」。「国敗れて山河在り、城春にして草木深し、時に感じては花にも涙を湧ぎ、別れを恨んで鳥にも心を驚かす」。

六十回以上の海外旅行で九十ヶ国を訪れた旅の成果は、数え切れない無尽の力を私に与えてくれた。その「想い出」を綴つた「紀行文」は、私にとっては金錢に替えられない貴重なものである。子孫に遺す財産は此の紀行文と数十冊のアルバムだけである。

海外旅行の中で誰も経験できなかった旅は、一般に入国不可能だった第四次中東戦争後のイスラエルに、「ヤミ」の手続きで足跡を残したことである。パレスチナを軍事占領中のイスラエルは治安も良く、世界の動乱の一因である「ユダヤとアラブ」、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の三大聖地の「エルサレム」は世界を知るために欠かせない地であった。

二十一世紀に入っても大義なき戦争が続いている。その戦争の原因は単純なものではない。原因を探求するには、その土地、民族のあらゆる分野を知らなければ理解できない。幸い世界を股にかけて旅をして、他国の経験から学んだことは有益であったと満足している。日本よ!! 自覚せよ!! 友好諸國の老猾さを過度に期待すべきでない。世に永久はない。

③『病魔に悩まされた後期』

私の生命は拾ったような「寿命」であった。これを「徳俵人生」というのかも知れない。眼光炯炯(ケイケイ)として輝いていた青年将校時代は、馬革を以って屍をつつむ覚悟で死力を尽くして戦った。敵弾を身に受けて負傷すること三回に及び、運命に翻弄されながらも、奇跡的に生還した数奇な運命に生きてきた。これを「盲亀の浮木」とでも言うのであろうか。滅多に出会うことのない幸運だったのである。

死を逃れ、一から再起してきた私は平均寿命に達し、喜寿を迎えた年に早期胃癌が発見された。早期胃癌は簡単に快癒するものと思っていたところ不運なことにも、経験不足の未熟な若年医師の手術は失敗におわり、薬害による症状は全身を蝕んだ。そのために私の晩年は暗澹たる症状に陥り、怒り心頭に發して恨み骨髓に徹し、銘肌鏽骨(マイキロウコツ=心に深く記して忘れない)している。(このことは 172 頁以下に詳細に記述した)

須(スペカラ)く、医師は病む人の心を理解すべしと絶叫したい。医は人間を幸せにするためにあるのだ。患者は「命に過ぎたる宝なし」と懸命に生きたいと念願し、決して諦めてはいないのである。患者にとっては一生の一大事である。このことから「医学は患者から学ぶ」という格言が生まれたのである。

最も大切なことは「医師と患者の信頼関係」である。大衆を愚かだと思っている医師こそ、実は最も幼稚で世間知らずである。又多くの患者が「医療に不満」を感じているのは事実である。相手を思う気持ちがなかったら、医療は成り立たないのである。

「病魔に悩んだ晩年」及び此の項目は、医師には耳の痛いことばかりを記述した。これは「群盲象を撫(さす)」(大勢の盲人が象の体の一部をなでまわしても、象のことは分からぬ)の類かも知れないが、敢えて私が自ら体験した真実を書き遺し、「医は責任に忠実であれ」と言いたいからであった。勿論「患者中心の医療」のために身を粉にして精勤恪勤している、誠実な医師も多く存在していることは承知している。

歳廻り月通り、不具廃疾の身となって晩年を送ってきた私の生命も終点に接近し、この世を去る時は「指呼の間」(近い所の意)に迫っている。しかし「命長ければ蓬萊を見る」(蓬萊は不老長寿の山)といった長寿は願ってはいない。「長生久視」(不老長寿)は「運否天賦」(ウンブテンブ=運にまかせること)である。

水火を踏むような危険な極限地獄で戦い、戦後の悲惨な有為転変を振り返ってみると、泣いても笑っても人の一生は一生であった。散るものは散り、「人生はあざなえる縄の如し」である。そして生きることは年齢ではない。今日を楽しく生きることに集中すれば、その他のことは些細なことだと思っている。

『今生の想い出』は平成 16 年(2004)元旦から書き始め、163 頁までを 5 月末に書上げた。しかし其の年の長期に亘る猛暑炎熱に耐えられず、衰弱した身は更に胃の周辺に激痛を覚えた。それが治癒すると便秘・下痢症状が連続し、苦しみに耐えながら自然治癒を期待して、死に遅れた翌年、平成 17 年(05)の元旦を迎えた。

元旦を迎えた新春の気分を奮い立て、漸く続行を決意することができた。再執筆して 2 月末に此の記録を閉じることができたが、この程度の文に 14 ヶ月もの時日を要したことには初体験であった。将に老い耄れた恍惚の人の記録である。

『人生は有限で「盛者必滅、会者定離」である。天寿を全うする前に我が親戚を始めとして、御世話をなった方々に対し、「有り難う」と御礼を述べて此の世のお別れと致します』

『子孫のために』

「天の命を拾った」(命拾い) 私のような凡人は、数奇な運命に生きただけで、子孫に遺す言葉は知らない。しかし故人は人類の為に多くの言葉を残している。その名言名句は人間の師表(手本・模範)として仰ぐべきである。

「人の生と死」は、本の表紙と裏表紙のようなものだと云われている。捲(メク)られた本の中には、さまざまなドラマがあり、そして静かに閉じていくのである。

軍人だった時代に私等が教えられた第一は「死生觀」であった。人の生死は天命で人の力では如何することも出来ない。即ち「生寄也、死歸也」(セイはキナリ、シハキナリ)である。即ち、人生とは此の世に身を寄せる仮の宿としているだけで、死は故郷へ帰るようなものだと教えられ、私も八十数年間、そのように実行して生きてきた。(中国・十八史略)

生きることは年齢ではなく意欲だと云われる。論語にある「老而不死、是為賊」とは、齢をとれば死ぬものだ。それが自然界の法則である。老人になって意欲もなくなり、体も動かなくなって、ただ生きていることだけに執着しているのは世の為にならない。

「美しい花も僅か数日で見頃は絶える」のである。「人は死よりも苦しむことの方が勇気が必要」であった。だから私の死を懲哭(ドウコク)して嘆く勿れと言い遺しておきたい。

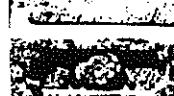
遵守してほしい言葉は、「仁者人也」である。「仁」の徳をもつていればこそ人間である。人の人たる所以は、「仁」があるからだ。「仁之道」こそ「人の道」である。(168頁参照)



「豹は死して皮を残し、人は死して名を残す」と云われるが、私は中国・ビルマの戦闘に参加して、当時の聯隊史に若干の名を遺している。左の写真は終戦五十周年を記念して平成7年に歩兵第219聯隊第3中隊の部下戦友会から寄贈された写真である。これは私が21、22歳ころの顔写真に軍服を着けた合成写真で、戦闘に参加していた私は此の軍服を着用した記憶は全くない。戦場生活が長く、旧陸軍将校としての写真がないため、やむなく贈呈された写真を転載することにした。



「寺前家の祖先について」、昨年(平成16年)の夏、御手継(オテツギ)の常楽寺の墓地を調査した。現在の当主は第18代目の「寺前一男」で、その亡父と私は従兄弟である。墓石は200年近い年月のため刻字は消えて読み取れないが、家紋は「横もっこう」で、写真のとおりで我が家でも現在使用している。この墓石は文政(1818~1830=仁孝天皇)年間のもので、其の当時の寺前家の苗字は「安栗」(ヤスクリ)と称していた。この苗字は私の子供の頃にも使用していたから間違いない。(左は寺前家祖先の墓)



(寺前家家紋)

寺 前 信 次

平成17年2月28日 記完了

付記

靖国神社の歌

陸軍省・海軍省 制定

- 一、 日本の光に映え 尽忠の雄魂まつる 宮柱、太く燐たり
 ああ、大君のぬかずき給う 栄光の宮、靖国神社
- 二、 日の御旗、断乎と守り その命、國に捧げし ますらおの御魂しづまる
 ああ、國たみの拝み称う いさおしの宮、靖国神社
- 三、 報國の血潮に燃えて 散りませし大和おみなの 清らけき御魂、安ろう
 ああ、はらからの感謝は薰る 桜咲く宮、靖国神社
- 四、 幸御魂、幸わえまして 千木高く輝くところ 皇國は永遠に嚴たり
 ああ、一億の畏み祈る 国護る宮、靖国神社
『我々將兵は殉國の勇士として、水漬く屍と身をも惜します
草蒸す屍と命を捨てて戦い、武運拙く敗戦を喫した』
敗北したとはいへ日本国民は靖國の御英靈を弔って欲しい。』

八絃一字の歌 (日本書紀にある世界を一つの家とする意)

- 一 赤い血潮で日の丸染めて 世界統一してみたい
 - 二 万里の長城で小便すれば ゴビの砂漠に虹がたつ
 - 三 支那や蒙古の子供が唄う 愛国行進曲、調子はずれ
 - 四 星の輝くサハラの砂漠で 可愛い稚子さんの夢を見る
 - 五 雪の閉せるアラスカ村で ラッコ肴で酒を呑む
 - 六 ギャング絶えたるシカゴの町で 孫が詣でる忠魂碑
 - 七 ヒマラヤしずくのガンジス河で 大和男子が鰐を釣る
 - 八 駱駝泣く泣くサハラの砂漠で 獅子を日本刀で試し斬る
 - 九 俺が死んだら三途の河原で 鬼を集めて相撲とる
- 『昭和二十年八月十五日の敗戦までは、「天皇を現人神とし、日本国民は他民族に優越して世界を支配する運命である」という架空の観念があった』私が陸軍士官学校に在学中から上記の軍歌が歌われていた。(偕行社発行軍歌集より)

大正時代 (平成十六年元旦、友人よりの年賀状から)

- 一 大正時代の俺達は 明治の親爺に育てられ 忠君愛国そのままに
お国の為に働いて みんなの為に死んで行きや 日本男児の本懐と
覺悟を決めていた なあお前
- 二 大正生まれの青春は すべて戦争のただ中で 戦い毎の尖兵は
皆大正時代の俺達だ 終戦を迎えたその時は 西や東に駆け回り
苦しかったぞ なあお前
『短い大正時代は明治四十四年から昭和六十四年の間に挟まる
十四年!である。小林 朗作詞、大野正雄作曲の歌「大正時代」
は、大正生まれを謳歌している』